岩波文庫
263—265

チスリク・ヨシータミイ
（びねまの督基）

譯郎三達村内

岩波書店

Sendai 22 Juillet.

Cher Monsieur,

Vous avez traduit l'Imitation de Jésus-Christ sur le texte original, et, vous m'avez demandé de revoir avec vous ce travail que vous désiriez voir le plus parfait possible.

J'ai vu déjà bien des traductions japonaises du même ouvrage, sans être fautives absolument, elle ne causent pas au cœur l'impression profonde que lui apporte le texte latin.

Vous avez su, vous, par des inversions exigées par la langue japonaise, des expressions choisies et faciles à comprendre, donner à votre texte ce sens profond qui frappe au cœur et le force à réfléchir.

Je vous engage donc vivement à publier votre travail, qui, j'en suis sûr, éclairera vos compatriotes sur le sens de la vie et les convaincra que le bonheur vrai, c'est à dire la paix du cœur est au dessus des choses qui passent.

L'Imitation de Jésus-Christ est un livre composé pour des Religieux, mais les conseils qu'il contient, les enseignements qu'il renferme, sont également salutaires pour tout homme sérieux et ami de la vérité.

Dans les pays chrétiens, ce livre a toujours été en grande faveur, et après la Sainte Bible, c'est certainement le livre le plus goûté, le plus médité. Traduit dans toutes les langues il fait la consolation de ceux qui souffrent

physiquement et moralement. Or, qui en ce monde n'a jamais souffert? La douleur sera toujours inséparable de notre pauvre nature humaine.

En publiant votre travail, vous n'avez qu'un seul désir, éclairer ceux qui cherchent la lumière, consoler ceux que la peine a visités, fortifier ceux qui perdent courage.

Je vous en félicite, et forme des vœux ardents pour la réalisation de ces désirs si surnaturels.

Veuillez agréer, l'assurance de mes sentiments bien dévoués.

L. Montagu.

モンタグ師書簡飜譯

拜啓

あなたは「基督のまねび」をラテン語本文より飜譯なされ、そして出來得る限り完全にしたいと云つて、私にその譯文をあなたと一緒に本文と讀合せて校閲するやうお願になつた。

私も今までこの書物の日本語飜譯に就て隨分いろいろ見たのである、而も必ずしも間違つてると云ふでない、けれ共、どうも皆ラテン語本文が與へるその深い感動を人の心胸に起させないのである。

然るにあなたは今、日本の國語の必要に從て原語の文脈を轉換させ、そして精練した又容易に理解し得る言ひあらはし以て、あなたの譯文に能く人の心胸を打ちはたくその深い意味と及び自ら反省考慮せしむるその力とを與へ得たのである。

それで、私はあなたに切にこの御飜譯を出版するやうお勸めする、卽ち私は信ずるのである、之が屹度あなたのお國びとにこの人生の意義を闡明し、又眞の幸福、然り、言ひ換へれば、心の平和は是れ消え行く物以上にあることを認めさせるに至るでせう。

「基督のまねび」は元來修道者のために著作された書物である、けれ共之が含有する勸告とその中に包藏される教訓とは、是れすべて眞面目な人々、卽ち眞理の友たる者に對しても亦同樣に有

益なのでございます。

基督教諸國の間では此の書は古來今でも非常に愛好せられて、確かに聖書に亞いでの最も耽讀せられ又瞑想せられる名著です、そして諸國の國語に飜譯せられて或は身體に或は精神に種々の惱苦を受ける者たちの慰安とされに居るのです。さやう、誰かこの世にあつて未だ曾て惱苦を受けたことないと云ふ者あるだらうか、不幸は實に私共のこの憐れな人間の本質と常に離る可らざるものであるのでせう。

で、この譯書を出版なされるなら、あなたは卽ち、光明探して居る者に光りを與へ、苦痛になやむ者に慰安を與へ、又勇氣を失つてる者に力を與へんとする、此の唯一の望をもつより外にないでせう。

私は之をあなたに祝し上げ、又そのやうな超越したお望みのどうぞ實現せられるやう、亦熱心に祈誓するのでございます。

敢て私の思つたままを披瀝したのみです。謹言

千九百二十七年七月二十二日

仙臺にて

エル、モンタグ

小序

イミタシヨ・クリスチが古來宗教的精神的の世界の名著たるは今更々する必要ない。して私のこの飜譯、之は實に私が多年親愛する天主公教會のマトン神父と復偶然にこの仙臺に邂逅して、その尊い靈的交誼に浴し得たにその動機を發したので、神父の深い敬虔に湧く愛の力に惹かれて、私も亦此の原著の純潔崇高なる思想信念に肖からうとしたのである。之を邦語に飜譯したのは、只一層に私の理解し得た會心の愉快を神父と共に語りて、その歡喜を己れに倍にせんためであつた。神父も亦如何に優渥なる眞情を傾けて私に天的慰安の光を添へ與れたことであつたらう。

然るに去年四月、私には非常の驚愕であつたが、マトン神父は突然その聖職を靑森に轉ぜられて仙臺を去ることになつた。けれ共その時私は更に神父に由て同じ聖職にあるモンタグ神父に紹介せられることを得た。してそのモンタグ神父亦永く我邦に布敎して既に十數年この仙臺に居られたのである。欣然私を迎へて、マトン神父と同一の誠欵を寄せて與れた。卽ちマトン神父の意を承けて、私のためにモンタグ神父亦愛の仕事とも爲し、その四月半頃より六月末に至るまで實に多くの時間を費して、私と共に深切鄭寧に一々原著の拉丁語に讀合せ、この飜譯の出來る限りの正確を期して與れた。で、之に由て私は啻に自分の不完全なる知識をあまた裨益せられたのみでない、その讀合せてる時間は亦私の宗敎的生命を溫め又淸めて、私をして常に歡喜と幸福とに

心を盈たさせたのである。

されど私には目的茲に遂げられたのだ。私はあの中世紀信仰の最もその精髄を發露したりとせらるるイミターシヨ・クリスチを私の心のたけに咀嚼翫味して、之を自分の靈の養ひと爲し得たのである。それより以上の事復何を欲しよう、この拙い飜譯を苟も書物となして世に出さうなどとは、私の境遇素より胸に浮べたことさへないのである。只マトン神父は當初よりして切に之を私に希望し又慫慂して呉れた。モンタグ神父も私との最後の讀合終つたその前日突然本國佛蘭西より更に教會の要職に就くために歸國を命ぜられるや、別れに臨んで私に巻頭所掲の書簡を殘して行つて呉れた。で兩神父の慇懃の友情は遂に私の心を動かしたのである。して結局茲に岩波書店に托してその叢書の一に加へるやうになつたのも、その一誘因實にマトン神父の熱心なる同情の結果である。今いよいよ世に公けにせらるるに當り、私がこの飜譯の由來を聊か說明したるも亦兩神父に對する私の甚深なる感謝の意を敢て表示する所以である。殊にモンタグ神父の書簡を巻頭に揭げたのは、中に私敢て當らず、ひたすら慚愧を感ずる言なきにあらざれ共、只是れ此の神父の切なる厚誼を私の永く記念せんためである。看者冀くは之を諒とせよ。

昭和三年五月一日

仙臺にて

譯者識す

說明數項

一、此の飜譯はその基本として羅馬公教會公定の拉丁語原本に正確に準據したのであつて、書中の巻章句節の順序分劃等盡く之に從つてある。

二、譯者はこの飜譯を思立つに當つて、すべて現在日本に於ける天主公教會の信仰にその基礎を置くことにした、殊に第四巻に於て最も然りであり、又譯者の苦心の最も窒められた所である。是れ此の書の著述はまこと歐羅巴の歷史で謂ゆる宗教改革運動のまだ發端せざる時代であつて、その思想信仰は、そのまま最も純に今の天主公教會に傳はりて教へられてあると私の考へた故である、して此の點卽ち序言にも述べた如く、譯者が專らマトン及びモンタグ兩師に就て深く教示を仰いだ所である。

三、書中聖書の引用句は主として今日日本の新教教會の間に使用せられる新舊約書よりの出典を用みてある。けれ共原書に於てはその出典は卽ち公教會公定の謂ゆる拉丁語本よりであつて上記の新教邦譯本とは多少に違つてる所がある。又中には此の邦譯本にはなくして拉丁語本にのみ見出される書巻より引用せられた文句さへある。例せば集會書又は智慧書などと呼ぶが如きである、而も公教會にはその邦譯ない、故にそれ等の引用語は只譯者の自由語に直してあるも已むを得ない。此等は本譯本文括弧内にある引用語出典の小註に於て承知せられたい。

四、譯文にはすべて漢字の讀方に振假名字を付けることにした、是れ此の世界的なる信仰書を亦日本のあらゆる階級種類の人々に普及せしめんと望む私の或る友人の切なる勸めを容れたのである。

譯者

目次

第壹卷　靈の生命に對する須要の勸告……一七

第一章　基督をまねび又此の世の空なるすべてのものを輕んずべきこと……一七
第二章　己れに謙遜なるべきこと……一九
第三章　眞理よりの教訓のこと……二一
第四章　人はその行爲を愼重にすべきこと……二六
第五章　聖書を讀むに就てのこと……二七
第六章　濫りに情愛に耽けること……二八
第七章　空しき希望と傲慢とを避くべきこと……二九
第八章　妄りに親交するを愼むべきこと……三一
第九章　柔順と服從とのこと……三二
第十章　言の多きを愼むべきこと……三三
第十一章　平和を得、又信仰に進むに熱心なるべきこと……三五
第十二章　患難の有益なること……三八
第十三章　誘惑に抵抗すべきこと……三九
第十四章　他を審くに輕率を愼むべきこと……四三
第十五章　愛心より出づる行爲のこと……四五
第十六章　他人の過失を寬恕すべきこと……四六
第十七章　修道院の生活に就てのこと……四八
第十八章　聖父たちの模範……五〇

第十九章　善なる修道者の勤行のこと……五三
第二十章　獨居靜默を愛すること……五七
第二十一章　心の痛悔のこと……六一
第二十二章　人生うき事の多きこと……六四
第二十三章　死に就ての瞑想のこと……六八
第二十四章　終りの審判と罪の懲罰とのこと……七四
第二十五章　全生涯を熱心に改善すべきこと……七八

第貳卷　內的生活に就ての誡告……八七

第一章　內的生活を愼むべきこと……八七
第二章　謙遜なる服從の事……九二
第三章　善良で平和なる人のこと……九三
第四章　純潔なる心と純眞なる志向とのこと……九五
第五章　自ら顧慮すべきこと……九七
第六章　善なる良心の歡喜のこと……九九
第七章　すべてに超えて耶蘇を愛しまつるべきこと……一〇一
第八章　耶蘇との親しき友情のこと……一〇三
第九章　すべての慰安の絕えたる時のこと……一〇七
第十章　神の聖寵を感謝すること……一一二
第十一章　耶蘇の十字架を愛する者の少きこと……一一五
第十二章　聖なる十字架是れ天への大道なること……一一八

第參卷　內心の慰安……一二七

第一章　忠實なる靈に語り給ふ基督の內的の御言のこと……一二七
第二章　響なくして靈に語る眞理の聲のこと……一二八
第三章　謙遜もつて聽くべく、而も世人多く重んぜざる神の御言のこと……一三〇
敬虔の聖寵を懇望する祈禱……一三三
第四章　神のみまへに誠實謙遜に生くべきこと……一三四
第五章　神の愛の奇しき效力のこと……一三六
第六章　眞の愛ある者の試錬のこと……一四一
第七章　謙遜の下に祕められる隱れた聖寵のこと……一四四
第八章　神のみまへに於て己れを無視輕蔑すべきこと……一四八
第九章　一切を神に歸し奉りて究極とすべきこと……一五〇
第十章　世を輕蔑して神に仕へまつる樂さのこと……一五二
第十一章　宜く心の願望を省察して之を節抑すべきこと……一五五
第十二章　忍耐を教養し又肉慾と搏鬪すべきこと……一五七
第十三章　耶蘇基督の模範に倣うて謙遜に從順なるべきこと……一六〇
第十四章　己れの善に誇らぬため神の隱微な審判を考慮すべきこと……一六二
第十五章　すべて希望し得べきものに就て如何なる態度を執り又如何なる言を用ふべきかのこと……一六四
神の聖意の成就せられんことを求むる祈禱……一六六
第十六章　眞の慰安は唯一神にのみ求むべきこと……一六七
第十七章　憂慮は常に神に委ねまつるべきこと……一六九
第十八章　基督を模範として平氣にこの世の辛苦を耐ふべきこと……一七〇
第十九章　害を與ふる者を寬恕して眞の忍耐を證すべきこと……一七二
第二十章　己れの弱きを告白して又この生の辛苦多きを認むること……一七五
第二十一章　すべての賜物及び善事にまさり只神にあつて休息すべきこと……一七八

第二十二章　神のあまたの御惠を記憶すべきこと……一八二
第二十三章　大なる平和を齎す四の條件のこと……一八五
　惡念を防ぐがための祈禱……一八七
　心の照灼を求むる祈禱……一八七
第二十四章　徒らに好奇に驅られて他人の身上を穿鑿するを避くべきこと……一八九
第二十五章　どうして心の堅固な平和を得べきか又讀の向上を得べきかのこと……一九〇
第二十六章　自由なる心の優秀は是れ讀書に由るよりむしろ懇篤なる祈禱に由て獲られること……一九二
第二十七章　自己的愛は最も至高の善を妨害すること……一九四
　心の淨化と天的なる智慧とを求むる祈禱……一九六
第二十八章　譏誘者の口に對すること……一九七
第二十九章　患苦に臨んで如何に神を呼び之を祝福し奉るべきかのこと……一九八
第三十章　神の御救を祈求し又聖寵の再授を信ずること……二〇〇
第三十一章　造物主を見出し得んために造られたる物は一切之を無視すべきこと……二〇三
第三十二章　己れを棄て又すべての情慾を絕つこと……二〇七
第三十三章　心は變り易し依て窮極は神をのみ目的とすべきこと……二〇九
第三十四章　神を愛する者には神はすべてにまさつて又すべてに於て眛はるること……二一〇
第三十五章　此の人生に於ては誘惑より逃るべき保障はあらざること……二一三
第三十六章　他人の空なる批判に對すること……二一五
第三十七章　心の自由を得るために完全に己れを委棄すべきこと……二一七
第三十八章　能く外部を齊へそして危險に於て神に信賴すべきこと……二一九
第三十九章　人はその仕事に焦るべからざること……二二〇
第四十章　人には本來一善なく又何等誇る能はざること……二二二
第四十一章　浮世の名譽は皆之を輕蔑すべきこと……二二五

第四十二章　平和は人間に置かれぬこと……二二六
第四十三章　空なる世の知識を慕むべきこと……二二八
第四十四章　外物に執着するを愼むべきこと……二三〇
第四十五章　すべての人信ずべからずして言は間違ひやすきこと……二三一
第四十六章　言語の矢丸に攻められた時は神に信賴すべき事……二三五
第四十七章　永遠の生命のためにすべての患難を忍ぶべきこと……二三八
第四十八章　永遠の日と此の人生の苦惱とのこと……二四一
第四十九章　永遠の生命の願望と及び戰ふ者に約束せられたその善福の如何に大なるかとのこと……二四五
第五十章　人は寂寞孤獨である時神の御手に己れを委ねまつるべきこと……二五〇
第五十一章　高き事に力足らずば低き事に最善を竭すべきこと……二五五
第五十二章　慰安は人之を受くるに足らずとして却て懲罰を分とすべきこと……二五六
第五十三章　地上の事を愛好する者には聖寵の來降なきこと……二五八
第五十四章　人の本性と聖寵と兩者その働きの相異ること……二六一
第五十五章　本性の墮落と及び神の聖寵の效力とのこと……二六六
第五十六章　全く私慾を棄て去り、十字架を負うて基督にまねびまつるべきこと……二七〇
第五十七章　過失に陷る時も敢て落膽すべからざること……二七三
第五十八章　徒らに高遠な事や又神の祕密に立入るべからざること……二七五
第五十九章　すべての希望と信賴とを只神に置くべきこと……二八一

第四卷　最も嚴かなる聖體の祕蹟……二八五

聖體拜領に關する最もかしこき勸めの聖訓……二八五
第一章　如何なる恭敬もつて基督を拜領しまつるべきかのこと……二八五
第二章　神の大なる仁慈と愛憐とは聖體の祕蹟に於て人に示されること……二九三

第三章　屢ば聖體の拜領に與かるは有益なること……二九七
第四章　聖體を敬虔に拜領する者には多くの善事與へられること……三〇〇
第五章　祕蹟の導きこと及び司祭の地位のこと……三〇四
第六章　聖體拜領に臨まんとして葬ぐべき祈禱のこと……三〇七
第七章　己れの良心を省察し又善に改まるを決心すること……三〇八
第八章　十字架上の基督の犧牲と及び自己棄却とのこと……三一一
第九章　己れと己れのもの一切を神にささげ、又すべてのために祈るべきこと……三一三
第十章　聖體拜領は容易に廢止すべからざること……三一六
第十一章　基督の聖體と及び聖書と最も信者の靈に必要なること……三一〇
第十二章　大なる精勵を以て聖體の拜領に準備すべきこと……三一五
第十三章　敬虔なる靈の人は宜く全心もつてこの祕蹟に於て基督と合一するやう望むべきこと……三一八
第十四章　基督の聖體に對する或る敬虔なる人々の抱くその熱情のこと……三二一
第十五章　謙遜にして能く己れを棄てる者即ち敬虔の聖寵を獲得すること……三二三
第十六章　私共の必要は之を基督に打明けてその聖寵を願ひまつるべきこと……三三五
第十七章　聖體を拜領すべき熱烈燃盛なる愛心のこと……三三七
第十八章　人は聖體の祕蹟に就きては、妄りに好奇に耽つて探求すべきでない、宜く謙遜に基督をまねびて、ひたすらにその心を聖なる信仰に服せしむべきこと……三四〇

イミターシヨ・クリスチ（基督のまねび）

第壹卷　靈の生命に對する須要の勸告

第一章

基督をまねび又此の世の空なるすべてのものを輕んずべきこと

一

主は言たまふ、「我に從ふ者は暗き中を步まず」（約翰傳、八ノ一二）と。是れ基督の御言であつて、私共もし眞にその御光に照らされて、心のすべての矇昧より救はれんと望むならば、如何にその御生涯とその御懿德とをまねねばならぬか、之に由て誨へられるのである。

されば、耶蘇基督の御生涯に就て深く默思を凝すこと、之を私共の最高要務とすべきである。

二

基督の御教はすべて聖者たちの教よりも優れてゐる。だから誰でもその御靈をもつ者は、その中に「隱れた靈的食物」（默示錄、二ノ一七）を見出す筈である。

然るに、往々多くの人々は隨分福音を耳にしながらに、殆ど之に氣を止めようとも感じない。基督の御靈をもたないからである。

その故に、誰でも基督の御言を能く味つて會得しようと思ふなら、必ず自分のすべての生涯を以

て基督のそれに合致させるやう努力せねばならぬ。

三

汝、或は能く幽玄なる三位一體の原理を論じ得るだらう。けれ共、もし汝に謙遜の德を缺いて、その故に三位一體の聖意に戻るが如きあるならば、遂に汝に何の益あらう。まこと、言は如何に高尚であらうとも、それが義人聖者とならせるのでない。只德に高い生涯が神に愛せられるやうなるのである。

で、私は、徒らに罪と云ふものの定義を知るよりも、その罪の痛悔を一層に感得したいと望むのである。

人もし、聖書の全部と、又あらゆる聖哲の言とを盡く諳記したからとて、神の慈愛と聖寵とがないならば、遂に何の益があるだらう。

「空の空なるかな、只神を愛し、神に仕へまつるの外、「すべては皆空である」。（傳道書、一ノ二）この世の事を輕んじて、只管に天の御國に向ふべきである、そして之が即ち最高の智慧である。

四

遂に滅ぶべき財寶を求めて、之に望みを屬するは、是れ空である。

世の名譽に憧れて、高位榮爵に攀ぢようとするのは、亦空である。

肉體の慾望に焦慮して、却て來世に重き懲罰招かねばならぬことを求めるは、空である。

徒らに長壽を冀ひて、善なる生涯を殆ど顧慮しないのは、空である。

現世の生命にのみ心を奪られて、未來の事に準備しないのは、空である。

泡と消ゆる刹那の事に戀々して、無窮の歡樂のある所に急がうとしないのは、空である。

五

「目は見るに飽くことなく、耳は聞くに充ることなし」（傳道書、一ノ八）との金言、之を屢ば想出せ。

目に見ゆる事の愛着より汝の心を引離し、そして見えざる所の事に心を轉ぜしめよ。凡そ情慾に從ふものは、その良心を汚し、神の聖寵を失ふからである。

第二章

己れに謙遜なるべきこと

一

「人は皆自然に知識を欲求する」。（アリストテレスの言）けれ共、神を畏れずして、その知識も何の用あらう。

むしろ、神に仕へる無學の田舍人が、天體の運行を研究しつ、却て自己を等閑にする傲慢な哲學者よりも優るのである。

自ら深く知る者は、必ず己れを輕んじて、そして人に譽められたからとて決して悦ばない。

たとひ、世のあらゆる事物を知り悉くしても、もし愛に缺くるなら、神のみまへに於て私を何の益しよう。神は實際の仕事に依て、私を審き給ふからである。

妄りに知識を欲求するは詰らない、徒らに惑亂と迷妄とを重ねる原因となるのみである。
兎角、學者は好んで博學と思はれ、又賢者と言はれたがる。
けれ共、知識は多く私共の靈魂に、殆ど、否、全然益する所ないのである。
故に、自分の靈の救に益ある以外の事に熱中するは、本當に愚かである。
餘計に言を弄したとて、それが靈魂を滿足させるのでない。只善なる生涯が心を爽かにし、又潔白なる良心が、神に對しまつりて大なる信賴を起させるのである。

三

汝の知識が益々殖えて進むほど、それ丈、汝の生涯が益々聖化しないなら、汝は却て益々己れに審判の苛嚴を加へるのみである。
だから、如何なる學にも決して誇るをするな。むしろ汝に與へられた知識の故に戰々恐懼すべきである。
もし汝が知識にすぐれてる、理會に富んでると自分に思へるやうなことのあつたならば、須らく知るべきである、汝のまだ知らない事尙更澤山であると云ふことを。
「高ぶる心をもつな」、(ロマ書、一一ノ二〇)むしろ自分の無學を知れ。學問汝より優れて、又律法に通ずる者は澤山あるだらう、之を汝は思はずに、なぜ自分を他の上に置かうとするのだらう。
若し汝が何事か有益に之を知り且つ學ばうとするならば、「それが誰にも知られずに、又何等の價

値ないものとされるを悦べよ」。(聖ボナベンツラの言)

四

最も深い知識であつて、又最も有益なる學問は、即ち、人が自己を能く知つて、之を輕蔑するにある。
凡そ己れを無價値な者として、そして他人を常に善い者高い者として推すことを知るは、是れ智の極み、又德の極みである。
人が若し罪を犯して、それが隨分重大で、そしてそれを汝が事實見たのだとしても、決して汝がその人よりも善人であると思つてはならぬ。汝のその善人の狀態がいつまで果して續くだらう、汝自身もそれを知る筈ないのである。
私共は皆罪を犯すに脆いものである。されど汝自身は亦汝ほど脆いはないと思はねばならぬ。

第三章

眞理よりの教訓のこと

一

消え去るべき形象や言語に由るのでなく、眞理自身が直接に、そのあるがままのものに由て教へるその人は、げに幸福な人である。
私共の意見や感覺は往々私共を失望させる、又目で見る所も此少である。

で、あの幽玄奥妙な事物など、之を私共が知らないとて、何も審判で問はれるのでない。それを何事ぞ、七面倒に議論して得々たる如き、何の益がある。

有益なる事必要なる事を忽諸にして、そして徒らに好奇の心に騙られ、却て害ある事に汲々する、是れ大なる愚妄である。本當に「目あれども見えず」(馬太傳、一三ノ一三)である。

二

私共には又、あの分類解剖是れ事とする理窟の如き、何の要があるだらう。

永遠の「御言」(ヨハネ傳、一ノ一)に由て教へられるその人は、常に紛々たる衆說の惑の中より救ひ出される。

卽ち一つの「御言」で、之より萬物生じて萬物之に就て語つて居る。そして是れ「太初」(ヨハネ傳、八ノ二三)であつて、今も私共に語つて居る。

之に由らずしては、何人にも眞の理解は起らない。又正しい判斷は來らない。

だから、凡そ人、萬物卽ち一つであり、一つに萬物歸着することを曉つて、又一つの中に萬物を見ることのできるならば、その人眞に不斷の心を常に神に宿らして、そして晏然として玆に休靜し得るのである。

嗚呼、眞理の神よ、私をして、長久の愛の中に爾と一つにならせ給へ。

多くの讀むこと聽くこと、往々私を倦厭かしめる。けれ共爾の中にのみ私の願ふこと望むことは皆あるのである。

すべての學者に皆口を默させよ。爾のみ手業の萬物に皆爾のみまへにあつて靜肅ならしめよ。そして爾のみ獨り私と語りたまへ。

三

人は誰でも益々己れに統一して、そしてその內心益々純化せられるなら、從てその人益々勞せずして多くの事又高い事を悟り得るだらう。天より智慧の光明を受くるからである。

凡そ潔正で、純眞で、又堅固な精神の人は、いくら繁忙の中にあつても、決してその心を擾されない。すべての仕業は只神のみ榮のためであつて、泰然として、念頭毫も己れの事を置かうとしないからである。

汝を最も妨げ又惱ますものは、汝のそのまだ殺され得ない胸の情炎である。して、之でなくして外に何である。

德に正しい、又信念篤い人は、すべてその爲すべき事、先之を胸中に整理して、然して後外に實行する。

だから、その仕業の故に決して邪惡に傾く慾念に惹入れられない、却て之をして正しい理性の命ずる所に從はしめて行くのである。

まこと、己れに克たうとするその努力を措いて、之より激しい戰が他にあり得ようか。

而も私共の務とするのは、卽ちその己れに克つことで、日々に之に向て益々勇氣を加へ、そして益々聖者の道に進まねばならぬのである。

この人生に於ては、あらゆる完全、皆多少の不完全を伴うてゐる。で、私共の眞理の思索にも、すべて多少の暗霧の懸らぬはない。故に、自ら卑下するを知るは、げに深遠なる學術の研究にもまさり、神に到る一層確かな途である。

四

けれ共、學問そのもの、又は謂ゆる世の普通の知識は、必ずしも悪しとすべきでない、それ等自身に考へられても、亦善いもので、又神の定め給ふ所のものである。只正しい良心と善なる徳の生涯とは、之よりもまさつて貴いとするのである。

然るに、その善なる生涯をするよりも、却て知識の欲求に没頭し、そしてその故に屢ば邪道に蹈迷ひ、遂に殆ど何等の結果をも靈の生命に齎し得ない者が多いのである。

五

嗚呼、人がもし、あの空なる議論に随分花を咲かせて悦ぶやうに、亦己れの悪を絶やし徳を樹つるに熱心であつたなら、本當に、此の世の中の罪悪も斯くは起らぬだらうに。道院自身にさへある信仰の弛緩も斯くは見ぬだらうに。

確かに、審判の日の來る時に、私共の尋ねられるのは、何を讀んだかでなくして、何を爲したかである。又どんな立派な事を語つたかでなくして、どんな聖い生涯を送つたかである。で、私に告げて見よ、あの博士だ先生だと崇められて、汝たちも克く知つて居る、此の世にあつた時その博學多識に榮えた所の人々も、今は復いづくにあるのだらう。その職祿さへ今は既に他人が所有して、果して能く昔の名を認めてゐるだらうか。生きてる時は随分何かの人物だとして仰がれたのだ、然るに今は誰も語るものさへない。

六

嗚呼、この世の榮譽の如き、なんと迅速無常なる。若し此の人の生涯がその學問と一致したりしたら、あら惜しや、その讀んだ事學んだ事も、亦その靈に資する所があつたらうに。

神に仕へることを殆ど考へずに、徒らにこの世の泡沫の知識に憧れて、そして滅亡に赴く者のなんと多いことよ。

是れ、人々が謙遜と云ふことを打忘れて、ひたすらに自ら豪振らうとするからで、それで己惚れて夢のやうに消えて了ふのである。

眞に偉大な人は、卽ち偉大な愛をもつ人である。眞に偉大な人は、卽ち己れを小き者であると考へてある。

眞に賢者とする人は、卽ち只管基督を獲んがために、すべての地上の物を見て、之を土芥となす人である。

また、神の聖旨をのみ行ひ、そして己れの意志を捨てる人が、卽ち善い學者である。

第四章

人はその行爲を愼重にすべきこと

一

他人の言語と己れの心の衝動とは、すべて之を信ずべきでない。而も愼重に冷靜に、物事を神の聖旨に從つて考量すべきである。

然るに、あな、人は往々善事よりも容易に惡事を信じて、そして之を語りたがる。して、期くも私共は弱いのである。

只、至人は容易にすべての噂に耳を傾けない、人間は弱くして惡に陷り易く、又極めて口舌に輕いものであると、知る故である。

二

その行爲に輕率でなく、又自己の意見をのみ固執しようとしない人、是れ大なる智慧者である。

その賢者は又妄りに人の言を信じない。さりとて、その聽いた事信じた事を、亦直ちに他の人に洩らすこともしないのである。

明智深慮な人と常に相諮るべきである、そして求めて己れより優れた者に教へられ、ゆめ、己れの臆斷に從ふことをするな。

善なる生涯の人は神の聖旨に從つてその智慧を與へられる。

益々己れを謙下らして神に服從するその人は、亦益々その智に明かにして、そして心に安らかであるだらう。

第五章

聖書を讀むに就てのこと

一

聖書を讀むのは、それより修辭を學ぶのでない、その中の眞理を探るのである。

すべて聖書はそが書かれた所の、その精神を以て讀まるべきである。

聖書の中に求むべきは、その巧妙な言でない、むしろ私共の靈の益でなければならぬ。

要するに、私共はその中の崇高深遠な書編と同じに、亦敬虔で單純な書編をも好んで讀まねばならぬ。

決して作者の名前に動かされるな、その文章の巧拙など問ふべきでない。只純粹なる眞理の愛に惹かれて、そして之を讀むべきである。

誰の書きたるやは問はずもがな、何が書かれてあるかに注意せよ。

二

人間は死んで消えて行く、けれ共「主の眞理は永久に存在する」。（詩篇、一一七ノ二）

神は人物に偏頗し給はず、私共に「種々の仕方」（ヘブル書、一ノ一）を以て語られる。

聖書を讀むに、好奇の心がよく私共に障碍する。卽ち、只單純に讀過すべきその所を、殊更にむづかしく解釋し、又議論しようとするのである。

聖書を讀んで、若し益を得ようとするならば、宜く心を謙遜にし、又單純にし、そして信仰を以て讀むべきである。決して博學の名を得ようとすべきでない。

疑義を質すに吝であるな。默して聖者たちの言を聽け。又先輩たちの所言を斥けてはならぬ、故なくしては語られないからである。

第六章

濫りに情愛に耽けること

一

何事にまれ、人之に耽つて度を過ぐれば、卽ちその心が忽ち褻される。

高ぶる人と婪ぼる人とは、決して平和を得ることない。けれ共、貧しい、そして靈の謙遜な人は、多くの平和の中にあつて存へる。

まだ全く己れに死に得ない人は、容易に誘惑に罹りて、そして小さな詰らぬ事のために打克たれる。

精神薄弱であつて、幾分かの肉念まだ存し、そして物感に傾き易いその人は、全く地上の煩惱より離脫することむづかしい。

で、その人は、何か己れより取去られることあれば、之を輕々に慍るのである。

二

されど、その人もし己れの慾望そのままを達し得たならば、忽ちその良心に呵責されるだらう。自分が求むるその平和に何等益しない情慾に從うたからである。

その故に、情慾に抵抗してこそ、心の眞の平和は獲られるのである、決して之に屈從するに由りてでない。

で、肉的な人や外物に縛られてる人の心には平和はなく、只信仰熱烈な、又靈的な人にのみあるのである。

第七章

空しき希望と傲慢とを避くべきこと

一

人間又は他の諸物一切にその望を置く人は、空である。

で、耶蘇基督の愛のために他に奉仕し、そして汝がこの世で貧乏に見えたとて、それを汝恥づるには及ばない。

己れに決して恃むなよ。只汝の望を神に築き置け。

汝の力の限りに爲せ。さすれば、神は汝の善なる志望を助けて下さるだらう。
汝の知識に頼るなよ、又如何なる人の才智をも信ずるな。神の聖寵にのみ依賴し奉れ。神は卑下る者を援けて、高ぶる者を貶し給ふのである。

二

汝、如何に富があるとても、如何に友が勢力あるとても、之を誇つてならぬ。誇るは只神に於てのみであれ。汝にすべてのものを與へて、そしてその上にも尚己れ御自身をさへ與へんとし給ふ神でまします のである。
汝の體軀が立派であらう、秀美であらうとて、驚つて了ふだらう。さりとて之に已惚れるな。少しの病氣で、そして弱つ決して汝の技倆才幹に慢心し、そして却て神を恚らし奉るな。なぜならば、すべて本來汝にある善いものは、皆神より出でたのであるからである。

三

自分を他より優れてると思做すな。恐らく神のみまへに於て、却て劣れる者とせられやせん。神は人の内心を知り給ふからである。
自分の善行に誇るをするな。神の審判は往々人の審判と異りて、人の善となすもの、却て神に嘉せられぬものなる故である。
もし汝に善業あつたなら、更に善い業が他人にあると知れ、汝が益々謙遜の心を保たんためである。

第八章

妄りに親交するを愼むべきこと

一

「すべての人に汝の心を打明けるな」。只賢にして神を畏るる者と相諮れ。（傳道者、八ノ二二（拉丁譯））
年の若い者や、又は普通世間の人と狎れ親むな。
富者に媚びんとするな。又權勢ある者の前に出ようとするな。
謙遜なる者や淳朴なる者、又は敬虔なる者や有德なる者と親交し、そして德を樹つべき事を以て相語れ。
如何なる婦人とも親密なるな。只すべての善良な婦人のために、神の惠寵を祈れ。
ひたすら、神とその天使とのみに親密ならんと願ふべし。そして人間に知らるることを避くべきである。

二

る。
すべての人の下に自分を置くとも害はない。されど若し、一人になりともその上に自分を置くなら、それは大に害がある。
謙遜な人には不斷の平和がある。けれ共傲慢な人の心には、嫉妬や、憤怒が常に往來する。

勿論、私共はすべての人に愛を抱くべきである。けれ共親狎れるは宜くない、で、往々あり勝なは、人がまだ知られない時は、その好い評判で映え渡る。けれ共、一度私共の眼に觸れるや、坐ろ之に不快を感じさせられることである。そのやうに、私共も亦、自分は交際して他を歡ばせると考へたに反對し、却て自分の行の缺點が曝露して、そしてその人をして轉た反感を抱かせることがあるのである。

第九章

柔順と服從とのこと

一

柔順に上なる者に服從し、そして自分の氣儘を行ひ得ずに居るは、甚だ善い事である。上に立つて司配するよりも、寧ろ下に居つて服從せよ、それが遒かに安全である。多くの人は、愛の故でなくして、むしろ已むを得ずに服從に屈して居る。そして之に苦痛を感じて、動ともすれば呟くのである。

只全心を以て神のために服從せよ。さあらぬ限り、心能の自由は得られない。いくら彼方此方驅り歩いたとて、只謙遜に上なる者の司配に服するより外に、眞の安靜はないのである。

妄りに想像を描いて場所境遇の變化を求めるのは、げに多くの人を誤らせる。

二

人は皆好んで自分の思つたままに爲して、そして自分と同じ考への者に親みたがる。して是れ事實である。

されど神もし私共の中に在すなら、時に平和を保つがため、私どもは自分の考へも棄てる必要ある。

三

人は誰か、すべてを能く知ることできる程に賢者なるがあるだらうか。

だから、自分の考へにのみ信賴しようとするな。亦努めて他人の考へにも耳を傾くべきである。もし汝の考へが善いとしても、それを只神のために讓つて、そして他人の意見に從ふのは、尙更汝を益するのである。

三

助言は與へるよりも受けるが安全であるとは、私は屢ば聽いて居る。

で、意見は雙方共に善いともせられようし。けれ共他方に從ふべき筋合自由のあるにも拘はらず、強ひて、我を張らうとするは、是れ傲慢と剛情との證據である。

第十章

言の多きを愼むべきこと

一

出來得る限り、衆人喧囂の所に加はるな。此の世的の事務を語らふのは、假令それが純なる意向より出たりとするも、尙汝に多大の障碍を與へるだらう。

なぜなれば、汝が忽ち空なる妄想に汚され又捉はれるからである。

で、今でも私は、もつと默つて居たかつた、又はあんな人中に行くではなかつたと、思ふことが澤山ある。

互に饒舌雜談して緘默に返つた後は、私共いつも自分の良心に何かの損傷を感じないは稀である に、而も何故に私共は尙それを好んでしたがるのであるだらう。

私共が好んで談話するのは、卽ち相互に打解けて慰められ、又種々の思索に勞れた心を休息させ度いと望むためである。

尙、私共は好んで、多く自分等の最も愛すること願ふこと、或はその反對に感ずる事を以て話題とするのである。

二

然るに、あな、それは往々空事となつて、その外より來る慰安のため、却て內なる神的慰安が、少からず妨害を受けるのである。

だから、私共は時間の徒らに過去らぬやう、常に警戒して祈禱すべきである。

もし語つて差支なく又善いとあるならば、話柄は只是れ互の建德の事であつてほしい。

私共をして談話に謹愼缺かせるのは、卽ち主として、私共に惡い習慣あつて、又靈の精進に怠慢

なるにある。

されど、敬虔な心で靈の事を語り合ふは、少共が靈と心と神に於て相一致して交る時、尙更に然りである。

第十一章

平和を得、又信仰に進むに熱心なるべきこと

一

もしも他人の言行や、又は何も自分の關係ない事などに、餘計な氣を揉まうとしないならば、本當に私共は多大の平和を享け得ることであるだらう。

妄りに他人の要務に干渉し、又は外部の用事を求めたりして、そして自己の反省に心を集中すること殆どないその人に、どうして長い平和のあり得よう。

心の純なる人は福ひなるかな、大なる平和を享得る故である。

二

なぜ、或る聖者たちは、斯くも完全で、そして瞑想に深くあつたらう。

あらゆる地上の慾望より、全く我と云ふものを殺去らうと努力して、そしてその故に心底より神に翹り奉り、全力を自分の精進に注ぎ得たからである。

然るに私共は、自分の情慾に執着し過ぎる、又消行く此の世の事に心を勞し過ぎる。

殆ど一の悪にさへ完全に打克つたことない。又何日の靈の進歩に熱心燃立つたことない。だから、いつもながらに信仰冷かで、そして微溫であるのである。

三

もし自己に完全に死して、そして內心何等の蟠りがなくなるならば、その時私共亦神の事を味ひ、又天的瞑想の樂みを多少に嘗試することができるのである。

然るに之が唯一の又最大の障碍は、卽ち私共がまだ情慾邪念より脫却せず、そして完全なる聖者たちの途に歩み入らうと奮闘しないにある。

で、少しでも患難起り來るや、忽ち之に打倒されて、そして狼狽して人的の慰安に向て凭掛らうとするのである。

四

勇者が戰場に立つ如くに、若し私共も亦奮闘するならば、確かに主の御援助は私共の上に天より來るを見るだらう。

神は私共が打克つために戰ひの機會を與へ給ふのである。だから、私共が戰つて、そしてその聖寵に依賴しまつるならば、神は屹度御援與へて下さるに躊躇なさらない。

されど私共もし、道に精進することが、單に外なる形式を守るにのみ存するとするならば、私共の信念是れ忽ちに熄まつて了ふのである。

で、私どもは根元に斧を措きませう。情慾より拂ひ淨められて、心の眞の平和を享得んためであ

る。

五

もしも私共、毎年一つづつ惡習を根絶して行くならば、遂には忽ち完き人とされ得ることであるだらう。

然るに結果は往々之に反し、私共は、自分が道に入つたその當初の方が、誓願立てて多年を經た後よりも、却てもつと信仰すぐれて、又純潔であつたやうに感ずるのである。

無論、私共の熱心と進德とは、日々增加せねばならぬ筈である。然るに今や、誰か若しその最初の熱心の小部分をなりと尙保有するならば、之が何かの偉い事のやうに思はれるのである。

それで若し、私共最初に少し自分に嚴酷であつたならば、却て容易に又愉快に、後の萬事が爲れ得たであつたらう。

六

習慣を除去るは困難である。けれ共自分の意志に向つて逆行するは、尙更に困難である。

されど、汝若し小さい輕易なものに勝つことできずして、何日もつと頑强なものを征服し得ようと思ふのか。

汝のその性向に最初に於て抵抗し、そして惡い習癖を取拂へ。怕く汝を次第に益々大なる困難に導き入れるだらう、そのことないためである。

嗚呼、若し汝が善い信仰の生涯するならば、それが汝にどれほど平和を得させるだらう、又他人

にどれほど歡喜を與へるだらう、之を思うたら、本當に汝はもつと靈的に進むやう一層に留意すべき筈だと、私は考へる。

第十二章

患難の有益なること

一

時折り、何かの患難挫折に遭遇するは、私共に善い事である。人は是れ流謫の客であつて、この世の何物にも望を繋ぐべからざるを、之に由て屢ば想起させられるからである。

又困難逆境に處して、そして隨分善い仕業である、乃至善意であるとすることも、それが却て悪しざまに思はれ、誤解を買ふことがある。それも併し亦好いのだ、往々私共を助けて謙遜に向はしめ、又虚榮の心の起らぬやう禦いで呉れる故である。

外界に於ては人々より侮蔑せられ、そして誰にも好く信用されない時、私共は却て內心の證者であり給ふ神を一層に求めるのである。

二

その故に、人は只堅固に神に繋りて、全然己れを委ねまつらねばならぬ。餘計な人間の慰安など、之を求める必要ないためである。善意の人、そして苦しめられ、試みられ、或は悪念もつて惱まされる時は、その人益々神の己れに必要にして、又神に依りまつるにあらざれば、何の善事をも爲し得ざるを知るのである。

その時げに、その受くる悲辛のために、歎き、唸き、又祈る。

その時、この上も生きるを願ひ、そして「世を去りて基督と共に居らんため」(ピリピ一ノ二三)死の己れに來らんことを望むのである。

卽ちその時、安定と平和とその完全にして滿足なる、到底この世に存じ得ないことを悟るのである。

第十三章

誘惑に抵抗すべきこと

一

この世に生きてる限り、患苦と誘惑とは、私共之を免れること出來ない。

その故にこそ、「人の一生は戰鬪である」(ヨブ記七ノ一)と、ヨブ記にも書いてある。

で、誰も皆翼々として誘惑に注意し、祈りを以て自ら警戒すべきである。是れ悪魔は決して眠つてゐない、絶えず誰かを嚥まうとして探し廻はつて居る。だから油斷して之に詔かれるやうな機會を與へてはならぬ。(彼得前書、五ノ八)

どんなに安全で、又聖者であるとても、時には誘惑を受けない人はない。で、私共は之より全く脫し去ることできないのである。

如何に厭でも、又辛くあつても、誘惑は亦往々、人に極めて有益である。之に由て私共は謙遜にせられ、又淨化せられ、又教訓されるからである。すべて聖者たちは、みな多くの患難誘惑の中を通過して、そしてその德に精進したのである。そして、その誘惑に耐へ得なかつた者は、卽ち神に棄てられ、そして途中で斃れて了つたのである。

如何に神聖な道院であらうとも、又は如何に靜寂な場所であらうとも、誘惑と困難とのない所はない。

三

何人も生きてる限り、全然誘惑より保障せられて居るはない。私共は皆邪慾を以て生れて居る、だから誘惑の原因を己れの中にもつて居るのである。

で、誘惑と患難と、一つが去れば又一つ來り、私共はいつも何かに苦められてゐる。原始の幸福を既に失つた私共であるからだ。

多くの人々は頻に誘惑を避けんとして、そして益々はげしくその中に陷るのである。

然り、逃げるのみでは克つこと出來ない。只忍耐と眞の謙遜とのみに依り、私共はすべての敵よりも强くされるのである。

四

單に外部でのみ逃れたとて、その根本を拔取らぬなら、その人殆んど益する所ない。誘惑は早速に戻り來つて、前よりも增してはげしくその人之を感ずるだらう。

能く誘惑に克つには、決して焦つて無理をするな。むしろ氣長くして、そして神の御援助に依り、忍耐もつて徐々に之に當るべきである。

誘惑に沒みては、努めて他の意見に聽け。又之に惱む者に苛酷であるな、而も汝が自ら爲されたいと望む如く、亦之に慰安を與ふべきである。

五

すべての惡い誘惑の第一原因は、抑も心の不定なると、及び神に對し奉る信賴の少いと、是れである。

恰も舵を失つて波のまに〳〵漂ふ船の如くで、人は只ぐらつきてその目的を逸し、そして種々に誘惑されるのである。

火は鐵を試み、誘惑は義人を試みる。

私共は往々自分で自分の力を知らない。されど誘惑初めて私共の眞價を示すことがある。されど、誘惑は殊更その當初に於て警戒せらるべきである。で、その誘惑てふ敵の來つて心の戸を敲く時、之を決して閾の中に入らしめず、此方より直ちに追返して了ふなら、私共の之に打克つことも一層容易であるだらう。

されば、古語にも言うてある。「抵抗は最初にぞ、徒らに永く猶豫するならば、醫藥も遂に時に

遅れん」（詩人オヴイデ）と。

さればである、誘惑その第一は、單に或る考が心に起るばかりである。次に強い想像起り、後に一の快樂と爲り、更に邪惡な肉慾の動きと變じ、そして終に承認にをはるのである。斯樣にして、邪惡な敵は次第に私共の中に全然這入つて了ふ。最初に抵抗されないからである。だから、之が抵抗を人久しく怠つて置くならば、その人日々に自ら力弱り、そして、その反對に、敵は益々強くなるのである。

六

或人はその入道生涯の當初より大なる誘惑に苦められ、又或人はその終りに於て之を經驗する。又、或人はその全生涯を通じて、困厄に惱まされる。又、或人たちは極めて輕微に試錬せられるに過ぎない。而も是れ、神の攝理の深い御智慧と、及び公平なる御裁量とに由るので、人各の境遇功績を考へられて、すべてその擇び給ひし者の靈の救を豫め定められし故である。

七

それ故に、私共は試錬せられる時も決して失望すべきでなく、只すべての患苦の中にも、神がその御援助を私共の上に降し給はらんことを、益々熱心に懇願しまつるべきのみである。卽ち「神は試錬と共に、亦勝つべき道を備へ給ふ」（コリント前書、一〇ノ一三）と、使徒保羅の言うたのは、げに是である。

で、すべての誘惑患苦に臨みて、只「神の御手の下に」（彼得前書、五ノ六）私共は己れの心を謙遜にさせねばならぬ。「神は心の謙遜な者を救ひ」（詩篇、三四ノ八）又高めたまふ故である。

八

誘惑患苦に遭うて、人はどれ程進歩したるや、之が試驗せられるので、又そこにその人の大なる功績が表示され、又その善德益々顯明するのである。

艱難を嘗めたことない人が、如何に敬虔で熱心であらうとも、敢て偉とせられない。けれど、逆境悲運の時に、之を能く忍んで悩へるその人に、卽ち大なる進歩の望があるのである。

或は、大なる誘惑には能く凌ぎ得て、而も毎日の小事に往々打克たれる者がある。是れ斯く小事に脆いものは、大事に當り自ら決して恃まずして、須く謙遜なるべきためである。

第十四章

他を審くに輕率を愼むべきこと

一

自分で自分を顧みて、そして愼んで他人を審くをするな。他人をさばくは勞して效がない、而も往々間違があつて、又過失に陷り易い。されど自ら審き又考察するは、必ずその效果がある。私共はいつも內に好惡の心があつて、之に由て屢ば事物を判斷する。だから是非の辨別容易に私情のために喪失されるのである。

もし私共の心願が、只神をのみその純なる目的とするならば、私共は自分の感情の抵抗ゆゑ、斯くは易く惑亂せられまい。

二

然るに、私共往々、内に何かの私心の潜むがあり、又は外部に起る事件に依り、一緒に之に牽かれるのである。

多くの人は又、その仕業に於て竊かに自分の事を求めて居て、而も自ら之を識らないのである。斯やうな人は、物事意のままに行はれるその間こそ、確かに一路平安とも思はれる。けれ共一旦事、志と違ふに及んでは、忽ち動轉せられて、そして悲歎に沈むのである。感情意見の阻隔のためには、朋友も別れるのである。同じ國の誼も破れて了ふ。又道者信者の間にさへも、屢ば不和が釀される。

三

舊慣を棄去ることは困難である。又誰も自分の視界以外に連行かれることを好まない。もしも、汝、耶蘇基督の示し給ひし服從の御徳をまねぶでなくて、徒らに自分の理性や努力に恃まうとするならば、汝が天の靈光に照らされること殆どなく、或は又甚だ遲々たるのである。なぜなれば、神は私共が完全に御自身に服從し、そして燃え立つ愛心もつてすべての理性を超越せんことを欲し給ふ故である。

第十五章

愛心より出づる行爲のこと

如何なる世の事物のためにも、又如何なる人の愛のためにも、惡は決して作さるべきでない。されど貧き人を益せんためには、時に何かの善事をも進んで中止させべく、或はそれを一層の善事と變化させるべきである。

で、この場合、その善い仕事は決して滅されるでない、一層の善行と變改せられるのである。愛なくしては、表面の仕事は何等の益する所ない。されど愛に由て行はれる事は、それが如何に小さく、又賤むべきであつても、必ずその全果を結ぶのである。

なぜなら、神の考量し給ふは、その仕事の大小でない、むしろ如何なる動機と愛とより出でて爲れたるか、之にあるからである。

二

多く愛する者、即ち多く事を爲すのである。善く事を爲す者、即ち多くの事を爲すのである。

私事を措いて、むしろ公事のために竭す者、即ち善く事を爲すのである。

往々愛の仕事と見えて、而も甚だ肉的なるがある。是れその人生得の性向や、自我の私情や、又は報酬の希望や、及び安逸の慾念など、此等がその跡を絶つこと稀なる故である。

眞正な又完全な愛をもつ人は、如何なる事にも決して自分を考へない。唯すべてに於てひたすらに神の御榮とならんことをのみ冀求する。

三

その人亦決して妨まない、自分の歡樂には何等執念ないからである。又自分の事に決して歡ばらと欲しない、唯神にあつてのみ、すべての善にまさりて、祝福せられんことを願ふのである。如何なる善も決して之を人に歸せしめない、只神に歸せしめる。神は卽ち源泉であつて、之よりすべてが流れ出るのである。そしてすべての聖者たちは皆最後に、茲に樂み歡んで安息するのである。

嗚呼、人若し眞の愛の一閃光だにもつならば、確かに此の地上盡く空なる事のみの滿てるを直ちに覺知するだらう。

第十六章

他人の過失を寛恕すべきこと

一

人が己れにあつて、又は他人にあつて匡正し得ないことは、他に神の定め給ふまで、須らく忍んで之を悩へるべきである。

して、是れ恐らく、汝の試錬と忍耐との爲めに有益であると思へ。そは之なくしては、私共の功

績が貴重を致さない故である。

で、斯やうな障碍に蔭んだならば、汝よろしく、神がその御助力を降し給うて、そして汝をして柔和に之に耐へ得させるやう、ひたすらに祈るべきである。

二

人がもし既に一度二度忠告せられて、そして尙聽入れないならば汝復之と爭ふな。只一切を神に委ねて、そしてすべての僕の中に聖旨をして成遂げられ、又御名をして崇めまつられしめよ。神は悪を變じて善となすことを好く知り給ふ。

その種類の如何を問はず、努めて人の缺點弱點に寛大であれ。汝にも澤山あつて、そして亦他の人より寛大にされる必要ある。

汝自身をさへ、自分の欲するままにさせることができないのだ。それに、どうして他人をして汝の機嫌の向く通りさせることができようか。

私共は好んで他人に完全を望みたがる、而も自分の缺點を矯めようとはしないのである。

三

他人が嚴しく懲されることは、私共之を欲する。けれ共自分の懲されることは、之を欲しない。他人が放縱に泥むを見ては、之を不快に思ふ。けれ共自分の欲求が拒まれるのは、之を欲しない。他人が法規で束縛されるのは、之を善とする。けれ共自分は何等の制限を受くるに堪へ得ない。

之を以ても、如何に私共が、己れを秤る如く、亦隣人を秤ることの稀なるかが明かである。

人がもし盡く完全であるならば、私共は、神のために、何を他人より忍ぶべきであるだらう。

四

されば、私共は「互に重荷を負ふ」(ガラテヤ書、六ノ二)ことを學ぶやう、神は定め給うてある。なぜなれば、私共は誰も缺點のない者はない、誰も自分に足れるはない、誰も智慧に盈てるはない。だから、私共は互に怨し、互に慰め、相助け、相誨へ、又相誡むべきである。人が如何ほどその德に貴いかは、最も好く災厄の場合に於て現はれる。まこと、此やうな場合は、決して人を脆くはならせない、只その本質如何を示すのである。

第十七章

修道院の生活に就てのこと

一

もし他人と一緒に居て平和に仲好くして暮らさうと思ふなら、汝多くの事に於て自己を碎くことを學ばねばならぬ。

然り、或は修道院、或は他の團體の中に住んで、そしてそこに何等喧嘩を釀さずに、死に至るまで忠實に持續する事は、是れなか〳〵小事でない。

で、此處で善い生涯をして、そして大往生を遂げるその人は、是れ眞の福者である。

故に、汝もし固く德に立ちて、靈の進步を致さんと欲するならば、地上にあつては、自分是れ流

人であり旅客であると思ひ做せ。

して汝もし、修道者生涯を送らうと欲するならば、自分を「基督のため愚かな者」(コリント前書、四ノ一〇)となさねばならぬ。

二

法衣剃髮は益少ない。只行を新にすると、及び全く情慾を殺すとが、卽ち眞の修道者とならせるのである。

純然に神と及び己れの靈の救とでなく、他に何物かを求むるなら、その人は只患苦悲哀を見出すの外はない。

自分をいと小いものとして、そしてすべての人に服從するを努めぬなら、その人は決して永く平和の生涯に立ち得ない。

三

汝がここに來たのは、勞仕するためである、司配するためでない。また、辛苦するため、勤勞するためであつて、怠けて、無駄口するために呼ばれたのでないと、汝知れ。

恰も熔爐の中で黃金が試錬せられる如く、私共亦此處にて試錬せられるのである。

誰も、その全心を以て、神のために己れ謙下らうと思はぬなら、その人はここに立つこと出來ないのである。

第十八章

聖父たちの模範

一

昔の聖父たちの活きた模範を仰げ。眞の完全と高德とがその中に輝いてる。そして私共の爲しつつあるものの如き、如何に小にして、殆ど數にもならぬかを見るだらう。

本當に、此等に比べたなら、私共の生涯は果して何であるだらう。

げに、基督の聖徒たち友人たちは、飢と渴との中に、凍と裸との中に、又は辛勞艱苦の中に、或は通夜斷食に依り、或は祈禱と聖なる瞑想とに依り、その他無數の誹謗迫害の中に、皆奉仕したのである。

二

又見よ、使徒たち、殉教者たち、證聖者たち、又童貞たちや、その他のすべて基督の足跡を追ひまつらんとしたる人たちを。嗚呼、その蹈破したる艱苦の如何に多くして、又大なることであつたらう。

げに此等の人たちは、その生命を永遠の世に獲んとして、之を此の世に於て嫉惡した。

で、思へ。あの聖父たちが荒野で送つた生涯の、嗚呼、如何に嚴烈で、そして自我放棄であつたらう。如何に永い、そして劇い誘惑を凌いだらう。如何に屢ば敵魔の惱しを受けたらう。如何に幾回ぞ熱烈なる祈禱を神に捧げたらう。如何に峻嚴にその禁慾を守つたらう。如何に靈の精迪のために、その赤誠と熱心との大なることであつたら。闘つたことであつたらう。又如何に淸らな、そして純正な志望を神に寄せまつつたことであつたらう。

そして、晝はひねもす勞働して、夜は長い祈禱に委ねたのだ。而もその勞働してる間でさへ、心の中に祈禱は寸時も止まなかつたのである。

三

かうして聖父たちは、すべての時間を有益に費した、して神と交りつゝ過すその時間はげに短く思はれて、淨思の大なる樂みのまへには、肉體の榮養さへその必要を忘るるに至らしめた。

まして、富も位も、朋友親戚も一切を棄てて了つた。此の世に惹かれる慾念一つもない。殆ど生の必要物をも取ることない。して、苟も、此の肉に奉仕の必要ある如き、之を悲んだのである。だから、地上の物に於ては貧者であつた。けれ共、神の恩寵と心の德とに於ては富者であつた。

又、外面窮乏した。けれ共、內は天的の恩寵と慰安とを以て活々と養はれた。

四

此の世に向つては外客であつた。けれ共神には最も近しい、そして親密な友人であつた。然り、己れ自身には全く無であるとも見えた、又世よりは輕蔑された。けれ共神の御眼には貴重で、そして愛しき者とされたのである。

その守る謙遜や眞實であつた。その生涯や單純な服從であつた。又その步むや實に愛と忍耐との

途であつた。そしてそのゆゑに日々その靈的生命に增長して、神の大なる聖寵に浴し得たのである。

で、此等の聖人、實に是れ、すべての修道者たちの模範として與へられたので、私共は宜く之に奮起せられて、益々善に進むべきである。ゆめ、あの多數な倦怠者輩の怠慢に陷つてはならぬ。

五

嗚呼、このやうな聖なる制度の創始せらるるや、之が最初の修道者たちの、皆如何に道心熱烈であつたことよ。

嗚呼、如何に祈禱に皆熱心であつたことよ、如何に德に進まんとて互に競爭したことよ、如何に紀律の嚴格に守られたことよ、如何に主設者の制規の下に、尊敬服從の萬事に盛んであつたことよ。

げに皆聖なる完全な人々であつて、そして必死に戰つて此の世を蹂躙つたのだ。して、その修行の痕跡今なほ立證せられて居る。

然るに今や、もし誰かが單に規則の違犯者でなく、或は自分が負はされたその事に纔かに堪へ得たりとすれば、その人卽ち大なりと思はれるのである。

六

さても、私共の熱ない怠惰な有樣よ。如何に最初の熱心は早くも旣に冷却して、そして疲れて、弛みて、生てふものにさへ倦み果てて居ることよ。

されば、汝、屢ば信心勇猛の例を幾多見たのである。願くは進德の一念の、全然汝に眠つて了ふことのなかれかし。

第十九章

善なる修道者の勤行のこと

一

善い修道者の生涯は、須らくあらゆる德をもて充備せられるべきである。卽ちその內心亦人に現はれる外面そのままの如くあらんためである。

然り、外に見られる尙その以上に、內心その德に圓滿なるべきである。神は私共を照覽し給ふからで、何處にあらうとも、私共は之を畏みうやまひて、そして天使たちの淸さをもつて、御前に歩まねばならぬ。

で、私共は日々に志を新にして、益々信念に强まり、そして今日初めて此所に來たかの如き決意を以て、かく唱ふべきである。

「主なる神よ、私を助けて益々善に志し、又聖なる奉仕に竭すを得させ給へ。そして今まで私の爲し來た事みな空無である。願くはけふ此の日完全に初より仕直すを私に許したまへ。」

二

私共の決意如何に從て、進歩も亦伴ふのである。で、能く進歩せんと望むものは、亦大に勵精の

必要ある。
堅い決意の人でさへ往々頓挫を來すのである。況んや決意の薄く、或は堅固でない人々に於てをや。
私共が決意を棄てるには種々の仕方がある。けれ共些少でも勤行之を怠れば、必ず何かの損失を受けずしては已むことない。
義しき人の決意は、自分の智慧に恃まないで、むしろ神の聖寵に依頼む。そして何事に着手するにも、常に之に信頼する。
是れ、事を企てるは人にある。けれ共之を仕遂げるは神にあつて、人の途は自分にない故である。（箴言、六ノ九）

三

或は神に奉仕するため、或は誰か兄弟に親切するためならば、汝の平常の勤行をたとへ何か缺くことあらうとも、それは後にて容易に取返しできるだらう。
されど若し、それが汝の心の倦怠の故に閑却せられるなら、それは由々しい罪過であつて、又有害であると知れ。本當に、私共は隨分努力を重ねても、尚且多くの失敗をするのであるからである。
何かにつけて、併し、一定の計畫を常に立て置くべきである。殊に私共を妨害すべきものに對して最も然りである。

私共の外行内心、よろしく之を倂く省察して齊整させるべきである。是れ私共の德の進歩に殊更に有益であるのである。

四

もし汝絶えず自ら反省できずとも、少くも時折りには、然り、毎日一回、卽ち朝或は夕には之を努むべし。
卽ち朝には、その日の決心を定むべし。又夕には、その日或は言に、業に、又は考に、自分が神と隣人とに對し罪を犯せるなきやと、汝の行を顧みよ。
惡魔の邪惡と戰ふため、鎧に固めて勇者の如くであれ。先づ口腹を節すべし、さすれば凡ての肉慾は容易に節し得られるだらう。
全く何をもせずしては決して居るな。或は讀み、或は書き、或は祈禱し、或は默想し、或は何なりと公共の爲めに勞する所あれ。
肉體的の勞役は、宜く適度に行ふべし、而も諸人みな一樣に之に從事すべきでない。

五

共同でするのでない修行は、之を外に表はすべきでない。私的の事は、之を密かに行ふが一層安全である。
されど、共同な事には懈怠して、而も特殊な事には熱中する如きないやう、汝よろしく心すべきである。只義務、又は命ぜられた事を完全に忠實に成果した後、なほ餘閑のあるならば、その時

汝の信仰の要するままに、自分の欲することに委せて好いのである。
諸種の勤行は又各々その時に從ふが心地好い。或は祭祝の日に適するがある、或はある事は私共誘惑の時に爲さねばならぬ、又ある事は平和無事の時に爲さるべきである。
又或る事は哀む時に考へるべきで、又ある事は私共主にあつて悦ぶ時にすべきである。

六

主要な祝日には、善き修行を更に新にして、そして聖者たちの仲介を一層熱心に懇願すべきである。
祭日より祭日に至るその間も、私共げに今にも此の世より遷りて、あの永遠の祭日に入らんとする如くに心掛けねばならぬ。
その故に、私共はかやうな時に當りて恭虔益々加はり、そしてすべての戒行みな嚴格に之を守り、やがては遠からず、神より私共の勞苦の報を受けんとする、その準備にいそしまねばならない。

七

もしその日が遷延するならば、是れ私共の準備がまだ足らないので、定まりたる時に啓示せらるべき、その大なる榮光を受くるに足らざる故であると信じ、そしていよいよ此の世の離脫に準備するやう勵まねばならぬ。(ロマ書、八ノ一八)
「主人の來る時目醒めて居るを見らるる僕は幸福なるかな、まことに汝等に告ぐ、主人すべての所有を彼に掌らすべし」(路可傳、一二ノ四三)と、福音記者のルカは言うてある。

第二十章

獨居靜默を愛すること

一

須らく適宜な時を求めて己れの心に退き、屢ば神の慈惠に就て精思すべきである。
好奇の心を棄ててしまへ。
書物を讀むも、徒らに興味を唆るのでなく、むしろ汝に痛悔の心を起させるものであれ。
もしも餘計の雜談や無益の訪問を差控へ、又奇聞珍說に耳を借さないなら、汝が有益な瞑想に耽るには、之に好適な時間は澤山であるだらう。
最も大なる聖者たちは、出來得る限り、人との交りを避けて、そして隱れて神と親むことを悦んだ。

二

或る人は言うてゐる、「人の中に入る毎に、いつも人物が下つて出て來る」(セネカの言)と。是れ私共が亦永い雜談する毎に屢ば經驗するのである。
全く默つて居るは、語り過ぎないやうにするよりも、容易である。
家に引込んで居るは、外に出でて用心堅固にするよりも、容易である。

故に、人荷も内心靈的に生きんと欲するならば、須らく耶蘇基督と共に、囂々の群衆を避くべきである。

好んで引込み居る人でなければ、外に出て安全でない。
好んで默し居る人でなければ、語つて安全でない。
好んで人の下に屈するものでなければ、上に立つて安全でない。
克く服從することを學んだ人でなければ、司配するも安全でない。

三

その良心が善なりとして證言するでなければ、人は誰も安全に樂むことはない。
故に、聖者たちの安全は、いつも神を畏るるの念を以て滿ちて居た。
それで、その聖者たちは、げに大なる德と聖寵とを以て輝きたるに拘らず、自分が小心であり、又謙遜であることは、秋毫も減じなかつた。
されど、惡者の安全は、傲慢と自負とより起り、そして最後は自ら欺くに至るのである。
まこと、此の人生にあらん限り、たとひ汝が如何に善良な修道者であり、又は敬虔な遁世者であると見えるとも、それで汝が安全であるとは決して汝信ずるな。

四

往々世に推重される立派な人が、過大な自信に失して、その故に重大な危險に陷るのである。
それ故に、人は全く誘惑がないよりも、屢ば之に襲はれるが、却て甚だ有利である。餘りに安心し過ぎたり、或は恐く高振る心を起したりするならば、又は放縱に外部の慰安に傾いたりすることないためである。

嗚呼、誰ぞ若し、過行く歡樂を決して求めることなく、又は此の世に決して捉はれることないならば、その人なんと清い良心を保ち得るであらう。
嗚呼、誰ぞもし、一切の空なる煩惱みな斷去つて、只管救の事天の事を心に掛け、その希望を全く神に寄せまつるなら、その人如何に大なる平和と安心とを樂み得るだらう。

五

人もし聖なる罪の懺悔に向て汲々努力しないなら、誰も決して天的慰安を受くるに足りないのである。
もし汝、心の丈に罪をなげかんとするならば、聖書の言にも「汝の臥床にありて罪に哭け」（詩篇、四ノ五）とある如く、臥床に退いて世の喧囂より遠かれ。汝が外にあつて往々紛失するもの、之をその密房の中に見出すであるだらう。
住み續ければ密房も樂くなる、されど落着いて居ないならば、倦みて厭になるのである。だから汝が道者となつた當初より、好く之に住込みて慣れて了ふなら、後には汝に取つて、その密房が、懷しい友であり、又最も樂しい慰めともなるのである。

六

敬虔な人は、その靈を幽靜蕭默の中にありて精進させ、そして聖書の奥義に通曉する。

そこに悔恨の涙の流を見出して、之を以て夜毎に自ら洗淨する。卽ち世の喧囂より離れれば離れるほど、それ丈益々己が造り主に親密になるのである。

是れ、その知己友人より隔離するその人は、神之にその聖なる天使たちと共に來り近づき給ふ故である。

隱棲して靈のことを顧慮するは、その人たとひ不思議を行ふも、尙己れを等閑にするに優つてゐる。

修道者苟も、外出稀であつて、人に見られるを避け、又人を見るを欲しないならば、それは稱讃すべきである。

七

なぜ、汝の持つてならないもの、之を汝は見たがるのであるか。「世と世の慾とは過ぎ去つて了ふのである」。（ヨハネ第一書二ノ一七）

すべて感能的の慾念は、汝を外に迷ひ出させる。そして時過ぐるや、何を汝は持歸つて來る。只重荷に惱む良心と、散り亂れた心緒とのみではないか。

で、往々樂き外出は歎きの歸來と變じ、嘻き夕は悲き朝に移るのである。

すべて肉的歡樂は、その來るや嫣々して居る、けれ共終には咬付いて、そして殺して了ふ。

此所にあつて見られないで、それで他所で見られるもの何である。見よ、天と地とすべての元素とを。之より萬物實に皆造られてる。

八

太陽の照らす所、いづくにか、汝、永く存續し得るものを見ることできようか。

おそらく、汝、その望が滿足されると信じて居る。けれ共それは叶はぬことである。

たとひ、汝が萬象盡く之を眼前に見つくすとも、只是れ空なる幻影でなくして何である。

いと高きにまします神に向て汝の眼を擧げよ。そして汝の罪と懈怠とのために祈れ。

空なることは空なるものに委ね去れ。されど汝は只神の命じ給ふその事を心とせよ。

汝の房の戸を鎖して、そして汝の愛しまつる耶蘇を中に呼入れよ。

そして主と共に房の中に留まれよ。その如きの平和は、他所には決して見出し得られまい。

もし汝が外に出行かず、又詰らぬ噂に耳を借さないなら、汝はいつまでも樂い平和を享け得るのだ。然るに汝が時々外の新奇なことを聞きたくなる、それから必ず不安は汝の胸に襲ひ來るのである。

第二十一章

心の痛悔のこと

一

もし汝、聊かなりとも靈に精進したいと欲するなら、絶えず神を畏れ居よ。ゆめ放漫に流れるな、而もすべての情感、之を紀律の下に抑制して、決して愚かな娯樂に己れを委ねるな。

罪の痛悔に心を傾けよ。眞の敬神はそこにある。

痛悔は多くの善い事を持來たす。けれ共、弛んだ心は常に之を忽ち失はせて了ふ。

己れ是れ流人に過ぎないで、又その靈魂げに幾多の危險に脅かされてるを考慮するその人が、尙この人生何物か安全に享樂し得るとするならば、それは不思議である。

二

私共は心が輕くして、自ら缺點を等閑にする、その故に自分に靈の悲哀を感ずることはない。そして本當に泣かねばならぬその時に、愚かにも往々笑ひよろこぶのである。

善なる良心を以て神を畏れ敬ふのでない限り、眞の自由と清い歡喜とはあり得ない。

己れを惑はす凡ゆる障碍を攘去つて、そして心を一にして聖なる痛悔に想を凝す人、その人はげに幸福である。

何事に依らず、すべて己れの良心を汚し又重くすることを斥ける人、その人はげに幸福である。

勇者の如くたたかへよ。習慣は習慣に由て打克たれる。

汝もし他のする事に干渉しないならば、他も亦汝のするままにさせて干渉せぬだらう。

三

他人の事に餘計な氣を惹かれるな。又權貴の事件などに自ら絡まるな。

己れの上に第一常に汝の目を注げ。そして汝のすべての愛するものを措いても、まづ汝自身に殊更に忠言を試みよ。

人に好遇せられぬとて、それが故に悲むに及ばない。けれ共汝の行足らず、汝の思慮到らずして、そして神の僕とし、又敬虔なる道の人として、之にふさはしからぬなら、それこそ汝に重大な事である。

人はこの生涯に於ては、多く慰安を有たぬこそ、殊に肉的なもの尙然りで、而もそれが往々有益で又安全であるのである。

けれ共、又神的なる慰安がなく、或は只稀にのみ之を感ずるのは、是れ私共の責である。心の痛悔を求めずして、そして空なる又世的の事を全く棄去らないに由るのである。

四

神的の慰安は汝之を受くるに足らずして、むしろ汝には只多くの艱苦のみが當れるのだと自ら知れ。

人が完全にその罪を痛悔する時は、卽ちその人に、この世全く辛いもの味氣ないものとなるのである。

善人はげに、歎くべきこと、泣くべきことを、到る所に發見する。

なぜならば、或は自分を顧み、或はその隣人を考へても、誰もこの世に生きてる者、その艱苦のないはないと知る故である。

そして嚴密に自分を考へた時、益々その悲傷を深くするのである。

然り、その正當の悲傷と及び內的痛悔との抑もの根本は、卽ち私共の自分の罪惡と邪念とであつ

て、之に纏綿せられて、私共が天的な事を諦思せんとするも、それが稀となるのである。

五

汝の考ふべきは、長壽のことでない、むしろ屢ば汝の死のことであれ。さすれば汝屹度もつと己れの改善に熱心であるだらう。

もし死後の地獄や煉獄の懲罰を、心からもつと汝が熟思するならば、私は信ずるのである。汝はもつと勇んで勞苦や悲痛を悚へ得て、又こやうな場所の嚴格も、何等怖れぬことであるだらう。然るに、此等の事が胸に徹せずして、そして私共まだ肉の愉快を愛し慕ふ故、それで本當にいつまでも冷淡で、又緩慢であるのである。

六

往々この靈の修養が不足なその故に、私共の哀れな肉體が、斯くは容易に欺き託つのである。その故に、汝謙遜して、汝に痛悔の心靈與へ給へと主に祈れ、そしてあの豫言者と共に言へ、「嗚呼主よ、涙の糧を私に食はせ、涙を枡に滿ち充つるほど、私に與へて飲ましめ給へ」。（詩篇、八〇ノ五）と。

第二十二章

人生うき事の多きこと

一

いづくに在り、いづくに向くも、只神に賴りまつるでない限り、汝は哀れなものであるだらう。

なぜ汝、自分の思ふこと望むことの叶はぬとて、それに氣を腐らすか。誰か萬事をその思ふがまに成し得るものあるや。然り、私も、汝も、その他地上にある人、誰も皆それはできないのである。此の世にある人、誰も皆多少の艱難憂苦のない者はない。國王も法皇も亦然りである。然らば誰が最も幸福であるだらう。只神の爲めに能く何事をも堪へ得るその人である。

二

弱行薄志な多くの人は言ふのである。見よ、あの人如何にその生涯幸福なる、如何に富裕なる、如何に豪華なる、如何に權力勢威の盛んなるとこの世の所有足り餘つたとて、それで人間幸福なのでない。只尋常なれば足れりとする。されど天の善き事を考へ見よ、此の現世のすべての物など取るに足らずして、皆泡沫である、否、むしろ重荷である。して之を有する者には結句心配恐怖の種である。

故に人もし靈的に高まらうとすればするほど、益々この現世の生命は辛くなるのである。人間墮落の缺陷を益々鋭く感じて、又益々明かに悟るからである。

まこと、敬虔でそしてすべての罪よりよろこんで解放され、又靈の自由を得ようとするその人には、此の食ふ、飲む、起る、寢る、又休む、働く、その他種々な自然の必要に服從するその事が、是れ大なる不幸で又苦痛であるのである。

抑も内的に生きるその人は、此の世ながらの肉體の必要を、すべて重荷と感ずるのである。それ故に、あの預言者は如何に之より逃れんと努力したるか、熱心に祈つて言うて居る。「主よ、私を已み難き必要より救ひ給へ」（詩篇、二五ノ一七）と。

然るに、この自分の不幸に氣付かぬ者、あな憐むべし。否、一層憐れなるは即ち、その悲慘な朽果つべき人生に、尚戀々として執着する人である。

要するに、此等の人は只この生に絡まり付いて、ひたすらに生存へんとするのみ、神の王國など何等頓着ない。そして、中には隨分辛い勞働し、或は物乞までして、やつと生きてるものさへあるのである。

四

嗚呼、斯くも地上にのみ深く沒頭して、そして肉の事より外に何等味ひ得ないとは、なんとその人々愚かで、又信仰ない心だらう。

されど、此等の哀れな人々も、自分が斯くも烈く愛したその事の、終には皆詰らぬもの空なるものであつたと覺つて、そして痛くも後悔するに至るだらう。

だから、神の聖者たちや、すべて基督の熱心だつた友たちは、決して肉を悦ばせるもの、又は此の世に榮えるものにその心を置かなかつた。而もその望と志とを盡く永久の善事にのみ寄せしめた。

そして、ひたすらその念願を皆、天なる、朽ちない、而も目に見えないものに向はせた。是れ目に見ゆるものを愛して、それに由て汚れた下界の情慾に引込まれないためであつた。

兄弟よ、汝、靈的に進むためぞ、「その確信を投棄てるな」。（ヘブル書、一〇ノ三五）まだ時間と時機とあるのである。

五

なぜ汝の決心を躊躇するか。立ちてすぐさまに斷行し、そして言へ。「爲すべき時は今である。奮闘するも今である、今こそ生命を立直すその時機である」と。

汝が災難患苦に出逢うたなら、その時即ち汝が功績擧げる時である。

「進んで火水の中にも入らねばならぬ」。之を蹈破して、始めて汝「豐盛な所へ行けるのだ」。（詩篇、六六ノ二）

已れに酷であれ、さもなくば、汝、自分の惡に勝たれない。

この脆い肉體を持つてる限り、罪は私共免れ得ない、又倦怠と悲哀となしには生きられない。

私共はよろこんで凡ての不幸を免れて安息を享け得たい。けれ共、既に罪の故に純潔をなくして居る、それで又眞の幸福をも失つて了つて居る。

それ故に、私共は只忍び耐へて、神の仁慈に依頼し、罪障消滅して、そして「死すべきものが生命に嚥まれる」まで、待望まねばならぬ。

六

嗚呼、常に惡にのみ傾いてる人間の、なんと極めて脆いことよ。

けふ汝は罪を告白する、而も明日その告白した罪を復犯すのである。
又は、今汝は自ら愼まうと決心する。而も一時も經過するや、恰も何等決心した事ないが如く行ふのだ。
斯くも私共は脆くして、又恆心ないのである。本當に、只自ら謙遜して、そして苟も己れを偉ぶる如き、決してあるべき筈でない。
ましてや、聖寵ゆゑにこそ、折角多くの骨折りして得たるそのものさへ、私共は自分の懈怠に依り、忽ち復失つて了ふことあり得るのだ。

七

今から早斯う熱を失ふ私共、最後に果してどうなるのだらう。
もし自分の生涯に眞の聖化の徴跡まだ現はれもしないのに、恰もはや平和安全を得たかの如く、私共自ら安心して了はうとするならば、是れ私共咀ふべし。
私共はむしろ善良なる新參者である如く、己れが德行完全するために、更に教へ直されるが善いことであるだらう。さらば或は將來の改善を、又は一層の靈の進歩を希望し得ることできるだらう。

第二十三章

死に就ての瞑想のこと

一

やがては死は汝にすぐに來るだらう。汝の今の狀如何、之を改め考へよ。今日人は生きて居る、明日は見えなくなつて了ふのだ。
そして一度眼より取り去られるや、その人忽ち忘れられて了ふのだ。
故に、死は逃れんとすべきでない、むしろ罪を犯すを愼めよ。
だから、あの只目前をのみ思案して、そして未來に毫も準備しない人々は、あな、なんと心の鈍く、且頑なであることよ。
然り、汝もし今日準備しないならば、いかで明日それが出來ようか。
けれど、汝はすぐにも死なんとするその如く、汝の仕業に又思考に、すべてにその仕度がなければならぬ。
明日は所恃にせられない。どうして明日が汝に屹度あると知れるだらう。(ヤコブ書四ノ一四)
若し汝の良心曇りがないならば、死は何等怖れる所はない。

二

私共もし斯く善に進むことの少ないならば、永く生きるも何の益があるだらう。
あな、長命必ずしも私共を善に進めない。却て往々罪を增さしめるのみである。
願くは、噫、私共一日たりとも、此の世を淸くして生きて見まほしや。
多くの人は自分が修道者生活の年數を計算する、されど往々善に進んだ結果は殆んどないのであ

る。

もし死するが恐怖すべきであるならば、永く生きるも怖らく危険であるだらう。常に死の時を眼の前に見て、そして毎日之がために自ら準備する人、その人は眞に福者である。もし、汝、誰か人の死するを見たならば、自分も亦同じ道を蹈行くのであると知れ。

三

朝には、汝、夕まで待ち得ない者と考へよ。夕來らば、復朝ありと敢て期待すな。で、常に準備し居よ、そして死が不意に來らぬやう、汝生くるも油斷すな。多くの人は、突然に、又その備へなくして死す。「人の子は思はぬ時に來る」（路可傳、二ノ四〇、一）のである。

而も、その最後の時來るや、汝の過去の全生涯は非常に違つて汝の考へに映り始めるだらう、そして自分が怠つて不用意だつたのを汝哭くだらう。

四

死の來た時期くあれかしと要するその通り、今生きてる間に努力するその人は、なんと幸福で又賢者であるだらう。

世を全く輕蔑する念、德に進まうとする熱烈なる願望、訓練を愛する心、罪を淨めの苦行、或は迅速に服從すること、又は基督の愛のためにあらゆる艱難に耐へ忍ぶこと、我慾を斷棄てることは何ができるだらう、私は知らない。けれ共健康弱りては何ができるだらう、私は知らないのだ。

病氣の故に、德に進み善に改まつたものの些かである。恰も多く巡禮し歩いたとて、聖者とされたものの稀なると同じである。

五

朋友親戚に信賴するな。又は自分の靈の救を未來の時まで延ばし置くな。人は汝が思ふよりも早く汝を忘れて了ふ故である。

寧ろ時のある間に自分で準備して、そして豫め善い事を天に蓄へ置け。死後他人の援助に望むよりも優である。

もし今汝が自分のために配慮するでないならば、誰が未來に汝のために配慮して呉れようか。今こそ眞に貴い時である。「視よ今は恵の時なのである、視よ、今は救の日なのである」。（コリント後書、六ノ二）

この今の時、卽ち之に由て、汝が永久に生きるための功績を遂げ得るのである。然るに、もし之を有效に用ひぬなら、あな、汝はげに哀れである。

いつか時が來て、汝が改善するために、或は一日一刻の猶豫をほしいと思ふことがあるだらう。けれ共それが果して許されるか、私は知らないのだ。

此等卽ち人をして幸福に死に臨ましむるに、大なる自信を與へるのである。

汝が丈夫である間は、澤山に善い事ができる。けれ共健康弱りては何ができるだらう、私は知らないのだ。

病氣の故に、德に進み善に改まつたものの些かである。恰も多く巡禮し歩いたとて、聖者とされたものの稀なると同じである。

五

朋友親戚に信賴するな。又は自分の靈の救を未來の時まで延ばし置くな。人は汝が思ふよりも早く汝を忘れて了ふ故である。

寧ろ時のある間に自分で準備して、そして豫め善い事を天に蓄へ置け。死後他人の援助に望むよりも優である。

もし今汝が自分のために配慮するでないならば、誰が未來に汝のために配慮して呉れようか。今こそ眞に貴い時である。「視よ今は恵の時なのである、視よ、今は救の日なのである」。（コリント後書、六ノ二）

この今の時、卽ち之に由て、汝が永久に生きるための功績を遂げ得るのである。然るに、もし之を有效に用ひぬなら、あな、汝はげに哀れである。

いつか時が來て、汝が改善するために、或は一日一刻の猶豫をほしいと思ふことがあるだらう。けれ共それが果して許されるか、私は知らないのだ。

最も愛する者よ、もし汝が今絶えず死を怖れて、そして之に警戒するならば、見よ、果して如何なる危險を汝が免れ得るだらう。如何なる大きな恐怖を汝が取除き得るであらう。で、死の來た時に、汝は之を恐れずに、むしろ欣然之を迎へることのできるやう、今汝の生くるその準備に努力すべきである。

六

卽ち、汝がその時基督と共に生き始めんために、今汝此の世の事に死するを學ぶべし。その時、自由に基督の御側に近寄り得るために、汝今すべての物を輕蔑するを學ぶべし。その時、汝が確實なる自信をもち得るために、今汝の肉體を苦行の笞にて苛めよ。

七

さても、汝、一日たりともその安全を請合ひ得ないのに、なほ長命保たんと思ひ煩ふや、あな愚かな人よ。

多くの人は、まだ生きられると思つて詒かれてるその間に、突然この生命より引張つて行かれるのだ。

そして、誰が劍で殺された、誰が水に溺れて死んだ、誰が高い所から落ちて頸骨を打折つた、誰が食事の最中窒息した、または誰が遊戲して居て頓死した、此等の話は汝が毎日耳にするのである。

或は火で、或は刃で、或は疫病で、或は盜賊の手に罹り、死は種々ある。そして人は悉くその終局死であるのだ。人生忽ち影の如くに消えて行くのである。

八

汝が死んだ後、誰が記憶するだらう、誰が汝の爲めに祈るだらう。

努めよや、いと愛する者よ。汝の力ある限りに努めよや。いつ汝が死するか知れないのだ。又は汝が死んだ後、何が身に來るか知れないのだ。

汝にまだ時のある間に、不死の財を積んで置け。

汝の靈の救以外に何をも考へるな、只神に屬ける事をのみ念とせよ。

神の聖者たちを尊敬し、その行爲に倣ひて、そして之を今汝の友とせよ。

此の生に汝が永訣する時に、「汝を永遠の住居に迎ひ入れん」（路可傳、一六ノ九）ためである。

九

「地上にあつては、汝、自ら行人旅客である」（ペテロ前書、二ノ一一）と思做せ。さすれば、此の世の要務には何も待つことないのである。

ここには「永遠の都汝にない」（ヘブル書、一三ノ一四）。だから、汝只心をこの世より離して、そして天なる神にのみ向はせよ。

そして、日々祈りと歎きとを涙を以てみまへに捧げ奉れ。死後汝の靈魂が、欣びさきはひて、主に行くに足るものとせられん爲めである。

第二十四章

終りの審判と罪の懲罰とのこと

一

すべての事につけ、最期は終に來つて、そして嚴しき審者の前に汝は立つだらう、之を汝念とせよ。その審者に向ひまつりては、何事も隱されない、賄賂も動かせない、又辯解も聽かれない。只正しきままの事を審判し給ふのみである。

さても、憐れな又愚かな罪人よ。時折り人の怒つた顏にさへ戰慄するその汝、すべての汝の惡事を知り給ふ神に向つて何と答ふるか。

で、なぜ、汝はその審判の日に對して、自分に用意をしないのか。その日には誰も他より辯解され、又辯護されることできぬだらう。各人皆自己の重荷に充分であるのである。

して、今ぞ汝の勞苦も效果がある。泣いて受納れられ、歎いて聽かれるのだ。又悲めば、罪業克く償はれ、又淨められるのだ。

二

損傷をうけて、うけた己れの損傷よりも、與へた他人の惡事の故に一層歎く人。己れ反對せられて、却て悅んでその人の爲めに祈り、そして心からその罪を恕する人。他人の寬假を乞ふに躊躇しない人。怒るに難くして、而も容易に慈悲の心に動かされる人。又は己れに當るに屢ば苛酷で、肉を全く靈に服從させんと努める人。卽ちかやうな人是れ、大いに又有效にこの世ながらの淨を

受けて居るのである。

未來に罪の淨めを藏つて置くよりも、今に於て罪を淨められ、又惡根を斷切られる方、もつと優つて居る。

げに、私共は餘りに肉に執着を有ち過ぎる、そして之に由て己れを詒いてる。

三

地獄の火を焚く燃料は、汝の罪でなくして、他に何である。

で、今汝が自分を庇つて、そして肉に從ふいよ〳〵大なれば、それ丈いよ〳〵汝は後の苦患を强めるので、又多量に地獄の燃料を貯込むのである。

そこでは卽ち、罪いよ〳〵多くして、その人いよ〳〵嚴しく罰せられる。して惰けた者は火焰の笞を以て迫立てられ、食に飽いた者は、烈い渴と飢とで苛責されるだらう。

そこでは、又贅澤した者や、淫樂に耽つた者は、熱する瀝青と臭い硫黃とを振掛けられ、嫉妬憎惡に燃えた者は、宛然狂つた犬の如くに、その悶に哮り叫ぶだらう。

四

如何なる惡習も、一としてそれ相應の苛責をうけぬはないだらう。

そこでは、すべて傲慢であつた者は恥辱に充たされて、又貧婪であつた者は悲慘な貧苦に窘められるだらう。

そこで刑苦をうける一刻は、この世で百年忍ぶ最も苛嚴な苦行より、もつと苦痛であるだらう。

この世に在ては、時折り勞苦より休ませられる、又朋友よりの慰安も享けられる。けれ共一度そこに投入れられた罪人には、絶體休息はないのである。絶體慰安はないのである。

で、汝、己れの罪を憂へて悲めよ、あの福者たちとともに審判の日に、汝が安全ならんためである。

然り、その時義い者は、曾て己れを窘め又苛めた者たちの前に向ひ、昂然恐れることなくして立つだらう。(智慧の書、五ノ一)

その時、今は柔順に他の審判に自ら屈するその者が、却て審判せんとして立つだらう。

その時、貧者賤者は大なる安心を獲るだらう、そして驕者は周圍を恐怖に打たれるだらう。

五

その時、基督のために愚かとなり、又輕蔑されることを學んだ者は、即ち此の世で賢者であつたとわかるだらう。

その時、この世で忍ばれたすべての艱苦は、皆歡喜と爲り、又「すべての不義はその口を塞ぐだらう」。(詩篇、一〇七ノ四二)

その時、すべて敬虔であつた者は悦ぶだらう。又不信であつた者は悲むだらう。

その時、己れの肉を虐げたその人は、常に珍味に飽かされたにも優りて、よろこび踊るだらう。

その時、粗末な着物が美しく光るだらう。そして綺麗な衣裳が汚なく映るだらう。

その時、賤の貧き矮屋は、金玉もつて飾られた宮殿よりももつと稱美されるだらう。

その時、絶えずに忍耐する生涯が、世界のすべての權力握ることよりも、もつと有利であるだらう。

その時、只單純に服從するその事が、この世のあらゆる巧智にまさり、はるかにもつと尊崇されるだらう。

六

その時、純潔で、又善なる良心は、該博なる哲學よりも、もつと歡迎されるだらう。

その時、富を輕蔑するその事が、地上のすべての財寶よりも、もつと貴重とされるだらう。

その時、汝の熱心籠めて捧げた祈禱が、汝の取つた最も甘美な馳走よりも、もつと汝の慰安となるだらう。

その時、汝が緘默守つたその事が、徒らに饒舌弄して多辯した事よりも、もつと汝に歡喜となるだらう。

その時、聖なる仕事は、幾多の美麗な言よりも、もつと珍重されるだらう。その時、嚴格なる生涯送つて、又峻烈なる苦行を積んだその事が、すべての地上の愉快を嘗めたことよりも、もつと汝を悦ばせるであるだらう。

今の些かの苦痛は、汝之を忍ぶを學べ、即ち一層重いその時の苦痛を汝が免れ得んためである。

汝が如何に後の世にて耐へ得るか、まづ之をこの世にて試みよ。

汝がもし今のこの些少の事を耐へ得ないなら、どうしてあの永劫の苛責に堪へ得られよう。

もし、今わづかの患苦に悶え惱むなら、その時地獄で汝どうだらう。
見よ、この世にあつては樂をする、又後の世には基督と共に天に司配する、さう二重には、汝美い事をもてないのだ。

七

もし、今のこの瞬間汝が死なねばならぬとなつたなら、假令汝が今日この日まで、絕えず名譽と快樂との中で過して來たとても、それが汝に全く何の益をする。
只神を愛して、之に仕へまつるの外「すべては皆空である」。（傳道書、一ノ二）
神を全心より愛するその人は、死も、刑罰も、審判も、又地獄も、皆怖れない。完全なる愛が神に近かせる保證を爲るからである。
だから、まだ罪に生くるを愛する人が、偏へに死と審判とを恐ろしがるも、不思議はない。
けれど、もし汝、まだ愛が足らずして、汝を惡より呼返すことができないなら、少くも地獄を怖れるその心に汝を抑へさせる、亦善い事である。
本當に、神を畏れることを躊躇するその人は、永く善に立留ることができぬだらう、而も忽ちに「惡魔の罠」（テモテ前書、一ノ二）に掛つて了ふのである。

第二十五章

全生涯を熱心に改善すべきこと

一

只「愼み」（テモテ後書、四ノ五）勵みて神に仕へまつれ、そして何の爲めに汝此所に來りしか、なぜ世を棄てたるか、之を繰返し自分に考へよ。然り、神にあつて生き、そして靈の人とならんためではなかつたか。
それ故に、汝德に進むに熱心なれ。やがて、勞苦の報を汝はうけて、そして、その時には、恐怖も悲歎も、もはや汝の周圍に及ぶことないだらう。
今僅かの間の勞苦であらう、そして大なる休息、然り、永久の歡喜は來るのである。
もしも汝がその仕業に始終克く忠實で又熱心であるならば、神も亦屹度之に酬いて、克く忠實で、又豐富であり給ふだらう
遂には勝利に達せられるとの、その善い堅固な希望は汝になければならぬ。けれ共それに安心すべきでない、怠つて、高ぶる心の起らぬためである。

二

或る人憂悶起りて、恐怖と希望との間に屢ば動搖し、遂に悲痛に堪へ兼ねて、或る日聖堂に入り、祈りするためその祭壇の前に跪きて、それを心に念じつつ、そして言うた。「嗚呼、もし尙耐へ通すべきなるや、私の知らまほしや」と。すると、その人忽ちに神の御答を心に聽いた、「汝もしそれを知りしなら、何を爲ようとするぞ。汝今あの時爲たいと思つた事を爲よ。さすれば、好し、汝は安全であるだらう」と。

之にその人は忽ち慰められ又强められて、己れを神の聖旨に任せ奉り、そしてそれより憂悶に惱むことも止んで了つた。

で、その人もはや、何が己れの未來にあるべきやなど、之を知るため敢て攻究しようとしなかつた。むしろ「神の聖意の悦びたまひて、又全き事」（羅馬書、一二ノ二）そは何であるべきや、之を求めるに努力した。卽ちそれに由てすべての善い業を始めより仕直して、そして仕遂げようとしたのである。

三

預言者は言うて居る、「主に依り賴みて善をおこなへ、この國にとどまれ、さらばその富にて養はれん」（詩篇、三七ノ三）と。

ただ一つ多くの人にその熱心な進德改善を邪魔するものがある、卽ちそが戰鬪の困難と勞苦とにおびえる事である。

だから、己れに最も仕惡い又難いと思はれることに當つても、猛然之に打克たうと勵むその人は、是れ殊に他にすぐれて最も德に進歩するのである。

卽ち、誰でも最も己れに克ちて、そして靈にあつて肉に死するならば、その人最も德に進むので、又最も神寵に値ひするのである。

四

けれ共、すべての人皆、その己れを打負かし、又己れを殺去る事に、同じ力を有つて居るのでない。ただ勤勉で善に勵む人ならば、假令その人多くの情慾あらうとも、他の品行善良な、而も德に向て熱炎足りない者よりは、却てもつと進歩の力に優つて居るのである。

二つの事が殊更に私共の改善に大なる益をするのである。卽ち、生得自分の惡習が傾くその事より無理に己れを引離すと、又最も自分に缺乏する善事に向て熱心に奮勵すると、是れである。

汝、また、度々他人に見て自分に不愉快を起させる事がある、之を尤も宜しく己れに避けて、そして自ら打克つやう努力すべきである。

五

到る處に、汝、進歩の機會を摑まへよ。で、もし模範とすべき事を或は見、或は聽いたならば、之をまねぶに汝の心の燃立てよ。

もし又、何か非難すべしと思つた事は、汝自ら、戒めて之を爲すな、或は既に之を爲たならば、直ちに自ら悛むることを努力せよ。

汝の眼の他人を見る如く、汝も亦他人に注視せられて居る。

信仰に熱烈で、且つ神に敬虔な兄弟の、亦行ひ善良で能く規律に正しいのを見ては、なんと愉快で、そして氣持の美いことであるだらう。

之に反して、その行動や放逸で、己れが呼ばれたその勤務を守らぬものを見る時は、なんと悲く又痛しくあるだらう。

又、ここに呼ばれた自分の目的を懈つてそして心をその本務でないことに傾けるは、なんと有害であるだらう。

六

汝が決心したその目的を常に記憶して、そして、汝の心にあの十字架に釘られ給ひし者の尊影を描き置け。

耶蘇基督の御生涯を觀たてまつりては、汝は、むべ、自ら恥ぢざるを得ぬだらう。既に永く神の道にありながら、一向に之に合致しようと、何等努力しなかつた故である。

まこと、熱心に又敬虔に、主のいとも聖なる御生涯と及びその御受難とを自ら體しまつる修道者は、すべて已れに有益で又必須なものを、そこにあまた見出すであるだらう。然り、基督を措きまつりて、之よりも善いものを求める必要はないのである。

本當に、もし十字架に釘られ給ひし基督が、私共の心に來ますなら、なんと迅速に又十分に私共が教へられるであるだらう。

七

熱心なる修道者は、すべて已れに命ぜられた事を能く受納れ、又能く之を遵奉する。

けれ共、怠惰で、又微溫な修道者は、患苦に患苦を加へられ、又すべての周圍よりの憂懼に攻められて、そしてその心の中に慰安を宿さない、又之を外に求むることを許されない。

規律に背いて生くる修道者は、必ず重い破滅のうき目に逢ふのである。

放縱と氣儘とをのみ求むる者は、常に苦勞の裡にある。どれもこれも物事皆自分に不平であるからである。

八

然らば何をして、あの他の多くの修道者たちが、各々その道院の規律の下に閉込められて居るのだらう。

殆ど外へは出て行かないで、全く世を離れて生きて居る、粗食を喫つて、粗服を纏ひ、多く働いて少く語る。夜にはまた遲くまで夜守りして、朝には早く起き、長い時間を祈禱に費して、又屢ば讀書する、そして嚴格にすべての規律を遵守するのである。

斯く到る所に多くの僧尼修道者たち、神に祈禱の唱歌を始むる時に當り、汝がその聖なる仕事を怠けて暮すとは、げに汝の恥ではないか。その他の種々の僧院尼院の事を考へ見よ。如何に毎夜で、あのカルツシア派や、システル派や、そして大勢立つては、神に讃美の歌を謳ふことよ。

九

嗚呼、私共は只心の限り喉の限り、主なる神を讃美しまつるのみ、その外何等なすべきことのなくしてありたしや。

嗚呼、汝亦食ふこと、飲むこと、又は眠ることの必要毫もなく、只常に神を讃美しまつりて、又唯一靈の知識にのみ意を用ひる事のできよかし。さらば復何かにつけ肉の必需に勤むることなく、

汝は今よりももつと幸福であるだらう。
願くはかやうな必要みな跡を絶ちて、只專ら靈の生命の養滋のみあれかしな。而もあな、私共は之を味ふことの稀である。

一〇

人がその慰安を何等有形の物より求めぬやうになつた時、卽ち神はその人に無上完全の樂みとなり始めるのである。して、その時、如何なる事物に出會ふとも、その人泰然として滿足するのである。
して、その時、大なる事にも悅ばされまい、小なる事にも歎かされまい。只完全に眞實に神に已れを委ねまつるのみ。卽ち神はその人に取つて一切を包むのである。然り、神にあつては、何物も失なることない、死することない。而も「萬物之に在て生き」、(路可傳、二〇ノ三八)そしてその命じ給ふままに直ちに奉仕するのである。

一一

終止は遂に來る、そして失はれた時間は復返らない、汝この事を常に記憶せよ。心勞動苦なくしては、到底德に達することはできないのだ。
汝の熱心冷め始める時、汝の不幸は亦始まるのである。
されど、その熱心燃える時、玆に汝は大なる平和を發見する。そして、神の聖寵と德を愛する念とに依り、勞苦も一層輕くなるを覺えるだらう。

熱心で、又勤勉な人は、すべての事に當るに用意が出來て居る。
惡習と情慾とに向つて抵抗するは、肉體の勞苦に汗するよりも一層骨が折れる。
小さい過失を避けない人は、次第に大きな過失に陷つて了ふ。
その日をもし有效に過したなら、夕方汝は歡喜があるだらう。
自ら愼めよ、自ら鬪ませよ、自ら誡めよ。そして、他人にどんな事のあらうとも、汝自らを忽諸にすな。
汝が自分を虐げることの強い丈、それ丈汝は德に精進するのである。

アーメン。

第貳卷　內的生活に就ての誡告

第一章

內的生活を愼むべきこと

一

主は言ひ給うてる、「神の御國は汝らの中にあり」（路可傳、一七ノ二一）と。で、汝心を竭して神に歸り、そしてこの悲慘なる世を棄てよ、汝の靈魂さらば安息を得るだらう。

勉めて外的の事を輕蔑し、そして專ら內的の事に意を注げ。さらば汝、神の御國の汝に來るを見るだらう。

その神の御國とは、卽ち「聖なる靈による平和と歡喜とであつて」、（ロマ書、一四ノ一七）之は神に不虔なものには與へられないのである。

で、若し汝、心の中にその相應い住居を準備しまつるならば、基督は必ず來りたまひて、その慰安を汝に示して下さるだらう。

すべて「その光榮と秀美とは內にあり」、（詩篇、四五ノ一四）そこに宿つて自ら悅び給ふだらう。

卽ち、主は屢ば來つて、內的なる人を訪れたまふのである。して、その語る御言は麗はしい、その與へたまふ慰めは樂くある、その平和は豐かである、また、その親みは全く美妙偉大である。

さらば、忠實なる靈の人よ、この新郎の欣び來つて、汝の內に宿るがために、心をこめて之を迎へまつるに準備せよ。

既に主は言ひ給うてある、一人もし、我を愛せばわが言を守らん、わが父これを愛し、かつ我らその許に來りて住所を之と共に爲ん」（ヨハネ傳、一四ノ二三）と。

だから、基督のために御座を設け奉れ、而も他の者の一切入り來るを拒絶せよ。

基督を所有しまつれば、汝は富みて滿足るのである。その時汝のために主はすべてを調達し、又忠實に處辨し下さつて、汝は全く人に賴る必要なくなるのである。

なぜなら、人は忽ち轉變して、そして汎速無常である。けれ共基督は永久にましまして、最後まで渝らず助けて下さる故である。

三

人は如何に有益で親密であらうとも、固是れ儚い有死の者である、決して之に多くを期待すべきでない。さりとて又、時に之が反對非難を受けようとも汝敢て悲むべきでないのである。

今日はその人汝と一緒に居る、けれ共明日は反對に立ち得るのだ。で、移變りは往々風の如くである。

汝全然神にのみ信賴して、そして只畏れて愛し奉れ。神は答へ給ひて、そして汝にいと善かれかしと計つて下さるだらう。

畢竟この世には永遠の都はない。で、何處に行くも、汝は外客である、旅人である。して只親く基督に結付いてるのみの外、休息は何時にてもないのである。（ヘブル書、一三ノ一四）

四

で、汝の休息する場所でないものを、なぜ汝はなほ見廻して眺めるか。

汝の住所は天にあらねばならぬ、そして地上のもの汝悉く之を浮雲流水視すべきである。

すべては皆過去つて了ふ、そして汝も亦過ぎ去るのである。

だから、心して之に縋るをするな、恐らく捉へられて滅びて了ふだらう。

汝の思念はいと高き者と共にあれ。そして汝の祈禱は絶えず基督に向けられよ。

もし汝が高い事天の事を思索し得ないとも、汝よろしく基督の御受難の中に休息し、又その聖なる御創痍の中にうれしみて棲居すべきである。

然り、汝もし耶蘇の聖痍とその尊き御涙との中に敬虔に竄入るならば、患苦に當つて汝大なる慰藉を覺えるだらう。又は人の嘲侮を顧慮せずに、容易に誹謗の言に堪へ得られるだらう。

五

基督もこの世にいまして、人より嘲笑せられ、そしてその最大必要の時に當つて、知人朋友よりさへ侮辱の中に見棄てられ給うた。

基督は甘んじて苦痛と輕蔑とを受けられ給うた。さるに、汝あへて何事を呟かうとするのであるか。

基督にはまた、敵と讒毀者とのみであつた。然るに汝は世人が皆汝に友達で、又親切であること

を欲してる。

だから、汝に何等逆難が起らないで、どうして汝忍耐の榮冠を戴けよう。

もし、何等の災禍をも凌がうと欲しないで、どうして、汝、基督の友となれ得よう。

で、汝もし、基督と共にあつて天に治めようとするならば、宜く基督と共に、又基督のために忍辱すべきである。

六

もし汝一度なりとも完全に基督の御胸に入り、そして少しなりとも、その燃ゆるが如き愛を味ひまつりしなら、その時自分の損得利害など復念頭に措くことなく、却て侮辱に逢つては汝はそれを悦ぶだらう。基督の愛は人をして己れ自身を輕蔑せしめるからである。

耶蘇と眞理とを愛し、又眞實に内的で、そして放縦なる愛慾より脱し得たその人は、即ち神に己れを自由に向はしめ、靈に於て己れ自身の上に高まりて、そして歡喜に滿ちて安らかなることができるのである。

七

すべてを世の評判や聲價に動かされず、而もそのあるがままに判識するその人は、是れ眞の明者であつて、即ち神より教へられたのである、人間に由るのでない。

誰でも内的に歩むを知つて、そして外的の事を考慮する少いその人は、その敬虔なる修道をするに、復場所を求め、或は時を待つことないのである。

靈的の人は忽ちにして己れに力を集中する、外部の事に心が散らされること全然ない故である。で、外部の仕事或は要務は、その必要の時に當つて決して閑却せられない、而も隨時にその人之に己れを適應させるのである。

又、克く靈的に己れを正しまた齊へた人は、他人の態度の如何に奇怪で邪曲であらうとも、之に一向頓着することない。

是れ、人は此の世の事をいよいよ自分に惹付けるに從ひ、いよいよ心が妨げられ、又擾亂される故である。

八

もし、物事汝にその正を得て、そして汝克く淨化されるなら、即ちよろづ皆汝の幸福と化して、そして靈の進歩を資けるだらう。

然るに、汝はまだ全く自分に死んで居ない。又すべての地的な事より脱却されてない。それで多くの事が汝を不快にさせ、又煩累させるのである。

凡そ人の心を汚し、又惑亂させるものは、げに塵界有形な物に對する、その不純な愛心にまさるはない。

故に、もし汝が外的なる慰安を拒斥するならば、即ち汝は想を天の事に回らして、そして内心屢ば歡喜に躍ることができるだらう。

第二章

謙遜なる服從の事

一

誰が汝に味方なるか反對なるか、之を多く顧慮するな。けれ共神が汝の爲すすべての事に汝と共にいますやう、之は孜々として注意せよ。

汝の良心きよらであれ、神亦汝を護つて下さるだらう。

神が祝けんとしたまふその人は、如何なる邪惡も之を害することできないのだ。

もし汝が默して忍ぶことを知るならば、屹度神の御援助汝の上にあるだらう。

神御自身汝を救ふべき時と方法とを知り給ふ。だから、汝は之に已れを任せまつらねばならぬ。

私共を援けて、そしてすべての困厄より救出して下さるのは、卽ち神の御業である。

人が私共の過失を知つて之を非難するは、私共を益々謙遜にさせてくれ、往々甚だ有益とすべきである。

二

人がその過失の故に自ら謙下する時は、容易に他人の心を和げ、又その惱を早く解くことができる。

謙遜なる者を神は保護して、そして救つて下さる。又謙遜なる者を愛して、そして慰めて下さる。

然り、謙遜なる人々に已れを傾け給ひて、謙遜なる者に大なる聖寵を垂れ給ひ、そしてその沈んだ後に更に之を榮光に擧げ給ふ。

謙遜なる者に神は又その奥義を啓き給ひ、そして美妙に之を已れに惹付けて、又之を召し給ふ。』

謙遜なる者は恥辱を受けても自若として能く平和に安んずる、神にあつて立ち、そしてこの世に特まない故である。

で、汝、汝がすべての人に劣れりと感ずるでない限り、決して少しなりとも德に進歩したりなどとは自ら許すなよ。

第三章

善良で平和なる人のこと

一

まづ汝自身に平和を齎らせよ、その時、亦他人に平和を與へ得るだらう。

平和な人は、すぐれた博學な人よりも、もつと善い事をする。

情に激する人は、善をも惡に變らしめ、又容易に惡を信じたがる。

善良で平和な人は、すべての事を化して善とならしめる。

平和な人は誰をも決して疑はない。けれ共滿足缺けて氣の焦る人は、種々の疑惑に由て動搖され、そして自分を安ぜしめない、又他人の安んずるをも許さない。

さやうな人は、往々その語つてならぬことを語るのである。又爲して利益なことを忽諸にする。』

又、他人の務とする事を考へて、そして自分の務めとすることを懈怠する。
それ故に、汝まづ自分の事に熱心なれ。その時亦正しく汝の隣人にも熱心であり得るのだ。

二

自分の爲た事には辯疏百方、種々に色付けることを汝は知つて居る。けれ共他人の辯疏は之を受け納れない。
されど、むしろ自分の罪は之を責めて、そして汝の兄弟のは之を辯解するやう、汝もつと正しくあれ。
汝もし他に怨されたくば、亦他を怨すべし。
見よ、如何に汝はまだ眞の愛と謙遜とより隔たることよ。なぜならば、此の德は是れ、只己れに向つてのみの外、決して怒り又腹立つことを知らない故である。
善良柔和な人と交るは、決して大なる事でない。是れ誰も自然に好む所であつて、人は皆平和を得ることを悦ぶのだ、そして殊に自分と意見同じな者と親むのである。
けれど、剛情で意地惡なもの、又は規律がないもの、或は自分に反對なものと、平和に生きることのできるのは、是れ大なる聖寵であつて、且稱むべきことであり、また非常な勇敢の仕業である。

三

己れ自ら平和を持して、そして亦他人とも平和に暮す者がある。

又、己れに平和をもたないで、他人も亦平和にあらしめない者がある。斯やうな人は、他人にけに厄介で、而も自分自身に一層厄介であるのである。
又、自分自身を平和の中に置いて、そして他人を亦之に引入れようと努むる者がある。
要するに、この悲慘な生涯に於ける私共の平和は、必ずしも艱難を感ぜざるにあるのでなく、之を謙遜もつて耐へ忍ぶに存するのである。
で、能く忍ぶことを知る人は、即ち能く平和を持する人である。して、その人即ち自分自身の克服者であり、世界の主人であり、基督の友であり、又天を承繼ぐ者である。

第四章

純潔なる心と純眞なる志向とのこと

一

兩の翼が人をして地より翔り上らしめる、即ち、志向には純眞がなければならぬ、又心情には純潔がなければならぬ。
純眞は神を求めさせる、そして純潔は之を捉へて味はせる。
もし汝の內心放縱な物慾より解放されるなら、汝の善行何等の障碍を蒙むることないだらう。
もし只、神の聖意を悦ばし奉り、又隣人の福利を計らんとするの外、何等他に企て又求めることないならば、汝は即ち完全に內的の自由を享受するだらう。

もし汝の心が正くあるならば、あらゆる萬物皆汝に生命の鏡であり、又聖なる御教の書物であるだらう。

如何に微にして睹くあらうとも、萬物一として善なる神の御力を示して居らぬはない。

二

もし内的至善にして、又純潔であるならば、汝は何の障碍もなく、一切の事物を見、そしてその眞相を攫み得るだらう。

純潔なる心は、天國地獄にも貫徹する。

人は各々その内心の狀態如何に從つて、亦外部の事を判斷する。

もし、此の世に歡喜があるならば、それは只潔い心の人のみがもつのである。

もし、此の世に歡喜があるならば、それは只潔い心の人のみがもつのである。

して、もし又何處にか患難憂苦があるならば、それは良心汚れた者のみが能く知つてゐる。

鐵は火中に入れられると、その錆を失つて、炎々として白熱化する。丁度その如く、人も亦全く神に己れを歸依させて了ふなら、その怠慢より脫却して、そして新い人間と變るのである。

三

人がその熱心冷始めると、その時少しの勞苦も之を恐れて、そして切に外的なる慰安を得ようとする。

されど、完全に己れに克つて、そして勇敢に神の道に步み始めるや、その時前には苦痛と感じた事も、今はそれを少しも意に介せぬやうになるのである。

第五章

自ら顧慮すべきこと

一

私共は己れに全く信賴せられない。聖寵にも理智にも私共往々不足する故である。

私共には些しか光明ない、而もそれさへ自分の怠慢ゆゑに忽ち失して了ふのである。

然り、往々私共内的に盲であることにさへ氣が付かない。

又、往々惡を行つて、そして之を辯疏して益々惡くするのである。

折には又、激情に驅られて、誤つて之を熱心と考へる。

或は他人にある小さな事を見咎めする、而も自分にあるもつと大きな事を看過する。

又は、他人より蒙つた害は、私共銳敏に感じて考慮する。け れ共他人が自分より受けた時は、恬として顧みない。

苟も己れを嚴正に省察する人は、他人を苛酷に審く筈がない。

二

内的な人は、何事の配慮を措いても、まづ自分自身の事を配慮する。そして自分の事に心を向ける人は、勿論他人の事には默してゐる。

もし、汝が他人の事には一切口を緘して、そして殊更に自分を省みることをしないなら、汝決し

て内的な、又敬虔な人とはせられない。
もし、汝が自分と神とに全然心を向けるなら、外から日に映るものなど、毫も汝を動かすに足らぬだらう。
自分の心ある所に汝が居るのでなくして、汝は何處に居る。又は一切萬事に眼を通したとて、自分自身を怠つて何の益がある。
もし汝が平和を欲し、又神との眞の合一を望むならば、他の萬事を差措いて、そして只自分にのみ眼を注がねばならぬ。

三

故に、もし汝が淡然一切の塵慮を絶つて居るならば、汝の進徳必ず大なることであるだらう。
けれど、もし何なりと世事に心を寄せるなら、即ち汝は退歩するのである。
只純然神と及び神より出るものとの外、何物をも汝に取つて大なりとするな、高しとするな、悦ぶべしとするな、又受くべしとするな。
如何なる慰安も、すべて有形な物より來るものは、皆之を空であると思ひ做せ。
神を愛する謙の人は、神以下のものは、之を一切に輕蔑する。
只神のみ永遠である、無限である、萬物に普遍して、靈魂の慰安である、又心の眞の歡喜である。

第六章

善なる良心の歡喜のこと

一

善なる人の光榮は、その善なる良心の證明である。（コリント後書、一ノ一二）
汝の良心を善ならしめよ、さらば歡喜は汝にある。
善なる良心は、能く多くを忍耐する、そして不幸の中にあつても能く歡喜する。
不善な良心は常に恐怖と不安とに襲はれる。
もし汝の心已れを咎めるなくば、汝はたのしく安らかであるだらう。
善を行つた時でなくして、決して歡ぶな。
不善な者は決して眞の歡喜をもつことない、又内心の平和を感ずることない。「惡者には平安あることなし」（イザヤ書、四八ノ二二）と主は言ひ給うてる。
或は言ふものあるだらう、「平和はわれにある、禍は來ることあるまじ、誰か敢て害を加へんとするや」（ミカ書、三ノ一一）と。されど、之を信ずるな。突然神の御怒は起り來つて、それらの人の仕事は皆打壞され、そしてその計畫はすべて滅びて了ふだらう。

二

「思難を誇りとする」（ロマ書、五ノ三）のは、愛ある者にむづかしい事でない。かやうな誇りは、是れ「主の十字架の誇り」（ガラテア書、六ノ一四）である。

人より與へられ、又受けられる榮譽は是れ、僅に束の間のものである。而も、この世の榮譽は、往々悲哀は伴はれる。

されど、「善人の榮譽は、その良心にある」、（コリント後書、一ノ一二）人の口にない。義人の歡喜は神より來り、又神にある。そしてその樂みは、眞理にある。誰でも眞正な又永遠な榮譽を欲するならば、その人はこの世の事を意としない。この世の榮譽を求むるもの、或は之を心から輕蔑しないもの、その人は是れ天の事を愛する信念少ない人である。

然り、美名も汚名も、之を顧みないその人は、本當に大なる心の平安を得るのである。

三

良心清らかなその人は、容易に滿足して、そして平和であるだらう。

美名を得たとて、それ丈聖者となるのでない。又汚名で呼ばれたとて、それ丈惡人であるのでない。

汝は汝である、神のみまへに立ち得るその汝以外には、人の言汝を大にもしない、小にもすることない。

汝がもし自分の內的の事にのみ留意するならば、他人が何を外で言はうとも、何等顧慮することはないだらう。

「人は外面のみを見る、されど神は心の中を知り給ふ」（一サムエル前書、一六ノ七）。又人は仕業を以て判斷する、されど神は志向そのものを考慮したまふのである。

ひたすらに善をのみ志し、そして殆ど自分の事に屈託しないのは、是れ謙遜な靈の人たる表徵である。

何等有形な物より慰安を得ようとしないのは、是れその人の信仰最も純潔で、又靈的である證據である。

四

己れがために一切外よりの證明を求めないのを明示するのである。

「それは是とせらるるは、己れを譽むる者にあらず、主の譽め給ふ者なればなり」（二コリント後書、一〇ノ一八）と。

第七章は、これ聖保羅の言である。

內心神と共に歩み、そして外なる愛着に何等捉はれないのは、卽ち靈的なる人の狀態である。

第七章

すべてに超えて耶蘇を愛しまつりて、そして耶蘇のために己れを輕蔑すべきこと

一

耶蘇を愛しまつりて、そして耶蘇のために己れを輕蔑するとは如何、之を理會するものは、幸福な人である。

即ち、その愛のために、私共は他の愛をみな棄てねばならぬ。耶蘇は只己れのみすべてに超えて愛せられんことを欲し給ふ故である。

有形な物を愛することは、迷妄であつて、常に移り易い。

耶蘇を愛しまつることは、眞實であつて、永く變らない。

有形な物に繋る人は、その斃れるや、共に倒れて了ふ。

耶蘇を抱きまつる人は、永久に堅固である。

耶蘇を愛しまつりて、之を大切に汝の友とせよ。世は皆汝に背いても、耶蘇は決して棄て給はない。

い、又最後に於て、汝の滅ぶるままにはなさらない。

否でも應でも、汝は早晩すべてのものより離れねばならぬ。

二

生きるも死ぬるも、耶蘇に繋りて、そしてその信實に賴りて己れを任せ奉れ。世は皆汝を失望させた時、耶蘇のみは獨り助けて下さることができる。

げに汝の愛しまつる者の御性質は斯うである、即ち、他の誰をも許容し給はずに獨り汝の心を專有して、そこに王者の如く、自分の王位に坐せんとし給ふのである。

だから、もし汝能くすべての物念、之を己れより掃ひ去ることを知るならば、耶蘇は必ず悦んで、汝と共に住み給ふだらう。

けれど、もし耶蘇を外にし奉つて、汝が何物かなほ人間に依托するならば、それは全然汝に損失

であると知るだらう。

あの風にそよぐ葦を信じて之に凭掛るな、「人は皆草なり」。（イザヤ書、四〇ノ六、）

三

もし全く人の外觀のみに向て期待するならば、汝は忽ち欺かれるであるだらう。

又もし他の人に向て慰安利益を求めるならば、往々汝は損失を受くるに過ぎぬだらう。

けれど、もしすべてに於て耶蘇を求めまつるならば、即ち確かに耶蘇を見出しまつるだらう。

之に反して、若し汝自身を求めるならば、汝自身は見出される。けれ共、それは汝の破滅である。

人もし耶蘇を求めまつらぬなら、それは、全世界よりも、然り、そのすべての敵よりも、夐かにもつとその人に害となるのである。

第八章

耶蘇との親しき友情のこと

一

耶蘇が共に在す時は私共安全である。又何事も困難とは思はれない。けれ共耶蘇が共にいまさぬなら、事はよろづ皆難儀である。

耶蘇が私共の内心に語り給はぬ時は、すべての慰安もその値ない。けれ共もし一言なりともそが語りますならば、即ち大なる慰安が感ぜられる。

マグダレナのマリアは、姉妹のマルタが「師來りて汝を呼び給ふ」（ヨハネ傳、一一ノ二八）と告げた時、その泣いてた場所よりすぐさま起ちて行きはしなかつたか。

涙の中より靈の歡喜に來れと耶蘇の呼びます時、是れ汝に幸福のときである。耶蘇ましまさずば、如何に汝は淋く又堪へ難くあるだらう。又もし耶蘇を外にしまつりて他の何物をか汝の望むなら、如何に愚かで又空であるだらう。それは全世界を失ふより、汝にもつと殃害であるのである。

二

耶蘇ましまさずば、何をこの世が汝に提供し得るだらう。

耶蘇ましまさずして居ることは、おそろしい地獄である。されど耶蘇と共に居ることは、甘美な樂園である。

耶蘇もし汝と共にいますなら、如何なる敵も害を與へ得ぬだらう。

耶蘇を見出しまつる人は、「善い財を見出すのである」。（馬太傳、一三ノ四四）然り、すべての善いものにもまさる善いものであるのである。

又耶蘇を失ひまつる人は、非常な損失するのである。然り、全世界を失ふよりも、はるかに大きくあるのである。

耶蘇を離れまつりて生くるものは、最も貧なる人である。又耶蘇と共に親み居るものは、最も富める人である。

三

耶蘇と交りまつることを知るは、大なる智慧である。

謙遜で、又平和であれ。さらば耶蘇は、汝と共にいますだらう。

又敬虔で、そして靜默であれ。耶蘇は汝と共に留り給ふだらう。

もし外なる物に心を傾けようとするならば、汝は忽ち耶蘇を取逃がしたてまつり、そしてその聖寵を失つて了ふだらう。

して、もし一度之を取逃がし又失ひまつるなら、その時汝は誰に逃れ行き、そして誰を求めて友としようとするだらう。

友なくしては、汝は克く生きてゐられない。で、もし耶蘇が汝にすべてに優る友であり給はぬなら、汝は只非常に悲く又淋いことであるだらう。

故に、もし汝が他の誰かを信じ、又は歡ばんとするならば、それは愚かな仕業である。

耶蘇を惱らせまつるより、汝むしろ世界を皆敵とするを好とする。

汝が心を寄せるすべてのものの中にても、特別耶蘇が汝の最愛の友であれ。

四

すべては皆耶蘇のために愛せられる。けれ共耶蘇は耶蘇御自身のためである。

耶蘇基督をのみ私共特別に愛しまつらねばならぬ。只耶蘇のみ獨りすべてにすぐれて、善い、そして信義な友であると私共は知るのである。

耶蘇のため、又耶蘇にあつて、汝は友も敵も同じく愛せねばならぬ。そしてすべての人のために、皆耶蘇を認めて之を愛しまつるやう、祈らねばならぬ。

汝決して特別に稱められよう愛せられようと欲してならぬ。それは只獨一無比であります神にのみ屬することである。

誰よりも汝にその全心を竭すを望んでならぬ。汝亦誰にも決して全心の愛を捧ぐるな。只耶蘇のみ、汝の中に、又すべての善人の中にいまさせよ。

五

何等有形な物には絡まれずに、汝その內心より純潔であれ、又自由であれ。

もし「汝自由に神の恩惠ふかきを見ん」（詩篇、三四ノ八）とするならば、只裸な又潔い心を神のみまへに持來るやうせねばならぬ。

げに然り、されど汝この心境に達するには、必ずまづその聖寵に導かれて、それに誘致せられねばならぬ。汝がすべての肉慾より脫離解放せられて、そして天の唯一な者と唯一に結合するためである。

まこと、神の聖寵來り臨むや、その人すべての事に當つて力を得るのである。又その去るや、その時貧い弱い者となつて了つて、恰も全く鞭笞の下に委棄せられた如くであるだらう。

されど、此やうな時にも、汝決して落膽し、又失望してはならぬ。只神の聖旨に任せて平靜に蹈みこらへ、又汝に降りかかつた災難を、却て耶蘇基督の御榮に歸せしめて堪へ忍ぶべし。多のあとには春來り、夜のあとには晝來り、又嵐のあとにはうららかな晴天仰がれる故である。

第九章

すべての慰安の絶えたる時のこと

一

神よりの慰安ある時には、人間よりのものなど、之を輕蔑するは難事でない。

けれど、人よりも神よりも慰安全く絶えながら、而も神のみ榮のために悅んで心の孤獨を忍び、そして何等自分の事を求めず、又自分の功績を顧みないのは、是れ大なることである、極めて大なることである。

聖寵已れに降りて、そして汝が歡喜に躍り、敬虔に滿ちたとて、それが何の大なることであらう、誰も皆さやうな時を希つて居る。

神の聖寵に負はれるその人は、極めて樂くその生路を行くのである。

もしその人、天の全能者に支持せられ、又至上な者の御手に導かれて、そして人生何等の重荷を感じないとしたとても、それが何の不思議であるだらう。

二

私共は好んで何かの慰安を有ちたがる。人はその自我より離脱されることむづかしい。聖なる殉教者ロレンチオは、その司祭と併せてこの世に打克つた。なぜなれば、すべて地上に愉快と見られるものを悉く輕蔑して、そして自分の最も愛する、神の最高司祭のシスツスをさへ、それが己れより奪去られるを、基督の愛のために、自若として忍び得たからである。

聖ロレンチオは當時の羅馬教會主教シスツス二世の下にその執事であつた。時恰も羅馬皇帝ヴアレリアノ位に在り、基督教徒に大迫害が起りて、シスツスも捕へられ、まさにその犧牲とならんとするや、ロレンチオは主教を欽慕の餘り、己れも亦之と共に光榮の死に赴かんと願ひしも、シスツス許さず、即ちその遺命に從ひ尚後に殘りて己が教會の愛的責務を果さんため、昔の恩師である、また今の主教である、漆膠水魚の間のそのシスツスの空しく獨り曳かれて去り行くのを忍んで看過した、而もその後數日ならずして、ロレンチオも亦遂に捕へられ、最も崇高壯烈なる殉教的の死を以て永久に天の榮えの冠冕を贏得たのである、實に紀元二百五十九年の事なりと云ふ。（譯者の註）

即ち、天の造物主に對しまつるその愛に由りて、人に對するその愛の上に超越し、そして人より來る慰安以上に、神の悦び思召すことを欲した故である。

されば、之に學んで、汝も亦神の愛のために、隨分大事な又愛する友をさへ棄てねばならぬ。さりとて又、汝の友より棄てられた時も、それを穴勝苦痛とすべきでない、私共は最後に皆互に別れねばならぬと知るのである。

三

人が充分に己れを抑へて、そしてその愛情を神に全く寄せまつるやうになるまでには、その人またの永い靈的苦闘を蹈んで之を學ばねばならぬ。

人が己れを恃みて立つその間は、その心常に人間的の慰安に惹かれ易い。

されど眞に基督を愛しまつりて、そして德を研くを是れ事とするその人は、決してそやうな慰安に躓くことない、又何等の感覺的な快樂を求めない。只益々嚴格なる修行に邁進して、そして基督のために如何なる苦役をも凌がんとするのである。

四

故に、もし神より靈的慰安が與へられたなら、その時汝それを感謝を以て受けまつれ、而もそれは神の恩賜であつて、汝の功績に出るのでないと知れ。

ゆめ、己惚れるな、過大に悦ぶな、又は徒らに慢心すな、而もその恩賜の故に益々謙遜であつて、そして、すべて汝のする仕事に益々つつしみ、又畏れをののけよ。やがてその時は過去つて、後に誘惑接し來るであらう故である。

されど又、慰安が取去られたとて、汝直ちに失望するに及ばない、只謙遜と忍耐ともつて、更に天の眷顧を待つべきである。神は前にも增す慰安を復汝に與へて下さることできる故である。この理是れ神の道に精しい人たちには、必ずしも新奇な又不知な事でない。古來大なる聖者たちや又預言者たちに於て、此の種の轉變亦屢ばあつたのである。

それで、その或る者は恩寵に満ちて言うた。「われ豐かなる時に言へり、永久に動かさるることなからん」。と

五

然るにその恩寵の取去らるるや、そが經驗したまま更に加へて言うた、「なんぢ御面をかくし給ひたれば、われおぢ惑ひたり」（詩篇、三〇ノ六、三）と。

されど、その中にも尚失望せず、直ちに主に願求めて言うて居る、「主よ、われ汝に呼はん、われひたすらに汝に願はん」（詩篇、三〇ノ八、三）と。

やがて、その祈りの結果を齎らすや、之を悦び言うてゐる、「主はわれに聽きたまひ、又われを憐みたまへり、主はわれを助けたまへり」（詩篇、三〇ノ一一、三）と。

而も如何に、然り、言うてある、「なんぢ踴躍をもつてわが哀哭にかへ、また歡喜をもつてわが帶としたまへり」（詩篇、三〇ノ一二、三）と。

されば、大なる聖者でさへも斯うであつたならば、まして弱い哀れな私共である、假令時には熱心で、又時には冷淡であらうとも、それは失望すべきでない。聖靈はその聖意のままに、來たりて又去り給ふ故である。だから、福者のヨブも「朝夙く彼をみそなはし、時わかず彼を試みたまふ」（ヨブ記、七ノ一八）と言うてゐる。

六

されば私共はひたすらに神の大なる憐憫と又天よりの恩寵とを仰ぎのぞむのみ、その外復何に望

を置かれよう、何に信頼すべきだらう。

もし聖寵に見放されて、そして自分のままの哀れな狀に委棄されて了ふなら、その時如何なる善人私と共に居ようとも、或は同輩如何に敬虔でも、友人如何に忠實でも、或は神聖なる書物、綺麗なる册子、又美妙なる詩や歌何があらうとも、すべてそれらのもの何等私を益する所ない、又何等私を悦ばすことないのである。

その時、私は只忍耐して、己れを全く神の聖意に委ねまつるのみ、それより優つた救濟はないのである。

七

如何に信仰堅固なる修道者でも、亦時にその聖寵の減退を悟り、或はその熱心の消衰を感ぜぬものあるだらうか、私はまだ見たことない。

又は、如何に天の歡喜に躍り、或は靈の光に照された古の聖者でも、或は始めに或は後に、何かの誘惑に出會はなかつたはないだらう。

まこと、神のために何かの患苦で鍛へられたことない人は、亦神に就ての高い瞑想を樂む値ない。』いつもの習ひ、誘惑まづ來るは、是れ慰安後に續く前徵である。

誘惑に耐へ得た人には、天の慰安が約束せられてある。曰く、「勝を得る者には、われ生命の樹の實を食ふことを許さん」（默示錄、二ノ七）と。

八

神の慰安は又、人が厄難に悩へ得るために、その勇氣を加へんとして之に與へられる。されど、誘惑またその後に接いて來る。如何なる善い事も、その人の誇らぬためである。惡魔は睡ることない、して自分の肉慾まだ死んでゐない。だから汝戰鬪の準備を弛めるな、右にも左にも敵はあつて、そして決して休息しないからである。

第十章

神の聖寵を感謝すること

一

汝は働くために生れてる、それに何故汝は休息を求めるか。(ヨブ記、五ノ七)汝が心に掛くべきは慰安でなくして、忍耐することであれ、又歡喜でなくして、十字架を負ふことであれ。(路可傳、一四ノ二七)

靈的慰安と歡喜と、もし俗人なほ常に受得ることであるならば、誰か之を悦んで受納れないものあるだらう。

まこと、靈的慰安は、あらゆる世の愉快や、又は肉の快樂よりも優つて居る。是れ世の甘樂は皆空である、或は醜である。けれ共靈的愉快は惟り眞に樂く又正しく、善德より發して、そして神に由て純潔なる心に注ぎ込まれるのである。

されど、この天的の慰安は、誰も之を意のままには享けられない。誘惑の時は久しく停止して居ない故である。

二

此の天來の眷顧に對し、之を最も障碍するは、即ち心の虚僞な自由と、及びその人の大なる自信と、是である。

神はその慰安の聖寵を與へ給うて、その御業や善である。けれ共人は神に酬いまつるに全くその感謝の仕事を以てせず、その行や惡である。だから、即ち聖寵の賜物私共に溢れることができないのである。なぜなら、私共はその恩賜者にその本源の泉に注ぎ返すことをしないからである。

三

慰安もし私に悔恨を齎すならば、私は之を欲しない。又瞑想もし私を傲慢に導くならば、私は之を好まない。

そは、高いもの悉く聖でない、樂いもの悉く善でない、又は願望ことごとく純でない、して私共に貴重なもの悉く神の悦びたまふものでない。

故に、私の進んで受けたいとする聖寵は、即ち之に依て私が常に益々謙遜で、又益々小心である

と認められ、そして自分を棄去るに益々覺悟させるものである。聖寵の賜物うけては教へられ、又は之を取去られて、なほ恰も鞭笞を受けた如くに學んだその者は、復如何なる善事をも敢て之を己れに歸せしめようとはしない、而も却て自ら貧い者裸な者として告白するのである。神のものは神に納れ奉れ、そして汝のものは汝に歸せしめよ。即ち神にはその聖寵を感謝し奉り、そして汝には只汝の罪と、その罪ゆゑ受くるに値する懲罰とを意識せよ。

四

常に汝をどん底に置け、さらば絶頂にも置かれるだらう。どん底なくしては、絶頂も存在しないからである。

神のみまへではいと高くあつた聖者たちも、自分等の眼には最も小さいものであつた。して益々榮光の高まるに從つて、益々自分は謙遜であつた。

眞理と天の光榮とに滿ちた人たちは、復この世の虚き名譽などをほしがらない。

神に基礎して固められた人たちは、高ぶる心など毛頭起すはずがない。

自分の受けて善事は何であれ、皆之を神に歸しまつる人たちは、復相互よりの名譽などを求めないで、而も唯一の神より出るその榮譽にのみ憧れる。そして自分と及びすべての聖者たちとの間に於て、神がすべてのものに優りて讃美せられんことを希ひ、又絶えずその神に向て進み行くのである。

五

故に、いと小い聖寵にも汝は之を感謝せよ。さらば、もつと大なるものを汝は受けるに足るだらう。

いと小いものも、汝にはいと大なるものの如くであれ。そして尚更賤微なものも、汝はそれを特別の賛賜と思ひなせ。

もし、その與へて下さる者の尊さを考へなば、如何なる賜物も、之を小いもの或は賤いものと、どうして思はれよう。至上の神より賜はるものに、賤いもののある筈ない。

たとひ懲罰と鞭韃とが與へられたとて、私共は之を感謝すべきである。神は私共に來るもの、皆是れ私共の救のためなのである。

神の聖寵を保持せんと思ふものは、その與へられた聖寵には感謝して、そしてその取去られたものには、よろしく忍耐すべきである。而も之を取戻し得んために祈れ、また之を取逃さぬやう翼翼として、そして謙遜なれ。

第十一章

耶蘇の十字架を愛する者の少きこと

一

今や耶蘇の天國を嘉ふ者は澤山ある。けれ共その十字架を負はうとする者は稀である。

天よりの慰安を得たいと望むものは澤山ある。けれ共患苦を受けんとする者は稀である。

耶蘇とその食卓を共にせんとする者は澤山ある。けれ共之と共に制慾せんとする者は稀である。』みな耶蘇と共に歡ばんと希ふ。之がために何なりと忍ばんと欲するは稀である。麵麭を裂きたまふまでは、耶蘇に隨ひまつるもの澤山ある。けれ共受難の盃を飲むまでするは稀である。

その奇蹟を崇めまつる者は澤山ある。御跡を追うて十字架の恥辱を受ける者は稀である。多くの人は耶蘇を愛し奉る、只患難身に迫らぬ限りの間である。多くの人は又耶蘇を讃へまた之を祝ぎたてまつる、只之より何かの慰安を得てるその間である。で、耶蘇もし己れを匿し給ふか、或は暫時棄て給ふかするならば、その人たち或は怨懟に或は落膽に甚く沈んで了ふのである。

二

誰でも耶蘇を耶蘇の故に愛しまつりて、そして自分自身の何かの慰安の故でないものは、その人がすべての患苦やまた心の憂悶の時にも、亦慰安の絶頂にある時の如く、同く之を祝ぎまつることができる。

して、もし聖旨がその人たちに何等の慰安を與へようとし給はないでも、尙依然として常に讃美し奉り、又常に感謝を捧げまつらんとするのである。

三

嗚呼、もしも利己自愛の心が毫も混らぬなら、私共が耶蘇に對し奉るその純なる愛は、なんと大

なる力であるだらう。

絶えず慰安を求めるものは、すべてそれが雇はれ人と呼ばれるのではないか。

自分の都合利益をのみ常に念とする人は、是れ基督よりも、もつと自分を愛する者であることを證するのではないか。

全く報酬を望まずに、そして神に奉仕する者は、げに何處に見付けることが出來るだらう。

四

一切を離脱して裸となつた眞の靈的な人は、世に殆ど見られない。

眞に靈の貧い、そして物界一切より離脱したその人は、今や誰が見るだらう。斯やうな人は、「げに天の際地の涯」（箴言、三一ノ一〇（拉丁譯））より來たかの如くに貴いのである。

「假令人その財産をすべて與へようとも」（雅歌、八ノ七）尙何等取るに足らないのである。

或は如何なる勤行苦行を重ぬるとも、なほ之に比べては詰らない。

或は又、あらゆる知識を攫み得たからとて、なほ遙かに及ばない。

或は又、その人大なる有德であつて、此上なく信念熾烈であらうとも、なほ大に缺けてるものある。然り、一事絶對にその人に必要なものである。

そは何である。卽ち一切を拋つて、己れをさへ棄去り、全然我念より脫却して、そして何等私慾を止めないこと、是である。

斯やうな人は、その爲すべきであると知つた事をみな爲た時も、却て自分は何も爲たのでないと

考へる。

五

又、偉いと貴ばれ得べき事も、之を偉いと考へない。只自分は是れ眞に無益な僕であるとのみ思做す。されば、眞理も言ひ給うてる、「斯の如く汝らも命ぜられし事を爲したる時、われらは無益なる僕なり、爲すべき事を爲したるのみと云へ」（路可傳、七ノ一〇）と。故に、その人はげに靈に於て貧しく又裸であつて、昔の預言者と共に、「我は孤獨にして貧し」（詩篇、二五ノ一六）と言ひ得るのである。

本當に、己れと及びすべてとを棄て、そして己れを世のどん尻に置くことを知るその人より、もつと富めるは誰もない、もつと強きは誰もない、もつと自由なるは誰もない。

第十二章

聖なる十字架是れ天への大道なること

一

「己れを棄て、十字架を負ひて耶蘇に從へ」（馬太傳、一六ノ二四、ヨハネ傳、六ノ六一）との此の言、之は多くの人に苛酷であると見て取られる。

けれど、もつと苛酷であらうと聞えるのは、即ち「詛はれたる者よ、我を離れて永遠の火に入れよ」（馬太傳、二五ノ四一）との、あの最後の言である。

故に今よろこんで十字架の語を聽いて之に從ふ者は、また永遠の刑罰を宣告される怖れないだらう。

して、主が審判のために來給ふ時は、即ちこの十字架の象形が天に現れるだらう。

その時この世に生きてる間、十字架に釘けられ給ひし者を則とした、即ち十字架の僕たちは、大なる確信もつて、審判の主なる基督の御側に寄近くだらう。

二

それなら何故、天國への行く路なる、その十字架を負ふことを汝は恐れるのか。

十字架に救がある、十字架に生命がある、十字架にあらゆる敵に對する防禦がある。

十字架に天的甘味の潤ひがある、十字架に强健なる心の力がある、十字架に靈魂の歡喜がある。』

十字架に善德みな包括されてある、十字架に聖なる事皆圓滿されてある。

十字架を外にして靈魂の救はない、永遠の生命の希望もない。

故に、汝の十字架を負ひて、そして耶蘇に從ひまつれ、さらば汝は永遠の生命に入るだらう。

耶蘇は「その十字架を負ひ給ひて」先に行き、そして汝のために十字架の上に死に給うた。汝が亦汝の十字架を負うて、そして勇んで十字架の上に死なんためである。（ヨハネ傳、一九ノ一七）

汝もし耶蘇と共に死なば、亦之と共に生きるだらう。又もし之と共に苦むなら、亦之と共に榮光を享けるだらう。

三

見よ、一切皆十字架に根據し、又一切皆己れに死する一事にあつて解決する。然り、生命に達し、又眞なる心の平和に達するには、只是れ聖なる十字架と、毎日自我に死するとの途より外に、他に途はないのである。

汝の欲する所を歩み、汝の欲する事を求めて見よ。只十字架の途より外に、上にはもつと高い途、下にはもつと安固な途を見出すまい。

すべて汝の欲するまま、思ふがままに按排整理せよ、而も汝は否應なく必ず何かの忍ぶべきものを見出さずには已まぬだらう。卽ち、そこに汝は十字架を常に見出すのだ。

或は肉に於ての苦痛を感ずることがあるだらう、或は心に於ての靈の悶を受けることがあるだらう。

四

或は時に神より棄てられる、或は時に汝の隣人より惱まされる。而もそれにも彌增すのは、卽ち汝が汝自身に往々重荷となるのである。

して、その時汝を救ひ又宥め得べき方法慰安他に何等ないだらう、只神の聖旨のあるまで、忍んで悚へねばならぬのみである。

是れ神は、汝が慰安なくして患苦を忍ぶことを學び、又之に由て己れを全くみまへに服せしめ、そして苦難に依て益々汝が謙遜にせられんことを欲し給ふ故である。

心から基督の御受難を感知する者は誰でもない、只自分で之と同じな經驗した者である。

で、十字架はいつでも用意がしてある、そしてどこにでも汝を待つて居る。

何處へ逃げたからとて、汝はそれを避けられない。なぜなら、何處へ行つても、それが汝に伴いてゐて、又いつでも汝を見付け出す故である。

汝、上を向いて見よ、下を向いて見よ、外に向け、內に向け、何處に向いても、汝は十字架を見出すのだ。

五

だから、汝がもし內心の平和を得、そして朽ちざる冠を贏得んと欲するなら、忍ぶと云ふこと、是れ何處へ行つても、汝に必要なのである。

汝がもし愉快に十字架を負ふならば、之が亦汝を負うて汝の願ひのその終局へ連れて行つて呉れるだらう。その場所卽ち辛苦の終局する所であつて、而もこの世には、どうあつてもない所である。

されど、汝がもしそれを厭々負ふならば、それが汝に重荷となつて、又汝自身をいよいよ重くするだらう。而もやつぱり汝はそれを負はねばならぬのである。

そして假令一つの十字架を投棄てても、汝はまた屹度他の十字架を見出して、而もそれが前のものより恐らく一層重くあるだらう。

六

誰も人間未だ曾て避得たことないそのものを、汝はなほ逃れ得られると信ずるか。見よ、あの聖

者たちを、誰か十字架なく、又患難なくして此の世に居たものあるだらうか。

然り、私共の主なる「耶蘇基督さへも、この世にいましその間は、一時たりともげに御受難の惱みのなきはなかつた。で、言ひ給うてる、「基督は苦難をうけて死より甦り、その榮光に入るべきあり」（路可傳、二四ノ二六及四六）と。

さらば、汝なぜ、この天國への大道である、卽ち聖なる十字架の道をば棄てて、そして尙も他の道を求めるのであるか。

七

基督の全生涯、げに十字架と殉義とで終始し給うた。然るに汝は安息と歡樂とを求めるのか。汝もし患苦を忍ぶでなくして、他に何かを求めようとするならば、それは間違つてる。間違つてる、間違つてる。なぜなれば、この人生全く悲哀に滿ちてゐて、そして到る所に十字架もて印章せられてある故である。

殊に、誰かもしその靈に於て益々高く進むなら、その人益々重く十字架を見出すこと往々ある。この流竄なる人生の苦痛が、その愛に由て益々增加する故である。

八

されど、さやうな人は、斯く多く試錬に惱むその間にも、なほ宥めの慰安がないではない。そが十字架を擔ふ大なる報果は、己れに積りて天に藏せられるを知る故である。

で、悅んでその下に屈する時は、患苦の重荷はすべて變じて、天的慰安を望む確信となるのであ

る。

又、この肉體益々苦難に苛まれるに從ひ、靈は益々內的恩寵に由て強健にせられるのである。して又時々、基督の十字架に肖からんとするその愛の故に、全く患苦困厄の惱みより強められ、そしてその憂苦患苦のなきをさへ却て欲せぬやうになるのである。自分が神のため凌ぎ得るその苦痛の多く又重いほど、自分は益々神に受納せられる者と信ずる故である。

九

而も、之は人間的の德の力でない。只基督の聖寵であつて、之に能はざる事はない。卽ち、之がこの脆い肉の人間に働くや、今まで自然に忌みて且避けたその事を、その熱烈なる心靈却て自ら勇進して行つて、そして之を愛するやうになるのである。

凡そ、十字架を負ふこと、十字架を愛すること、この肉體を打擲してそして隷役に服させること、名譽を逃避すること、悅んで屈辱に耐ふること、自分を輕蔑して、又輕蔑せられんと欲すること、不幸と損傷と之を忍ぶこと、及び、この世に於ける榮華は一切之を望まぬこと、卽ち此等は人間の力ではできないのである。

試みに汝自分に顧みよ、此等の事一として汝の自力で出來るはないだらう。

けれ共、もし主に信賴しまつるならば、汝は天よりの力を與へられ、そして此の世と肉と皆汝の命令に屈服せられるであるだらう。

加之、もし汝が信仰もつて鎧とせられ、又基督の十字架もつて印章せられてあるならば、敵な

る悪魔をも汝は怖れることないだらう。

一〇

さらば、汝を愛する故に木に釘けられ給ひし汝の主の、その十字架を勇敢に負はんため、汝基督の善なる又忠なる僕となることを覺悟せよ。

この悲慘な人生、げに不幸と不便と種々雜多である。で、汝は之に耐へ得るためにその準備せよ。そは何處に行き何處に移るとも、それは常に汝に付纏ふを見るだらう故である。されどそれを如何しよう。只汝は之を忍ぶのみ、それより外に厭な患苦憂苦を逃れる方法はないのである。

もし汝が主の友となり、主と共に生きんとするならば、主の盃を、汝、愛心もつて之を飲め。

慰安をすべて神に任せ奉り、そが善となし給ふ御意のままであらしめよ。

まこと、汝は患苦に耐へることに孜々として、そして之を以て最大の慰安と考へよ。「假令すべての憂患、之を盡く己れ一人に受くるとも、今の時の苦難は、我等に賜はる未來の榮光にくらぶるに足らぬ」。（羅馬書、八ノ一八）故である。

一一

汝が患苦に遭つて、之を基督のために怡樂である、愉快であると感ずるやうになつた時、その時汝に取つて、げに地上に天の樂園を見出したとも言つて好い。

けれど、苦勞が汝に重荷であつて、そして之を逃れようと求めるその間は、汝はいつまでも不幸である、そして患苦を恐れる心は到る處に汝に付纏ふ。

で、もし汝が自分に必須なこと、即ち苦を忍ぶこと、及び己れに死すること、この二つの事に決心するならば、汝の心狀忽ち改まつて、そして平和は汝に來るのである。

假令汝が保羅と共に第三の天にまで擧げられたとても、そが爲めに汝はもはや此の世の苦患を受けないとの保障を得るのでない。耶蘇は言ひ給うてる。「われ彼にわが名のために如何に多くの苦難を受くるかを示さん」（使徒行傳、九ノ一六、）と。

故に、もし汝が耶蘇を愛して、そして絕えず之に仕へまつらんと欲するならば、苦勞はいつまでも汝に離れずあるのである。

一三

願くは汝が耶蘇の御名のため、何かを受難するに足るものとならまほし。如何に大なる榮光の汝に保留されるだらう。如何に大なる凱歌を神のすべての聖徒たちが揚げるだらう。又如何に大なる模範と汝が隣人たちになるだらう。

然り、誰もが皆忍耐することを稱讃する、され共自ら苦難を受けんとするは稀である。

この世の事のためには、多くの人隨分能く忍耐する、されど汝は基督のためであれ、して些少なりとも悅んで受難したならば、それを汝の功績とせねばならぬ。

一四

己れに死する生涯を汝は送らねばならぬ、確かに之を汝知れ。そして自分に死ねば死ぬほど、そ

の人益々神にあつて生き始めるのである。
誰でも己れを屈して、基督のために苦難を忍ぶでない限り、決して天の事を暁るに適しない。
基督のために悦んで忍苦するより以上に、この世に於ては何事も神の御旨に叶ふはない、何事も
汝の靈に裨益するはない。
もし汝に選擇ができるとするならば、寧ろ基督のために苦難を忍ぶことなれよ、徒らに多くの慰
安に浴しようとしてならぬ。即ち益々基督に肖かり奉るのであつて、又すべての聖徒たちに一致
するのである。
なぜならば、私共が功績を積み又德に進むのは、決して多くの愉快慰安の中にあるのでなく、む
しろ最も逆地に立ち、又最も患苦を凌ぐ中にあるのである。

一五

で、もし忍苦する以外に、人間の救ひのため何かもつと優れた又もつと有效な方法あつたならば、
基督は必ず何かの言葉又は何かの例に由て之をお示しあつたに相違ない。
けれ共、その從ひまつつた弟子たちや、又は從ひまつらうとした者たちに、基督は明かに十字架
を負ふことを命ぜられた、そして言ひ給うてる。「人もし我に從ひ來らんと思はば、己れをすて、
十字架を負ひて我に從へ」（路可傳、九）と。
故に、私共はすべて讀んだこと、又査べたことを綜合し、そして此の最後の結論を得るのである。
卽ち「我等は多く艱難を經て神の王國に入るべきなり」（使徒行傳、一四ノ二二）と、是れである。

第參卷　內心の慰安

第一章

忠實なる靈に語り給ふ基督の內的の御言のこと

一

「わが神のわれに語りたまふ所を聽かん」。（詩篇、八五ノ九）
主が內心に語り給ふを聽き、又その御口より出る慰安の言を受納れる靈は幸福である。
神の微妙な御囁きの音聽捉へて、そして此の世の囁きを毫も顧みない耳は幸福である。
然り、外に響く噪しき聲に惑かれずして、內に語る眞理の敎に聽入る耳は幸福である。
外なる物には閉ぢられて、そして內なる物を諦視する眼は幸福である。
深く靈的に探りて、そして日毎の修行に依り、いよいよ益々天の奧祕を捉へんと、その準備に努
力する人たちは幸福である。
神の事にのみその心を寄せて、そして此の世のすべての障碍を振棄てる人たちは幸福である。

二

されば、私の靈よ、此等の事を念として、苟も肉慾汝に來るべきすべての門戶を閉鎖せよ。「主
なる神の汝に語ることを聽き得んためである」。（詩篇、八五ノ九）
汝の愛する主は斯く言ひ給うてる、「我は汝の救ひなり、汝の平和なり、また汝の生命なり」（詩篇、三五

三ノ一〇）と。又「汝、われと共に居れ、さらば平和を見出さん」と。すべて過行く泡沫を棄去つて、永遠の朽ちざるものを追求せよ。すべて世上のもの孰か汝を迷はすものでないだらう。若し造り主汝を棄て給ふなら、すべての造られた物汝に何の益を與へよう。

その故に、一切を離脱して、只汝を造り主の御旨に叶ふ忠なる者とならしめよ。眞なる靈的幸福を汝が攫み得んためである。

第二章

響なくして靈に語る眞理の聲のこと

一

「主よ語りたまへ、爾の僕聽くなり、我は爾の僕なり、われに智慧を與へて、爾の證詞を知らしめたまへ」。（サムエル前書、三ノ一〇）「わが心を」爾の御口の言に「傾ぶかしめたまへ」。（詩篇、一一九ノ三六）「爾の聖言を露の如くに降らしめ給へ」。（申命記、三二ノ二）

昔イスラエルの子たち摩西に言うた、「汝われらに語れ、我等聽かん、唯願くは神われ等に語りたまはざらんことを、恐らくは、我等死なん」（出埃及記、二〇ノ一九）と。

されど、否、主よ、否、私は斯くは祈りまつらまじ。而も預言者サムエルと共に、謙遜に又懇篤

に祈請しまつるのである、「主よ語りたまへ、汝の僕聽くなり」（出埃及記、一〇ノ一九）と。

摩西或は他の預言者たちの誰をもして私に語らしむるな。只主なる神よ、爾はすべての預言者たちの靈の鼓吹者、又光照者にましますぞや、その爾ぞ語りたまへ、その爾ぞ獨り、あの預言者たちなくも、私を完全に教へ得るのである、又爾なくしては彼等も何の益することないのである。

二

然り、人或は言を語り得る、されど精神を傳へない。その語るや或は美しい。されど爾もし默したまはば、他の心を燃立たせない。只文字を羅列する。されどその深義を開發するは爾である。

又は、誡律を述作する。されど私共を助けて之を實行せしむるは爾である。

又は道途を指示す。されど、力を強めて之を歩み行かしめるは爾である。

即ち、彼等は只外部を仕調へる。されど心を教へてそして光照するは爾である。

或は外部に水注ぐ、されど種子を萌出させるは爾である。

然り、彼等は言語を以て呼號する。されど、聽者に理會を與ふるは爾である。

三

故に、摩西をして私に語らしむるな、只、爾、主なる神、永遠の眞理よ、只、爾のみ語りたまへ。もし徒に外よりのみ誡告せられて、そして內心燃立たせられることないならば、恐らく私は死し

て何等の果を結ばずに終るだらう、その事ないためである。
願くは審判に臨んで、私が、言を聽いて行はない、考へて愛しない、又信じて守らなかつた者であらしむるな。
故に「主よ、語りたまへ、爾の僕聽く」（約翰傳、六ノ六九）そは「永遠の生命の言は爾にある」。私に語りたまへ、私の靈魂ひたすらに慰められ又私の生命のいよいよ善に向はんためである。又爾に讃美と光榮と、及び無窮の稜威のあらんためである。

第三章

謙遜もつて聽くべく、而も世人多く重んぜざる神の御言のこと

一

「子よ、聽けわれの言を」。（箴言、四ノ一〇）いと樂しい言である、そして此の世のあらゆる哲人賢者の知識にもまさつて居る。
「我の言は靈である、生命である」。（約翰傳、六ノ六三）そして人智を以ては量られない、勿論以て虚しき娯樂には供されない、而も靜默もつて之を聽き、又すべての謙遜と及び大なる愛情とをもつて受けらるべきである。
で、私は言つた「主よ、爾の懲しめたまふ人、爾の法を教へらるる人は福ひなるかな、爾は斯かる人を禍ひの日より逃れしむ」、（詩篇、九四ノ一二、一三）また地上に淋しからしめ給はじと。之に主は又言ひたまふ「我は原始より預言者たちを教へた」、（イザヤ書、一ノ一）そして今に至るまですべての人に語るを已めないのである。
されど、多くは我の聲に聾て、そして頑固である。

二

多くの者は、神に聽くよりも、悦んでこの世に耳を傾ける。神の聖旨に從ふよりも、容易にその肉慾に惹付けられる。
世は纔かに束の間の、そして詰らぬものを提供する、然るに大なる貪婪もつて奉仕される。我は之に反して、至高で又永遠のものを提供する、然るに人の心は冷然として動かない。
誰か世とその君主たちとに仕ふる如く、亦すべてに於て汝々我に仕へて從はんと努むる者あるや。
「嗚呼、シドンよ、恥づべしと海は言へり」。（イザヤ書、二三ノ四）そして若し何故と問ふならば、その理由を聽け。
僅かの利得のためには千里の路をも走る。されど永遠の生命のためには、誰もその足を一度地より擧げるさへするもの殆どない。

三

くだらぬ收益漁り求めて、只一箇の貨幣のためにさへ、往々見苦しくも訴訟する。又は空なる事物のために、或は些少の報酬得るために、日夜に勞苦することも厭はない。

されど、あな、不變の善のために、無上の報酬のために、又は至高の名譽と不朽の光榮と、此等のためには、げに些少の骨折さへ惜むのである。

故に、汝、骨吝みな呟く僕よ、恥らへや、汝が生命の事に勞するよりも、世人はもつと減びの事に汲々たるを見るだらう。

然り、汝が眞理に對するよりも、世人はもつと空なる泡沫に對して歡喜するのである。

されど、げに世人は徒々その希望を裏切られる。只我が約束は誰をも失望させない、又我に信賴する者を決して空には去らせない。

もし最後まで持續してわが愛に忠實であるならば、我の約束したこと之を我は與へよう、又我の言うたこと之を我は仕遂げよう。

我はすべての善人を報賞する者である、又すべての信者を嚴く試錬するものである。

四

我の言を汝の胸に書き込んで、そして孜々として之を思ひめぐらせよ、いつか誘惑に出遭うた時、屹度役立であるだらう。

汝が讀んで理解しない事、それを我の眷顧の日に於て汝は悟り得るだらう。

我の擇びし者を我が眷顧するに二樣ある、誘惑と慰安と是れである。

又、我は毎日之に二樣の課業を讀み聽かせる、一はその惡慝を責めるためである、又一はその善德を勵まして高めるためである。

我の言を聽いて、そして輕蔑する者は、「終りの日に之を審く者がある」。(約翰傳、一二ノ四八)

敬虔の聖寵を懇望する祈禱

五

主なる、私の神よ。爾は私のすべての善にてましまする。而も「私は何者ぞ」、(サムエル前書、一八ノ一八)敢て爾に語りまつらんとするのであるだらう。

爾のいと哀れな僕であつて、又賤い蟲豸のみ。然り、私の知る所、又私の言葉にある限り、私より劣りて、又穢れて汚ないものは他にないのである。

又、我は毎日之に二樣の課業を讀み聽かせる、一はその惡慝を責めるためである、又一はその善德を勵まして高めるためである。

而も「私は何者ぞ」、(サムエル前書、一八ノ一八)敢て爾に語りまつらんとするのであるだらう。

爾のいと哀れな僕であつて、又賤い蟲豸のみ。然り、私の知る所、又私の言葉にある限り、私より劣りて、又穢れて汚ないものは他にないのである。

で、主よ、記憶したまへ、私は數にもならぬものである、何をも持たないものである、又何もできないものである。

されど、爾は獨り善と義と聖とにてましまする、爾に能はざることない。爾はすべての物を與へ給ひ、又すべての物を充たしたまふ。そして罪人をのみその空しきままに棄てたまふ。

「願くは爾の憐愍を想ひ出し」、(詩篇、二五ノ六)爾の聖寵もつて私の心を滿たさせたまへ。亦爾のみ業であつて、そが空しくなるは爾の欲し給はぬ故である。

六

もし爾の憐愍と聖寵とを以て私を強め給ふにあらざれば、爭でこの悲慘な生路に於て、之を私の耐へ得られよう。

願くは爾の御顏を私より背けたまふな、爾の眷顧の日を遲延せしむるな、又爾の慰安を私より取

去るな、そして「私の靈を爾に向ひて燥きたる地の如く」（詩篇、一四三ノ六）にあらしむるな。主よ、私に聖旨を行ふことを教へたまへ」。（詩篇、一四三ノ一〇）爾のみまへにかしこみ又謙下りて生き得るため、之を私に教へたまへ。爾は私の智慧にましまして、私を眞實に知り給ふ。又世の造られし以前に於て、又世に生れ來ざりし以前に於て既に知り給ふ。

第四章

神のみまへに誠實謙遜に生くべきこと

一

子よ、誠意を以て「我がまへに歩み」、（創世記、一七ノ一）且つ單なる心を以て常に我を求むべし。誠意を以てわが前に歩む者は、悪の襲撃より守護されるだらう。又不正な人の蠱惑と誹謗とより「眞理は之を解放するだらう」。（約翰傳、八ノ三二）もし「眞理が汝を解放するならば、汝は眞に自由である」、（約翰傳、八ノ三六）そして復人間の空なる言などを介意することないだらう。

主よ、げに爾の宣へる如くである。願くは私にその如く成されかし。爾の眞理は私を教へよや、私を守れよや、そして最後の救ひに至るまで私を保てよや。又その眞理、私をすべての邪慾と妄念とより解き放せよや。そして心の大なる自由を以て爾と共に私は歩むだらう。

二

我は汝に（眞理は言ひたまふ）何を我の正しとなし、又善とするかを教ふべし。汝の罪過を省みては、之を厭ひ之を悲めよ、そして、よし善業あつたとて、その故に、汝決して自ら何かであると思ふなよ。詮ずる所、汝は罪人であつて、多くの情慾に汚れ、又纏はれて居るのである。で、自分を以ては、常に空しき事に馳行くのみ、忽ち打倒され、忽ち打克たれ、忽ち狼狽され、忽ち滅されて了ふだらう。

汝に何等誇り得べきはない、只汝を墮落させるべきもののみ澤山ある。汝は已れ理會し得ないほど、非常に脆いものなのである。

三

この故に、すべて汝の爲ること、何にまれ、それが汝に決して偉いと見られるな。只永遠なものでない限り、何も偉大とされるはない、何も貴重とされ、又感服されるべきはない、何も名譽とするに足るはない、何も高いはない、何も讃むべき、又望ましきとするはない。すべて優つて汝に樂きは、永遠の眞理であれ。又常に汝に厭はしきは、汝のその賤劣な心であれ。『如何なる物の損失にもまさつて、汝が厭はねばならないのは、自分の悪と罪とであつて、これ程汝の恐れ、嫉み、又避くべきはないのである。

或はわが前に歩むに眞實の心なく、徒らに好奇驕慢の心に騙られて、我の玄祕を知り、又神の高御旨を悟らうとし、而も自分の靈の救ひは全く懈る者がある。かやうな人は、その驕慢好奇の故を以て我に斥けられ、そして往々自ら誘惑と罪過との中に沈んで了ふのである。

四

神の御審判に戰々とし、又全能者の御激怒に戰々たれ。ゆめ、至高者の御仕業を論議しようとするな。只自分の犯した罪惡の如何なる程度であり、或は自分の爲すべくして而も懈つた善事の、如何に多きやを自省せよ。

或はその信心を書物に持つものがある、或は繪畫に、或は外なる形象形式にもつものがある。或はその口にては、わが名を唱へてる、けれ共その心にては殆ど我を尊ばない者がある。之に反して、その悟性は天の光明に照され、その心情は純化せられ、そして常に心を永遠に寄せて、地上の事を耳にするを慊しとし、人間自然の必要に迫らるるさへ悲む者がある。斯樣な人は即ち、眞理の靈がその心に語るを感得するのである。

即ち、之がその人を導いてこの地の事を輕蔑し、そして天の事を愛せしめるのである、又世上の事を無視して、そして晝となく夜となく、絕えず神の事を考へしめるのである。

第五章

神の愛の奇しき效力のこと

一

天の父よ、私の主なる耶蘇基督の父よ。爾を私は祝ぎまつる、賤きこの私を、爾は忝くも聖意に留めたまふ故である。

嗚呼、「もろもろの慈悲の父、すべての慰安の神よ」、(コリント後書、一ノ三)何等慰安を受くるに足らざるこの私を、爾は時に爾の慰安を降して强めたまふのである、私は爾に感謝したてまつる。

爾を、爾の御獨子と及び慰安の主なる聖き靈とともに、私は、幾代重ねて祝ぎまた崇めたてまつる。

嗚呼、主なる神よ、私の愛しまつる聖なる者よ。爾、私の心に來りませ、その時私の內心すべて歡喜に溢れ躍るだらう。

爾は「私の光榮である」、(詩篇、三)又私の心の歡喜である。爾は私の望である、又「私の艱苦の日に於ける隱れ場である」。(詩篇、三)

二

されど、私はなほ愛に不足である、又德に不完である。で、爾に依て强められ、又慰められる必要ある。故を以て願くは爾よ屢ば私を眷みて、そして爾の聖なる訓練もつて私を教へたまへ。

邪惡な情慾より私を解放し、又すべての妄らな執着より私の心を痊したまへ。內心健全となつて、又克く淨潔せられ、愛するに適して、忍ぶに强く、萬苦を冒して撓まぬものとなされんためであ

る。

愛は大なる力である、又大なる善である。只愛のみすべての重荷を輕からしめる、又すべての難路を坦路とならしめる。

愛に由て、重荷もその重さを失つて擔はれる。又すべての苦味も愉快な甘味として嘗められる。』耶蘇の愛のその高尚なる、私共を大なる仕業に向つて激勵する。又絶えず志望を刺戟して、いよいよ完全に向はせる。

愛は常に高きを心とさせる、そして何等低きものに引留められることを欲しない。

愛は自由であつて、そしてすべての世の執着より離脱せんと希ふ、その內觀障碍をうけないためである、又は何かのこの世的なる得意なことに纏綿され、或は失意な事に挫折されないためである。

天にも地にも愛にまさる甘きものない、強きものない、高きものない、廣きものない、又樂きもの、盈てるもの、善なるものはない、愛は神より生れたものであつて、又神にあつて存在する。

さもなくば、すべての有形萬物の上に超越して安息し得る筈がない。

四

愛ある人は翔り、走り、又躍りよろこぶ、そして自由であつて束縛せられない。

而も凡てを凡てのために與へて、又凡ての中に凡てを所有する。凡ての上なる獨一至高な者の中に安息するからで、之より凡ての善は皆湧いて流れ出るのである。

その人は又賜物そのものを顧慮しない、而も賜物の主に向つて、すべての善事にまさり己れを歸依し奉る。

愛は往々その限度を知らない、而もすべての限度を超えて熱燒する。

愛は重荷を感じない、勞苦を意としない、自分の力以上に竭さんと欲して、又不可能を以て訴へない。何事も愛は皆爲し得べく、又爲すべきであると思ふ故である。

だから、何事をも爲すことできる。して、愛なき者は失敗して倒れて了へども、愛ある者は多くの事を仕遂げて、そしてそれを有效に成就させる。

五

愛は能く警覺する、そして寢ても眠らない。

疲れても倦み果てない、窘められても窘まない、又脅かされても、狼狽することない。而も燃ゆる炎の如く、又熱する炬火の如く、焰々として上騰し、そして何物をも安全に押貫いて行くのである。

人もし愛するならば、卽ち此の聲の叫びを知るだらう。

卽ち、神の御耳に達する大なる叫びであつて、靈の熱烈なる愛情そのものである。曰く、「私の神よ、私の愛よ、爾は全く私のものである、私も亦全く爾のものである」と。

六

願くは私を愛に擴大せさせたまへ。私が心の奥底にて、如何に愛することの愉快なる、又愛の中

に融け込みて、又浸り入ることの甘美なるか、願くは愛に私のとらへられ、極度に熱狂し喪心し、そして自分を忘れるまでになりて見まほしや。

愛の歌を私に歌はせよ、高きにまします愛する爾に私は従はばや。愛に扑舞して、私の靈は爾の讃美に憧れる。

私が爾を愛する己れにまさらせよ、然り、己れを愛する只爾のためであれ。又すべて爾を眞實に愛する者、亦皆爾の中にあらしめよ。是れ爾より出でて輝く愛の律法の命ずる所である。

七

愛は敏捷である、眞實である、恭虔である、快活和樂である、剛强不撓である、又忠實で、深慮で、堅忍で、勇猛である、そして決して自分自身の事を求めない。

で、人が何なりとも自分の事を求むるや、即ち愛より墮落するのである。

愛は愼重で、謙遜で、又方正である、而も懦弱でない、浮薄でない、空なる事物に拘泥しない、謹恪で、貞潔で、堅實で、恬靜で、そして一切の情慾を節制する。

愛はまた、柔順で、長上に服從し、而も自分に對しては横暴無禮である。されど神には恭虔で、感謝の念篤く、忠實であつて、そして神を己れに味ふことない時でも、尙常に之に望を寄せ奉つて居る。哀傷なくしては愛に生きられない故である。

八

すべてを忍び、そして愛しまつる者の聖旨に從はうと覺悟ない人は、到底愛ある者と呼ばれる値がない。

愛ある者は、すべての困難辛苦をも愛しまつる者のために悦んで抱擁し、そして如何なる災禍に逢ふも、之を捨てまつることのないやうせねばならぬ。

第三卷 第六章

第六章

眞の愛ある者の試錬のこと

一

子よ、汝まだ愛に勇敢深慮な者とせられない。

主よ、何故なるや。

僅かの困難汝に出逢へば、その着手した事も頓挫させ、そして妄りに貪つて慰安を求める故である。

愛に勇敢な者は、誘惑に立ちて動かない、また狡猾なる敵魔の勸言を信じない。そして順境にあつて我を悦ばす如く、逆境にあつても亦我に不愉快を起させない。

二

愛に深慮な者は、その愛する者の賜物を必ずしも考へない、むしろその賜與者の愛に重きを置くのである

外に顯れた賜物の價値よりも、むしろ內に籠るその愛心に重きを置いて、そしてすべての賜物にまさり、己れを愛するその者を尊敬し奉る。

愛に高尙な者は、すべての賜物の上に出で、只我に於てのみ安息する、そして賜物そのものに依頼することない。

故に、もし時として、汝が我或は我の聖者たちに對し、汝の思ふがまま、愛を充分感ずることないとても、それで汝が全く滅びたと云ふのでない。

汝が時々抱くあの善美な愛情は、是れ現在汝が受けてる聖寵の結果であつて、また天の御國を豫め味はせるのである。されど汝餘りにそれに依頼すべきでない、來てまた去つてしまふゆゑである。

けれ共、汝の心に起る惡念に向つて奮鬪し、又惡魔の與ふる暗示を拒絶することは、之は眞德の徵であつて、又大なる功績とすべきである。

三

故に、如何なる原因より生じ來るとも、外よりする幻想に汝惑亂せられるな。

只堅固に汝の決心と、及び神に對する正しき目的とを確守せよ。

時々汝が突然に極度の歡喜に昂上して、又忽ちにいつもの庸愚な心狀に戻ることがある、而も必

ずしも之が錯覺に出るとすべきでない。

この變化は是れ汝が自ら爲るのでなく、むしろ已むを得ずに受けるのであつて、之を汝が嫌つて、そして抵抗する限り、そこに汝の功績がある、滅びではないのである。

四

昔ながらの敵魔は、汝の進善の志望を絶えずに妨害しようと努めて居る。卽ち諸聖者たちを尊崇すること、我の受難を恭虔に記念すること、罪過を有益に追憶すること、心の貞潔を警め守ること、又は堅い決心もつて德の研磨に勵むこと、此等すべての修行を汝に廢せしめんとするのである。汝之を知れ。

惡魔は種々の惡念を汝に起さしめ、そして汝が祈禱すること、又は聖なる書物を讀むことさへ、之を厭うて忌むに至らせる。

惡魔は又、人が謙遜にその信仰を告白するを嫌ふのである。そして、もしできるならば、之に聖體の拜領をさへ廢せしめんとする。

故に、たとひ惡魔は屢ば汝に欺罔の罠を張るとても、汝は之を信ずるな、之を決して顧みるな。之が惡念邪念を以て汝に入つて來た時は、卽ち叱責してそして言へ。

去れよ、汚れた惡魔よ、醜つ惡靈よ、あな汚らはし、汝何故に斯く私の耳に囁くぞ。

あな、極惡の誘惑者よ、私より退き去れよ、汝と何も關係ない、而も耶蘇は恰も「强き戰士の如くに」、（エレミヤ書、二〇・一一）私と共にいますのである、汝は狼狽するだらう。

汝に聽いて從ふよりも、むしろ私は死して如何なる呵責をも受けまほし。

「默して鎭まれよ」。(馬可傳、四ノ三九)たとひ如何に私を邪魔しようと努むるとも、もはや汝に聽くことないい、「主は我の光なり、我の救なり、誰を怖るべき」。(詩篇、二七ノ一)また、「たとひ軍勢我に逆ひ聯なるも、我はおそれじ。主はわが救、またわが贖ひ主なればなり」。(詩篇、二七ノ一四)

五

善い兵卒として戰へよ、若し時には力足らず倒れるとても、我が恩寵のいや增し加はるを信じ、一層の勇氣を鼓舞して更に奮起せよ。そして虛妄な己慢傲慢に陷ることを最も戒めよ。之が爲めに己れを誤られ、そして往々殆ど癒す可らざる盲目に沈む者も澤山ある。で、此等傲慢る人たちの、愚かにも自分に招いたその破滅をして、汝に好い鑑となりて、そして永久に謙遜なるべきことを敎へさせよ。

第七章

謙遜の下に祕められる隱れた聖寵のこと

一

子よ、汝に敬虔の聖寵が與つたなら、之を隱して決して高ぶる思ひをするな、決して他に吹聽するな、又決して自分の心に己惚れるな、而もむしろ自分を輕蔑して、恰もその恩賜に耐へざる者のように恐懼せよ。斯くする事が即ち汝に有益であり又安全であるのである。

なほ、この感情は之を恃みて餘りに執着すべきでない、忽ちに變つてその反對なものとなり得るからである。

もし聖寵を受けたなら、その聖寵なくしては、如何に汝の哀れで、かつ詰らぬものなるかを考へよ。

まして、汝が慰安の聖寵を得たからとて、その時必ずしも之に靈的生命の進歩があるのでなく、それは却てその聖寵の減退せられて、汝が尙能く謙遜に、且克己と忍耐ともて之を悚へる時にあるのである。即ち、その時祈禱の勤行汝は之を弛めるな、いつもの仕事之を廢するな、例に從つて孜々として、あらゆる事、之が等閑にせらるるを容すなよ。

然も、力の限り智の限り、自分にあること悅んで之を爲せ。そして汝が心に感ずる無聊憂懼の念のために、己れを全く懈怠させるな。

二

物事思ふままに成功しないと、忽ち短慮を起したり、又は意氣消沈したりする者澤山ある。

「人の途は常に己れの力に依るのでない」、(エレミヤ書、一〇ノ二三)而も與へる慰める皆神にありて、その時、その仕方、その人、またその程度、只是れ聖旨に叶ふがままである、そしてそれより以上でないことない。

然るに或る人々は、その敬虔の聖寵を受けながら、却て自ら愼まずに、之が爲めに破滅に至つて

了つた。自分のできないことを爲ようと欲し、求むるままに從つて理性の判斷を顧みなかつた故である。又神の聖旨でない大きな事を敢て覬覦して、そして自分のために巢を天に構へた者は、この世に窮乏困厄のものとなつて棄てられた、即ち己れ卑くせられ又貧くせられて、復自分の力で飛ばうとせず、只管我の翼の下にのみその望を置くことを學ぶためであつた。

主の途に新參で、そして未熟なものは、思慮あるものの指導に己れを任せない限り、容易に欺かれて、そして滅びて了ふのである。

三

他人の經驗に信ぜずして、却て自分の意見をのみ行はうとするならば、その人げにその我執の心を取去られるを欲せぬ限り、さても靈的の危險に陷らんとするのである。

自分に賢者を許してゐて、そしてなほ謙遜に他人の指圖を受けんとする者、それは稀である。謙遜でさへあるならば、その人假令學問すくなく理力乏きも、却て知識の寶庫を擁して、而もそれに己惚れる者よりはるかに優つて居る。

汝が慢心し得るものは、それは澤山もつより、少い方が優つてゐる。

その與へられた聖寵を失なすことを恐怖しながらに、なほ己れが靈的窮乏者であつた昔の事と、及び主を畏れまつる淨潔とを忘れ、そして全然己れを歡樂に耽らせんとする如き、是れ智慮ある者の行爲となされない。

さりとて又、困難災厄の時に臨んで、その重荷に全く絶望せしめられ、そして正しく我を恃んで信仰すべきなる、その信仰を薄らがせて了ふのは、之も決して德を尙ぶ賢者の業でない。

四

平時餘りに安全をほしがる人は、往々戰ひ來た時に甚く落膽して、そして恐怖に狼狽するのである。

もし汝が絕えず謙遜で且つ小心であつて、その上にも自分の靈を克く抑へ又制することを知るならば、斯くは汝が忽ちに危險過失に陷ることないだらう。

汝の靈が熱心に燃えた時、その光明の取去られた曉の果してどうであらう、之を靜思せよとは、げに善い勸めである。

五

されど、さやうな時のあつたなら、是れ汝に愼戒與へんがため、又我に光榮を歸せしめんがためである。して只少時取去られるのみ、その光明復汝に戻つて來るのであると考へよ。

斯様な試錬は往々、汝が意のままなる順境に立つよりも、却てもつと有益であるのである。抑も人の功績が定められるのは、そが天的幻示や又は慰安を多く得たからとて、之に依るでない、或は聖書に精通したからとて、之に依るのでもない、又は高い地位に措かれたからとて、之に依る

只その人が眞に謙遜に立脚して、神的慈愛に充溢れ、一意專念、常に神の榮譽を求めて、そして、自分を無視して眞實に輕蔑し、或は他人に嘲笑侮辱せられても、却て尊敬せられたにまさりて之を歡喜する、その信念に依るのである。

第八章

神のみまへに於て己れを無視輕蔑すべきこと

一

「我は塵と灰となるに敢て爾に語るべきや」。(創世記、一八ノ二七)然り、もし私が之よりも以上であると思つたなら、見よ、爾は私に反對し給ひ、そして確な證據は私の罪を譴めるだらう、而も私は之に抗言できないのである。

もし又、自ら卑下して、己れを無にし、全く我念を斷つて、之を(元來私のままの)微塵にして了ふなら、卽ち爾の殊更なる恩寵私に下り、又爾の光照私の心に近づきて、そしてすべての自尊の心は、それが如何に些少であらうとも、皆自我空寂の深淵に沈んで、永久に滅びてしまふだらう。

そして、そこで爾は私に、私が何である、何であつたか、また何處より來たのであるか、之を示し給ふだらう。私は何でもないものであつて、何も知らない故である。

もし私が自分のままに放任せられるなら、見よ、私は何でもないもので、又全く無力なものであ

る。然るに突然爾の眷顧を蒙むるや、忽ちに私は强いものとなつて、新たな喜悅に充盈たされる。

して、自分の重みで、いつもどん底に沈まうとするその私が、斯くも遽に引揚げられ、そして畏くも優しく爾に抱擁されるのは、眞に不思議である。

二

而も之を爲すは爾の御恩愛であつて、いつも聖寵もつて私に先立ち行き、そして多くの必要に臨んでは私を支持し、切迫する危險よりは私を保護し、又無數の(然り、私は斯く言ふのである)厄難よりは私を救出し給ふのである。

私は愚にも己れを愛して、そして己れを失つた。されどただ爾をのみ求め、又專心爾を愛して、そして爾と自分とを共に見出した。尙それのみか、この愛ゆゑに一層深く自分を空寂ならしめ得た。

嗚呼、いともうるはしの私の主よ、是れ爾が私のすべての功績以上に、又は私の敢て望み或は冀求するそれ以上に、私をめぐみ給ふ故である。

三

私の神よ、爾は讃むべきかな。爾の慈愛は高大無限にましまして、この私げに恩に背き義を忘れ、何の善き事をも受くるに足らざるに、爾は尙みめぐみ垂れ給うて決して已むことないのである。願くは爾に私共を向はせよ、私共が爾の恩慈を感じて、そして誹遜で、又敬虔であらんためであ

る。爾は私共の救ひにましまして、又私の勇氣であり、又力であり給ふ。

第九章

一切を神に歸し奉りて究極とすべきこと

一

子よ、もし汝が眞に福者であらうと欲するたら、我は卽ち汝の最高の、又最極の目的であらねばならぬ。

然り、汝の意向が玆にあつてこそ、それで往々自分と及び世の朽つべきものとに傾く汝のその愚かな愛情が淨化されるだらう。

然らずして、もし何なりと自分の事を求めるなら、その時汝は忽ち退轉して、そして枯乾して了ふだらう。

故を以て、一切を汝專ら我に歸せしめよ、物皆我の與へたのである故である。

卽ち物みな最高の善より流れ出たのであつて、そしてその故に、萬物その源として我に歸着すべきであると考へよ。

二

すべて、小なるもの大なるもの、又は貧きもの富めるもの、皆、活ける泉ともして、我より活ける水を汲むのである。

そして自分の心より出て、悅んで我に奉仕するものは、いやがうへにも我より恩寵を受けるだらう。

されど、我以外の事に誇らうとし、或は何か自分の善に悅ばうとするものは、その人眞の歡喜に安定せられない、又はその心を伸張せられない、只益々障碍と心勞とを加へられるのみである。』

故を以て如何なる善をも之をもつて己れに歸せしめ、或は如何なる人の德にも屬せしめてはならぬ。一切皆神より出るのであつて、神なくしては、人間全然何をももつことないのである。

一切みな我の與へたのである、我は一切を皆有たんと欲ふ、そして最もおごそかに感謝をすべての者より要求する。

三

是れ卽ち眞理であつて、虛榮を驅逐するは之にある。

そして、もし天よりの聖寵と眞の聖愛との入り來るなら、復何等の嫉妬も餘地がない、或は狹い心や、私愛の情など容るべき所ないのである。

そは神の聖愛はすべてに打克ち、又私共の靈のあらゆる力を伸張させるのである。

で、若し汝の智慧が正しいなら、只我に於てのみ歡ぶだらう、只我に於てのみ望むだらう、「神を措いては外に善なる者ないからである」。（路可傳、八ノ一九、一）神はすべてに優りて讚美されるべきである。すべてに於て祝福されるべきである。

第十章

世を輕蔑して神に仕へまつる樂さのこと

一

主よ、今復爾に私は語りまつらばや、そして默すまじ。私の神の御耳に達しまつらばや、私の主よ、いと高きにまします私の王よ。

「嗚呼、主よ、爾を畏るるもののために藏されたる爾の仁慈は、如何に大にして豐かなるぞや」。（詩篇、三一ノ一九）されど爾を愛しまつるものには如何にましますぞ、その全心もつて爾に仕へまつる者には、亦如何にましますぞ。

爾を瞑想しまつることの樂さよ、眞に言辭に竭せない。して、是れ爾を愛する者に爾の賜はるものである。

然り、私のまだ生れぬ時に、爾は私を造り給うてる、又私が爾を離れて永く迷つてゐた時に、爾は私を復歸せしめて、爾に事へしめ、又爾を愛することを私に命じたまうた。そして斯く、爾の慈愛の如何に美妙なるかを特に私に示された。

二

嗚呼、永久の愛の源泉よ、爾に就てなんと私の語りまつるべき。

私が落ぶれて滅びて了つた時でも、尚畏くも私を御心に留めたまうてた爾にましますのである、爭で私の忘れまつるを得るだらう。

爾の僕のすべての望み以上に、爾は之に慈悲を加へ給うた。又その功績以上に恩惠と好誼とを示し給うた。

何をこの聖寵に對して「爾に私の酬いまつるべき」。（詩篇、六ノ一二）一切を棄てて世俗と絕ち、そして此の修道の生涯に入る如き、是れ誰にもみな許されるのでない故である。

而も、爾に事へまつるは何等大なる事でないか、爾の御手に成りたるもの、みな然くあるべきではない。

爾に事へまつるのが私に大なることと思はれてはならぬ。只この哀れな詰らぬ者の奉仕を畏くも受納せられ、又爾に奉仕し得る者として撰び給ひしこそ、むしろ大なる事、又不思議な事と私には思はれる。

三

見よ、すべて私のもつもの、又私の以て爾に事へまつるもの、皆爾のものである。

然るに、事何ぞ反對なる、私が爾に仕へまつるよりも、却て爾が私に竭して居て下さるのだ。

見よ、天と地と爾に服事し、そして毎日爾の命を奉じつつある。而も是れ、爾が人間の用に供するために造りたまひしものである。

否、是れなほ小事である、爾は天の使たちにさへ指圖して、人間に奉事せさせ給ふのである。

して、此等すべてにも尚まさるのは、卽ち爾は御自身爾の造りたまひし者に勿體なくも竭さんとし、そして之がために己れ御自身をも與へんと約束し給ひし事である。

されば、かやうな無數の恩惠に對し、何を爾に私が捧げまつるべき。只願くは生命ある限りの日をすべて、爾に奉仕することにささげまつらばや。

願くは只の一日でも爾に奉仕して、そして本當にふさはしく之を送ることの得まほしき。

爾は眞にすべての奉仕とすべての尊敬と、又永久の讃美とを受けますべきである。

爾は眞に私の主でおはします、そして私は爾の哀れな僕であつて、只全力を竭して爾に奉仕すべきである、爾を讃美しまつりて、決して倦怠すべきでない。

して、是れ私の望みである、願ひである、願くは私に足らざる所、爾はみめぐみ垂れて之を補ひ給へ。

五

爾に奉仕して、そして爾のために世の一切を輕蔑するは、是れ大なる譽れである、又大なる誇りである。

自ら進んで爾のいと聖なる仕事に服する者は、その人大なる聖寵を得るだらう。

爾の愛の故にすべて肉的の快樂を放棄する者は、その人聖き靈魂のいと甘美なる慰安を見出すであるだらう。

又爾の御名のために狹き途に入り、そして世のすべての塵念を絶去るものは、その人大なる精神の自由を得るだらう。

六

本當に、神に仕へまつることのうれしくも又樂きかな、之に由て人は眞に自由で、そして聖なるものとなるのである。

本當に、修道者たちの聖なる服務的狀態よ。人をして天使たちにも伴しからしめる、又神には悅ばれ、惡魔には恐怖される者とならしめる、そして一般信者の人々には推奬されるべき者とならしめる。

本當に、この服務の慕はしくも、又絶えず望ましきかな。之に由て至上の善は酬いられ得るのである、又永久不斷の歡喜は達し得られるのである。

第十一章

宜く心の願望を省察して之を節抑すべきこと

一

子よ、汝がまだ學ばぬこと澤山ある、之を汝はよく學ばねばならぬ。

主よ、抑も何事でありますぞや。

然り、全然汝の願望を我が意の適するままに從はしめ、且つ汝が己れを愛せずして、わが欲するままに從はしめ、

ままを行ふに熱心な者となること、是である。汝は往々願望燃立ちて、激く之に刺戟せられることがある。されどその時、その汝の動かされるのは、それが果して我の榮えのためであるか、或は汝自身の利益のためであるか、之を考へよ。』もしその原因我にあるならば、我の定むる所の如何に拘はらない、汝は克く満足するを得るだらう。されど若し自分の要求何か潜んで居るならば、見よ、それは汝を障碍し又惱苦するものとなるのである。

二

だから、汝に先入し、そしてまだ我に諮らない願望に、汝決して依頼せぬやう注意せよ。最初汝を悦ばし、又汝が善なりとして熱心に求めたその事も、恐らく汝を後悔せしめ、そして之を嫌忌せしめるであるだらう。

要するに、すべての發情、それが一見善であると思へたとて、之に直ちに從ふべきでない。さりとて又それが最初に反對であつたとて、必ずしも逃避すべきでない。で、その努力と願望と、それがよし善であるとしても、之に時々制抑を用ひるは好いことで、汝が我執に失して心の惑亂を起さぬためである、節制紊れて他人の躓きとならぬためである、或は他人の反抗に遭うて忽ち狼狽し、そして倒れて了ふことないためである。

三

又、或時は隨分暴力をさへ用ひ、そして勇敢に感觸的の肉慾に反對する必要がある、而もそれを

肉が欲する欲せぬ構はない、只之を、よし欲せずとも、充分に靈に服從せしむるやう、大に奮勵すべきである。

そして、肉が少許を以て滿足し、質素を以て甘樂し、又何かの不便に對しても、復呟かぬやうに教へられ、すべてに向て覺悟ができるまでは、之を懲し之を苛めて、強て服役の下に置かれねばならぬ。

第十二章

忍耐を教養し又肉慾と搏鬪すべきこと

一

主なる神よ、忍耐眞に私に必要なるは私の知る所である。人生意のままならぬ事多い故である。』して、私の如何に平和を得んと企むも、私の生涯遂に戰鬪と悲哀となきを得ないのである。

子よ、げに然り。されど汝平和を求むるも、その平和は誘惑なく、又は困難を感ずることないものであらしむるな。我は之を汝に欲するのだ。

で、汝が種々の患難以て鍛へられ、又あまたの災厄もつて試みられる時にても、その時汝却て平和を見出したのだと考へよ。

二

汝もし辛苦多くして耐へ得ずと言ふならば、如何にして汝煉獄の火を凌げよう。
兩惡その一を擇ぶべきであるならば、必ず輕きものを取るのである。
故に、永劫未來の懲苦を免がれるためには、神のために汝この現在の苦厄を平氣で忍ぶことを努力せよ。

三

汝、この世の人たちは、何等ほとんど忍苦することなしと考へるか。行つてその最も快樂を極める者に問うて見よ、さうでないと知るだらう。
されど、汝は言ふのだ、此等の人は多くの快樂をもつて、そして自分の思ふがままに振舞つてる。故に、多少の患苦は之を殆ど意にしないのであると。
然り、さもあらう。けれ共その欲するままに出來たとて、それが果していつまで續くと汝考へるか。
見よ、如何にこの世の富者も「煙の如くに消去つて」、(詩篇、三七ノ一九)そして過去の歡喜は何の記憶をさへ殘さぬを。
而も生きてる間も、その逸樂の中にありながら、なほ辛苦と疲憊と又恐怖とないではなかつたのだ。
否、自分が快樂を取らんとしたるその事よりさへ、往々その人は悲き懲苦を受けたのである。
それもその筈だつた、妄りに快樂を婪り又求めたから、從つて恥辱と苦痛ともつて充たされないではなかつたのだ。

四

嗚呼、すべては皆如何に儚いもので、虛僞なものであることよ。
而も、人は心醉ひ靈盲して之を曉らない。そして宛然畜生そのものの如く、僅かの朽つべき此の生の快樂のために、その靈魂の死を誘致するのである。
だから、汝「子よ、汝の肉慾に從はず、又汝の私意を棄て了へ」。(集會書、一八ノ三〇)
「主によりて歡びをなせ、さらば主は汝が心の願ひを與へたまはん」。(詩篇、三七ノ四)

五

故に、汝もし眞に快樂を與へられ、又我より豐かに慰安を受けんと欲するなら、見よ、この世の一切を輕蔑し、又卑い一切の快樂を放棄して、そしてそこに汝の祝福はあるだらう、又豐富な慰安は汝に加へられるだらう。
なほ、汝がすべての物的慰安より離脫すればするほど、益々汝は我に於て甘美な又力強い慰安を見出すであるだらう。
されど、まづ幾多の悲哀と及び鬪爭の勞苦とを經ぬならば、汝は之に達し得られまい。
習慣深く浸込んでゐて、頑固に抵抗するだらう、けれ共それは只一層善い習慣もつて打克たれるのである。
肉亦之に對して怨訴するだらう、されど熱烈なる靈の力之を能く抑へ得るのである。
昔ながらの惡蛇は汝を刺戟し汝を鼓動するだらう、けれど祈禱は之を驅逐し得る。加之汝が有

益なる勤務にいそしむなら、そが接近殊更に妨止されるだらう。

第十三章

耶蘇基督の模範に倣うて謙遜に從順なるべきこと

一

子よ、人その從順より引退かんと努むるならば、是れ我の聖寵より自ら引退くのである。又己れの私益をのみ求むるならば、是れその團體を委棄するのである。

人その長上に對し、進んで快く服從しないのは、是れその內まだ自分に全く服從せず、そして往往反抗怨訴する表徵である。

故に、もし己れの肉を服從せしめんと要するならば、汝直ちに長上に對し自分を服從させることを學ぶべし。

內的人間もし蹈荒されてないならば、外なる敵に打克つは容易である。

汝もし靈と好く合致しないならば、汝に取つては、汝自身よりもつと邪魔氣なる、又有害なる靈魂の敵はない。

汝がもし肉と血とに勝たうと欲するならば、宜く自分を全然自分に輕蔑せしむるやうにすべきである。

二

汝がまだ自分を安りに愛し過ぎるから、それで汝は自分を充分他人の意志に委ねることを怖れるのである。

然るに、我は全能者で、至高者で、そして無より萬物を創造したのである、而も汝のために卑下りて人に屈したのではないか。然らば纔かに「塵芥である」、（創世記、三ノ一九）否、全く無であるその汝が、神のために人に服從したとて、それが何の偉いとせられよう。

然り、我はすべての人の中の、最も卑い又最も賤い者となつた、汝が我の謙遜に依りて汝の傲慢に打克たんためである。

されば、汝微塵の者よ、從順なることを學ぶべし。汝土芥の者よ、謙下りて、そしてすべての人の脚下に屈することを學ぶべし。

汝の意志を打碎き、そして己を棄ててすべての人に服從することを學ぶべし。

三

自分に對しては猛烈火の如くであれ、又は高ぶる心の汝の中に存するを許すなよ、而も自ら示して賤い者小なる者となり、すべての人をして、汝の上を蹈み歩き、又街路の泥土の如くに蹂躙することを得さしめよ。

詰らぬ人よ、何を汝は訴へんとするのである。

汚れた罪人よ、斯も屢ば神を怒らし奉り、又幾度ぞ地獄の中に墮さる可かりしその汝である、汝を責むるその人々に對し、何を辯解して言ふことできるだらう。

けれ共、汝の靈魂我が前に貴いのであつた、故を以て、我が眼汝を寛恕して居た、卽ち汝が我の慈愛を認め、そして常に感謝して我の恩惠に生存せんためである。
又汝が絕えず、眞の從順と謙遜とに己れを委ね、そして忍んで自分の輕侮を受けんためである。

第十四章

己れの善に誇らぬため神の隱微な審判を考慮すべきこと

一

主よ、爾の審判は私の上に鳴りはためき、そして怖れと駭きとすべての骨に徹して私を震へしめ、又私の靈を眞に戰慄させるのである。
私は愕然として立ち、そして考へる、「諸の天も爾の目の前には潔からざるなり」（ヨブ記、一五ノ一五）と。』
もし「天使たちをも邪惡な者と見做して」、（ヨブ記、四ノ一八）之を爾の寬恕し給はぬなら、まして私の如き如何されるべきであるだらう。
「天の星も地に隕つ」、（默示錄、六ノ一三）然らば塵埃の如き私が何を自ら恃めよう。
曾てはその仕業稱むべきものと見做された、而もその人奈落の底へ落ちて了つた。又曾ては天の使の糧をさへ食した者、その人豚の飼食に就いて欣然たるを私は見た。

二

故に、もし、主よ、爾の御手を退き給ふなら、何等聖なるものはないのである。

もし、爾の御指導止め給ふなら、智慧も何等益する所ないのである。
もし、爾の御擁護絕ち給はずば、勇氣も何等安全でないのである。
もし、爾が庇ひ給はずば、操守も何等援けとなることないのである。
もし、爾の聖なる見張の垂れられずば、私の自分の用心何等益する所ないのである。
で、爾に見放されまつりては、私は沈みて滅ぶるのみ。されど爾が眷み給ふなら、げに起き上りて生きるのである。
本當に私共は不定なものである、只爾に由て堅固にせられるのみ。本當に微溫なものである、只爾に由て燃立たされるのみ。

三

嗚呼、如何に私自身卑い賤いものとして自分に思はるべきであることよ。如何に、假令何かの善事私にありと見ゆるとて、それを私が無視すべきであることよ。
嗚呼、主よ、爾の不測な審判の下に、如何に私は深く自ら屈服すべきだらう。私は自ら見て只無に過ぎぬのである、然り、無にして、又無であるのである。
嗚呼、何たる絕大の重量であるだらう、何たる際涯なき滄海であるだらう、そして、之に對して只私は無である、何も自分に見出すことないのである。
されば、何處に誇りの心の蟠まる餘地あらう、どこに自分の善德に信賴する念などの抱けよう。』
すべての空なる傲慢自負は、皆私の上なる爾の御審判の、その深みの中に呑込まれて了ふのであ

る。

四

爾のみまへに於ては、肉は果して何である。
土塊はその陶器師に向ひ、何を誇り得られよう」。（イザヤ書、一〇ノ一五）
その心眞に神に服從する者は、どうして空語して高ぶることができるだらう。
眞理が己れに一度服從させたその人は、全世界も之に高ぶる心を起させ得られない。又神に全然希望を固めたその人は、假令すべての口で稱められても、それに動かされること決してない。
然り、その稱辭を語る人自身さへ、見よ、みな無であつて、そして言葉の響と共に消去つて了ふのである、而も「神の眞理はとこしへに絶ゆることない」（詩篇、一一七ノ二）のである。

第十五章

すべて希望し得べきものに就て如何なる態度を執り又如何なる言を用ふべきかのこと

一

子よ、すべての事に於て斯く汝言へ。主よもし聖意に適はば、之を斯く成らしめたまへ。
主よ、もし爾の御榮となるならば、爾の聖名に於て之を成らしめたまへ。
主よ、もし、私に便利であるとみそなはし、又有益であると認めたまふなら、その時之を爾の御

榮に用ふるため、私に與へたまへ。
されど、もし、之が或は私に有害であつて、又私の靈の救ひに益せぬと知り給ふなら、願くは斯樣な願、之を私より取去りたまへ。
これ、人には假令正しく又善であると見ゆるとも、すべての願望必ずしも皆聖靈より出るのでない故である。
この事或はかの事に汝の願を刺戟するものが、それが果して善き靈なるかはた否か、又は汝が動かされるそれが果して汝の自分の靈に由るのであるか、之を判斷するは、げにむづかしいことである。
多くの人は最初善なる靈で導かれてると思做す、そして最後にはやつぱり詒かれて居るのである。

二

だから、如何なる心の願望起らうとも、常に神を畏れまつりて、そして謙遜な心もて願ひ又求むべし、殊には自分を棄てて全く我に委ね、そして斯く言ふべきである。
主よ、爾は何が最も善なるやを知りたまふ、願くはこの事或は彼の事を爾の聖意あるままに成したまへ。
爾の聖意あるままのものを、又聖意あるままの量を、又聖意あるままの時に與へたまへ。
爾の知りたまふままに、又むしろ爾の聖意に適ふがままに、又殊更に爾の御榮となるままに、之

を私に成したまへ。

私を聖意あるままの所に置き、そして自由にすべての事に於て私に爲し給へ。

私は爾の御手にある。私を廻すも戻すも旋轉爾の思召すままである。

見たまへ、「私は爾の僕であつて」（詩篇一一九ノ一二五）自分に生きようとは望まない、只爾に於てのみである。で私には準備はすべて出來て居る。願くは之に私がふさはしく、又完全でありたしや。

神の聖意の成就せられんことを求むる祈禱

三

いとも慈愛深くまします耶蘇よ。爾の聖寵を私に降したまへ。私と共に在り、私と共に働き、そして私と共に最後まで耐へ續かんためである。

爾に受納れられ、又爾にいとしとして嘉みせられんこと、之を私の常に望んで求むるやう、願くは私に許したまへ。

爾の聖意は私の意であり、私の意は常に爾の聖意に從ひて、そして最も完全に相一致せしめたまへ。

私の欲し又欲せぬ、爾と一つであらしめよ。或は爾の欲し又欲せぬ事でない限り、何等亦私の欲し又欲せぬことのあり得しむるな。

四

私をしてこの世にある事物に皆死なしめて、そして爾のために輕しめられ、又この世に名もなき者となることを愛するやう、之を私に許したまへ。

すべての願にまさつて、爾に於て私の休息し、そして爾に於て私の心の平和を得られるやう、之を私に許したまへ。

爾は眞に心の平和であり給ふ、又唯一の休息であり給ふ。爾を外にしては、すべて皆困苦と不安とのみである。卽ちその「唯一」の平和」（詩篇九（拉丁譯四）ノ一）の中に、然り、唯一のいと高きもの、無窮の至善者なるその爾の中に、願くは「私の眠り且憩ひたや」。

第十六章

眞の慰安は唯一神にのみ求むべきこと

一

凡そ私の慰安として望み又考へ得られる事、私は之を現世に於てでなく、只未來に於てのみ期待するのである。

もし、この世のすべての慰安を私一人で所有し、又すべての歡喜を皆享け得たりとするとても、それは確かに永續せられない。

故に私の靈よ、神のみ只貧き者の慰安者で、又賤き者の庇護者であり給ふ。で、その神を措きまつりては、汝が充分に慰められ、又は完全に休養せられること、決してあり得ない。

待てしばし、私の靈よ、神の御誓に俟望め、そして汝はすべての幸福を饒かに天に於て與へられ

るだらう。

もし、ただ妄りにこの現世の事を貪るなら、永遠で天的なるもの、汝は之を喪失するだらう。

この世の事は汝之を利用せよ、されど汝の望は永遠の事にあれ。

この世の事は如何なる善事にても満足せられまい。之を享けんがために、汝は造られたのでない のである。

二

よし物的の善事皆汝にあるとしても、それで汝が祝福されたでもない、又惠寵されたでもない。只萬物を造りましし神にあつてのみ、汝の慶祥幸福すべて存立するのである。

而もその幸福たる、愚かなこの世の愛着者等が目睹して以て稱讃する所のものでなく、即ち善良なる基督信者等の期待する所であつて、又時々純潔なる心をもつて靈的の所謂「その國籍天にある」者たちが、豫めその天味を感じ得る所のものである。(ピリピ書、三ノ二〇)

すべて人間的の慰安はみな空であつて、又僅かの束の間である。

されど、内的に眞理の齎す慰安は、至福で又眞實である。

神に敬虔なる人は、どこにあつてもその慰安者なる耶蘇を伴つて、そして之に告げまつる。いづれの場所いづれの時にても、主なる耶蘇よ、私と共にいまし給へ。

私がすべての人的慰安をよろこんで棄去ること、之が私に慰安であらしめよ。

そして、もし爾が慰安を取去り給ふとも、その爾の聖意と正しき試錬とが、却て私に無上の慰安であらしめよ。

そは、爾は「恆に責むることをせず、永遠にいかりを懷きたまはざるなり」(詩篇、一〇三ノ九)と。

第十七章

憂慮は常に神に委ねまつるべきこと

一

子よ、我の欲するままに之を汝に爲さしめよ、汝は人間として考へる、そして萬の事只人間の性情の勸むるままに從つて判斷する。

主よ、爾の仰せまことである。爾が私の爲めに仕たまふその憂慮は、却て私が自分のために爲し得るすべての心勞にも幾多越えて居る。

然り、誰もその憂慮を皆爾に委ねまつらぬなら、その人非常に不安の中に立つのである。

主よ、私の意志が爾に向ひて絶えず正しく又堅固である限り、願くは爾の聖旨に適ふがまま、何事なりとも之を私に爲し給へ。

そは、爾が私に爲したまふこと、善ならざるはあり得ぬ故である。

二

もし私が闇に居るが聖意であるならば、爾は讃むべきかな。又私が光に居るが聖意であるならば、

爾は亦讃むべきかな。或はもし私を以て慰安を與へられるに足る者と思召さば、爾は讃むべきかな。されどなほ患苦に私の惱むが聖意であるとても、爾は依然として常に讃むべきかな。

子よ、もし我と共に歩まんと欲するならば、汝斯の心に立たねばならぬ。

苦難に當つて勇むこと、必ず汝が歡喜に向ふと同じであれ。

乏く且貧くあらうとも、なほ豐かで且富んでる如くに、必ず欣々然之に甘んぜよ。

三

主よ、如何なる事の私に罹り來るとも、それが聖意であるならば、私は爾のために悦んで之を忍びませう。

爾の御手よりであるならば、善も惡も、樂も苦も、又は歡喜も悲哀も、之を受くるに差別しますまい、而もすべて私に起り來る事のため、爾に感謝を捧げんとするのである。

願くはすべての罪より私を護りたまへ、さらば死も地獄も恐るることないだらう。

爾が永遠に私を棄去つて、そして生命の名簿より私の名を削除し給はぬ限り、如何なる患苦の私に降りかかるとも、何等私を害することないだらう。

第十八章

基督を模範として平氣にこの世の辛苦を耐ふべきこと

一

子よ、汝の救のために我は天より降つた、して汝の艱苦を身に負うたのは、我に必要あつてでない、只愛の故である。汝が忍ぶことを學んで、まこと、わが降誕の時より十字架上の最期に至るまで、我には苦惱の弛められることなかつた。』そしてこの世の艱苦を愬へず悚へんためである。』

この世の事物には非常に不足した。我に對する多くの怨訴は絶えず耳にした。侮辱と罵詈とを柔和に辛抱した。恩を仇で返された。奇蹟は徒らに瀆された。そして教訓空く咎責を贏得たのみであつた。

二

主よ、殊更爾の聖父の命令成遂げんためであるから、爾はこの世に生涯ましまして、幾多の忍耐したまうた。さればこの憐れな罪人の私が、爾の聖旨に從うて忍んで艱苦をうけ、そして聖意のある限り、私の救のために、朽つべきこの生命の重荷を負擔する、是れ當然であるのである。

或はこの現在の生涯が重荷と感ぜられるだらう、けれ共之が却て爾の聖寵に依て眞に功績となり、又爾の模範と爾の聖徒たちの先蹤とに依り、弱き者にも一層凌ぎ好く、又一層明瞭となつたのである。

殊にむかし舊約時代にあつたよりも、慰安は遙かに澤山である、その時にはまだ天の門は堅く鎖されて、天に到る路さへ曖昧であつた。それで、その天の王國を探さうと心に掛ける人も鮮少であつた。

そして、その時義しい又救はるべきであつた人たちも、爾の御受難と聖なる死の御贖とのその以前であつて、天の王國には入ること出來なかつたのである。

三

然るに今や、爾はかたじけなくも私と及びすべての信者とに、爾の永遠なる王國に行くべきその正しい善い道をお示し下さつた。嗚呼之を何と私は爾に感謝しまつるべき。然り、爾の御生涯是れ私共の途である。そして亦私共の冠冕であります爾に向て、私共は聖なる忍耐蹈んで歩み行くのである。

で、もし爾が先立ち行きて、そして私共を教へ給ひしでないならば、誰が御跡に從はうとさへ心掛けるであるだらう。

本當に、もし爾の赫々たるその模範を仰ぐでないならば、げに幾多の人々、如何に遠く後方に居殘ることであるだらう。

見よ、私どもは多くの御奇蹟と及び御教訓とを耳にした、而もなほ熱心を刺戟せられない。もし爾に從ひまつるべきこの大なる光明を仰ぎ得るでないならば、げに果してどうなるのであるだらう。

第十九章

害を與ふる者を寛恕して眞の忍耐を證すべきこと

一

子よ、何を汝は言ふのである。憩へ已めて、我と及び他の聖者たちとの受難を考へよ。

「汝はまだ血を流すまでに抵抗せし事ない」。(ヘブル書、一二ノ四)

あの多くの艱難うけ、烈き誘惑に惱まされ、甚い災厄蒙りて、又種々の鍛錬試錬に遭うたその人人に較ぶれば、汝の忍んだ事などげに數にもならぬのである。

故に、汝の受けてるその輕微なものを、尚更容易に悼へ得んために、汝他の人たちのその重かつた艱苦を常に心に想出すべきである。

そして、もし汝の輕微なものが、然と汝に見えぬなら、これ汝の忍耐足りないからではないか、汝之を考へよ。

而も小であれ大であれ、汝すべてを悼へて忍ぶことを努力せよ。

二

汝が艱苦を受くる覺悟ができればできる程、汝は益々智慧に進みて、神に對しまつる功績益々加はるのである。そして勇氣と習慣とに依り、之に對して緩まずに準備するならば、汝の忍ぶこと亦益々容易となるだらう。

好く言はれることだ、「此樣な人より此樣な事を受くるに忍びない、此樣な待遇私に堪へ得られない。未だ嘗て考へなかつた非難を加へたのだ。けれ共い。そはこの人私に非常な損害を與へたのだ、もし之が他の人よりであつて、果して忍ぶべきと見るならば、私は甘んじて之を忍ぶを否まない」

と。けれど汝は然言ふな。
斯う考へるは、これ汝が忍耐の德と、又誰より榮冠を受くるのであるかとを思はずに、むしろ只自分の蒙つた害辱と、及び之を加へた人とをのみ計量した、げに愚かなことである。

三

自分に適當と見えた事を、而もそれを自分の氣の向いた人よりの外受けようとしないのは、その人決して眞の忍耐を知つたものでない。
眞に忍耐することは、是れその害辱が、或は己れの身上のもの、或は同輩身下のもの、或は善にして聖なる者、或は邪惡で無價値な者、その孰より來るとも、之に依て自分が練磨せられるに何の差別を立てないのである。
而も、一切の諸物よりするもの、その災厄の如何に大であり、又頻繁であらうとも、之を全然皆神の御手より出たものとして、感謝して受けまつり、そして此の上ない自分の利益であるとして考へる。
是れ、神のために受ける艱苦であるならば、それが如何に些少であらうとも、必ずその報償あるべきであつて、之なきもの一としてない故である。

四

故に、汝もし勝利を得んと欲するなら、いつも戰闘の仕度調へ居よ。
戰闘なくしては、忍耐の榮冠に達すること出來ないのである。

もし艱苦を凌がうと思はぬなら、これ榮えの冠を拒絶するのである。で榮えの冠を欲するなう、忍耐して受けこらへ、そして勇敢に戰へよ。
勞働なくしては休息に到れない、又戰闘なくしては勝利に達し得られない。
主よ、私には本性不可能と見ゆるそのことを、願くは爾の恩寵に依り、私に可能な事となしたまへ。
如何に私が忍ぶに腑甲斐なく、そして僅かの艱苦に出逢うても、意氣忽ち沮喪して了ふか、爾は之を知りたまふ。
如何なる患艱私を練磨するも、之を爾の御名のために、皆私の愛するもの又望むものとならせたまへ。然り、爾のために苦み又惱むは、げに私の靈魂を裨益するのである。

第二十章

已れの弱きを告白して又この生の辛苦多きを認むること

一

「我は已れに逆ひてわが不義を言ひあらはさん」。（詩篇三二ノ五）然り、主よ、私は爾に私の弱きを告白し奉る。
まこと、小さな事さへが往々私を落膽せしめ、又悲歎させるのである。
その決心、如何にも勇敢に事に當らうとする。けれ共些細の誘惑來るや、それが私には大なる憂

慮となるのである。

極めて詰らぬ事も、それより重大なる誘惑起ること往々ある。

私が自分でもう安全だと考へてると、意はぬ時に颯と一陣の風が吹く、見ると自分はもう殆ど轉覆して居るのである。

二

主よ、この故に私の賤きこと脆きことをみそなはせ、爾は既に之を知り給ふ。

願くは私を憐みて、「泥の中より私を救け出したまへ」、(詩篇、六九ノ一五)私が之に粘着して、そしていつまでも棄置かれることないためである。

然り、私は倒れ易い、又情慾に抵抗するに弱くして、その故に屢ば自ら逡巡して、そして爾のみまへに慚愧するのである。

而も、必ずしもすべてに於て私の屈讓するのでない、けれ共その續く襲撃に私は惱まされ苦しめられ、そして毎日斯く鬪爭の中に生活するに甚だ倦み果てる。

そして、常に忌むべき多くの忘想私に侵し來つて、それが入るは甚だ易く、而も退去るは難いのである、即ち之を以ても私の腑甲斐なさ、自分ながらに顯著である。

三

嗚呼、イスラエルのいと力ある神よ、忠實なる靈の熱愛者よ、願くは爾の僕の勞苦と悲哀とをみそなはし、そしてすべてその爲さんとする事に於て之を擁護し給へかし。

私のこの舊き人、即ちまだ全く靈に服從しない此の淺ましき肉が克誇つて、そして主權を振はぬためである。願くは、主よ、又天的剛毅の心を以て私を强めよかし。之に向て此のみじめな生命の息續かん限り、私は戰はねばならぬ故である。

而も、あな、患苦と不幸と絶ゆることなく、又すべてのもの罠と敵とに充滿してゐるこの人生、これ抑も何であるだらう。

げに、一の患苦もしくは誘惑去り行くや、又他のものが來るのである。否、最初の戰ひまだ酣なるに、續々として意外のたたかひ又迫つて來るのである。

四

で、こやうに辛苦の多くして、そして災難不幸にのみ左右せらるるこの人生、之をどうして愛し得られよう。

まして、死と病氣とを生做すのである、どうしてそれが生命と呼ばれよう。

然るに之が多くの人に由て愛せられ、又その中に快樂得んと求められるのだ。

成程、屢ば世は虛僞である空であると非難される。けれ共肉の慾望は絶大に司配してゐる、それで容易に之が棄てられない。

即ち、一方之を愛するやうに惹付ける、又一方之を輕蔑させるのだ。

世を愛せさせるのは、「肉の慾、眼の慾、及び所有の誇である」。(約翰第一書、二ノ一六)されど正當に之に伴ふ懲苦と不幸とは、又世に對して嫌惡と倦怠とを生ぜしめる。

されど、あな、邪悪な快樂は世に屈服せる心に打克つて、そして「荊棘の下に偃するを愉快と思はせる」（ヨブ記、三〇ノ七）これ神を知りまつる嬉さと德を心とする樂みとを見、又味つたことないからである。

人もし完全にこの世を輕んじ、そして聖なる紀律に從ひて神に生きんと努むるなら、即ちその人眞にこの世を棄てたるものに約束せられし神的快味を知るのであつて、又如何に世は甚だしくも迷つて居り、そして種々に欺かれて居るかを明かに見るのである。

第二十一章

すべての賜物及び善事にまさり只神にあつて休息すべきこと

一

すべてに優り、又すべてに於て、私の靈よ、常に神にあつて休息すべきである、これ聖者たち自身にさへ永久なる憩である故である。

最も樂き又最も愛しき耶蘇よ、すべての健康體美にまさり、すべての光榮名譽にまさり、すべての權力爵位にまさり、すべての財寶技藝にまさり、すべての學識智能にまさり、すべての歡喜欣躍にまさり、すべての評判讃辭にまさり、すべての快樂慰安にまさり、すべての希望約束にまさり、すべての功績期待にまさり、要するに一切萬物にまさりて、只爾にあつてのみ休息するを然り、すべて爾の與へ又撒布し得るその賜物恩典にもまさり、又は私共の心に捉へ又感じ得る限りの、そのすべての歡樂愉快にもまさりてである。

然り、最後に、天使たち、大天使たちにもまさり、又すべての天の萬軍にもまさり、すべての見ゆるもの見えざるものにまさり、又すべて、私の神よ、すべて爾でありまさぬものにまさり、只爾にあつてのみ私を休息せしめ給へ。

二

是れ、主なる私の神よ、爾はすべてにまさりて至善でおはします、只爾のみ至高でおはします、至大の能力でおはします、最も足りて又圓滿でおはします。

又爾のみすべてにまさりて最もうるはしく、最も愛すべく、最も尊く、最も樂あるものでおはします。即ち爾にあつて一切萬物同じく完全に善であり、過去にも常に然りであつた、未來にも亦然りであるのである。

この故に、爾が御自身もつて私に與へ給ふでない限り、如何に爾の御事啓示せられるとも或は約束せられるとも、なほ私は爾を仰ぎまつらないのである、又爾に達しまつらないのである。で、やつぱり、私にはそれが小さくそして物足りなく思はれる。

されば、私の心は、すべての賜物、又は天地すべての物に超越し、只爾にあつて休息するのみ、

私に許したまへ。

さもなくば、眞の休息と滿足と全然他にはないのである。

三

嗚呼、私の契こめていと慕ひまつるもの、耶蘇基督よ、いとも潔らけき戀人よ、又天地の統治者よ、誰か私の飛去り行きて、爾にあつて休息するために、眞の自由の「翼を私に與へる者」(詩篇五五ノ六)のあるだらうか。

嗚呼、如何に爾のかぐはしきか、之を心ゆくばかり充足りて仰ぎまつること、それがいつ私に許可されるだらう。主よ、私の神よ。

嗚呼、いつ私がすべての感覺量度をも超越し、そして、すべて誰も知らざるさまもて自分を忘れ、而も只爾をのみ感じまつるため、爾に全く己れを結び付かせることのできるだらう。

されど今は、私は屢ば歎いて、そして私の不幸を悲みつ悚へて居る。

そは、この悲哀の谷なる人生には、多くの災難襲ひ來つて、それが往々私を苦め惱まし、又雲にて蔽ひつつみ、往々妨げ、惑はし、誘ひ、又絡ませて、そして私をして自由に爾に近づくを得させない、又祝福せられた靈たちに常に備へてある、爾のその樂き抱擁を味はせない故である。

願くはこの私の歎息と、あまたな地上の苦悶とに、爾の憐愍動かし給はれや。

四

嗚呼、ときはの榮光かがやく尊き耶蘇よ、この行旅の人なる靈魂の慰めよ、爾のみまへにありては、私の口はその聲なく、私の緘默爾に語りまつるのみ。

私の主よ、いつまで爾は來るに躊躇したまふや。この小弱な私に來りて、そして歡ばしめたまへ。憂苦より救ひたまへ。

來りたまへ、來りたまへ、爾がましまさずば、一日片時も歡喜はないのである。爾は私の歡喜にましまして、そして爾がましまさずば、私の食卓空虛である故である。

爾の光臨私を生かして、私に自由を與へ、そして慈愛の聖容私に現はしたまふそれまでは、私は哀れなもので、そして恰も牢屋に囚へられ、又桎梏もつて繋がれたる如きものである。

五

他の人々はその好むがままに、爾を措いて他に何物かを求めるだらう。けれど私には、私の神よ、私の望よ、又永遠の靈の救よ、爾を措きまつりては、他に何等私を悦ばせるものないのである、又ある筈がない。

されば、爾の聖寵再び戻りて、そして爾が私の內なる心に語りたまふそれまでは、私は默すまい、又祈るを止めぬだらう。

「見よ、我ここにあり」、(イザヤ書、五八ノ九)見よ一汝われを呼びたれば」わが汝に來たのである、汝の涙と汝の靈の願と、及び汝の謙遜と心の悔恨とが我を動かして、我を汝に誘致したのである。

之に私は言ひまつりた。主よ、私は爾を呼びまつり、又爾を樂しみまつらんと願つて、そして爾のためにすべてを斥けようと覺悟した。

是れ、爾は最初に私を引起たして、爾を求めしめ給うた故である。

その故に爾は讃美すべきかな、「主よ、爾の饒かなる仁慈に從ひ、惠みをもて爾の僕をあしらひ給へばなり」。(詩篇、一一九ノ六五)

されば爾のみまへに於て何を爾の僕の復言ふべきであらう、只いたく自らみまへに謙下りて、絶えず己れの過失と罪惡とを想出すのみである。

まこと、天と地とのすべて奇きものの中に、爾に同きは一もないのである。

爾の仕業は甚だ善である、爾の審判は眞に正くある、そして爾の掟理は宇宙を司配する。

されば、讃美と榮光と爾にあれ。嗚呼、父なる神の御智慧よ、私のこの口、この靈魂、及びあらゆる萬物、皆同じく爾をたたへ、又爾を祝しまつらばや。

第二十二章

神のあまたの御惠を記憶すべきこと

一

主よ、私の心を爾の律法に向ひてひらき、私を教へて爾の訓戒を踐ましめ給へ。

私に許して爾の聖旨を理解し、そして深く敬ひ精く考へ、特殊に又は一般に、爾の御惠を記憶せさせたまへ、之に由て私が爾に感謝を獻ぐるに足る者とならんためである。

まこと、その御惠の最小部分に對してすら、之に奉謝の讃美を私は報いまつることできないのである、そして之を知つて告白し奉る。

すべて私に賜はつたその善事に對し、私は之を受くるにさへ足らぬ小さい者であつて、そして爾の崇高さを思ふ時、私の靈はその偉大に驚いて自失するのである。(創世記、三二ノ一〇)

二

すべて精神又は肉體に於て私共の所持する所のもの、又は內的に或は外的に、乃至自然に、或は超自然に私共の所有する所のもの、皆是れ爾の惠賜である。然り、一切の善事は皆私共爾より受けるのであつて、そして仁慈に富みて、慈悲深く、かつ恩惠饒かなるその爾を頌へまつるのである。

また或る人は多くを受けて、又或る人は少しをうける事がある。けれ共すべては皆爾のものであつて、そして爾がましまさずば、その少しなものさへ誰も有ち得ることないのである。

されど、その多くを受けた人とて、決して己れの功績を誇つたり、他を凌いで高ぶつたり、或は己れに劣つたものを輕蔑したりすべきでない。すべて善を己れに歸する最も少く、そして感謝の心を以て神に益々謙遜でまた恭虔なる人、即ちその人益々偉いので、また益々すぐれて居るのである。

即ち、すべての人の中でも、自分を最も賤しいものだと考へ、又最も無價値なものだと思ふ人、

その人却て最大なものを受くるに適して居るのである。

三

また、少しを受けた人とて、決して悲みたり、怨みたり、或は己れより饒かな者を猜みたりしてはならぬ、只むしろ、神よ、爾にのみ心を注いで、そして最も爾の恩惠を頌へまつるべきである。これ爾は人に偏頗なることなく、いつも豐富に又寛大に、また悦んで爾の惠賜を施し給ふ故である。

すべては皆爾より出るのである、そしてその故にすべてに於て爾は讃美さるべきである。人には各々その分あつて與へられるのである、そして之を爾は知り給ふ。だから何故甲は少く持つて乙は多いか、それは私共の關する所でなく、それは私共の關する所でなく、爾の御裁量にあるのである、爾に人めいめいの功績を明かに識別け居給ふ故である。

四

されば、主なる神よ、外から見て、然り、世人の以て謂ゆる名譽光榮とする所のもの、之を多く私は有たないのを、却て大なる御惠として考へる。これ自分の身が貧く又賤くあるとても、何もそれを氣にして憂愁悲歎に沈み、或は落膽することない、只むしろ之を大なる慰安とも又は怡樂とも思做すべき故である。

なぜなら、神よ、爾は貧きもの賤きもの、又はこの世に輕蔑せられる者を擇びて、之を爾の親近眷族とし給ふためである。

第二十三章

爾が「全地に王となし給へる」（詩篇、五ノ一七）使徒たち自身、即ちその證である。而も彼等は世に交つて懇へなかつた、謙遜に眞率に、全然惡意や譎詐なく、只管に爾の「聖名のために侮辱を受くるを喜んで」、（使徒行傳、五ノ四一）そして世の忌嫌ふ所のもの、之を大なる愛情もつて自ら抱擁した。

五

故に、爾を愛し爾の恩惠を知るものを歡喜させるのは、只之に行はるる爾の聖意と、及び爾の永遠なる攝理に含まるる畏き聖旨とにあるべきで、他に何等ある筈ない。

即ち、それに依て、その人全く滿足慰安を與へられ、そして他人が最大であることを望むが如く、自分は甘んじて最小なることを欲するのである。又最低の地位にあつても和樂滿足して、恰も最高の位に立つ如く、或は輕侮せられ擯斥せられ、名もなく譽もなくして、而も、宛然世に尊崇富貴を極むるものの如く、常に欣々として居ることができるのである。

要するに、爾の聖旨と爾を尊びまつるその愛とは、是れすべてのもの以上であるべきであつて、そしてその人之に由て慰められ又悦ばされること、已れが既に與へられ或は將に與へられんとするあらゆる恩惠にもまさり、更に饒かで又大きくなければならぬ。

大なる平和を齎す四の條件のこと

一

子よ、今汝に平和と眞の自由との道を敎へよう。

主よ、爾の宣へる如くに爲したまへ、恭しく之に私は耳を傾け奉る。

子よ、むしろ努めて他人の意志を行へよ、汝の有つこと常に少なかれ、多きことを願ふなよ。常に低い地位を求めて、すべての人の下に就け。神の聖旨の汝に全く成就せられるやう、汝常に願つてそして祈りせよ。見よ、かやうの人、卽ち平和安息の境に入るのである。

二

主よ、爾の聖言短くある、而もその中に數多の完全藏されてる。言は簡である、けれ共意義深長で、そして效果に於て饒かである。で、もし私が之を忠實に守るなら、復容易に煩悶私に起る筈ないだらう。して、いつも私が不安懊惱を感ずる度ごとに、屹度この敎訓私を離れて居るを知るのである。されど爾は全能でおはします、そして私の靈の進歩を常に愛し給ふのである、願くは益々爾の聖

寵を加へて、私をして爾の聖言を行ひ遂げ、又私の救を全うすることを得させたまへ。

惡念を防ぐがための祈禱

三

主なる「私の神よ、願くは私より遠かり給ふな、私の神よ、とく來りて私をたすけ給へ」。（詩篇、七一ノ一二）

そは種々の念ひと大なる恐怖と、「私にさからひて起り立ち」、（詩篇、七ノ一三）そして私を惱す故である。』どうしてそれを無難に私の通過しよう、どうしてそれを切拔けよう。

主は言ひ給ふ、「われ汝のまへに行きて地上の大なる者を卑くせん、われ牢獄の扉を開きて、隱る る神祕を汝に啓示せん」（イザヤ書、四五ノ一、）と。

主よ、その御言の如くに爲したまへ、さらばすべての惡念みな爾の聖顏のまへより逃去るであるだらう。

すべての患苦に於て爾に逃れ行き、爾に信賴し、心の底より爾に呼び求め、そして爾の慰安を期待し奉る。是れ私の望みである、私の唯一の慰安であるのである。

心の照灼を求むる祈禱

四

慈愛に富みます耶蘇よ、爾の輝く靈光もつて私を照らし、そして私の心の住家より一切の暗黑を拂ひ去りたまへ。

私の迷へる心を取抑へ、そして烈く攻來る誘惑を打退けたまへ。
猛然、私のために闘つて、そしてこの惡獸を、然り、私を魅惑するこの邪慾を追除け給へ。「爾の力によりて平和が致され」、(詩篇、一二二ノ七)そして爾の聖殿、卽ち純なる良心に、爾の讃美の盛んに響渡らんためである。
爾、風と嵐とに命令し、又海に向て言ひ給へ「靜まれ」と。又北の風にも告げ給へ、「吹きすさぶな」(馬太傳、八ノ二六)と。さらば「大なる平穩」來るだらう。

五

「爾の光と眞理とを放ち」たまへ、「地の上に照り輝かん」(詩篇、四三ノ三)ためである。卽ち私はその地であつて、爾が私を照らし給ふまでは、一形もない空虚な」(創世記、一ノ二)ものである。
願くは上より爾の聖寵を降りそそぎ給へ、天の露もて私を潤したまへ、又篤信敬虔の水を流して地の面に灌漑し、そして最善至福の果實を結ばしめ給へ。
罪の重荷に壓せられる私の心を引起させ、そして私の願を悉く天に向て置かしめたまへ。天上至樂の妙味を嘗め得ては、復地上の事を考へるを厭はしくならんためである。
願くは私を引放して、そしてすべて有形の物に繋がれる儚い慰安より救ひ給へ、そは、有形の物一として克く私の欲望を滿足させ、又は慰め得るものない故である。
願くは愛の絆もて離れぬやう爾に私を結び付けたまへ、爾を愛する者を滿足させるのは、只爾のみでおはします、そして爾なくしては天地萬物悉く詰らぬものであるのである。

第二十四章

徒らに好奇に驅られて他人の身上を穿鑿するを避くべきこと

一

子よ、徒らに好奇に驅られるな、又餘計な心勞を重ねるな。
「この事」あの事「汝に何の關係あらん、我にしたがへ」。(約翰傳、二一ノ二二)
或は、この人斯く斯くである、或はあの人斯く斯く爲した、斯く斯く言つた。さりとてそれが汝に何である。
他人のために責任負ふ必要汝にない、只自分のために汝の理由を開陳せよ。で、何故汝は妄りに干渉する。
見よ、我はすべてを知つて居る、天が下の事見ざる所ない、又誰がどうして居る、何を考へてる、何を欲してる、又如何の目的を抱いて居るか、皆之を知つて居る。
故に、一切我に委すべきである、そして汝は安んじて己れを守れば好い、躁いで動くものは勝手にさせて、その欲するままに躁いで動かせよ。
その爲したこと言うたこと、その報は各々の上に來るので、我を欺けない。

二

汝、大なる名前の影に庇はれようと欲するな、多くの友が親しいとて之に賴るをするな、又人々

の私的な愛顧に與からうと努むるな。
畢竟惑亂を來して、心に大なる暗影を生ずるのみである。
もし汝が熱心に我の降臨を待望み、そして心の扉をわれに開くならば、我は悦んで汝に語り、隱れた奥義を汝に啓示するだらう。
常に怠らず用意して、祈して目を醒まし居れ、又すべての事に汝を謙下れ。

第二十五章

どうして心の堅固な平和を得べきか又眞の向上を得べきかのこと

一

子よ、我は語りてある、「われ平和を汝等に遺す、わが平和を汝らに與ふ、わが與ふるは世の與ふる如くならず」（約翰傳四ノ二七）と。
平和は誰も皆望むのである、けれ共眞の平和に屬することは、之を誰もが皆念としない。
我の平和は心の謙遜な且柔和な人と共にある、して汝の平和は只多くを忍ぶにある。
もし我に聽いて我の聲に從ふなら、汝は多くの平和を享くることができるだらう。

主よ、何を私は爲すべきや。

汝の爲すこと言ふこと、すべてに於て自ら愼めよ、そして只我をのみ悦ばすことに汝の全心を傾けて、我より外に何ものをも欲するな、又求むるな。
されど又、他人の爲た事言つた事、之を輕々しく審くをするな、また汝に委せられたでない事には絡まるな。さすれば自分に煩累招くこと殆どなく、或は極めて稀なることできるだらう。

二

されど、汝が何等の煩累を感じない、或は心に體に何等の惱苦を受けないと云ふことは、是れ現世に於ては有り得ない、只永遠なる安息の狀態であるのである。
故に、假令汝が何等の痛苦を感じないとて、それで汝が完全であるとは言はれない。
事が行はれたからとて、それで眞の平和を見出したと汝考へるな。又は不運に惱まされること全然ないとても、それで汝が安泰だとは思つてならぬ、勿論汝の意のままに萬事が行はれたとて、それで苟も自分に已惚れ、又は特別神に愛せられたなどと思つてならぬ。德を眞に愛する者は、斯樣な事にて認められるでない、又斯樣な事に人の進歩完全はない故である。

三

主よ、然らば何なるや。

汝がその全心より己れを神の聖旨に捧げ、そして小にも大にも、或は地にても天にても、すべて

自分の利益を求めない事、卽ち是である。
又汝が順境逆境孰にあらうとも、常に同じ衡を以てすべてを量り、同一の顏色もつて依然として感謝の態度を持すること、亦是である。
もし汝が希望に於て勇敢で堅忍で、そして內的慰安の減退されながらも、尙汝の心に益々忍耐の覺悟を固め、斯やうな大なる患苦、之を自分受くべき筈でないとして己れを義とする如きなく、只すべての攝理に於て我のみを義と爲し、又我が聖なることを讚美するならば、その時汝は眞なる正しい平和の途を步むのであつて、そして復我の「顏を喜び見ることを得ん」（ヨブ記、三ノ二六）との確かな希望を抱くであらう。
又もし、汝が能く自己輕蔑の心に徹底するならば、知れ、その時汝、流謫の身ながらに、尙出來得る限りの豐富な平和を享受するのであるだらう。（詩篇、七二ノ七）

第二十六章

自由なる心の優秀は是れ讀書に由るよりも、むしろ覇篤なる祈禱に由て獲られること

一

主よ、凡そその靈を天上の目的より決して弛めるなく、そしてあまたの憂苦の中にあつて、尙その憂苦なきが如くに安居するは、是れ完全なる人の仕業であつて、遲鈍な心狀に由るのでない。

而も放縱なる物界の愛慾に何等執着せられない自由な心の特權に由るのである。

二

いと仁愛に富みます私の神よ、爾に祈誓し奉る、願くはこの人生の憂苦より私を保護して之に全く纏はれることなからしめ給へ、多くの肉體の必要より快樂得んとして之に捉はれることなからしめ給へ、靈の一切の障碍より、その妨害に打挫かれて落膽沮喪することなからしめ給へ。
然り、この空なる世が斯くも愛慾もつて切望するその物事よりと私の言ふのでない、只この悲慘な事よりと言ふのであつて、之は人類一般の呪詛であり、爾の僕たちの靈を刑罰ともして壓迫抑遏するのである。して、之がいつにでもその欲するままに私の靈の自由を侵して入り來ることなからしめ給へ。

三

嗚呼、私の神よ、言葉に盡せぬうましき御名よ、すべての肉的慰安は皆是れ私を永遠の愛より引離し、そしてこの樂き現世の何かの愉快と見ゆるものをもつて、惡くも己れに誘ひ行かんとするのである。願くは之を私に苦き忌むべきものとならしめ給へ。
肉と血とをして、願くは私の神よ、私に克たしむるな、私に克たしむるな。或は、世とその短い榮華とをして私を蠱惑せしむるな。又は惡魔とその狡獪とをして私を引倒すことあらしむるな。』私に與へて之に抗する勇氣あらしめ給へ、之に忍耐あらしめ給へ、又之を凌ぐ恆操あらしめたまへ。

すべての世の慰安の代りに、爾の靈に由て灌油される無上の快味を與へ給へ、又肉的なる愛の代りに、爾の御名に親みまつる愛を注ぎ給へ。

四

見よ、飲むもの、食ふもの、着るもの、或は他の肉體支持に屬する諸の必須物、皆是れ神に熱心なる靈のために重荷である。

願くは斯樣な需要は之を節用し、そして妄な愛着に泥むことなからしめ給へ。

之をすべて棄去るは正しくない、自然は支持せらるべき故である。けれ共或は餘計に要求し、或は徒らに快樂得んためであるならば、之は聖なる律法が禁ずるのである。さもなくば、一肉が靈にさからひて」、（ガラテア書、五ノ一七）横暴働くであるだらう。

卽ち此等の事に於て私は求め奉る、爾の御手の願くは私を抑へ又教へ、私をして適度を過すなからしめ給へ。

第二十七章

自己的愛は最も至高の善を妨害すること

一

子よ、すべてを得るためには、汝すべてを與へねばならぬ、そして一物たりとも自分のために遺し置くな。

知れ、汝を害するもの此の世に何があらうとも、それは汝の自己愛に過ぎるはない。

汝の有するその愛好の心に從て、それ丈多少の物慾汝に固着するのである。

若し汝の愛が純潔で端的で、そして好く節制されてるなら、汝は卽ち物慾に捉はれることある筈がない。

有つて正しくないものは、汝之を有たうと貪るな。

汝を妨害し、又は內的の自由を奪はうとする如きもの、汝之を有たうとするな。

汝の望み得る又有ち得るすべてを傾けて、そして心の奥底より、なぜ汝は己れを我に寄せないのであるか、さても不思議である。

二

なぜ空なる憂愁もつて心を勞するか、なぜ餘計な煩悶もつて氣を疲らすか。

我が聖意に任せて立て、さすれば何等損傷を蒙むることないだらう。

もし自分の都合や、勝手な我意をのみむしろ遂げんとして、汝が或は此の事彼の事を求め、或は此處に彼處に轉ぜんと欲するなら、汝に決して安泰ないだらう、又心勞絶えることないだらう。

あらゆるもの皆何かの缺點存して、又到る處反對なものに出逢ふであらう故である。

三

故に外よりしては、物如何に獲得され又增殖されようとも、それは汝に益しない、却て之を輕蔑して、心から根こそぎに斷つにある。

然り、之を宮に金錢財寶の富に就てのみと理會するな、名譽に憧がれ、又は詰らぬ稱讃望んだりするも同じである。皆この世と共に過去るのである。

もし靈の熱望缺乏するならば、如何なる場所も汝に殆ど安全を與へない、又もし汝の心狀眞正なる基礎に据ゑられるでないならば、永くは決して續かない。外よりの平和はそれが何であらうとも、語を換へて言へば、汝が我にあつて立たない限り、外に於ては變らば變れ、內に於ては少も善に遷れないのである。

而も機會起つて、それが受納れられるや、以前に汝の逃避したるもの、又はそれ以上のもの、それを復汝は見出すであるだらう。

心の淨化と天的なる智慧とを求むる祈禱

五

L.

爾の聖なる御靈の御惠に依り、神よ、私を強めたまへ。

願くは私に力を與へて一內的なる人の強められ、」(エペソ書、三ノ一六、)そして私の心はすべての無益な心配苦悶を取去られ、又如何なる物にもその價の貴賤に拘らない、それより起る種々の慾念に惹かれずに、只すべてを過行くものと看做して、私自身亦倂く過行くものなるを思はせたまへ。

まこと、天が下のもの一として永續するはない、皆「空であつて靈の苦悶である」。(傳道之書、一ノ一四、)嗚呼、之を識るはなんと賢きものであることよ。

主よ、願くは私に天の御智慧を與へて、私をしてすべてに超えて爾を搜し求め、すべてに超えて爾を味ひ又愛し、そして爾の御智慧の定に從て現在あるそのままに、他のすべてのものをも理解することを學ばせ給へ。

願くは、私に諂ふものは深慮もつて之を斥け、又逆ふ者は忍耐もつて之を悚へることを得させたまへ。

是れ、吹廻はる言葉の風に一々動かされず、又邪惡な蠱惑者の誹謗に耳を借さないのは、卽ち大なる智慧者であるからで、斯うしてこそ、歩み始めたその道を、誰も安全に進み行くことできるのである。(エペソ書、四ノ一四、)

第二十八章

讒謗者の口に對すること

一

子よ、もし誰かが惡ざまに汝を考へ、又汝の聞いて不快とするやうなこと、之を口にするとても、それに汝は氣を悶らすな。

汝は自分をそれよりも尙劣つて居ると考へ、又誰も自分より弱いはないと信ぜねばならぬ。

若し汝が靈的に考へて歩むなら、翩々たる噂の言に餘り重きを措くことないだらう。

厄難來つた時にも緘默して、只內心を我に向はせ、そして人の毀譽褒貶に惑亂されないのは、是

れ少なからぬ賢者のすることである。

二

汝の平和が他人の口にあらしむるな。よしや好く言はれたとて悪く言はれたとて、それで汝の人物の變るでない。眞の平和はどこにある、眞の榮えはどこにある、只我に於てのみあるのではないか。

故に、人の機嫌を取ることも求めない、又之を損ねることも恐れないその人は、卽ち大なる平和を享けられる。

すべて心の不安や知覺の混亂は、愛にその筋道なく、恐怖にその理由ないより起るのである。

第二十九章

患苦に臨んで如何に神を呼び之を祝福し奉るべきかのこと

一

主よ、この誘惑と患苦とを私の上に來らしめしは、爾の聖旨である、「爾の聖名は永遠に讃美すべきかな」。(ヨブ記、一ノ二一)

私は之を避け得られない、只已むなく爾に逃行きて縋りまつるのみ、爾の私を助けて、之を轉じて私に善事とならしめ給はんためである。

主よ、今私は患苦の中にある、そして私の心は安らかでない、しかも甚く目前の難儀に惱んで居

る。

そして今、愛する父よ、私は何を言ふべきや、私は此の窮厄の間に陷つてる。願くは「此の時より私を救ひたまへ」。(約翰傳、一二ノ二七)

「されど私はこのためにこの時に到つたのだ」、(約翰傳、一二ノ二七)私が全く謙遜にせられて、且つ爾に由て救出され、そして爾の御さかえの顯れんためである。

主よ、切にねぎ奉る、私を救ひ給へ。爾ましまさずば、この憐れな私、何を爲すことできるだらう、何處に行くのであるだらう。

されど此の不幸の中にも、主よ、私に許して忍耐せさせたまへ。

私の神よ、私を助けたまへ。さらば患苦は如何に重きとも之を恐れることないだらう。

二

而も、この間にあつて何を私の言ふべきや。主よ、「爾の聖旨のままに爲し給へ」、(馬太傳、六ノ四二)惱むも苦むも、私の正しき値であるのである。

されば私は忍ばねばならぬ、嵐の過去つてそして空の晴渡るまで、願くは之を立派に忍びたや。』

只、慈悲に富みます私の神よ、爾の御手は全能でおはします、そして曾て屢ば私に爲し給ひし如く、亦私が全く倒れ果てぬため、此の誘惑をも私より取去りて、又その荒ぶる猛威を和らげることでき給ふ。

そして、困難私に增せば增すほど、この「いと高き者の右の手の變化」(詩篇、七六ノ一一拉丁譯)は、益々爾

に容易であるのである。

第三十章

神の御救を祈求し又聖寵の再授を信ずること

一

子よ、「我は主にして患難の時に力を與ふるなり」。（拿鴻書、一ノ七）汝に事順ならざる時は我に來れ。

是れ、汝が祈禱に向ふに遲疑するからで、卽ち天的慰安が最も障碍を受けるのである。

して、汝が熱心に我に求むるまへ、既に多くの慰安を汝は探して、そして外物もつて己れを樂ませる故である。

故に、汝が我は「我に望むものの救であり」、（集會書五ノ十）我を措いては強固の援助なく、有益の謀議なく、又長久の治術もないと悟るそれまでは、何事も殆ど汝に裨益する所ないのである。

されど、今は嵐は過ぎ去つたのだ、汝の元氣を取戻し、そしてわが憐憫の光明に浴して復新になれ。是れ、主は言ひ給ふ、「我は汝の側にあるべし」。（詩篇、九一ノ一五）寧にその全部のみでない、饒多に豐富に、一切を汝に回復させんためであると。

二

「我に爲し能はざること何かあるや」。（エレミア書、三二ノ二七）或は、あの語りて行はざる者と我は同じであるべきや。

「汝の信仰いづくにあるや」。（路可傳、八ノ二五）常に剛毅であれ、不撓であれ。堅忍なれよ、勇者なれよ。その時到らば、慰安は汝に來るだらう。

我を待望め、待望め、我「行きて醫すべし」。（馬太傳、八ノ七）

汝をなやますものは誘惑である、そして汝を威すものは根もなき恐怖である。

未然の出來事を心配して、それが何を齎すのである、只自ら憂ひを憂ひに重ねるのみではないか。

「一日の苦勞は一日にて足れり」。（馬太傳、六ノ三四）である。

未然の出來事に煩悶し又欣喜するは、愚かで又無益である。多分は杞憂であり、又は糠喜びであるだらう。

三

されど、人間斯やうな想像に兎角瞞される、そして斯く敵魔の暗示に誘はれ易いのは、これその心の小弱な證徴である。

なぜなら、惡魔が汝をだまし又陷れるには、それを眞事でするか虛事でするか、又は汝を打倒すには、それを目前の情愛に依らせるか、未然の恐怖に依らせるか、その手段を擇ばないからである。

だから、「汝の心を騷がすな、また恐るるな」。（約翰傳、一四ノ二七）我を信じ、そして「我」の慈悲「に賴りたのめ」。（徹言、三ノ五）

汝が我より遠ざかつたと考へる時、我は往々尚更に汝に接近してゐるのである。汝が殆ど全く倒れたと思ふ時、その時一層功績示す利得が往々控へて居るのである。物事自分の逆に起つた時でも、必ずしも萬事休したのではないのである。で、汝はその目前の感じでのみ判斷してはならぬ。又如何なる困難どこから來たらうとも、之に泥んで、そしてもう脫出る希望が全く取去られた如く思做してはならぬ。

四

或は暫時汝に何かの患難を與へることがある、或は汝の欲する慰安を奪取ることがある。さりとて汝はそれを全然棄てられたと考へるな、却てさうして「天の御國」（使徒行傳、一四ノ二二）へ連行かれるのである。

艱難もつて鍛錬されるのは、萬事が意のままに行くよりも、却て汝と及び他の我が僕たちに、屹度もつと有益であるのである。

我は隱れた考へを知つて居る、で、時々汝が味氣なく棄てられるのも、汝が、怕らく成功博して高ぶる心を起したり、又は無である自分を何かの如くに已惚れたりすることないためで、それが汝の救に大いに益をなすのである。

我の與へたものは我が取去ることができる、又我の意に適した時亦之を與へ返すことができる。

五

我が與へた時でも尚我のものである、そして取返したとて汝のものを取るのでない、「すべての善き賜物とすべての全き賜物とは」（雅各書、一ノ一七）我がものなればである。

汝にどんな患難を與へ、どんな逆境に汝を置かうとも、それを怨むことをするな、又は「汝の心を落させるな」。（サムエル前書、一七ノ三二）

我はすぐ汝を支持することができる、又汝の苦痛をみな歡喜と變らせることができる。汝に對して與く爲す時でも、我はなほ正義であつて、そして大いに稱美されべきである。

六

もし汝の智慧が誤らず、見ること亦正しくあるならば、汝艱難に出會つたとてそれをそんなに落膽して悲む筈ない、却て歡喜して感謝すべきである。

然り、悲哀を以て汝を苦め、そして容赦しないのを、汝は却て之を殊更にうれしき事と思做せ。（ヨブ記、六ノ一〇）

「父の我を愛し給ひし如く、我も汝らを愛するなり」（約翰傳、一五ノ九）と我は愛する弟子たちに言うた。而も我は之を遺はした、この世に歡喜を享けんためでなく、大なる戰鬪に當らしめんためであつた、名譽をうけん爲めでなく、侮辱に逢はしめんためであつた、逸樂に耽らんためでなく、勞苦にいそしましめんためであつた、又休息に安んぜんためでなく、艱苦の中に多くの果實を結ばしめんためであつた。我が子よ、此等の言葉を記憶せよ。（路可傳、八ノ一五）

第三十一章

造物主を見出し得んために造られたる物は一切之を無視すべきこと

一

主よ、もし誰人も何物も一切私を碍げ得ないその域にまで私の達せねばならぬなら、私は尚この上の聖寵を確かに必要とするのである。

是れ、何物かが私を引留めてる限り、私はいつまでも自由に爾に翔り行けない故である。

「誰か我に鴿の翼を與ふる者ぞ、さらば我は飛行きて安息を得ん」（詩篇、五ノ六）と。之を言つた者、これ爾に自由に飛行かんと思ひ焦れたのである。

神に向けられる純眞なる眼以上、何物かもつと安靜であるだらう。地上の何物にも望を措かない事以上、何事かもつと自由であるだらう。

この故に、人はあらゆる萬物を超越し、又完全に己れ自身を棄絶して、そして絶頂法悦の心狀に立ちて爾を仰ぎ、爾は是れ萬物の造主にましまして、その萬物何等爾に肖似るはなきを見ねばならぬ。

又、人はすべて造られた有形の物より解脫せられない限り、自由にその心を神的な事に向けることできないのである。

で、凡そ世に瞑想深思な人の稀なるは、卽ち己れを能くその死滅すべき有形な物より脫離させること、之を知る者稀なる故である。

二

而も、之を爲すには大なる聖寵が要せられる、これ靈を向上させ、又己れ以上に超越せしむる所以である。

又、人もしその心靈向上されて、すべての有形の物より解放され、そして神と全然合一するでない限り、假令何を識らうとも或は何を有たうとも、それは敢て之に重きをなさしめない。

ただ唯一の絶大者、永遠の善美者を措いて、何なりと他の者を大なりと思做すならば、その人は長久に微小なものであつて、下界に滅びて了ふであらう。

なぜなら、神でないものは、どんなものでも、皆空無である、そして空無として考へられねばならぬ。

天の光で照らされた、そして神に敬虔な人の明智と、强覽で博學な教職者たちの知識とは、そこに大なる軒輊がある。

神の感應より出て天より滴下した知識は、人間の才能で刻苦して獲られたものよりも、遙かにもつと高貴である。

三

瞑想を望む者は澤山にある、而も之に要求される事を實行しようと努めない。

殊に形象や外的な事物に拘泥せられて、そして完全な自己抑壓を等閑にするは、是れ大なる障碍である。

本當に、私共は靈的な人だとして見られてる。然るに斯くも消行く詰らぬ事物にのみ力を勞し氣

を痛め、そして自分の内的な事を考へて、之に心力を注ぐを殆どしない。抑も如何なる靈に導かれてゐるのだらう、何を目的としてゐるのだらう、自分ながらも知らないのである。

四

あな、或は暫時心を集注する、忽ち外に氣が反れて、そして自分の仕業を嚴密に考覈することない。

何處に自分の愛情向つて居るか、それに氣を留めもしない。又すべてが如何に不純であるか、それを歎きもしない。

「まこと、世の人みなその道をみだしたれば」、(創世記、六ノ一二)そのゆゑにこそ大なる洪水は來たのである。

で、私共の內的愛情が甚く腐敗するや、必然行爲も亦墮落するのであつて、卽ち內的の强健が缺乏した證據である。

潔い心から善なる生涯の果が生ずるのである。

五

誰がどんなことを仕たかを私共尋ねたがる。けれ共どんな德心もつてそれを仕たかは穿勝考へない。

或は强者であつたか、富者であつたか、美しかつたか、上手であつたか、能書であつたか、美聲であつたか、又は能く働いたか、それらは好く研究される。けれ共如何にその心が謙遜であつたか、如何に堅忍で柔和であつたか、如何に敬虔で靈的であつたか、そやうな事は多く默過される。

互に外部の事に眼を着けるは人の自然の性である、けれ共眼を內的に向はしめるは、これ聖寵による。

前者は、されど、往々失望させられる。けれども後者は神にその望を置く、故に欺かれることない。

第三十二章

己れを棄て又すべての情慾を絶つこと

一

子よ、もし全然に「自分を棄ててしまふ」(馬太傳、一六ノ二四)でないならば、汝は完全な自由を有たれない。

すべて、その所有と及び己れ自身とを愛する者、貪婪なる者、好奇なる者、又は怠忙として奔走これ事とし、常に安樂を求めて「耶蘇基督の事を求めない」、(ピリピ書、二ノ二一)而も往々砂上の建築に營營たる者、此等は皆その靈を桎梏せられて居るのである。

是れ、神より出たのでないものは、みな滅ぶるのである故である。

「すべてを棄て去れ、さすればすべてを見出すだらう、情慾を棄てて了へ、さすれば安息を得る

だらう」。卽ちこの短い而も不磨なる格言、之を好く心に藏つて置け。之を反覆精思して、そして行ひ遂げたその時に、汝は一切を理會するのである。

二

主よ、之は一日の業でない、又小供たちの遊戲でない。然り、此の簡單の言の中に、私共修道者のすべての完全が含まれてる。

子よ、汝、完全なる者たちの道を聽いて、或は回避し、或は忽ちに挫折してはならぬ、而も一層に高きに向つて勇進せよ、或は少くも之に向つて望むらくは汝にも亦然あれかしや、そして汝が自分を愛するにあらず、只我と及び我が汝に父として示したその者との命をひたすらに守るやう、そこに汝の達することのできよかし。その時汝は本當に我が意に適ふ者と爲り、汝の全生涯を歡喜と平和とに於て渡るであるだらう。されど汝になほ棄てべきものが澤山ある、それを我のために諦らめて了ふでないならば、到底汝の要するものを獲られまい。

「我汝に勸む、なんぢ我より火にて煉りたる金を買ひて富め」。（默示錄、三ノ一八）是れ卽ち、すべての下界の物を蹂躙する天的の智識を言ふのである。

そして、すべての地的の智識や、又は他人乃至自分に媚びんとする考へを斥けよ。

我は汝に、世の貴しとし高しとする事物を棄てて、却てその賤しとして輕蔑するものを買へと言つたのだ。

まこと、天的の智識は、自分でその高きを知らない、又地上で大きくされるを求めない、それで世の中では極めて詰らぬ小さいものとせられ、殆ど全く忘却されて了ふ。只多くの人はその口のみを以ては隨分稱揚しないでない、而もその生活に於ては遠く相違するのである。して之が卽ち、「多くの人より蔽されてる價高き眞珠である」（馬太傳、一三ノ四六）のである。

第三十三章

心は變り易し、依て窮極は神をのみ目的とすべきこと

一

子よ、汝の感情に信賴しようとするな。今あるもの忽ちに變つて別なるものとなるだらう。

汝が生きてる間は、嫌でも變化は仕方がない、今の歡喜は忽ち煩悶となつて、又熟心は冷淡に、勉勵は懶惰に、そして憂鬱であつたものが快活となるのも、往々然りである。

されど深く精く靈の智識に達した人は、此樣な變化の上に立つのである、そして何を自分が感ずるか、或は常ない風のどの方角から吹來るか、そやうな事には頓着しない、只一の必須なる、而も最も自分の望を寄せる窮極の目的に向てその全心を注ぐのである。

で、その人は、全く雜然たる出來事の中にも、その目的一徹の純なる眼を絶えず我に向はしめ、

そして斯うして、單一に、同一に、又搖がずに不變なることできるのである。

二

汝のその目的凝視の眼が純潔であればあるほど、汝は益々恆心もつて此の人生の雜多な風雨の中を押行くことができるだらう。

されど純潔であるべきその目的が、多くの人に於て暗むのである。

忽ち之に見取られるからである。

然り、全く利己と云ふ汚點が心にない人は稀である。

昔し、ユダヤ人たちベタニアにあるマルタとマリアとの所に來た、啻に耶蘇のためのみでなくて亦ラザロを看んためであつた。（約翰傳、一二ノ九及ビ一二ノ九）

それ故に、目的凝視の眼は純潔なるべきである。卽ち專一に眞直に、他の雜多な障碍を一切に無視して、ひたすら我にのみ向けらるべきである。

第三十四章

神を愛する者には神はすべてにまさつて又すべてに於て味はるること

一

見よ、私の神よ、私のすべてよ。何を私の更に欲すべき、如何なる幸福此の上なほ私の望み得るや。

嗚呼、なんと「御言」の味好くして甘美なるや、然り、「世をも世にある物をも愛せず」、只「みことば」を愛するその人に取つてである。

私の神よ、私のすべてよ。卽ち此の御言、之を解する者には意味足れりである、又愛する者には幾度繰返すも樂くある。

若しげに爾の在すなら、すべて皆たのしくある。

爾は心を安泰ならしめ、又大なる平和と及び嬉々たる歡樂とを與へ給ふ。

爾は私共に一切みな善なるを感ぜしめ、そしてすべてに於て爾を讚美せさせ給ふ。爾を外にしては何物も永く心を悅ばすことの能き得るはない。而も若し之を樂く快く味ふべきであるならば、只爾の聖寵之に加へられ、そして爾の御智慧の調味を以て鹽梅されねばならぬ。

二

爾の甘美を味ふその人には、何物か甘美の味のないだらう。又は爾がその味を與へぬその人には、何の樂むべきものあり得よう。

されど、この世に賢なる者と、及び肉を樂む者と、この兩者は爾の御智慧に缺乏する。前者は畢竟虛妄に了つて、又後者は死して滅ぶるのみであるだらう。

然るに又、この世の事物を輕蔑し、自分の肉慾を抑殺し、そして爾に從はうとする者がある。斯やうな人こそ眞に賢者として認められるので、虛妄を變じて眞理とせられ、又肉を變じて靈とせ

られる故である。

卽ち、その人こそ神を味ひ知つたので、何なりと善事を造られし有形な物に見出すや、之を盡くその造り主なる爾の讃美に歸せしめる。

まこと、造り主と造られし物と、及び天の無始なる光明と人爲で點じた燈光と、之を味ふ樂みや、互に懸隔甚しい、然り、極めて甚しい。

三

嗚呼、天の永久なる光明よ、あらゆる造られし光を皆超越する。願くは上より赫灼の光輝を放ち、て、私のすべての心の奥底に入つて照らし給へ。願くはその力を以て私の靈を淨くし、喜ばし、輝かし、又活かさせて、私をして歡喜に充溢れて爾に縋るを得させたまへ。

爾のみまへに接しまつりて私は滿足し、そして爾が私に「すべてに於てのすべて」（コリント前書、一五ノ二八）となるのである。卽ちその幸福、之を私は待望んで居る。嗚呼、その時のいつ來るのであらう。』その時の到らぬ限り、私には歡喜の滿つることないのである。

然るに、悲いかな、私にはまだ「舊き人」（ロマ書、六ノ六）が生きて居て、全く「十字架に釘けられて」ゐない、又完全に死んで了つてない。

まだ靈に抗して肉慾はげしくその威を振はせ、心の內訌絕間なくして、そして靈の王國に靜謐を得させない。（ガラテヤ書、五ノ一七）

されど、爾は「海の力を左右し、そしてその波の動搖をもしづめ給ふのである、起ちて私をたすけたまへ」。（詩篇、八九ノ九及ビ四四ノ二六）

四

願くは「たたかひを好む諸の國民を散らさせて」爾の御力もつて之を打碎き給へ。

爾に願ひ奉る、爾の大なるみ業を現はして、爾の右の御手をして榮えあらしめたまへ。私の神よ、只爾に縋りまつるのみ、他には希望も隱れ場も私にはないのである。

第三十五章

此の人生に於ては誘惑より逃るべき保障はあらざること

一

子よ、此の人生には安全決してない、故に生きてる限りは、汝に常に靈の武器が必要である。汝は「敵の中に」（出埃及記、三二ノ二五）住んでゐるので、右よりも左よりも攻立てられる。

故に、汝は忍耐の盾をもつて前後左右みな禦ぐでないならば、永く負傷せずには居られまい。殊更に、汝の心を確と我に措いて、何事も專心我のために忍ばうと覺悟するでないならば、汝はこの激戰を支へ得ず、又あの諸聖者たちの如き勝利も獲ることできぬだらう。

故に、汝、勇敢に萬難を冒して、そして猛然として障害を突破せねばならぬ。

これ、「勝利を得る者にはマナが與へられ」、（默示錄、二ノ一七）そして怠惰な者には不幸が殘されるゆゑである

る。

若しこの生涯で安息を求めるなら、どうして、汝、永遠の安息に達せよう。

二

多く安息を得ようと汝努むるな、只多く忍ぶを以て念とせよ。

眞の平和は、之を地上に求むるな、只天に於てせよ。又人間や他の有形な物に於てするな、惟り神に於てせよ。

神の愛のためには、汝すべての事を悦んで忍ばねばならぬ。即ち勞役、悲歎、誘惑、煩累、憂苦、窮乏、疾病、傷害、誹謗、非難、屈辱、慚愧、懲責、及び悪口、此等である。

此等は汝を助けて德に向はせる、此等は基督の兵卒を試錬する、此等は天の榮冠を作り上げる。

我は汝の短い勞苦のために永遠の褒美を與へ、又暫時の恥辱のために無窮の光榮を酬とする。

三

汝は汝の欲するままに、いつでも靈的慰安が得られると思へるか。

わが聖者たちも常に然くは得られずに、却て多くの艱難と、種々の誘惑と、又大なる悲哀とに惱まされた。

されど、此等の聖者たちは「今の時の苦難はわれらの上に顯れんとする榮光に較ぶるに足らざる」(ロマ書、八ノ一八)を知つて、忍耐して萬の事に辛抱し、そして己れに信頼せず、只神に信頼し奉つた。

さらば汝は、多くの人々が澤山に涙を流し、又大なる苦勞をして、そして辛と贏得たそのものを、

然り、汝はそれをすぐ得ようと思ふのか。

「主を待望め、勇敢であれ、堅固であれ、」(詩篇、二七ノ一四)疑惑するな、落膽するな、而も神の御榮のために絶えず身も魂も差出せよ。

我は豐滿に汝に酬いよう、「我はすべての艱難に於て汝と共にあるだらう」。(詩篇、九一ノ一五)

第三十六章

他人の空なる批判に對すること

一

子よ、汝の心を確と主に置きまつり、そして汝の良心汝を忠誠で又潔白であらしむる限り、決して人間の批判など恐れるな。

汝が斯うして忍耐するは善い事で、又幸福な事である、而も己れに恃まずして神に恃みまつる謙下つた心には、それが決して苦痛でないだらう。

多くの人は口が多過ぎる、それ故殆ど信を措かれない。

されど又すべての人に盡く滿足せられるなと努め、それは出來得ることでない。

保羅も、神にあつてすべての人に悦ばれんと努め、そして「すべての人には凡ての人の狀に從つた」。(コリント前書、九ノ二二)けれ共尚且「人の審判によりて審かれることをいと小さな事として取つた。」(コリント前書、四ノ三)

保羅はあらん限り能ふ限り、他人の教のために救のために懸命に働いた。けれ共時として尚人から非難せられ、輕侮せられることを免かれ得なかつた。

二

で、すべてを知ります神に萬事を委ねて、己れを惡ざまに口にする者や、徒らに己れを誤解する者や、又勝手な噂を言振らす者たちに對し、忍辱して謙遜して以て自ら防衛した。

されど、時としては保羅も辯解したのであるが、自分が緘默してゐて、却て弱い者の躓となるからで、それのないためであつた。

三

「汝いかなる者なれば死ぬべき人をおそるるか」、（イザヤ書、五一ノ一二）今日生きて居る、そして明日は見えなくなつて了ふのである。

神を畏れまつれ、さすれば人の威嚇など恐怖することでできよう。（傳道之書、一二ノ一三）

誰が惡口侮辱したからとて、何を汝にすることでできよう。汝を害せず、むしろ自分を害するのみである、してその人誰であらうとも、神の審判を免れることでできぬだらう。

神を汝常に目の前に置きまつり、そして、ゆめ荒らかの言などして「爭はうとするな」。（テモテ後書、二ノ一四）

よしや、今は汝が屈して、そして自分の値しない恥辱に逢ふことあらうとも、それを殘念に思つたり、又は短氣を起したりして、却て汝の受けべき榮冠を減少させるな。

第三十七章

心の自由を得るために完全に己れを委棄すべきこと

一

子よ、「己れを棄てよ、さらば我を見出さん」。（馬太傳、一六ノ二五）

好惡の擇をするな、又すべて自分の勝手を考へるな、却て愈利得するだらう。

そは、汝が自分を我に捧げて、之を取返さうとしないなら、直ちに聖寵汝に益々加へられる故である。

主よ、幾度爾に私を捧ぐべき、又何事に於て私を棄てべきや。

常に、又すべての時に、又小にも大にもである。我は除外をしない、而もすべてに於て汝が無一物であることを欲するのだ。

若しさうでなく、汝が內にも外にも自分の我念から皆脫却されないなら、どうして汝が我のものと爲り、又我が汝のものと爲ることできようか。

只天に居る我に汝の眼を注げ、我はすべての恥辱や損害を救つて、そして「各人の所爲に應じ、之に報いる」（ロマ書、二ノ六）ことができるのである。

そして、それをすること早いほど、汝に益々善いのであり、又それが周到で眞實であればあるほど、益々我が意に適ふので、又益々多く利得するだらう。

二

或る者は又自分を捧げはする、けれ共それに何か除外がある、是れ神に充分信賴しないからで、それで己れに備へしようと配慮するのである。又或る者は最初一切を提供する、けれ共誘惑に攻立てられると、それを復自分に取戻す、それで少しも德に精進することない。此樣な人々は、まづ全然己れを棄てて、尙毎日自分を犧牲にするでない限り、その心の眞の自由を得、又我と樂く親むその聖寵に達することない。して之なくしては、靈の眞果を結ぶ我との一致成立たない。又永續することない。

二

我は既に幾度か汝に言うた、して「今復之を繰返すのである」。（ガラテヤ書、一ノ九）汝を棄てよ、汝を獻げよ、さらば大なる內的の平和を汝は得るだらう。すべてを得んためにすべてを差出だせ、何物をも要求するな、何物をも返報されようとするな、そして專心に躊躇することなく我にあつて立て。我を汝のものとすることできるだらう。汝の心は自由となつて、闇黑汝を蹂躙することないだらう。さらば、之を勉めよや、之を祈り、之を望んで、すべての自我的私慾より脫却し、そして全く無一物であつた耶蘇に汝亦無一物となつて從へよ。汝の自我に於て死ね、そして我にあつて永遠の生命を得よ。

その時一切の空なる妄想や、汚れた煩惱や、又は餘計な憂慮は消去つて了ふだらう。その時亦過度なる恐怖は跡を絕つて、又濫りな愛情は死滅して了ふだらう。

第三十八章

能く外部を齊へそして危險に於て神に信賴すべきこと

一

子よ、汝が如何なる場所にあり、如何なる仕事を爲し、或は如何なる外界の業務に就くにしても、汝の內心自由であつて、己れ自分の主宰と爲り、萬のもの汝の下に服することないやう、之を汝の目的として熟心に努ノせねばならぬ。して、汝は自分の仕事の主人と爲り、支配者となりて、その僕婢や奴隸でなく、寧ろ神の子供としてその嗣業と自由とを承繼ぐ拘束ない眞の希伯來人の如くになれ。

卽ちその自由な人とは、現在の上に超越して、永遠の事を思索する者である、又左の眼を以て消行く地上の物を眺め、右の眼を以て天の無限を觀る者である。

これ、時間的なる事物に惹付けられて之に縋らうとすることなく、却てすべての事物皆神に由て定められ、又至高の技術者に由て創造せられたものであつて、その御手に成りたる萬物一として

秩序のなきはないとなし、寧ろ之を己れに惹付けて奉仕に利用せんためである。

二

如何なる事柄に臨みても、苟くも外に現はれたるもの、即ち肉の眼に映つて燦爛の光を放ち、若くは耳に聽ゆるものに決して心を惹かれるな、而もすべての場合に於て、摩西と同じく、直ちに幕屋の中に入りて、之を主に諮れ。時として神の御答を汝は聽くだらう。又現在未來に於ける多くの教訓を與へられるだらう。

これ摩西はその疑問不審を解決するために、いつも幕屋に入るを常と爲し、又危險や人間の罪戻より救はれんために、祈禱の助けを得んとして、そこに隱れたのである。

そのやうに、汝も亦汝の心の密室に入りて、神の天助を切に懇願しまつらねばならぬ。

之に就ても、私共は如何にヨシアとイスラエルの子たちがギベオン人に欺かれたかを讀むものではないか。是れ最初に「主の御口」(ヨシア記、九ノ一四)を問ふことをせずして、全く詐りの言を信じ、そして敵の詭計に欺かれたと言ふのである。

第三十九章

人はその仕事に焦るべからざること

一

子よ、我に常に汝の事件を委ねて了へ。その時來らば、之を我は適宜に扱ふだらう。我の如何に處理するかを待て、そしてそれが汝の利益であると知るだらう。

主よ、私は快くすべての事を盡く爾に委ねまつる。私の焦慮は何等殆ど益するところない故である。

願くは、徒らに未然の出來事に氣を揉むことなく、勇み進んで私を爾の聖旨に任せ奉ることのできたしや。

二

子よ、人は何かその望む事あれば、之が爲めには往々烈くその精力を傾倒する。けれ共、一度之が遂げられれば、心は他に變り始めるのである。愛情は一事に絡つて永續するものでない、むしろ此より彼へと押移るからである。

だから、極めて些細の事にでも、己れを棄てるのはなかなか些細な事でないのである。

三

己れを棄却するは、眞にその人の進歩である、そしてその己れを棄却した人は、甚だ自由で又安全である。

されど、昔ながらの敵魔はすべての善に反對して、誘惑を止めることない。而もその欺妄の罠を以て若しや無思慮なものを陷れることできないかと、日夜にその奸譎な惡計をめぐらしてゐるのである。

主は言ひたまふ、「誘惑に陥らぬやう目を醒し且祈れ」（馬太傳、六ノ四一）と。

第四十章

人には本來一善なく又何等誇る能はざること

一

「主よ、世人はいかなるものなれば、之を聖念にとめ給ふや、人の子はいかなる者なれば、これを顧みたまふや」。（詩篇、八ノ四）

人は何の功績あつて、之に爾は聖寵を降したまふのであるだらう。

主よ、爾がもし私を棄て給ふとも、何を私は訴へることできるだらう。或は私の祈る事爾の之を爲し給はずとも、何の抗議を私の挿むことできるだらう。

本當に、私の考へ又言ひ得ること正に是である、「主よ私は何でもない、何も爲し得ない、何の善きもの私にある事ない、只全てに不完であつて、絶えず空無に歸せんとするのみである」と。で、もし爾の聖助を仰いで、内心啓發せられるでないならば、私は全然信仰冷却した、又熱心弛んだものとなつて了ふだらう。

二

されど、主よ、「爾は常に變ることない」、（詩篇、一〇一ノ二七）絶えず永遠にましまして、いつも善であり、義であり、又聖であり給ふ。して善と義と聖とを以てすべてを行ひ、又聖智を以て之を處理し給ふ。

然るに私、進歩は思ひきや、寧ろ退歩に傾いて、しかも常に同一の狀態に留まることない、既に「七の時私の上に變化した」（ダニエル書、四ノ一三）のである。

されど若し、爾の聖意に適ひて聖助の御手を打延し給ふなら、私は忽ち改善するのである。然り、只爾のみ人力を借らずして私を助け得、又私を萬事に強めることでき給ふ。して之に依て私は復意志を種々に動搖されることなく、而も爾に專ら心を向はせて、そして安泰なることできるのである。

三

此の故に、或は信念圓熟したとも仕よう、或は人間私に安慰を與ふる者ない故に、餘儀なく驅られて爾を求めるのでもあるだらう、その孰に依るにせよ、若し私が能くすべての人間的慰安を棄去ることを知るならば。

その時私は正當に爾の聖寵に與かるの望を抱き、又新な慰安を賜はりて、之に歡喜するを得るだらう。

四

爾に感謝し奉る、いつにてもすべて善い事私に起るなら、それは皆爾より來る故である。

然るに私は爾の「み前に於て空なるもの」、（詩篇、九ノ五、三）また無なるものである、又常ない弱い人間であるのである。

で、何を私は誇れよう、どうして他人の評判得んなどと貪らう。それが無なるが故であるか、然り、最も空なる事である。げに虚榮の心は悪疫である、最大の空事である。これ眞の光榮を奪取り、又天の恩寵を剝去る故である。

まこと、人が己れに滿足すれば爾の聖意に忤ふのである、又人間の稱讃に亜涎すれば、卽ち眞の德より離れるのである。

五

されど眞の光榮と聖なる欣躍とは、人その自我にでない、爾にありて誇るにある、己れの德にでない、爾の御名にありて喜ぶにある、又只爾の爲め以外、他の造られた物にありて決して樂みとせざるにある。

私の名ではない、爾の御名をして崇められしめよ。私の仕業ではない、爾の仕業をして讃へられしめよ。爾の聖なる御名こそ祝福すべきかな。されど人よりの讃美は一も私にあらしむな。爾は私の誇であり給ふ、爾は「私の心の欣躍」（詩篇、九ノ二一一）でありたまふ。爾にありて私は終日誇り且欣ぶだらう。「私のためには只私の弱きことの外、何も誇るべきはないのである」。（コリント後書、一二ノ五）

六

「相互の榮譽」（約翰傳、五ノ四〇）は猶太人これを求めるだらう。私は唯一の神より出るものをこそ願はし

や。

あらゆる人間の光榮や、あらゆる浮世の名譽や、又はあらゆる俗界の爵位など、之を永遠なる爾の光榮に較ぶるなら、皆空である、愚妄である。

嗚呼、私の眞埋であり、又仁慈であります私の神よ、又聖なる三位一體よ。讃美と譽と德と榮と、千代の八千代のとこしへまで、獨り爾にのみあらしめよ。

第四十一章

浮世の名譽は皆之を輕蔑すべきこと

一

子よ、若し他人が崇められ、また高められ、而も自分は賤められ卑められるを見るとても、汝その氣にするな。

天にある我に向て汝の心を擧げよ、さすれば地上の人の輕蔑など汝を悲ませることないだらう。」

主よ、私共は盲である、そして虚榮の故に忽ち釣込まれる。

若し正しく自ら反省するならば、諸物何ものよりも毛頭傷害が私に與へられたのでない、故に爾に對して訴ふべき何等正しき理由は私にないのである。

されど、私は屢ば大なる罪を爾に犯したのだ、それでその故に、天地萬物みな私に向て武器を執るのである。

で、恥辱と輕侮と私には至當である、されど譽れと尊貴とは爾にあれ。

そして若し私が、すべての世のものより輕蔑せられ見捨てられ、又全く無視せられて、それで之を甘受するやう覺悟ができて居ないなら、私は内心平和と安定とを與へられることないだらう、又靈的に照らされて、そして充分に爾と合一せしめられることないだらう。

第四十二章

平和は人間に置かれぬこと

一

子よ、汝が誰かの人を自分と氣が合つたとか、又は一緒に居たとか云ふその理由で親くし、そして之に平和を置くならば、それは永續しないで、却て縺れとなるだらう。

けれ共、汝が恆久不變な眞理に向て平和を置くならば、假令友人去るとても或は死ぬとても、それが汝を悲ませることないだらう。

我に於てのみ親き友誼も存在すべきである。そして此の人生に、誰を汝が良友とし、或は大事な知己とするとても、之を只我に於てのみ愛すべきであらしめよ。

我を外にしては如何なる友誼も値ない、又永續することない、そして我の結んだでない愛情に、

決して眞なる又純なるものある筈ない。

で、その如き此世からなる愛着には、汝死んで了はねばならぬ。

限り、汝はすべての交際全く無くなるやうせねばならぬ。

人はあらゆる地上の慰安を遠く離れば離るほど、益々神に接近するのである。

又、益々深く降下して自分で賤くなればなる程、それ丈高く神へ上昇するのである。

二

誰でも何か善事を以て己れに歸する者あらば、その人は神の聖寵の己れに來るを妨害するのである、これ御靈の聖寵は常に謙遜なる心を求めてゐたまふ故である。

若し己れを絶滅させ、そしてあらゆる有形物的愛情を盡く掃去することを汝知るならば、その時我は汝の中に大なる聖寵もつて溢れしめるだらう。

されど汝が眼をなにかの有形な物に注ぐなら、その時その造り主のみ顏は引込まされて了ふだらう。

汝、造り主のためにすべてに打克つことを學ぶべし、然らば汝は神の知識に達することができるだらう。

如何にその物微小であらうとも、若し汝が妄りに之を愛し、又之に目を惹かれるなら、汝は至高の靈域に入るを妨げられ、否、却て惡に陷るに至るだらう。

第四十三章

空なる世の知識を卑むべきこと

一

子よ、人の言辭は美いとて巧みだとて、それに汝動かされるな。「言辭に神の國はあるのでなくて、能力にあるのである」。（コリント前書、四ノ二〇）

我の言辭を聽け。汝の心を燃し、汝の靈を照らし、又汝の痛悔を致さしめ、汝に種々の慰安を與へるのである。

苟且にも學者を衒はう、智者を誇らうとして、我の書を讀むな。

汝の惡念を矯めんことを主眼とせよ。幾多の難問を曉るにまさつて、汝にはるかにもつと益である。

二

多く讀んで又識つた時も、汝は之を必ず一の本源に歸させねばならぬ。

「人に智識を敎ふる者」（詩篇、九四ノ一〇）は我であつて、人間敎ふることできない明るい理解を我は子供らにも授け得る。

我の言を聽けば、明智忽ちその人に披けて、靈に於て多大の進歩をするだらう。

されど、あな、徒らに人間の知識に汲々とし、そして我に奉事する道に殆どいそしまない者がある、その人は詛ふべし。

やがては師の師である、天の使の主なる基督の現れて、すべての人の課業を聽取り給ふだらう、卽ち人銘々の良心を審査し給ふので、してその時は來るのである。

「その時燈を以てエルサレムの中を尋ね」（ゼパニア書、一ノ一二）給ふであらう、そして「闇にある隱れたる事」は明かにせられ、又口舌もつてする議論は沈默して了ふだらう。（コリント前書、四ノ五）

三

謙下る心を瞬く間に高める者は我である、そして之が能く永遠なる眞理の奥義を理解すること十年の日月學事の功を積むにも勝るだらう。

我の敎ふるのは、言葉を響かせてするのでない、又議論を鬪はさせてするのでない、意見を錯綜させてするのでない、名譽の心を刺戟させてするのでない。

我の敎ふる事とは、卽ち地上を輕んじ、現世を嫌ひ、永遠を求めて之を味ひ、名譽を避け、侮辱を忍び、希望をすべて我に措いて、我より外のものは何をも心とせず、そしてすべてにまさつて熱烈に我を愛せしむるにある。

四

玆に或人あつて、深く我を愛し、之に依て神の事に通曉して、そして不思議の事を語つた、而もその人が斯く進歩したるのは、之が幽玄な學問したるに由るのでなく、却て世のすべての物を棄てたに由るのである。

されど我は、或者には普通の事を語り、或者には特異な事を語る、又或者には表徴や形象で氣持

好く現はれる、そして又或者には多くの光明に包まれた神祕を以て啓示する。書物の語る所は一である、けれ共一様にはすべての人を教へない。我は人の心にあつて、その眞理の教師である、思想を識別する者である、行動を刺戟する者である。要するに、我の正しと思ふ所に從つて、人銘々に我の賜物を分賦する者なる故である。

第四十四章

外物に執着するを愼むべきこと

一

子よ、汝須く多くの事に於ては無知であり、そして地上にあつては「萬の事に己れは死にたる者」、（コロサイ書、三ノ三）又己れに取つては「世はみな十字架に釘けられたるもの」（ガラテア書、六ノ一四）として考ふべきである。

尙多くの事は、之を汝は聾者として聽流し、そしてもつと汝の平和に關する事を思はねばならぬ。『汝に不快な事からは眼をそむけ、そして人を各々その意見のままに委ねるは、是れ汝が徒らに議論に沒頭するよりも有益な事である。

汝が若し神と和らいで居り、そしてその御審判に目を向けてゐるならば、假令汝が負けたとて、之を忍ぶは容易であるだらう。

二

嗚呼、主よ、此の狀何たることぞ、見よ、此世的なる損失を悲みなげいて、些細な利得のために遑々勤勞する、而も靈に受ける損失はぢきに忘れて了つて、そして殆ど氣にも留めない。詰らない、又何の益だもない事にはその全心を込めて、そして絶頂必要な事を等閑にして放擲する、全人間が外物に沈み切つた故で、速かに反省するでないならば、甘んじてその中に塗れて了ふだらう。

第四十五章

すべての人信ずべからずして言は間違ひやすきこと

一

主よ、「願くは助けをわれに與へて、患難に向はしめたまへ、人の助けは空しき故である」。（詩篇、六〇ノ一二）幾度ぞ、私の期待したその所に、私は信義を見失つたことであるだらう。又、思ひも寄らぬその所に之を見出したのも、亦幾度であるだらう。だから、人に望むのは空である。されど、「神よ、義しき者の救は爾にある」。（詩篇、三七ノ三九）主なる、私の神よ、すべて私共にある出來事に於て、爾は讃美すべきかな。私共は脆くして又恆心ない、そして忽ちに欺かれ、又變化され易い。

二

すべてに於て自ら守る能く愼重周到で、そして欺妄困惑如何なるものにも未だ曾て逢つたことな

い人「誰なるや」。(詩篇、五ノ二)
されど、主よ、爾に信頼して、そして純なる心をもつて爾を求むる者、即ちその人は容易に倒れることないのである。
そして若し、何かの患難に陥り、又はどんな状態に絡まるとも、その人は爾に依て直ちに救出され、或は爾より慰安を得るのである。爾は爾に希望を措く者を最後まで決して見棄て給はぬ故である。(詩篇、六ノ二、八)
あらゆる苦難に苛められてるその友人に、始終その情誼を渝へない信義な人は、げに稀である。』然るに、主よ、只爾のみすべての場合に於て、最も忠實であり給ふ、そして爾の如きは他にあることない。

三

「私の心は安固である、基を基督に据あられて居る」(聖アガダは紀元二五一年殉教す)と。嗚呼、之を言うたあの聖女のなんと賢明であつたことよ。
もし私にもさうであるならば、私が斯く容易に人を怖るる念に惱まされることないだらう、又非難誹謗の矢丸に攻められても動くことはないだらう。だれか克く未來の災禍を豫防することできるだらう。
豫知した事さへ往々害傷を與へるならば、まして豫知しない事、尚更でなくつてどうだらう。

然るに、此の哀れな自分に、なぜ私はもつと好く豫知して置かなかつたらう、なぜ斯くも輕々に他人に信頼したのだらう。
されど、私共は人間だ、然り、假令世からは天使ともして尊ばれ又言はれよう、けれ共やつぱり私共は弱い人間に過ぎないのである。
誰に、主よ、誰に信頼すべき、只爾にのみである、爾は眞理でおはします、爾は欺き給はない、又欺き給ふことあり得ない。
然るに、之に反して「すべての人は虚僞者である、」(詩篇、一一六ノ一一)薄志で、弱行で、又間違ひ易い、殊に言に於て最も然りである。故に一見さもあるべしと思はれるその言にも、うつかり信を措かれべきでないのである。

四

「人々に心せよ」、(馬太傳一〇ノ一七)又「人の仇はその家のものなるべし」、或は「見よ此處にあり彼處にありと云ふ者ありとも信ずるな」、(ミカ書七ノ六)と。なんと意味ある警戒の御言であるのだらう。
自ら痛事嘗めて私は教へられた。願くは之より益々愼重を加へて、そして「愚かな昔の私に返ることのなきもがな」。(馬太傳四ノ二三)
或人私に告げて言つた、謹みてつつしみて自分の語る事之を私に守つて居よと。で、私は默つて居た、又祕密はそのままであつたことと信じて居た。然るに思ひきや、その人は自分が默つて居よと願つたそのことを、却て自ら默らなかつた。そして私と自分とを忽ちに裏切つて行つて了つ

た。（詩篇、（拉丁譯）二一ノ三）

願くは、主よ、「私を護つて」、（詩篇、一七ノ八）復と此樣な虚僞なる不埒な人に逢はさせるな。私をしてその手中に陷らせるな、又自分が決してそ樣な事行はぬやうせさせ給へ。

私の口には只信義渝らぬ言のみあつて、そしてうはべを飾る上手な舌は之を私より遠ざけたまはれや。

人より受けるを好まぬ事は、亦私よりも決して與へぬやうせねばならぬ。

五

嗚呼、如何にこの事善にして、又平和を與へる業だらう、即ち他人の事には默して、すべてを妄りに信じない、又容易に外のうはさをしやべらない。

勿論自分のとこには最も口を愼みて、常に隱れた心を臠はす爾を求め、「決してさまざまの言の風に吹廻はされずして」、（エペソ書、四ノ一四）只爾の聖旨の善となし給ふそのままに、内にも外にも、すべてが遂行せられるやう願ふその事である。

又人目に觸れることは之を避け、或は外部の聲譽齎らずと見ゆる如きは之を求めずに、而も只此の生の改善と熱心とを致すため汲々全力を傾注するならば、その事如何に私共が天の聖寵を保有するに安全なのであるだらう。

六

その德人に知られ、又はその稱讚餘りに早過ぎて、それがため却て害を受けた者の如何に多くあつたらう。

この脆い人生、是れ全く誘惑と「戰鬪」（ヨブ書、七ノ一）とのみである、而もその中に緘默もつて聖寵を保持するは、如何にげに有益な事であるだらう。

第四十六章

言語の矢丸に攻められた時は神に信頼すべき事

一

子よ、搖がずに立ち、そして「我に望め」。（詩篇、三七ノ三）

言語は言語に過ぎないで、何である。空中を飛んで來る、けれ共一箇の石をさへ害し得ないのである。

もし汝が罪あるものであるならば、汝進んで自ら悛めることを思へ。

もし汝の良心疚しくないならば、汝甘んじて之を神のために忍ぶことを考へよ。

汝まだ大きな打擊に耐へることできないのである。時に言語の矢丸を忍ぶなど、全く小さな事である。

然るにその小さな事が、なぜそんなに汝の胸に響くのか、汝がまだ肉的であつて、そして必要以上に人間に泥むのでなくて何である。

即ち人の輕蔑を恐れるから、自分の過失の故に非難せられるのを好まない、それで辯疏の蔭に隱

れようとするのである。

二

けれど、克く自ら省みよ、汝にまだ俗念が取れないで、そして人に悦ばれようとするその空なる愛が存在するのである、之を汝は知らぬだらう。

汝が自分の過失の故に、人に貶され黜されるを恐れるその間は、汝に眞の謙遜なく、汝がまだ本當に世に死なずして、「世が汝のために十字架に釘けられて」（ガラテア書、六ノ一四）居ないのを證明する。

されど我の言辭を聽け、さすれば人よりの言などたとひ幾萬なりとも何の氣に掛ることあるだらう。

見よ、假令如何なる罵詈惡口猛烈に汝に向て放たれるも、若し汝が之を皆聞流して了ふなら、なに、それが藁一本の害をも汝に與へることできないではないか、或は頭の毛の一條も抽き取ることとできないではないか。（馬太傳、一〇ノ三〇）

三

然るに定まつた心が內にない、又神を眼の前に見奉らない、それでその人非難の言に容易に動かされるのである。

されど又、我に信賴して、そして己が判斷で立たうとしないその人は、復人間を恐れることないだらう。

なぜなら、我は審判者である、我はすべての隱れた事を看破する、我はどうして事が起つたか之を識別する、我は害者被害者を共に知悉する。

その言は我より出でたのである、その事は我に許されて起つたのである。（エレミヤ書、二九ノ二三）

顯れんためである」。（ルカ傳、二ノ三五）

我は罪ある者と罪なき者とを審くであらう、さされど豫め祕密の審判に依て之を試さうとしたのである。

四

人間の證言は往々間違ふのである、けれ共我の審判は正しくある、又不變であつて、また轉覆されることない。

只之が大概隱れてゐて、纔かの人々にのみ知るを許される。それで愚かな者の眼には正確でないと見えるだらう、けれ共それが決して謬らないことあり得ない。

故に、すべて事を審くには、皆我に來るべきである、自分の意見に據つてはならぬ。

神より出た事はそれが何であらうとも「義者」は之に「惑亂せられない」。假令それが不當であつて己れに不利を來さうとも、之を敢て心に留めない。

さりとて又、それが他人に依り正理に辯護せられたとて、徒らに躍り欣ぶこと決してない。

これ我は人の心と腎とを究めて、顏やその容貌に從つて審くことをしない、故に人が審いて稱むべしと信ずるその者も、我が眼には往々罪すべしとせられる事がある、して之を義者は考へる故である。（詩篇、七ノ九）

主よ、私の神よ、強くして忍び給ふ「正義の審判者よ」、爾は人の脆きと邪惡とを知りたまふ、願くは「私の力」(詩篇、三一ノ二後)であり給へ、又私の全然憑れる所でありたまへ、私の良心私に滿足させない故である。

私の知らざる事、之を爾は知りたまふ、その故にすべての非難に於て私は自ら謙遜し、そして柔順に之を忍ばねばならぬ。

されど、私が之を行はないことある毎に、爾の憐愍もつて私を宥し給へ、そして私がもつと忍耐し得んために、再び聖寵を與へたまへ。

げに、私が徒らに己が正義の念に恃んで、そして自分の眠れる良心を辯護するよりも、むしろ爾の豐かな御慈悲に訴へて、その寛大なる容赦をねがひまつることこそ、私に取つてもつと良いのである。

よし、私が「自ら責むべき所あるを覺えぬ」(コリント前書、四ノ四)とて、それで己れを私は義きものとはなし得ない。若し爾の御慈悲が去つて了ふなら、「生けるもの一人だに爾の御まへに義とせられるはないだらう」。(詩篇、一四三ノ二)

第四十七章

永遠の生命のためにすべての患難を忍ぶべきこと

一

子よ、我がために汝の負うたその勞苦、汝を挫折せしむるな、又患難汝を沮喪せしむるな。只我の約束、すべての出來事に於て汝を強め、又汝に慰安を與へるだらう。

我に洪大無邊の力がある、能く汝に酬い得るのである。

いつまでも此の世で勞苦することないだらう、又常に悲歎に沈み居ることないだらう。

待てよ暫しぞ。やがて汝の不幸は終りを告げるだらう。

一つの時が來るのである、その時すべての勞苦と艱難と終息するだらう。

して、時と共に過行くものは、皆泡沫である、夢幻である。

二

汝の仕事にいそしめよ、そして忠實に「我の葡萄畠にて働け」(馬太傳、二〇ノ八)「さらば我汝の報酬となるだらう」。(創世記、一五ノ一)

書いて、讀んで、歎いて、默して、祈つて、そして勇敢に辛苦な事に耐へ切れよ。永遠の生命は、げに此等の戰鬪を、否、もつと大きな戰鬪をも凌ぐ値がある。

主の知り給ふ一つの日に平和は來るだらう、その時即ち今の此の世の如き晝と夜とはなくなつて、只不斷の光明、無限の照灼、堅固の平和と、又安泰なる休息とがあるだらう。

「噫、此の死の體より我を救はん者は誰ぞ」(ロマ書、七ノ二四)と、併しその時、汝はもはや此言を發することないだらう。又「禍ひなるかな、我の宿は長引けり」(詩篇、一二〇ノ五)と、之も亦汝叫ぶことないだ

らう。「死は投倒されて」、疾病その跡を斷ち、憂悶は消滅して、只歡喜に躍る慶福と樂しき又うららかなる天の交りとあらん故である。（イザヤ書、二五ノ八、）

三

嗚呼、本當にあの昔、この世にあつて輕蔑せられ、そしてその生命さへ生き甲斐なしと思はれた る聖者たちが、今や輝く榮えに躍り欣んで、天の不朽の冠冕戴いてるそのさま、もし汝之を見るならば、確かに汝は謙遜して地にまでも跪き、そして假令一人になりともその上に立たうなどとは、あなおろか、むしろすべての人の下に己れも屈せんと願ひ望むに至るだらう。尙又この人生の快樂貪る心を斷ちて、只神の爲めに患苦を忍ぶを歡喜と爲し、そして人の世の間には全く無視せられるを、却て己れの最大利得と思做すだらう。

四

もし之が汝に味はれ、そして深く心に浸徹するならば、噫、どうして汝が一度なりとも懶へることの聽かれよう。

永遠の生命のためには、一切の苦勞も耐へられべきではないかしら。

神の王國を失ふか獲るかである、之は決して小事でない。

故に、汝の顏を擧げて天を仰ぎ、そして我と及び我と共に居るすべての聖者たちとを見よ、此等これ此の世にあつて大なる苦鬪を經たものである、而も今は歡喜に溢れて居る、今は慰安されて居る、今は安全である、今は休息しつつある、そして無窮に我と共に我が父の御國にあつて住み續けるであるだらう。

第四十八章

永遠の日と此の人生の苦惱とのこと

一

嗚呼、いと高きにある神の都の至福なる住居かな。嗚呼、永遠の光明極度に灼くその日かな。夜は復閣も て包むことないだらう、而も至上の眞理は常に照り渡つて、長へに歡樂漲り、長へに安泰滿ち、そしてその狀態復逆轉變化することと決してないだらう。

嗚呼、願くはその日の明渡つて、すべての此の浮世の事皆終息を告げまほし。

而も、その光の日の中に、諸聖徒たちは永久に照り映えて榮え輝いてる。そして此の地上にさまよふ私共は、只之を恰も「鏡をもて見る如く」（コリント前書、一三ノ一二、）遙か遠くより眺めるのみである。

二

此等の天の住民たちは、如何にそこで樂しいかを知つて居る。然るに私共エバの子孫の流浪者は、ここで苦しい事辛い事に呻いて居る。

此の世に於ての日は「短くして惡し」、（創世記、四七ノ九、）悲哀と憂懼とに充ちて居る、そして人は多くの罪惡に汚される、多くの情慾に動かされる、多くの恐怖に困められる、多くの亂慮に惱まされる、多くの好奇に惑はされる、多くの虛妄に絡まれる、多くの誤謬に圍まれる、多くの勞苦に疲らせ

られる、誘惑に責められる、快樂に弱められる、或は窮乏に窘まれる。

三

嗚呼、いつ此等の苦難のときは終るだらう、いつ此の惡の奴隷の悲慘な狀態より解放されるだらう。

いつ、主よ、私は爾にのみ思を凝らせるだらう。いつ爾にあつて歡喜に溢れるだらう。いつすべての障害なくなつて、眞の自由になれるだらう。又心に體にすべての苦勞がなくなるのであるだらう。

いつ、鞏固な平和があるだらう、搖がぬ平和があるだらう、內にも外にも涉る平和があるだらう、すべての方面皆安泰な平和があるだらう。

仁愛富みます耶蘇よ、いつ私は立ちて爾を見奉ることできるだらう。いつ爾の御國の榮を私は觀思することできるだらう、いつ私に「すべてのものすべての中にある」（コリント前書、一五ノ二八、）ことできるだらう。

嗚呼、いつ、抑も始めなき永遠このかた爾が愛する者のために備へ置き給ひしその爾の御國に入つて、爾と共に私が居ることできるだらう。

此の地上げに、每日の戰爭と至大の不幸とを見るのである、而も四面敵に圍まれて、私は孤貧流浪の者である。

四

私の流浪を慰め給へ、私の悲痛を和め給へ、私のすべての願は爾に向て寄せられる。此の世が供するすべての慰安は皆私に重荷な故である。

心底、私は爾を歡びまつらんと希望する。けれ共此の世の事物と、私にまだ仕切れない情慾とが、之を天なる事に繋付かんと願つて居る、けれ共未だその域に達せない。

妨害するのである。

すべての事物に打克たうと肚では期してゐる、けれ共意ならずも肉の爲めに強ひられて私は屈服するのである。（ロマ書、七を見よ、）

あな不幸や、斯く私は自分と戰をして、そして自分に此の身を獻はしくするのである、卽ち靈なる私は上に向はんとする、然るに肉なる私は引下らんとするのである。（ヨブ記、七ノ二〇）

五

げに、心では天の事を思ひめぐらせる、すると忽ち肉の邪魔が起つて、祈禱も妨げられる。嗚呼、私の心の苦悶を何としよう。「私の神よ、私より遠ざかり給ふな、又は「怒りて爾の僕を拒絶し給ふなよ」（詩篇、七一ノ一二、及び二七ノ九、）

爾の一電光を打振つて」（詩篇、四四ノ六）之を追散らしたまへ。

ての妄想を潰亂せさせたまへ。

私の意覺を爾に向て集中せさせ給へ、私をして、邪惡の妄念を速かに棄去つて、又之を擯斥せさせ給へ。

永遠の眞理よ、願くは私を助けて、そして如何なる虚妄の心にも動かされることなからせ給へ。』天つ美しの御能力よ、來りて爾の御顔の前よりすべての不純を皆逃げ去らせ給へ。苟くも祈禱に臨みて、爾以外の事を私の思ひめぐらす度ごとに、願くは、爾、私を宥して御慈悲をもつて寛恕を垂れたまへ。

まこと、私は自白したてまつる、私は常に極めて心が外に散るのである。

然り、自分が體を以て起坐する所、そこに必ずし私の居るのもでない、却て自分の思念のある所、そこに連行かれて居るのである。

卽ち、私の思念のある所、私の居る所にして、私の思念屢ばある所、亦私の愛するもののある所である。

して、本來私の快とする所の事、或は習となつて私が悦ぶ所の事、之が忽ち念頭に起り來るのである。

六

是の故に、爾、眞理でありますもの、明かに言ひ給ふた、「汝の寶のある所亦汝の心のある所である」（馬太傳、六ノ二一）と。

若し天を私の愛するならば、私はよろこんで天の事を考へる。

若し又世を愛するならば、私は私の幸福と共に喜ぶのである、その不幸を悲むのである。

で、若し肉を愛するならば、卽ち肉に屬する事を常に念とする。

又若し靈を愛するならば、私は靈の事物を考へるを愉快とする。

なぜなら、何でも私の愛する事、之をよろこんで口にし又耳にする、そしてその想像を自分と共に家へ持ち歸つて來るのである。

されど、主よ、爾のためにすべての物緣を斷去つて、又强く自然の性を壓抑し、そして靈の熱心に肉の慾念を犧牲にして、之を十字架に釘ける人、その人是れ爾の福者である。澄渡つた良心も つて純潔なる祈禱を爾に捧げ、そして內にも外にも全然地的な事の混らない、その天使たちの合唱に這入り得るに足る故である。

第四十九章

永遠の生命の願望と及び戰ふ者に約束せられたその善福の如何に大なるかとのこと

一

子よ、汝もし永遠の至福を願ふ心の天より己れに注がれしと感じ、又は「回轉の影なき」（雅各書、一ノ一七）わが灼光を仰ぎ得んために、已れその肉體の「幕屋」（コリント後書、五ノ一）より脫出せんと欲するなら、その時汝須らく汝の胸を打披き、心願を凝らして、此の聖なる靈感を受くべきである。

そして汝が我慾の重みに由て地に沈むことないために、斯くも仁恵もつて汝を遇し、憐愍もつて汝に臨み、又優渥に奬勵し强固に支持し給ふ、その無上の天恩に對し、汝至大の感謝を捧げねば

ならぬ。

そは是れ、汝の之を受くる考究努力の功に依るのでなく、只全く至上な聖寵と神的眷顧との恩降にのみ依るのである、卽ち汝が德に高まりて益々謙遜の心に進み、尙來らんとする戰鬪に自ら準備して、そして全心の愛情を以て我に縋り、又熱烈なる意志を以て我に奉仕するやう努めんためである。

二

子よ、火は屢ば燃えるのである、けれ共煙なしには焰は上らない。

その如く、或人は亦その願望を天に向て燃立たせる、けれ共尙肉的慾念の誘惑より免れることないのである。

それ故に、之が望焦れて願ふその事も、紲然に神のみ榮のためにのみ求められるでない。で、汝が本當に誠意で捧げると思ふその祈願も、往々やつぱり然うである。

是れ、すべて自分の利害で染められてるそのことは、決して純な又完全なものではないからである。

三

汝に愉快な事、便利な事を以て祈りとするな。只我の意に適ひ、又我の榮となるべき事を以てせよ。是れ若しも汝の判斷正しいなら、汝は自分の願や、又はすべての者の願にまさり、我の定める事を善として之に從はねばならぬ故である。

我は汝の願を知つて居る、そして屢ば汝の歎きを聽いた。

今や汝は「神の子たちの光榮の自由に入る」（ロマ書、八ノ二一）ことを望んで居る、今や永遠の住居である天の故鄕の歡喜を戀慕ふ。けれ共その時はまだ來らない、まだその時ならぬ時であるのだ、卽ち戰鬪の時である、勞苦或は試錬の時である。

汝は至高の善もて飽足りたいと望む、けれ共今はそれを得られない。

我はその至高の善である、我を待望め、主は言ひ給ふ、「神の御國の來るまで」（路可傳、二ノ一八、二）と。

四

汝はまだ地上にあつて試錬せられ、又多くの事にて陶冶されねばならぬ。

慰安は時折汝に與へられるだらう、けれ共充分他足るまでは許されまい。

で、自分の本性に忤ふこと、之を忍ぶと共に又之を行ふに、汝心を強くしてそして勇み勵め。（哥約書、一ノ七）

汝は「新しき人を着て」、（エペソ書、四ノ二四）そして別な人間と爲り變らねばならぬ。

汝は自分の好まぬ事を屢ば爲さねばならぬ、又自分の欲する事を棄てねばならぬ。

他人の喜ぶ事は或は成就されるだらう、けれ共汝の悅ぶ事は遂に成就せられまい。

他人の言ふ事には耳が傾けられるだらう、汝の言ふ事には一顧の注意も與へられぬだらう。

他人は求めて許容されるだらう、されど汝の求める事は決して聽かれまい。

五

他人は嘖々として世に稱讃されるだらう、されど汝は默殺されるだらう。
他人は此の事彼の事を委任されるだらう、されど汝は全く無用視されるだらう。
して、その故に、汝の本性之を遺憾に思ふだらう。けれ共若し默して忍ぶなら、それは偉大な事である。
此様な事、又は多くの同じな事に於て、主の忠なる僕は試錬されるを常とする。卽ち、どれ程まで之が自分を棄ててるか、又はすべてに於て自分が挫かれてるか、それを知られるためである。』
凡そ汝の意志に戻つてる事、殊に極めて汝に不便で、又殆ど無用であると思へる時に、それを爲せと命ぜられ、そして之を知つて忍ぶほど、自分に死ぬと云ふその事の汝に必要なるは他に殆どない。
して、汝は權威の下に置かれて、敢て上長に抵抗し得ないから、それで他人の指圖で行動し、又自分の意見を全く棄てることが、汝に困難と思はれるのである。

六

されど、子よ、此等の勞苦の結果と、やがて迅速に來るべきその終末や、又は極めて大なるその報酬とを考へよ。さすれば汝之に就て惱苦を感ずることなく、却て汝の忍耐の中に最も強い慰安を得るだらう。
なぜなら、今汝が自ら進んで棄てるその些少な我慢の代りに、汝は天に於て永久に汝の志望を遂げ得る故である。

そこにて、汝はすべて汝の欲するもの、又は汝の願ひ得るほどのもの、皆之を見出すであるだらう。
そこにて、汝に天の善福盡く與へられ、そしてそれを復失ふ虞がないだらう。
そこにて、汝の意志は常に我の意志と一致して、そして外なる事や私的な事を何等望むことないだらう。
そこにて、何物も汝に抵抗するはないだらう、誰も汝に就て愬へるはないだらう、何等邪魔するはないだらう、而もすべて望まれた事はすぐさまに現出され、又すべて汝の欲した事は叶へられて、そして圓滿絶頂の點にまで滿足されるだらう。
そこにて、我は汝が詠へた侮辱の代りに天の榮を與へよう、最も卑賤であつた地位の代りに無窮の王座を與へよう、悲哀の代りに稱美の盛衣を與へよう、又そこにて、汝が從順だつた效果は現はれよう、罪を淨めの苦行は歡喜となるだらう、また卑下して屈したその報に、榮の冠冕を頂くだらう。

七

是の故に、今は汝すべての人に謙遜に屈下せよ、又は誰が此を言ひ彼を命ずるとも、汝之を念とするな。
されど殊更大事なは、卽ちそれが身上であれ身下であれ、或は同輩であらうとも、すべて汝に求め又暗示するそのことは、なんでも汝善意を以て之を承け、そして誠意を以て仕遂げるやう努め

ること、是である。

或人は此を求めよう、或人は彼を求めよう、又或人は此に誇り、或人は彼に誇り、千度萬度稱讃されるだらう、けれ共汝は此にも彼にも心を捉はれるな、只汝自身の輕蔑されること、又我のみの聖意に叶ひ、そして我の榮の高められることとを歡喜せよ。

汝の願ふべきは、卽ち「生命をもつてするも死をもつてするも、神の常に汝に由りて讃美せられん」（ピリピ書、一ノ二〇）こと、是である。

第五十章

人は寂寞孤獨である時神の御手に己れを委ねまつるべきこと

一

主なる神よ、聖なる父よ、爾は御旨のままに爲し給ふ、そしてその爲し給ふこと皆善である、爾は今に又永遠に讃美すべきかな。

爾の僕をして己れに悦ばず、只爾にのみよろこばしめ給へ。

爾のみ唯一の眞の喜悦であり、又希望であり、又私の冠冕であり給ふ。然り爾は私の歡樂であり、又私の榮譽であり給ふ、主よ。

何か爾より受けぬもの爾の僕にあるや、而もその受けたる、何の功績ありてではないのである。（コリント前書、四ノ七）

爾の與へ給ふもの、皆是れ爾の造り給ひしものにして、萬物皆爾の有である。

私は「貧しくして幼稚より勞苦の中にあり」、（詩篇、八八ノ一五）私の靈は悲みて時には淚をさへ流すに至つた、又時には邪念にはげしく脅威せられて、靈はそが爲めに擾亂された事もある。

二

私は平和の歡喜を欲求する。私は慰安の光もて爾より養はれる、その爾の愛子たちの平和を切望する。

もし爾が平和を與へ給ふなら、もし爾が聖なる歡喜を注ぎ給ふなら、爾の僕の靈は爾を讃美するであらう。

玲瓏の調音と至渥の敬虔とをもて滿つるだらう。

されど、若し爾が退去り給ふなら、して之が爾に最も常なる事であり給ふ、卽ちその靈は復「爾の聖誡の道をはしることできない」、（詩篇、一一九ノ三二）只その膝を屈し胸を打つのみであるだらう。

そは、今は復爾の「燈光彼の頭の上に輝き」、（ヨブ記、二九ノ三）或は「爾のつばさの蔭に」（詩篇、七ノ八）かくれて、寄來る誘惑より護られた、あの曩の日の時の如くでないからである。

三

義にして常に讃むべき父よ、爾の僕の試錬の時は今正に來たのである。

愛する父よ、此の時爾の僕が、爾のために何かの艱苦を忍ぶとも、是れ當然の事である。

永久に崇むべき父よ、時は正に來た、是れ永遠の初めより爾が豫めその來るべきを知り給ひしものにして、爾の僕が暫の時の間、外にて打克たれ、而も絶えず內にて爾と共に生きんためである。

しばしの時の間ぞ、人の前にて罵られ、卑められ、無視せられ、又患難辛苦に揉まれるだらう、やがて爾と共に新しき光の曙に起上つて、天の榮に輝かされんためである。聖なる父よ、爾は斯く定めて、又斯く欲し給うた、そして爾の命じ給ひしままにその事仕遂げられたのである。

四

爾の愛のために此の世に於て忍耐辛苦することは、それが幾度であらうとも、又は如何なる方面よりであらうとも、只是れ爾の御許可あつて然るのであり、即ち爾がその友に與へ給ふ惠寵なのである。

爾の計畫と攝理となく、又その原因なくしては、如何なる事も地上に起るはないのである。主よ、「爾が私を屈せしむるは善きことである、之によりて爾の律法をまなび得るのである」、（詩篇、一一九ノ七一）又心のすべての傲慢と己惚とを棄て得るのである。又「慚愧私の面を蔽ふは」（詩篇、四ノ一五）私に有益である、之によりて私は、人に向はず、寧ろ爾に向て慰安を得んと求める故である。

是に由て、私は爾の不可測なる御審判の畏るべきを學ぶのである、爾はげに「義き者と悪き者とを共に苦しめ給ふ」、（ヨブ記、九ノ二二）而も公平と正義とないではないのである。

五

私は爾に感謝し奉る、爾は私の悪を寛假し給はずに、苦き笞もて私を打懲し、悲哀に惱まして、又肉にも靈にも痛苦を以て苛責したまふその事を。

私の主なる神よ、此の天が下にあるすべてのものの中に、誰が私を慰め得るだらう、只爾の在すのみ、爾は靈を癒す天つ國手であり給ふ、爾は「又擊ち又癒す」、（申命記、三二ノ三九）爾は陰府に連れ降し、又連れ戻し給ふのである。

「爾の懲戒」、（詩篇、一七ノ三六、拉丁譯）私の上にある、又爾の鞭笞そのもの私を教訓するだらう。

六

兒給へ、愛する父よ、私は爾の御手のなかにある。

私の背と私の頸とを打ち給へ、曲れる私の心を爾の聖旨の下に屈せしめ給へ、是れ爾の常に好んで爲し給ふ所であつて、私をして、篤信謙卑なる、爾の弟子とならしめんためである。

卽ち私が爾のすべての御指圖に從つて歩まんためである。

私は爾に向つて、己れとすべての私のものとを委ね奉る、爾の聖意のままに懲治し給へよや。この世にて懲治を受けまつらん、未來に於てするよりも勝つて居る。

一切合切爾は皆之を知りたまふ、又人の心の事も一として爾に知られぬはないのである。

爾はすべての事之を未然に知り給ふ、又爾に向ては、地上の出來事、之に就て誰の教示も勸告もその必要ないのである。

爾は又如何なる事が私の進歩を裨益するか、或は私が罪の錆より淨められるため、如何に患苦の有

用なるか、之を知りたまふ。
爾の御旨に適へるままに私に爲したまへ。又爾のみ私の罪の生涯、之を誰にも增して精く又明かに知りたまふ。而もその故を以て私をさげしむことをし給ふな。

七

主よ、私に許して、私の知るべきこと之を知り、愛すべき事之を愛し、又爾の御旨に無上に適ふ事之を讃美せさせ給へ。又爾に貴しと見ゆる事之を私の念として、又爾の御眼に汚らはしとせらるる事、之を私の嫉惡するを許したまへ。
願くは私をして「日見る所」（イザヤ書、一一ノ三）の外の形「によりて審判をせず」、又愚かな人の根もなき噂を耳にして斷定をせず、而も物に屬する事と靈に屬する事とを正しき判斷もつて辨別し、そしてすべてに優つて爾の貴き聖意のある所を探らしめ給へ。

八

人間の感覺往々事を審くに私共を謬らせる。で、此の世を愛する者ひたすら形の物を愛して、そして己れを謬られる。
その故に、人が世間にえらいと稱められたとて、それがどれ程好いのだらう。
虚僞な人は虚僞な人を、又盲者は盲者を、弱い人は弱い人を、互に稱立てて欺くのである。そして徒らに人を稱めることは、むしろ事實に於て之に恥辱を與へるのである。
之は謙遜な聖者フランシスコの言である、「人は各々爾の聖眼に映ずる所、只それ丈が卽ちその人の眞相である」と。

第五十一章

高き事に力足らずば低き事に最善を竭すべきこと

一

子よ、汝は常に德を進めることのみを熱心に願つて居られない、而も原始の墮落が因をなして、時々卑惡な者と爲り下り、そして此の汚れ易い人生の重荷を、如何に厭でも尙忍んで負はねばならないのである。
汝が死すべきその肉體をもつてる間は、心の倦怠と苦痛とをいつまでも感ずるのである。
で、汝は肉にあつて肉の重荷を往々歎かねばならぬ、靈の事を研究し、又は神の事を默想するのみに、絕えず耽つて居られない故である。

二

そやうな時には、汝に取つて執るべき方法最是にある、卽ち汝宜く卑近な又外部の仕事に身を逃れて、そして善事を行つて自ら心を遣り、以て汝が我より見舍はれて、すべての憂苦より救出されるまで、固く信じて我の降臨と至高の天の眷顧とを待望み、只忍んで汝の逐謫の生涯と無聊寂寞な思とを悚ふべきである。
我も汝をしてその勞苦を忘れて、そして內心安らかに喜悅に溢れしめるだらう。

汝の前に我は聖書の絲野を展開しよう、汝が「その心を打擲げて我のいましめの道を騙りはじめん」（詩篇、一一九ノ三二）ためである。

そして又「今の時の苦難はわれらの上に顯れんとする榮光に比ぶるに足らず」（ロマ書、八ノ一八）と言はんためである。

第五十二章

慰安は人之を受くるに足らずとして却て懲罰を分とすべきこと

一

主よ、私はげに爾の慰安も又はその他の靈的眷顧も受くるに足らぬものである、故に爾が斯く私を乏く又寂く棄置き給ふのも、是れ私には當然であるのである。

なせなれば、假令私が海の如くに涙を流すことのできようとも、尚爾の慰安を受くるに足りないからである。

これ私は重く且つ屢ば爾に背きまつりて、又多くの事に極めて罪過を犯したのである。で、若し受くべきものあるならば、只鞭韃と懲罰との外ないのである。

故を以て正理に之を考へては、私はげに露ほどの慰安も受くるに足りないのである。されど、爾は寛大で又慈悲ある神におはします、して爾の御仕業の滅ぶるを欲し給はない、依て「憐憫の器に向て爾の仁惠を豐かに示さんため」（ロマ書、九ノ二三）爾の僕の何等自分の功績ないにも拘はらず、之に

敢て人間の仕方以上に慰安を降さんとし給ふのである。

然り、その爾より降る慰安は、是れ人間徒らに云爲する如きものでないのである。

二

主よ、何を私の爲したれはぞ、爾は天の慰安を私に與へんとし給ふや。

私は何等善事をしたのを記憶しない、只常に邪惡に傾いて、そして之を矯めるに緩慢であつた。』そして、之は事實であつて否まれない。若しさうでないと私の言ふならば、主よ、爾は私に反對して立ちますだらう、又誰も辯護する者ないだらう。

然らば、その罪の故に私は何を受けべきであるだらう、地獄とその不滅の猛火とのみである。

本當に自白し奉る、私はすべての嘲笑侮蔑を受くるに値する。そして爾の忠實なる僕の中に算へられんなどと及びもない。して此の事之を聞くは遺憾である、けれ共事實は仕方ない、私は己れの罪を己れに對して論證する、爾の御慈悲を蒙むることの一層容易であり得んためである。

三

罪ある此の私、あらゆる慚愧を極めてゐる者である、復何を言ふべきや。

只此の言の外に私は何も口にすべきはない。「主よ、私は罪を犯しまつりた、私を憐みたまへ、私を恕したまへ」と。

又、しばらく私に許したまへ、「私が死の蔭に蔽はれる暗き地に往く前に、私の悲哀をなげかんためである」（ヨブ記、一〇ノ二〇―二一）と。

只懺悔悟して、その犯した罪の故に自ら卑下することの外、何を爾は殊更に此の責むべき哀れな罪人より求めんとし給ふや。

眞にその罪を痛悔し、又眞に卑下したその心より、卽ち赦免の希望は生れるのである、惱み亂れた良心は和解されるのである、失はれた聖寵は回復されるのである、又人は來るべき神怒より救はれて、そして神と悔悟した靈魂とが、互に聖なる交りに於て接吻することも起るのである。

四

卑下した罪人の痛悔は、主よ、げに爾に嘉納せられる供物であつて、爾のみまへに放つその芳香は遙かに乳香の薫物にもまさるのである。

また、聖なる御足に爾が悅びて濯がれ給ふ馥郁たる「香の膏油」（路可傳、七ノ四六）である。そは痛悔してそして卑下した心は、之を爾は決してさげしみ給ふことない故である。

して、玆に卽ち敵魔の怒れる顏よりの逃れ場がある、又玆で私共は、そのどこよりと云ふことない、自分に附着し來つたその罪の汚れを淨め又滌ふことができるのである。

第五十三章

地上の事を愛好する者には聖寵の來降なきこと

子よ、我の聖寵は貴重であつて、そして外界の事物や、又は地上の慰安と混同せられるを許さない。

故に　もしそが注入を受けんと汝の願ふなら、宜くその聖寵の障碍となるものを一切拋棄すべきである。

宜く密所を汝に擇ぶべし、宜く獨り離れて靜居することを愛すべし、決して誰とも雜談するを求むるな、只汝が痛悔の誠意と純眞の良心とを保持せんがために、ひたすらに宜く神に向て優渥なる祈禱を獻ぐべし。

全世界をくるめても之を尊重するな、而もすべての外界の事物に向て神との親交を對照させよ。』これ我とも親交し、又共に世の泡沫をも愛するは、汝にできない故である。

知人昵近よりさへも隔つて、又凡て一時的なる慰安より汝の心情を離して置け。

使徒なる聖ペテロも、基督信徒はこの世にあつて、皆「行人旅客」（ペテロ前書、二ノ一一）の如くであれと勸めて居る。

二

嗚呼、此の世の事物に毛頭愛着を貽さぬ人には、その死際に澁んでどんなに安心があるだらう。』されど、そのやうなすべてを離脫した心は、是れ精神弱い人には有たれない。又「自然性の人」（コリント前書、二ノ一四）は靈的な人の自由を解し得られない。

兎に角、人もし眞に靈的なものとならんと欲するならば、須らく遠い者近い者一切より絕緣し、又何ものにもまさつて、第一に己れに留意すべきである。

もし汝自身が完全に克たれるならば、その他は容易に征服せられよう。

完全なる勝利とは、人が己れの上に凱歌を奏するにある。

是れ、人もし能く己れを打負かして了つて、之に由て肉慾は理性に、理性は又すべてに於て我に服従するやうになるならば、その人即ち眞の己れの勝利者にして、また世界の帝王であるのである。

三

もし汝この頂點に昇りたいと欲するならば、即ち勇敢に之に着手して、そして自我と及びすべての隱れた而も放埒なる私慾物慾を根絶せんために、「斧をその根元に置かねばならぬ」。(路可傳、三ノ九、)して、その根絶されべきであるものは、それが何であらうとも、その萌來る原因みな、人が只理由もなく妄りに自分を愛するその惡念にあるので、之をさへ打する又屈服させて了へば、即ち汝に大なる平和と安泰とは絶えずに續くであるだらう。

然るに人は完全に自分に死なうと努力し、或は自分を充分に離脱しようと苦心すること稀である、それで、いつでも自分に絡つて居て、そしてその靈に於て己れ以上に高められることができないのである。

されど、我と共に自由に歩まうと願ふその人は必ず己れの邪惡な又濫らな慾念をすべて、殺して了つて、そして一切の諸物その戀々の私的な愛情を惹くことないやうにせねばならぬ。

第五十四章

人の本性と聖寵と兩者その働きの相異ること

一

子よ、汝つらつら人の本性と聖寵との働きを考へ見よ、兩者互に極めて相反對して、そして微妙に相働かれる。それで、靈的な、又內心天の光明で照された人でない限り、殆ど之を識別し得ないのである。

一體、人はすべて善を欲して、或は言に或は行に、皆多少の善を術はうとする。で、その外着のみの善を以ては、多くの人が謬られる。

然し本性は巧妙であつて、多くの者を惹付け、之を籠絡して欺瞞しようとする、而も要するに己れを以て最後の目的とするのである。

されど聖寵はその歩み單純で、すべて惡の類に遠ざからうとする」。(テサロニケ前、五ノ二二、)決して虛僞を裝はない。而もすべての行動純然神のためであつて、そして之にあつて亦最後に於ける如く安息するのである。

本性は殺されることを欲しない、又壓せられ、屈せられ、打克たれ、或は自發的に服從せしめられることを欲しない。

聖寵は眞に自我の死滅に努力する、又肉慾に抵抗する、又屈することを求めて、打克たれることを希ひ、決して自分の事に自由を得ようと欲しない、又好んで訓練の下に服して、他人の上に立

たうと望まない、只常に神の御許に生き、立ち、又存んと願ふのみ、或は神のため「すべての人の立てたる者」（ペテロ前書、二ノ一三）に屈從することを躊躇しない。

本性は自分の都合をのみ考へて精勵し、そして何が他人より利得せられべきや、それのみに注意する。

聖寵は之に反し、何が自分に利益であるか又は都合好いか、それを考へない、むしろ衆くの人に對する事を念とする。

本性はよろこんで名譽と尊敬とを受入れる。

聖寵はげにすべての名譽と光榮とを以て、之を忠實に神に歸せしめる。

三

本性は恥辱と輕蔑とを恐怖する。

聖寵は然うでなく、「耶蘇の御名のために侮蔑を忍ぶことをよろこびとする」。（使徒行傳、五ノ一四）

本性は閑暇と身の安樂とを愛好する。

聖寵はされど寸時も安閑として居られない、而も自ら進んで勞役を己れに執る。

本性は珍奇なもの、綺麗なものを有つことを求めて、詰らぬもの粗末な者を斥ける。

聖寵はさうでなく、簡單なもの卑賤なものに樂んで、粗惡なものをも厭はない、敝衣を纏うて一向平氣である。

本性は此の世を尊重する。地上の利得に歡喜して、損害を受ければ悲歎する、そして些細な惡口

にも忽ちに激怒する。

されど、聖寵は心を永遠に騁せて、此の世の事物に戀着しない、又泡沫同樣なものに由て擾亂せられない、勿論罵詈せられたからとて敢て憤怒することない、その「財寶」（馬太傳、一九ノ二一）と歡喜とは「天に」蓄へられてあつて、復失はれることない故である。

四

本性は貪婪であつて、與へるよりも寧ろ受けるをよろこび、汲々として我慾私慾に沒頭する。

之に反して、聖寵は深切で、公益を心とし、私益を圖ることを避ける、常に少許を以て滿足して、「受くるよりも與へる者は幸福なり」（使徒行傳、二〇ノ三五）と思つてゐる。

本性は心を有形の物に傾ける、自我の肉慾に傾ける、虛妄な事浮薄な事に傾ける。

されど、聖寵は神に惹付ける、德に惹付ける。又すべての有形の物を棄絶して世俗を逃避し、肉的の要望を嫉んで、外界の彷徨を抑へ、公衆の中に出るのを羞ふのである。

本性はその樂み感觸に接するものにある、そして之に依て外的の慰安を得て快とする。

されど、聖寵は唯一の神にあつてのみその慰安を得る、そして眼に見得べきあらゆるものにまさり、至高の善を以て樂まされる。

五

本性は萬事を只利益のため、又は自分のためにのみ爲す、そして一事たりともその報酬なしには爲すことできない、而もその對等の價値のもの、もしくはそれ以上のものを得んとする、又はそ

の爲た恩惠に對しては稱讃或は眷寵を博せんと望むのである。殊に自分の仕業又は贈與に就ては、それが大に貴重せられんことを切望する。之に對して又、聖寵は決して此の世的に求めることなく、唯一の神の外に何等の報酬も得ようと考へない。此の世に必須なものと雖も、それが自分に取つて只永遠な事を追求するに役立ち得る丈である、それ以上には何等欲することないのである。

六

本性は朋友親近の多きを悦び、高き爵位や貴き門地を誇りとする。又權者に阿り、富者に諛ひ、そして己れと同類なものを稱揚する。されど、聖寵はその敵をさへ愛するのであつて、友人多いとて之を得意とするのでない、又門地も素生もそこにすぐれた德があればである、さうでない限り何等之を貴ばない。又富者によりも、もつと貧者に好意を寄せ、權者によりも、もつと心の純なる者に同情を表し、虚僞な者によりも、もつと眞實な者に歡喜を共鳴させる。そして常に善人に勸むるに、益々「優れる賜物」を求めて勵み、その善德に由て神の御子に肖かることを以てする。

七

本性は貧困や障碍に遭へば、忽ち歎いて訴へる。聖寵は操守堅固にして、窮之を凌いで立つ。

本性はすべてを皆己れに歸せしめて、その奮鬪も論爭も己れのためにする。されど、聖寵は萬事をその本源であり給ふ神に歸せしめる、そしてどんな善事も決して之を己れの手柄としない、決して矜つて自ら構へない、又爭ふこと決してない、或は自分の意見を以て他人の上に倘へること決してない、而もすべての意見と智能とに於て、只永遠の御睿智と及び天的なる審理とに服從するのである。

本性は貪つて祕事を知り、奇聞を聽きたがる、或は外界に現れ、そして五官に觸れて多くを實地に知りたがる。又稱言讚辭の生ずる所にあつて人にされど、聖寵は決して新しい事奇しい事を知らうと思はない、此等はすべて昔ながらの人間の墮落より起つたので、この地上には元來新しいそして永續すべきものなど、一としてある筈ない故である。

それで、聖寵は教へるのである、卽ち感觸を制抑して、空なる滿足と虚飾とを避け、又稱讚驚異に値することにてさへも謙遜して自ら匿れ、そしてすべての事物より、或はすべての知識に於て、只管靈に有益なる結果と、及び神の御譽御榮とを求むべきこと、是である。

聖寵は自分或は自分の物の吹聽せられるを欲しない、而も萬物神の純なる愛より出て與へられるので、卽ちその賜物に於て神の祝ぎまつられん事を望むのである。

八

此の聖寵これ一の超自然的なる光明であつて、又神の殊更なる賜物である、そして又選ばれた

る者の獨特なる記章であり、永遠の救に入る保證である。之に依て地的の人は引揚られて天を愛する者と爲り、又肉的より靈的に變ぜられる故である。

故を以て人の本性益々抑へられて又打克たれるその時は、聖寵亦益々多く注與され、そして毎日その眷顧を新たにして、その肉的なる人間が神の御像に從ひ改造されるのである。

第五十五章

本性の墮落と及び神の聖寵の效力とのこと

一

主なる、私の神よ。爾は「爾に象りてその像の如く」(創世記、一ノ二六)私を造り給うた。私が己れを罪に誘ひ又滅亡に陷らせる此の汚れた本性に打克たんためである。願くは爾の示す斯くも偉大な、又救に必要のその聖寵を私に垂れたまへ。

そは「私の肢體のうちに他の法ありて私の心の法と戰ひ」、(ロマ書、七ノ二三)私を導いて虜と爲し、多くの事に於て肉慾に服從せしむるのである、そして之を私は認めて而もその邪念に抵抗する力ない、只爾のいと尊き聖寵の私の心に熱烈に注がれて、その援助を仰ぐより外ない故である。

二

「その幼き時よりして常に惡しかりし」(創世記、八ノ二一)本性に克つのである、之が爲めには爾の聖寵、然り、大なる聖寵必要なのである。

是れ、始祖なるアダムの墮落して罪に汚れた故に由り、その罪の刑罰は「すべての人に」(ロマ書、五ノ一二)傳り、爾に由て善に且義に造られたる本性そのものも、今は腐敗した本性の邪慝と脆弱とを指すとして考へられるに至つて了つた、そして之をその儘に委棄するなら、その趨く所益々劣惡と爲り、又低落に向ふのみであるだらう。

而もその殘つた僅かの力とし云へば、ただ燼灰に被はれた熒々たる殘火の如きに過ぎないのである。

三

是れ、私の神よ、爾の誡命は善であり、義であり、又聖であつて、すべての罪と惡とより逃るべきを說くのであるを知り、私が「內なる人にては爾の律法を悅ぶ」所以である。

「けれども肉にては罪の律法に仕へて居る」。(ロマ書、七ノ二三)理性によりももつと肉慾に從ふからである。

是れ「善を欲することと私にあるも、之を行ふ能はざる」所以である。(ロマ書、七ノ二八)

是れ、私が往々多くの善を行はんと決心する、而も私の脆弱を助ける聖寵の缺乏するために、小

難に出逢つても忽ち逡巡して沮喪する所以である。是れ私が完全の道を知悉して、如何に之を行はねばならぬかを能く明瞭に見ながらに。而も、自分の腐敗に壓せられ、一層完全の域に向て邁進し得ない所以である。

四

嗚呼、主よ、されば苟くも善に着手して、之を進め、又之を遂げさせんとするためには、如何に爾の聖寵が私に取つて極めて必要であることよ。そは、「之を離れて私は何事も爲し能はないべての事を爲し得る」（ピリピ書、四ノ一三）のである。嗚呼、眞に天よりの聖寵よ、之なくしては人に何等自分のものとなすべき功績ない、自然の賜物として考へられべきもの何等ない。聖寵なくしては、主よ、如何なる技術も、富も、美も、力も、乃至天才も雄辯も、爾のみまへに於て何等その價値ないのである。

まして自然の賜物は善者も惡者も共有する、けれ共聖寵或は天の愛は只撰ばれたる者のみ受ける獨特の賜物であつて、永遠の生命を有するに足る表章である。

して、此の聖寵や卓然としてその類を絶ち、之なくしては預言の天賦も奇蹟の實行も、或は如何なる幽玄な思索も、何等價値あるものとして考へられることないだらう。

又信仰も希望もその他の善德も、此の天愛と聖寵となければ、それが爾に受納されることないだらう。

嗚呼、最も祝福すべき聖寵よ、爾は心に貧き者をしてその心に謙遜なる者とならしめる。

五

願くは私に來り降りて、爾の大なる慰安を以て私に滿たさせ給へ、私の靈がその心力倦怠し枯乾し、そして萎靡して了ふことないためである。

主よ、爾に懇願し奉つる、爾のみまへにあつて私が聖寵を見出すことを得させ給へ。假令自然の愛するもの私は之を何等得ぬとても、私には爾の「聖寵是れ足れり」（コリント後書、一二ノ九）である。

假令多くの患難もつて惱まされ苦められるとも、爾の聖寵私と共に在る限り、私は「何等禍害を恐れることないだらう」。（詩篇、三ノ四）

聖寵是れ私の力そのものである、私に與へられる忠言そのものである。援助そのものである。すべての敵よりも強いのである、あらゆる賢者よりも智慧に富むのである。

六

又、眞理の啓蒙である、訓練の教師である、心の光明である、困難の慰安である、又悲哀を驅逐し、恐怖を洗滌する者で、又信仰の傅育者で、又淚を流させる力である。

之なくして私は何であらう、只投げて棄てられべき枯れた木枝や、無益な切株に過ぎないのみ。』此の故に、主よ、爾の聖寵をして常に私の先に行き後に付き、私をして絶えず善事にいそしみてだらう。

熱心ならさせよ。爾の御子の耶蘇基督に由て願ひ奉る。

アーメン。

第五十六章

全く私慾を棄て去り、十字架を負うて基督にまねびまつるべきこと

一

子よ、汝が自分を能く離脱すればするほど、益々汝は我に入ることできるだらう。何等外に欲する所なければ、内おのづから平和を得る如く、汝亦自ら内を棄てて了へば、即ち神と結合するのである。

我は汝が反對もなく不平もなく、完全に己れを棄てて我が意に從ふやう、之を汝の學ぶを欲するのである。

「我に從へ」、(馬太傳、八ノ二二)「我は道である、眞理である、又生命である」。(約翰傳、一四ノ六)道なければ行かれない、眞理なければ知られない、又生命なければ生きられない。即ち我はその汝の辿るべき道である、その汝の信ずべき眞理である、その汝の望むべき生命である。

我は迷ふことない道である、謬ることない眞理である、竭きることない生命である。

我は最も眞直な道である、最も高い眞理である、眞正なる生命である、幸福なる生命である、無始無終の生命である。

もし我の道に留まるならば、汝は眞理を曉るだらう、そして眞理は「汝に自由を得させて」(約翰傳、八ノ三一)そして汝は永遠の生命を獲得するだらう。

二

「汝もし我に入らんとせばわが誡命を守れ」。(馬太傳、一九ノ一七)

もし汝眞理を曉らんとするならば我を信仰せよ。

「もし汝全からんと思ふなら、往きて汝の所有を賣つて了へ」。(馬太傳、一九ノ二一)

もし我の弟子たらんと思ふなら、「汝己れを棄てて了へ」。(路可傳、九ノ二三)

もし眞福の生命を贏得たいと思ふなら、此の現在の生命を輕んぜよ。

もし天で高められようと思ふなら、この世で自ら卑くなれ。(路可傳、一四ノ一一)

もし我と共に王たらんと思ふなら、我と共に汝、十字架を負へ。(路可傳、一四ノ二七)

十字架の僕のみが只、祝福の道と眞正の光明とを見出す故である。

三

主なる耶蘇よ、爾の道は狹くして、そして世に輕蔑される。願くは私も亦世を輕蔑して爾に倣ふを許したまへ。

「僕はその主人よりも大ならず、又弟子はその師にまさらざる」(馬太傳、一〇ノ二四)故である。

爾のその御生涯に倣つて、爾の僕をして自ら修めしめたまへ、そこに私の救と眞の聖德とがあるのである。

之を外にしては、何を讀み何を聽かうとも、私を慰め又樂ませるもの決してない。

四

子よ、汝は今之をすべて知り又讀んだ。で、それを若し汝が行ふなら、汝は幸福であるだらう。（約翰傳、一三ノ一七）

「我が誡命を保ちて之を守るものは、卽ち我を愛する者である、我も之を愛し、之に己れを現はすだらう、又之をして我が父の御國に於て我と共に坐らせよう」。（約翰傳、一四ノ二一）（默示錄、三ノ二一）

五

主なる耶蘇よ、爾の語り、又約し給ひし如く、その事成らしめて、そして私を之に與かるに足る者とならせ給へ。

爾の十字架を私は受けませり、爾の御手より受けませり、爾が私の上に置き給ひしそのままにて負ひまつらばや、死に至るまで負ひまつらばや。まこと、善い修道者の生涯是れ十字架である、而も又天の樂園への指針である。

既に着手せられた「後を振返るべきでない」（路可傳、九ノ六二）又棄てらるべきでないのである。

六

さらば、兄弟たち、もろ共に進まばや、耶蘇は私共と共にいますだらう。

耶蘇のために私共此の十字架を受けたのである。耶蘇のために十字架を負うて行通さう。

耶蘇は私共の援助者でありますだらう、卽ち私共の案內者又先驅者であり給ふ。

見よ、私共の王は先頭に進み出で、そして私共のために戰ひ給ふだらう。（サムエル前書、八ノ二〇）

私共は勇敢に從はばや、誰も恐怖におびえるな、潔く戰つて死する覺悟を仕よう。十字架より逃げ免れて、私共の名譽に汚點に來すが如き決してしますまい。

第五十七章

過失に陷る時も敢て落膽すべからざること

一

子よ、汝が順境にあつて、慰安信仰共に大なるよりも、却て汝が逆境に立ちて克く忍び克く卑下するを、我は一層に嘉みするのである。

なぜ、汝それを悲むか。

なぜ、汝に不利益な事少しばかり云はれたとて、汝心を動かされる必要ない。

假令それがもつと大きな事であつたとて。汝心を動かされる必要ない。

只聞流して放つて置け、それが決して最初でない、又新しくもないのである、そして汝が生存へる限り、亦最後でもないだらう。

まだ何等の逆境蹈んだ事ないうちは、汝なかなか勇者である。

或は人にも忠告する、又言を以て激勵することも知つて居る。けれ共災難一度汝の門戶に襲ひ來るや、その忠告も激勵も忽ちに消えて了ふのだ。

汝の極めて弱志なるは、既に小さな事件に於て汝屬ば之を經驗したのだらう、之を汝考慮せよ。

けれど此様な事乃至その種類の事發生した時は、それが却て汝の救のためなのである。

二

災難來たからとて、成るべく之に心を奪れるな。そして若しそれが汝を苦しめるとも決して悲觀するな、否、怵へて之に氣を揉むな。

若しそれを愉快に受けることできないとも、少くも忍んで之を我慢せよ。

假令自分に面白くない事を耳にし、或は腹立たしいと感ずる事があらうとも、汝愼みて自ら抑へ、そして苟くも不用意の言の汝の口より出て、それがために小さなものを躓かせるが如きことあらしむな。

やがて、沸立つ胸の動さは忽ちに鎭まつて、そして聖寵の復歸に由り、汝の內心の苦惱も和げられるであるだらう。

我は尙「活く」。(イザヤ書、四九ノ一八)(主は言ひたまふ)、若し我に信じてそして熱心に呼び祈るなら、我は汝を助けるに躊躇しない、そして豐かに慰安を與へるを常とするのである。

三

汝、心を靜かにして、そして益々堅忍の帶を締めて居よ。

若し汝が屢ば患苦に出逢つて、はげしく誘惑せられるとも、それで萬事休すと云ふのでない。

汝は人間である、神でない。肉である、天使ではないのである。

天の使であつたルシフェルや、樂園の始祖でさへ、亦罪に陷るを免れ得なかつた。まして、汝が

どうしてその心操を常に渝へずに守り通せよう。

我は「憂ふる者を引起して之を幸福ならしめ」、(ヨブ記、五ノ一一)又已れの弱きを知る者を導いて、之を我の神域に到らしめるものである。

四

主よ、爾の御言のうるはしさよ、一蜜にも甘露にもまさりて」(詩篇、一一九ノ一〇三)私の口に樂くある。

もし爾がその御言もつて私を強め給ふでないならば、苟くも艱難憂苦に當つて、何を私の爲すべきであるだらう。

もし救の港にさへ達することが出來るならば、多少の艱難、それがどんなものであらうとも、何を心に掛くべきであるだらう。

私に許して、清き往生遂げしめよ。此の世を去り行く私の末期をして幸福ならしめよ。

「私を憶へ給へ」、(路可傳、二三ノ四二)私の神よ、私を導きて眞直に爾の御國に行かしめ給へ。

アーメン。

第五十八章

徒らに高遠な事や又神の祕密に立入るべからざること

一

子よ、愼みて高遠の事や、又は神の神祕な御審判を穿鑿しようとするな。例へば、なぜ此は然く

棄せられて、而も彼は然く聖寵を蒙むるか、又なぜ此は然く艱苦に惱まされて、而も彼は然く非常に尊貴を與へられるか、卽ち此等の事である。

此等の事は人の力の及ばない所であつて、又神の御審判を研究することは、是れ如何なる推理も議論も到底益する所ないのである。

故に汝に之を惡魔が暗示するか、もしくは誰か好奇な人の尋ねることがある時は、汝須く之に答へて預言者と共に斯く言ふべきである。「主よ、爾は義にして、又爾の審判は直くある」(詩篇、一一九ノ一三七)と。

又斯く言へ、「主の審判はまことにして、ことごとく正しくある」(詩篇、一九ノ九)と。

我の審判は畏怖されべきである、窮鑿されべきでない、そして人智を以ては「不可測」(ロマ書、一一ノ三三)なものである。

二

又、聖者たちの功績に就ても、誰がすぐれて聖なるや、或は「誰が天國にて大なるや」(マタ、一八ノ一)之を敢て討究窮鑿しようとするな。

斯様な事は往々無益な「論爭紛議」(テモテ後書、二ノ二三)を釀し、又詰らぬ傲慢自負の心を養成する。そして是に由て、或は此を聖者とすれば、或は彼を優れる者となさんとし、互の嫉妬軋轢が生ずるだらう。

又斯様な事は、之を知らうと研究したからとて、何等結果を齎らさない、却て聖者たちに迷惑さ

せるのみだらう。「神は紛爭の神でなくして平和の神である」。(コリント前書、一四ノ三三)然り、その平和は互の自尊に由るのでない、眞の謙遜に由て成立つ故である。

三

或は、人その熱心なる敬慕で此に引付けられ、又は彼にその愛情を寄せるのである。けれ共之は畢竟、神的でなくて人間的とすべきである。

我は是れすべての聖者たちを造つたものである、之に聖寵を與へたものである、又光榮を授けたものである。

我はその行ひを知つて居た、我はよきたまものの惠をもて彼等を迎へたのだ」。(詩篇、二一ノ三)

我は世の創始の以前に「豫め」、(ロマ書、八ノ二九)我の愛するものたちを「知つてゐた」。「我は此の世の中より之を擇出した」、(約翰傳、一五ノ一六)我の愛するものたちを「豫め」我を擇んだものでない。

我は之を聖寵に由て召した、仁慈に由て惹付けた、我は之を種々の誘惑の中より連出した。

我は浩大なる慰安を之に注いだ、我は不撓の心を之に與へた、我はその忍耐に報いて天の冠冕を之に戴かせた。

四

我は首位の者と末位の者とを知る。我はすべてを皆無量の愛を以て抱擁する。

我はすべての聖者たちの間に讃美されべきである、然り、我は各自の間に一切の諸物にまさつて祝福され又崇敬されべきである。そは、此等は皆何等その自己の前功に依るのでなく、而も我が

豫め定めて、斯くも光榮もつて大ならしめた者である。

此の故に我の聖者のいと小き者一人をも輕蔑するは、亦そのいと大なる者をも敬はないのである、是れいと小なる者もいと大なる者も、皆我の造りし者なればである。

又、此等の聖者の誰をなりと貶す者あるならば、是れ我を貶すにして、又天の御國に居る他のすべての者を貶すのである。

すべての聖者は皆愛の絆で繋がれて一つであり、同じ感情同じ意向であつて、そして互に一體となつて相愛して居る故である。

五

されど、尚もつと崇高なるは、卽ち此等の聖者たち皆、その自己、或は自己の功績よりもまさり、我を一層に愛することである。

是れ、此等みな己れの上に超越し、又自己の愛の外に離脫して、全然我の愛に徹底し、そして又その中に安息を享けてる故である。

して、誰人も之を離叛せしむることできない、又壓抑することもできない。まこと、皆永遠の眞理に滿たされて、永久不斷の愛の火に燃えて居るのである。

故を以て只自分の快樂を愛するのみ、外に何も知らない肉的な自然の人間が、敢て聖者の事に就て爭論するなど、宜く默すべきである。要するに、自分の好不好に從て褒貶するに過ぎない、永遠の眞理を悅ばす所ないのである。

此樣な事をするその多くは無識であつて、殊にその最多數は、天の光明に照らされた事殆どなく、完全なる靈的愛を以て他を愛するなど、之を知るさへ稀れなのに由るのである。

此等の人たちは多く、尚その本然の愛情や人間の友情などに由り、或は此に或は彼に惹付けられ、そして自分が低い地上に於て感ずる如く、亦天の事に就ても想像するのである。

されど、その不完な者の考へる所と、及び上よりの啓示を受けてその心の照らされた人々の思索する所とは、到底比較も出來ない懸隔が存じて居る。

六

七

されば、子よ、そやうな好奇な、そして汝の智慧の及ばぬ事には愼んで心を惹かれるな。而も、むしろ神の御國にて、そのいと小さき者なりとも汝の呼ばれることのできるために汝は之に心を傾注すべきである。

で、よしや人ありて、誰が天國で他よりもすぐれて聖者である、又は偉大とされると知つた所で、もしもそれを考へて、その人益々我の前に謙遜し、そして益々わが名の讃美を頌へるやうになるでないならば、その知識もその人に何の用をなすだらう。

神にもつと御旨に叶ふことは、徒らに聖者たちの大小優劣を議論するよりも、むしろその人自ら、如何に己れの罪の大なるか、又は如何に己れの德の小なるか、又如何にその聖者たちの完全なりしに較べて自分の劣れるか、之を考へることにある。

無益な穿鑿に耽つて、穴勝聖者たちの祕密を探らうとするよりも、却て敬虔なる懇請もつて、涙を流してその聖者たちに對し、謙遜にその光榮ある仲介の祈禱を哀求せよ。是れ汝にもつと良いのである。

八

若し人々が滿足して、そしてその空なる議論を差控ゆるなら、その聖者たちは、却て非常に滿足して歡ばれるであるだらう。

彼等は自分の功績に誇らない、何等の善も之を己れに歸せしめない、只一切を我に歸せしめる。我には是れ我の無量な愛よりしてすべてを之に與へる者なるが故である。

彼等は天的至上の愛と溢るる歡喜とに滿たされてる、故を以て光榮何等之に缺くる所ない、何等の幸福足らざる所あり得ない。

で、すべての聖者たち、その光榮益々高まるに從ひ、益々己れに謙遜であつて、そして益々我に接近し、又益々親愛されて居るのである。

聖書の中にも斯う錄されてる。「彼等は神の前にその冠冕を投出し、羔羊のみ前に平伏して、代々に限りなく活きたるものを禮拜し奉る」（默示錄、四ノ一〇）と。

九

人は多く誰が神のみ國で大なりやと尋ねたがる、而も自分はそのいと小さき者の中にさへ算へられるに足らないことを知つてゐない。

天にあつては皆偉大なのである、故を以てその中でいと小なる者であることさへ、既に偉大な事である。すべては皆神の子たちと呼ばれ、又然あるであらう故である。

「小さき者は千とならん、又百歳の罪人も死すべし」（イザヤ書、六五ノ二〇）と。

されば、天のみ國にては誰か大なるやと弟子たちの聽いた時、之がその答へられた言であつた。

「もし汝等翻りて幼兒の如くならずば天國に入るを得じ、されば誰にても此の幼兒のごとく己れを卑うする者は、これ天國にて大なる者なり」（馬太傳、一八ノ三―四）と。

一〇

禍なるかな、幼兒と共に甘んじて自ら謙卑るを屑しとしないその人よ。天のみ國の低い門戶は之がその中に入るを容許されぬだらう。

又、禍なるかな、己れの慰安に耽る此の世の富む者よ」、（路加傳、六ノ二四）貧き者が神のみ國に入る時は、己れは外で悲み嘆きて立つて居るだらう。

謙遜なる者よろこべよ、貧しき者うれしめよ。若し只「眞理に從て」（約翰第三書三節）歩むなら、神のみ國は汝たちのものであるだらう」。（路加傳、六ノ二〇）

第五十九章

すべての希望と信賴とを只神に置くべきこと

一

主よ、此の人生にあるもの、何に私が信頼せられよう、天が下に見ゆるすべてのものの中に、何が私の最大慰安であるだらう。

主なる、私の神よ、而も是れ爾自身にましまさずや、爾の仁慈は洪大無量であり給ふ。

爾を離れて何處にか私に善事あつたらう、或は爾が共に在して何の時にか災禍私にあり得たらう。

爾を離れて私の富まんよりも、むしろ爾の爲めに貧しからんを私は望ましや。

爾を離れて天をわが物とせんよりも、むしろ地上にあつて爾と共に私はさまよひたい。

爾の在す所私には是れ天であつて、そして爾の在さぬ所是れ死である、地獄である。

爾は私に必需である、その故に爾を慕うて私が呻き叫び又祈るも已むを得ない。

要するに、機會が起つて、私が援助を是非要する時、誰に能く信じ得られよう、只唯一の爾に於てのみ、他に全然ないのである。

爾は私の希望であり、又私の慰安者であり、すべての中の最も信實なる者であり給ふ。

二

「人は皆唯己れの事のみを求む」。(ピリピ書、二ノ二一)然るに爾はひとり私の救ひと進みとを望みて、そしてすべての事皆之を轉じて私に善と爲し給ふ。

或は又種々の誘惑艱難に曝し給へども、而も皆私を益せんために爾の定め給へるものにして、爾は千百の仕方に於て爾の愛する者を常に試錬し給ふのである。して、その試錬に於ても、亦天の慰安を以て私を盈たし給ふその時と同じく、私共はやつぱり毫も増減なく、爾を愛し又崇めまつらねばならぬのである。

三

故を以て、主なる神よ、爾に私はすべての希望と信賴とを置きまつり、又爾にすべての艱苦と憂悶とを披瀝し奉る。げに爾を外にしては、何を私の見廻すとも、すべて皆力なきもの恆なき者のみ見る故である。

されば、若し爾御自身私を助け、支へ、強め、又慰め、又教へ、又護り給ふでないならば、多くの友も益する所ない、強い後援も頼みとせられない、或は如何なる智者も何等惑を解いて呉れるでない、學者の書物も慰安を教へない、又は如何に財産貴いとも私に自由を與へない、又如何に閑靜な又樂い場所であらうとも、私を安泰ならしめる事ないのである。

四

して又、すべて私共の平和と幸福とに資すると思はれるその事物も、爾在さずしては皆何等の價なく、又何等の幸福をも眞に與ふることないのである。

故を以て、爾はすべての善事の窮極であり、又生命の絶頂であり給ふ、又智慧の言辭の深き泉であり給ふ、そしてすべてに優りて爾に於て望むこと、是れ爾の僕等の最も力ある慰安である。

「私の眼は常に爾に向ふ」、(詩篇、一二五ノ五)私の神よ、「もろもろの慈悲の父よ、爾に私は信賴し奉る。

願くは天の祝福もつて私の靈を祝し又浄めたまへ、即ち爾の聖なる宮居とせられて、爾の永久の光榮此處に御座ましつ、御稜威かがやく此の神殿に爾の嚴かなる御眼を濱すが如き事、何等復見出されないためである」。（コリント後書、一ノ三）

願くは又爾の大なる仁愛と及び爾の豐かなる慈悲とに從ひ私を顧みて、この「死の蔭なる地上に」（イザヤ書、九ノ二）久しく漂浪する爾の憐れな「僕の祈りを聽きたまへ」。（ダニエル書、九ノ一七）

そして此の朽つべき人生のあまたの危險の間に、爾の僕の靈を庇護し又保護して、更に爾の聖寵を之に伴はせ、平和の道を導きて永久なる光明かがやく國土に到るを得させ給へ。

アーメン。

第四巻　最も嚴かなる聖體の祕蹟

聖體拜領に關する最もかしこき勸めの聖訓

第一章

如何なる恭敬もつて基督を拜領しまつるべきかのこと

弟子の聲

一

基督の御聲

主は言ひ給ふ。

「すべて勞する者、重荷を負ふ者、われに來れ、われ汝らを休ません」。（馬太傳、一一ノ二八）

「わが與ふるパンはわが肉なり、世の生命のために之を與へん。」（約翰傳、六ノ五一）

「取りて食へ、是れ汝らのために付されたる我の體なり、わが記念として之を行へ」。（馬太傳、二六ノ二六。コリント前書、一一ノ二四）

「わが肉をくらひ、我が血をのむ者は、我に居り、我もまた彼に居る。」（約翰傳、六ノ五六）

「わが汝らに語りし言は靈なり、生命なり」。（約翰傳、六ノ六三）

永遠なる眞理の基督よ。上記その宣はれるや、その時一でない、又その錄されるやその場所一で

ない、而も亦皆爾の御言なのである。

是れ、爾の、然り爾の眞なる御言である。して感謝と信仰ともつて私はすべて之を拜受すべきである。

是れ爾の御言であつて、爾が之を宣うたのである、而も私のものであつて、私の救のために之を與へ給うたのである。

私は悦んで之を爾の御口より受取りまつる、之を深く私の心に刻込まんためである。

げに大なる恵みのみ言や、甘美と愛とに満ちて私を奮起させる。けれ共自分の罪念私を恐怖せしめ、又その大なる祕義を受けんとするも、私の不純な良心之を阻害するのである。

爾の御言のその甘美私を招き寄せる。されど多くの悪根私に存じて、それが重荷となつて私を苦しめる。

二

もし爾と關係せんと思ふなら、私よろしく爾に信頼して接近しまつるべきである。又もし永遠の生命と光榮とを得んと欲するなら、宜く爾の不朽の養滋を受けまつるべきである、して之が爾の命じ給ふ所である。

「凡て勞する者、重荷を負ふ者われに來れ、われ汝らを休ません」（馬太傳、一一ノ二八）と爾は宣うてる。』

嗚呼、いかに罪人の耳に響いて、此のみ言のうれしくある、是れ私の主なる神よ、爾が之を以て乏しき者貧しき者を、爾のいと尊き聖體の拜領に招き給ふのである。

されど、主よ、私は何者なれば、敢て自ら恃んで爾に近づき奉らう。

見よ、「諸の天の天も爾を容るるに足らざるに、」（列王紀略上、八ノ二七）而も爾は「すべてのもの我に來れ」と宣りたまふ。

三

この優渥極まる仁愛と、慈恩洪大なる招待とは、抑も何の聖旨に由るのだらう。私は一の善も、もつて恃みとし得べきもの、「自分の心に覺えない」。（コリント前書、四ノ四）どうして敢て爾の御許に行かれようか。

爾のいと深き慈愛の御顔を冒して反きまつりしも度々である。どうして私の棲家に爾を迎へたてまつらう。

天使大天使も崇め尊びて、聖者も義者も畏み敬ふに、爾はなほ「すべてのもの我に來れ」（馬太傳、一一ノ二八）と宣り給ふ。

然り、主よ、爾が御自身宣ふにあらざれば、誰か之を眞なりとして信ずべき。

又、爾の命じ給ふにあらざれば、誰か敢て近付きたてまつらんと思ふべき。

見よ、「義しき人なる諸亞」（創世記、六ノ六）は、「僅か一」（彼得前書、三ノ二〇）の人たちと共に救はれんがために、その方舟を造るに一百年骨折りた。然らば私は世界の造り主を謹んで迎へ奉らんためである。どうして僅かの一時間でその準備ができようか。

四

爾の偉大な僕で、又特殊な友であつた摩西は、朽ちざる木を以て聖櫃を作り、之を純金もつて被うた、その中に律法の石板を藏せんためであつた。然るに朽つべきこの人間の私は、かしこくもその律法の創作者であり、又生命の授與者であり給ふ爾を受納れまつらんとするのである。どうしてそれが容易にできようか。（申埃及記二五章及二十六章）

イスラエルの國王中最も聰明だつたソロモンは、爾の御名を崇めるために、七年掛つて、莊嚴なる神殿を建築した。（列王記略上、六ノ三八）

そして、王は八月の間その獻殿の祭典を擧行した。即ち千の平和の犧牲は捧げられ、そして契約の聖櫃は喇叭の響と歡呼の聲とに伴はれて、豫め準備せられたその場所に、いと嚴かに安置された。（列王紀略上、八ノ六六）

然るに、私は最も不幸な又哀れな人間で、そして殆ど片時も爾に熱心もつて過すことできない者である。で、どうしてその私が爾を自分の家へ迎へまつることのできるだらう。願くはげに私が、只一度片時なりとも爾に仕へて、そして之をそれにふさはしく送りて見まほしや。

五

嗚呼、私の神よ、此等の人たちは皆爾を悦ばせまつらんため、如何に多くの努力をしたことであるだらう。

然るに、噫、私の爲す所なんと微少なるや。私が聖體の拜領に自ら備ふるに、之に費す時間のなんと短きや。

之に心思が凝らされること全く稀である。すべての散亂より淨め得られること最も稀である。確かに生命を與へます神なる爾のみまへに於てである、不淨な思念が何等起つてはならないのである、又何等有形な物が心を占めてはならないのである。是れ私の迎へまつる賓客は天使でない、その天使たちの君なる主御自身でありますが故である。

六

殊に、ただその付屬物を藏した契約の聖櫃と、その言ひ現はせぬ諸德を具備した完美な聖體との間には、又來るべき犧牲の表徵だつたあの律法の上のそれと、すべての昔の犧牲の完成なる爾の聖體の眞なる犧牲との間には、その差極めて大なる懸隔があるのである。

さらば、何故私は爾の尊きみまへに出でんとして、もつと熱心燃え立たないのであるだらう。あの昔の先祖たちや預言者たち、又は王たち君たちは、皆一般の人民もろ共に、神の儀式に向てその熱烈なる愛情を表示したのである。然るになぜ私ももつと心力を傾注して、爾の聖なる奥義を受くべき支度をせぬのだらう。

七

最も敬虔であつた王ダビデは、その全力を以て神の御櫃の前で舞ひ踊つた。むかし先祖たちに爲し給ひし恩惠を憶出すからであつて、王は卽ち諸種の樂題を製し、詩篇を作り、之を歡喜を以て歌唱せしむることにした。王は又聖なる靈の恩寵に感動せられて、屢ば自ら堅琴執つてその歌を彈じ、イスラエルの人民を教へて全心込めて神を讃美せしめ、又毎日その玲瓏の聲を合せて以て

祝福頌榮せしめたのである。（サムエル後書、六ノ一四、）もし當時契約の聖櫃のまへに於てさへそのやうな敬虔が致され、又神を讃美の記念が行はれたのであるならば、今私と及びすべての基督信徒たるもの、最も尊き基督の聖體を拜領するのである、此の祕蹟の前に臨んで如何に多大の敬畏と恭虔とを抱くべきであるだらう。

八

多くの人々は諸所を驅廻つて聖者たちの遺物を見物し、そしてその特行談に耳を傾けて驚嘆する。又は壯大なる寺院の建築を仰いで、そしてその中の絹や黄金で包まれてる、その聖者たちの遺骨に接吻する。

然るに、見よ、この祭壇の上には、私の神なる聖の聖なるもの、人類の創造者にして、又天の使たちの君なる爾が私と共に居ますのである。

然るに、斯やうな人は往々好奇の心に驅られ、そしてまだ見ぬ珍奇な物に眼を走らしたがる、是れ殆ど進善の效果を齎らすことないので、殊にそれが眞の痛悔の念なしに、徒らに觀覽の遍歷となるに至つて、最も然りである。

されど、此所の祕蹟の祭壇には、私の神でおはし、又人でおはす基督耶蘇の正しくいますのである。で、もし私共がふさはしく、そして敬虔もつて拜領しまつるならば、卽ち永遠なる救ひの效果を、私共は豐かに受けることできるのである。

そして、之に私共が羞付けられるのは、卽ち輕佻の心や、好奇の念や、又は世俗的の情に由るのでなく、而も堅固な信仰と敬虔な希望と、及び誠實なる愛とに由るのである。

九

嗚呼、世界の造り主なる見えざる神よ、爾が私共に仕たまふその聖業のいかに不思議なる。爾の擇びしものにこの聖なる祕蹟に於て爾の御自身を授け給はんとするのである。その爾の聖旨のいかにうれしくも又ありがたき。

是れ全く人智の上であつて、殊更に敬虔なる者の心を惹付け、そしてその愛心を燃立たせるのである。

そして、その全生涯を己が修德に委ねんとする眞の信者らが、この最も仁慈なる祕蹟に由て、その敬虔の報なる大なる聖寵と、及び善に進み德に向ふその愛心とを嘗ば受けるのである。

一〇

嗚呼、驚くべき、而も玄なる玄なる祕蹟の聖寵かな。これ基督に忠なる信者のみの知る所であつて、信仰なきもの、又は罪の奴隸となつてる者たちの經驗できない所である。

この祕蹟に由て、聖寵が靈に賜與されるのである、又罪より生じた汚れが綺麗になるのである、又失はれた精神の力が囘復されるのである。

して、時に此の聖寵の力の大なるや、そが齎らす信念に充滿して、之に由て、啻に心意のみでない、身體虛弱な人さへも、轉た强健を覺えるのである。

一一

されど、極めて悲しく又憐れなは、卽ち自分の冷淡と怠惰とであつて、そが爲めに基督を拜領しまつるに漕みても、私共の愛心もつと之に惹付けられないことである。而も私共救はるべき者の希望と功績とは、全然之にあつて存立するのである。

是れ、その御自身卽ち「私共の聖化であり、又救贖」（コリント前書、一ノ三〇）であり給ふ、又私共行旅人の慰安であり、又聖者たちの永遠の福祉であり給ふ故である。

されど此の天を歡喜せしめ、又全世界を保持する、生命賦與の奧義に對し、多くの人がその注意を向けることの稀なのは、げに甚だ悲むべしとなすのである。

あな、人の心の矇昧なる、頑固なる、この得も言はれぬ賜物に卽も敢て注意を與へずに、却て每日之に慣用して、遂に全く冷淡に之を考へるにさへ至つて了はふとは、抑も亦何たる事であるだらう。

二

されど、もし此のいと聖なる祕蹟が全然只一箇所のみで擧行せられるものであり、又此の世界の中只一人の司祭に出てのみ司られるものであるならば、此の神の至玄なる奧義が擧行せられるのを見るために、いかなる熱望もつて人々がその一つの場所に、又その一人の神の司祭の許に引寄せられるであるだらう。

然るに今は多くの司祭は出來た、又多くの場所に於て基督はささげられる。是れ聖寵と人に對する神の愛とが益々多く示される所以であつて、それ故地上到る處に、この聖體拜領の祕蹟の普及

を賀するのである。

爾に感謝し奉る、仁惠ふかき耶蘇よ、永遠なる牧者よ、爾はその尊き聖體と聖血とに由り、勿體なくも此の哀な又流浪者たる私共を休養させんとして、そして此の至玄の祕蹟に與からしめんため、自ら爾の御口を以て私共を招いて斯く宣うた、「我に來れ、すべて勞苦して重荷に苦む者よ、われ汝を休ませません」。（馬太傳、一一ノ二八）と。

第二章

神の大なる仁慈と愛憐とは聖體の祕蹟に於て人に示されること

弟子の聲

一

私は、主よ、爾の大なる仁慈と愛憐とに信賴して、病者である、故に救の主に、飢ゑて居る渴いて居る、故に天の王國に、僕である、故にその主人に、又造られた者である、故にその造り主に、そして憂に沈む者である、故に私の慈悲なる慰安者に近づき奉る。

されど、爾が私に來ますとは「何によりてか私之を得し」。（路可傳、一ノ四三）私は何者ぞ、自ら御身を以て私に授け給ふとは。

どうして此の罪人が爾のみまへに敢て出られよう、又どうして爾が己を下げて此の罪人に來ます

だらう。

爾は爾の僕を知り、又之が爾のこの眷顧を受くるに足るべき一の善事もないのを知りたまふ。故を以て私は自分の賤劣を告白し奉る、爾の仁恩を承認し奉る、爾の徳惠を讃美し奉る、又その絶大なる慈愛の故に爾に感謝をささげ奉る。

是れ、爾のこの仁愛は、之を爾は只御自身の爲めにのみ行ひ給ふので、私の功績の故でない。その仁愛益々私に明かと爲り、愛心ますます豐かに私の胸に充たされて、又ますます完全に私の謙遜を加へしめんためである。

そして、之が爾の聖旨に適ふのであつて、即ち期く爲せよと命じ給うた。で、私も爾の仁惠をよろこんで、ひたすらに罪惡私を妨げるなかれかしと願ふのである。

二

嗚呼、いとも甘しき、又いとも仁慈な耶蘇よ、爾の聖體を拝領し奉るそのために、如何なる敬畏と感謝と又不斷の讃美と爾に捧ぐべきであるだらう。まこと、その尊嚴さ、誰も人間之を説明し得る者ないのである。

されど、此の尊き祕蹟に臨んで、主のみまへに近づき奉るに當り、何を私の考ふべきであるだらう。私は之にその當然の崇敬を與へることできない、而も之を虔みて拝領し奉らんとは私の切なる願である。

只全然己れを爾のみまへに卑下らしめ、そして仰いで爾の無限の仁愛を頌揚しまつるべきのみ。

それより以上私に何の善きことあるだらう、又何の救を高むることあるだらう。私の神よ、爾を讃美し奉る、又永久に頌揚し奉る、又已れを輕蔑して、私のどん底なる賤卑を以て爾に屈服し奉る。

三

見よ、爾は是れ聖の聖なるものにましまする、而も私は罪人の中にもその滓である。見よ、爾は聖顔を私に向け給ふ、然るに私は爾を仰ぎ見るにも足りない者である。見よ、爾は私に臨み給ふ、私と共にましますことを欲して、私を饗宴に召し給ふ。

爾は私に啖はすに天の食物を以てせんとし給ふ、然り、「天の使のパン」（詩篇、七八ノ二五）である。而もこれ爾の御自身に外ならずして、即ち「天より降り給ふ生命のパン」（約翰傳、六ノ三三）であり、又世界に生命を與ふるものである。

四

見よ、之より愛は生じ來つて、その仁惠の如何に照り輝くぞや。さればその故にぞ、如何に大なる感謝と讃美とが爾に捧げられべきであるだらう。

嗚呼、此の祕蹟を創設せし爾の叡慮いかに難有き、いかに有益なる。又爾の御自身もつて食物として與へ給ふその饗應の、いかにうましく又よろこばしき。

嗚呼、主よ、爾の御仕業の如何に歎美すべきである、爾の能力の如何に弘大なる、爾の眞理の如何に不可思議幽妙なる。

是れ爾が物言ひ給へば、卽ち萬物成る。又爾が命じ給へば、卽ちその事行はれる故である。（詩篇、一四五ノ八ノ一）

五

私の神よ、爾は眞なる神にましまして、又人であり、そして此の少許のパンと葡萄酒との形質の裡に含まれ給ひて、而も之を拜領する者食へど竭きざるその事、是れ驚異とすべきであつて、而も信ずるに足るのである、そして全く人智を凌駕する所である。

爾は萬物の主であり、何の乏きものあり給はぬ、而も尙この祕蹟に依て爾は私共と共に宿らんと欲し給ふ。

この神祕の聖奠、是れ爾が專ら爾の榮譽と永久の記念とのため設け給へるのである。私が歡喜と潔き良心と以て屢ば之を擧行し、又私の永久の救として之を受くるを得るために、願くは私の心と身とを保ちて汚れなからしめたまへ。

六

私の靈よ、歡べや、この涙の谷にありながら、尙斯も貴き賜物と特異な慰安とが汝に貽されてあるのである、汝之を感謝せよ。

是れ、汝がこの神祕を想出して、そして基督の聖體を拜領する度毎に、卽ち汝は自分の罪の贖を行ふのであつて、又基督のすべての功績に與かる者となるのである。

そは、基督の慈惠は決して減少せられない、又その偉大な贖罪は決して銷盡せられることないのである。

で、汝は之に汝の心を豫備させるため、常に己れの心を新たにし、又此の救の大神祕に注意して、之を仔細に熟慮せねばならぬ。

そして汝が禰撒を擧行し、或は之に參列する時は、宛も基督がその同じ日を以て初めて童貞の胎内に降つて人と爲り給ひし如く、或は十字架上に掛けられて人類のために受難し、そして死に就き給ひし如く、之を汝に至嚴な、新しい、又歡喜の瞬間として考へねばならぬ。

第三章

屢ば聖體の拜領に與かるは有益なること

弟子の聲

一

見よ、私は、主よ、爾に近づき奉る、爾の恩賜に由て私の益せられ、又「神よ、爾の仁慈を以て貧き者たちに備へ給へる（詩篇、六八ノ一〇）爾のその聖なる饗宴に與かつて、私の歡喜せんためである。」と言ひ給ふ。

見よ、爾にあつてのみ、すべて私の望み得べきもの、又望まねばならぬもの、皆存在するのである。爾は卽ち私の救であり、又罪の贖であり給ふ、又希望であり、力であり、飾りであり、誇りであり給ふ。

故を以て、願くは今日「爾の僕の靈を悅ばせ給へ」。主なる耶蘇よ、「私の靈は爾を仰ぎのぞむ」

（詩篇、八六ノ四）のである。

私は今爾をうやまひかしこみて受領し奉らんと希ふ。爾を私の家に案内して、ザアカイと共に爾に祝福せられる者と爲り、アブラハムの子たちの中に算へられんと切望するのである。（路可傳、一九ノ九）私の靈は爾の聖體を欲求し、私の心は爾と一つとならんことを願望する。

二

願くは爾を私に授け給へ、さらば私は滿足する。爾を措いて慰安は外に全くない故である。爾がましまさずして私は存在できない。爾の來臨なくしては私は生きられない。

この故に、私は屢ば爾に近いて、そして私の救の方劑とし爾を拜領せねばならぬ。天よりの糧の不足して、「怖らく途にて疲れ果てん」と、（馬太傳、一五ノ三二）之なきがためである。

なぜなら、最も慈悲に富みます耶蘇よ、爾は曾て人々に「說教へ、又多くの病める者を癒した」（馬太傳、一四ノ一四）後に宣うた、「我は彼等を飢ゑしままその家に歸らしめじ、途にて疲れ果てん」（路可傳、九ノ三五）と。

されば、私にも亦同じ仕方もて爲し給へ。すべて信ずる者を慰めんために爾はこの祕蹟の中に御自身を遺し置き給ふ故である。

卽ち、爾は靈を養ふ甘美な食物にておはします。爾を喫ふに足るその者は永遠の光榮に與かり、又之を承繼ぐ者となるだらう。

私は度々躓いて罪を犯すのである、又忽ち冷却して信念衰退するのである。さればその私に取つては、屢ば祈禱し懺悔し、又爾の聖體を拜領し、そして自ら新たにし自ら淨め、又自ら燃立たせること、是れ極めて必要である。若し永く之を廢して置くならば、私の聖なる決心も怖らく消失せられて了ふだらう。

三

「そは、人の心は幼き時より惡に傾けばである。」（創世記、八ノ二一）で、もし神よりの靈藥に由て救治せられるでないならば、人は忽ち益々罪惡に沈んで了ふだらう。

故に聖體の祕蹟は惡より人を救出し、そして善に向て力を強くする。

然るに、もし私が現在この祕蹟に與かり、又之を擧行して居てさへも、斯く屢ば懈怠に陷り冷淡に流れるのであるならば、もし私が此の靈劑を取らずして、その偉大な神助を求めないとせよ、然らば果して如何なる事に私はなるのだらう。だから、假令私は每日之に與かるに足らず、又之を擧行する覺悟が能く出來てゐないとしても、而も時機ある每にこの神祕の儀式に列し、そしてその大なる聖寵の分與を受けたいと、是れ努めんとするのである。

で、爾を離れて此の死すべき肉體に漂浪うてるその間は、すべて忠實なる靈魂の主なる慰安はい、卽ち屢ばその神を憶ひ起して、そして敬虔なる心にその愛しまつる者の聖體を拜領することである。

四

主なる神よ、爾はすべての靈を造りて、又之に生命を賦與し給ふ、而もその尊き爾が畏くもこの

哀れな靈に臨みたまひ、そして爾のすべての神性人性を以てそが飢渇を飽かさせ給ふとは、嗚呼、爾の優渥なる仁愛の如何に驚くべきであることよ。

嗚呼、爾、主なる神よ、爾を敬虔もつて拜領し、そしてその爾を拜領するに依て靈的歡喜に滿たされるその人は、げに何たる幸ひの精魂ぞや、何たるめでたき心靈ぞや。

その人是れ、嗚呼、如何に大なるその主君を迎へるのであるだらう、如何に愛するその珍客を請ずるのであるだらう、如何にうれしきその同輩を受けるのであるだらう、如何に信義あるその友人に會ふのであるだらう、如何に立派な貴ぶべき、而もすべてにまさつて戀慕ひ、又すべてに超えて愛し焦れる、その配偶を抱擁するのであるだらう。

いとも美しき、私の愛しまつる者よ、天地とその中の森羅萬象、皆爾のみまへにありては默させよ。そは如何に讃むべきもの、又は美麗とするもの之が有するとも、只是れ爾のめぐみに出たる賜物のみ、爾の完美に到底及ぶべくはないのである。爾の「御智慧は實に無量であり給ふ」。（詩篇、一四五ノ七）

第四章

聖體を敬虔に拜領する者には多くの善事與へられること

弟子の辭

一

主なる、私の神よ、私が克くかしこみ虔みて爾の偉大なる祕蹟に近づき得んためである、願くは「爾の美きめぐみの賜物」（詩篇、一ノ三、二）をもて爾の僕を迎へたまへ。願くは爾に向て私の心をはげまし、又私の重き遲鈍を取去りたまへ。爾のその甘美さ、恰も湧きて竭きざる泉に於ける如く、此の祕蹟に滿溢れて藏れて居る、之を私の靈に味ふためである、願くは「爾の救を以て私に來りたまへ」。（詩篇、一ノ三、一）その大なる玄祕に徹せんためである。又私の力を強めたまへ、搖がぬ信仰もつて之を信ぜんためである。

そは是れ爾の御仕業であり給ふ、人間の企及する所でないのである。又爾の聖なる制定であり給ふ、人間の發明ではないのである。

又、如何なる天使の叡智を以てするも達し得ざる所である。ましてその他の者之を捉へて理解し得るなど到底あるべき筈でない。

殊にはこの「塵と灰」（創世記、一八ノ二七）なる、碌でもない罪人の私が、どうして此の高遠な聖なる奥義を探り、又探らへることのできるだらう。

二

主よ、私は純なる心と、善なる堅固な信仰とを以て、又爾の命に從ひ、希望と崇敬とを凝らして爾に近づき奉り、そして此所にこの祕蹟の中に、爾は神とし又人として存在ましますことを眞實に信じたてまつる。

故を以て、私が爾の聖體を拜領し、又私自身愛に於て爾と一つと爲り奉らんとす、是れ爾の聖旨である。

されば、私は爾の憐憫を希ひ又ひたすらにこの聖寵を私に賜はることを願ひ奉る。私が全く爾に融合して、又爾の愛に浸透せられ、復他の慰安を私に受入れべき何等餘地なきまでに至らんためである。

然り、この最高最貴の祕蹟たる、是れ靈魂肉體兩者の救濟である、すべての靈的憂思の醫藥である、又之に由て私の邪惡は匡される、情慾は矯められる、誘惑は打克たれる或は滅らされる、聖寵一層に注ぎ込まれて、萌え初めた善德は、いやが上に加へられる、又信仰は固められる、希望は强められる、そして愛は燃やされ、或は擴められる。

三

まこと、爾が與へたまうた恩惠は多量であつた。今も尙、屢ば敬虔もつて聖體を拜領する爾の愛する者たちに、この祕蹟に由りて爾は豐かに恩惠垂れ給ふ。私の神よ、私の靈魂の擁護者であり給ふ、又內的慰安の唯一の賜與者であり給ふ。

爾は卽ち、人々種々の艱苦に出會ふや、之に多くの慰安を注ぎ給ふのである、然り、その沮喪落膽するや、之を引上げ給ひて爾の保護に希望を置かしめる。或は新たに聖寵垂れ給ひて、之を心的に養ひ又啓發する。さればである、最初は憂慮に沈んで、祕蹟拜受の以前には生きた愛情さへ感じなかつたその者が、以後にはその天的の食物飲料もつて囘復せられ、そして自ら善に向て益

益敬まるを知るのである。

卽ち、爾がその擇びし者を斯く扱ひ給ふのは、是れその者たちが、如何に己れに出るもの皆劣弱であつて、而も如何に大なる恩惠と聖寵と爾より湧出るか、之を眞に認識し、又明かに體驗せんためである。

然り、その者たち己れより出ては冷淡で、頑固で、又信念乏くある。されど、爾に由て熱烈となる、快活となる、又信念篤き者となるのである。

そしてそれよりその多少の甘美を持歸らぬものあるだらうか。

或は、誰か謙遜に甘美な泉に近づいて、そしてそれより少しもその熱氣を受ぬものあるだらうか。

或は誰か盛んに燃ゆる火の傍に立つて、そして、爾は卽ちその常に滿ちて溢れる「泉」(イザヤ書、一二ノ三、)であり給ふ、又「一絕えずに燃えて」(利未記、六ノ一二)そして決して熄まざる火でありたまふ。

四

で、もしその滿溢れてる泉より私が思ふさまにその甘美を汲み、或は飽足るまで之を飮むを許されないとしたとても、少なくも之を導く天的小管のその孔に私の口を宛てて、そしてそれより滲み出る小許の涓滴を吸取りたや、私の渴を潤して、全く乾き死することのなからんためである。』

又は、假令私があのケルビムや又セラビムの如く、全然天の焰に燃立つことできないとも、なほ謙遜に生命與ふる祕蹟を拜受しまつりて、之に由て神的烈火のその微小の焰をなりと私に贏得ん

ためである。して私は常に敬虔を守つて、そして私の心を之に準備したいと努力するのである。』

されば、最も聖なる救ひ主、慈悲なる耶蘇よ、私に何なりと足らない事ある、之を爾の仁慈と恩寵ともつて私のために補ひたまへ、爾は寛恕にましまして、すべてのものを爾に召して宣うてる。

曰く、「すべて勞苦して重荷に苦む者よ、我に來れ、われ汝らを休ません」（馬太傳、一一ノ二八）と。

五

然り、私は「額に汗して」（創世記、三ノ一九）勞苦する、心の憂愁に惱まされる、罪の重荷に窘まれる、訪惑に苛められる、多くの邪念に絡まれ又揉立てられる。而も誰も助けてくれるはない、誰も解放して呉れるはない、又誰も救濟して呉れるはない、只、爾、主なる神よ、私の救の主よ、只爾のみ、爾に私は自分と自分のすべてのものとを任せ奉る、願くは私を守りてそして永遠の生命に導きたまへ。

願くは爾の御名の讃美と光榮とに私を受納れたまへ、爾はその聖體と聖血とを以てさへ、之を食物とし飲料とし私に準備し下さつたのでましまする。願くは主よ、私の救の神よ、私に許して屢ば爾のこの祕蹟に與かるを得、そして之に由て私が敬虔の熱情を益々增加させたまへ。

第五章

祕蹟の尊きこと及び司祭の地位のこと

愛しまつる者の御聲

一

たとへ、汝、天使の如くに純潔であつて、又パプテスマの聖約翰の如くに聖者であらうとも、尙まだ以て此の祕蹟を拜受し、もしくは之を扱ふに足りないのである。

そは、人荷くも此の基督の祕蹟を聖別し、又は之を扱ひて、そしてその食物とし、「天の使のパン」（詩篇、七八ノ二五）を取らんとするのである、その事是れ人間の功績にては許されてないのである。

この祕蹟や至嚴である、そして司祭の位や至尊であつて、天の使にだも許されない權能之に與へられてあるのである。

只是れ聖會正式の敍任を歷たるその司祭のみがこの聖奠を擧行し、又基督の聖體を聖別する權能あるのである。

されば、司祭は神の司職であつて、神の命令と制定とに從ひ、神の御言を用ゆるのである。勿論、神はその中に在して主働者であり、又眼に見えざる行事者であり給ひ、之にすべてのものその聖旨のままに服從し、又その命じ給ふままを遵奉するのである。

二

故にこの最も尊き祕蹟に於ては、汝宜く汝の感覺や、或は何かの他の見得べき象徵以上、一層全能なる神を信じまつるべきである。

卽ち、畏れと敬ひとを以て之に近づきたてまつらねばならぬ。

「己れを愼み」（テモテ前書、四ノ一六）そして司敎（監督）の「按手に依り」（テモテ後書、一ノ六）汝に授けられたる

「その聖職」（コロサイ書、四ノ一七）の貴きを考慮せよ。見よ、汝は司祭とせられて、その奥義を行ふために聖別せられたのである、宜くその時宜に從て忠實に敬虔に神に供物を獻げ、そして汝に非難せられる餘地なからしむるを努むべし。汝の責務は輕減せられたのでない、却て益々規律の嚴しき羈絆もて縛られたので、又益々汝の聖職の完全を勵むべきである。

司祭はよろしく凡ての善德もつて飾らるべし、そして「善なる生涯の模範」（テトス書、二ノ七）を人に示さねばならぬ。

その平生の言行も尋常一般の人の如くであるな。宜く「天にある」（ピリピ書、三ノ二〇）み使たちや、地上にある高德善美な人と同じであるべきである。

三

聖服纏うた司祭は是れ基督の代理者であつて、その務とするは、卽ち「自分と及びすべての民衆とのために」（ヘブル書、五ノ三）神に祈願し、又謙遜に哀求するにある。

之がその前後に主の十字架の徽章を佩ぶるは、是れ絶えず基督の御受難を記念するためである。卽ちその法衣の前面に佩びる十字架は、是れ孜々として基督の御先蹤を諦視して、そして熱心に之に追隨はんためである。

その背後に記される十字架は、是れ如何なる事を他より受けるとも、之を神のため柔和に忍ばんためである。

その前に十字架を佩びる、是れ己れの罪を歎くためである、又その後に佩びる、是れ同情もつて他人の罪を悼み、又自分の使命是れ神と罪人との仲介なることを知らんためである。

そして、司祭は自分が聖寵と憐憫とを受くるに至るまでは、祈禱と及び聖なる供物とを捧げることを忘つてはならぬ。

司祭がこの聖奠を擧行する時は、卽ち神を崇めまつるのである、又天使らを悦ばせるのである、教會を啓導するのである、又生けるものを援助し、死せる者に安息を與へ、そして己れをすべての恩惠に與かる者とさせるのである。

第六章

聖體拜領に臨まんとして捧ぐべき祈禱のこと

弟子の聲

一

主よ、爾の尊嚴を考へ、又己れの賤卑を顧みては、私は極めて恐懼するのみ、偏へに自ら慚愧するのである。

そは、もし爾に近づきまつらぬなら、是れ私は生命を逃避するのである、又もしその値なくして冒進するならば、私は爾の不興を買ひまつるだらう。

私の神よ、私の援助者よ、又窮せる時の指導者よ、何を私の爲すべきや。」（路加傳、一六ノ三）

願くは爾、「私に正しき道を教へたまへ」。（サムエル前書、一二ノ二三）然り、この聖なる祕蹟に適切なる何かの豫行のあるならば、之を短く私に示したまへ。

私が克く爾の聖體を拜領し、或はこの嚴かなる尊き聖奠を擧行せんとするに莅み、如何に爾にかしこみうやまひて私の心を準備せねばならぬか、之を知るはげに私に有益な事である。

第七章

己れの良心を省察し又善に改まるを決心すること

愛しまつる者のみ聲

一

司祭がこの祕蹟を擧行し、又は之を取扱ひ、或は之を拜受せんとせば、最も先心の無上の謙遜と、つつしみ畏るる崇敬と、又溢るる信仰と、誠心御榮を願ふの念とを以て神に近づきまつらねばならぬ。

孜々として汝の良心を省察し、そして力の限り、眞なる痛悔を謙遜なる告白とに由り、之を清淨潔白ならしめよ。即ち汝に苛くも自ら苛責し、或は自由に神に近づき奉るを妨ぐるもの尚あつて、之を汝の苦く感知するやうな事ないためである。

一切の罪惡、之を汝は悉く斥くべきである、殊に毎日の罪過は尚更に之をなげき又悲めよ。

そして、若し時が許さば、心の奥に於て、すべて汝の情慾より湧いた惡念を神に向て告白せよ。』

二

汝のなげいて悲むべき事數へ竭せない。汝にまだ存ずる肉的俗的な事である、まだ死にやらぬ煩惱斯くも大なる事である、邪慾の發動斯くもまだ旺んな事である。

斯くも五官の衝動に油斷の多い事である。斯くも空なる妄想に多く引絡まれる事である。

斯くも多く外物に傾きたがる事である。斯くも內なる靈の事に怠慢な事である。

斯くも歡笑逸樂に流れ易い事である。斯くも汝が啼懺恨に動き難い事である。

斯くも輕易な生活や、肉的愉快を追ふに敏捷なる事である。斯くも窮屈なる事熱烈なる事を嫌ふことである。

斯くも新奇を聞き美麗を見るに熱心なる事である。斯くも賤しい事卑い事を身にうけるを厭ふことである。

斯くも多くを有たんとして貪婪なる事である。斯くも施すに吝なる事である。斯くも握るに粘の固い事である。

斯くも語るに不用意なる事である。斯くも默するに操守ない事である。

斯くも禮儀に粗雜なる事である。斯くも動作に輕率なる事である。

斯くも飽食に耽ける事である。斯くも神の御言に耳遠い事である。

斯くも休むに氣早い事である。斯くも働くに手緩い事である。

斯くも雑話の夜深しを好むことである。斯くも聖事の通夜に睡氣を催ふす事である。斯くも仕事にその終息をいそぐことである。斯くも注意を之に散らすことである。斯くも勤行の時に怠慢なることである。斯くも聖餐行ふに微溫なる事である、聖體の拝領に熱心でない事である。

斯くも忽ちに心の亂されることである。斯くも默想凝思の稀なる事である。斯くも憤怒に速かなる事である。斯くも他人に不快を抱き易い事である。斯くも人を審きたがる事である。斯くも責むるに嚴しい事である。斯くも順境に歡喜することである。斯くも逆境に沈淪することである。斯くも屢ば多くの善事を志して、そして之を仕遂げる少いことである。

三

卽ち、此等の事と、及びその他の過失と共に、己れの脆弱を浩歎痛尿し、之を懺悔し又泣恨して、そして益々己れが生涯の改善と進德とにで、斯うして全く己れを棄て、誠心誠意わが名の榮のために汝自身を永久の燔祭として、以て汝が心の祭壇に捧ぐべきである。卽ち語を換へて言へば、汝の體と靈魂とを以て忠實に我に委せるのである。

卽ち、斯やうにして汝は犧牲を捧げるために神に近づき奉り、又克くわが聖體の祕蹟を受くるに足る者と爲り得るのである。

そは、凡そ人がその罪の消滅を得ようとせば、只彌撒或はこの聖なる祕蹟に於て基督の聖體をさげまつると共に、亦純潔完全なる己れ自身を以て之を神に獻げまつるにあるのみ。之にまさる貴い又滿足なる獻げ物他に決してないのである。

人もし宥恕と恩寵とを得んとして、我に來る度毎に己れの限りを爲してその罪を眞に悔恨するならば、(主は言ひ給ふ)、「我は活く、われ惡人の死ぬるを悦ばず」、(エゼキエル書、三三ノ一一)却て「その途を離れて生くるを悦ぶなり」、その故にこの上更に「その惡を心に留めじ」、(イザヤ書、四三ノ二五)而もすべて皆彼等に赦免されるだらう。

第八章

十字架上の基督の犧牲と及び自己棄却とのこと

愛しまつる者のみこゑ

一

我は汝の罪ゆゑに、十字架上に雙手を擴げて、又身は丸裸にせられ、一物も我に殘らぬまでにすべて神を宥むる犧牲と爲り、以て甘んじてわが父なる神に己れを捧げたのである。

されば、その如く汝も亦毎日彌撒に於て汝の力と情とを竭し、心の限りに純なる又聖なる犧牲となり、以て進んで己れを我に獻げねばならぬ。

何をわれ汝より要求すべき、只汝が全く己れを以て我に委ねんとすることのみ。

汝を措いて何を汝が與へるとも、我は之を意に留めない。我は汝を要求する、汝の贈物を欲しない。

二

我を措いて何を汝が有するとも、汝一切滿足を得られまい。又その如く、我も亦何を汝が與へるとも、汝自身を捧げるでない限り、之を悦ぶこと決してあり得ない。

汝よろしく我に己れを捧げ、そして神のため己れを全然提供すべきである、さらば汝の供物は神に嘉納されるだらう。

見よ、我は汝のために己れを全く神にささげ、我の體と血とを食物として與へたのである。全く汝のものとなつて、汝が亦いつまでも我のものとならんためである。

されど、もし汝が自分の裡に止まつて、進んで我の聖旨に己れを委ねるでないならば、汝の供物は完全でないのである、又我らの間に眞の一致はないだらう。

故に汝もし自由と聖寵とを得んと欲するなら、汝は宜くすべての仕業に先ちて、自ら進んで汝自身を神の御手に捧ぐべきである。

然るに人は己れを全然委棄することを知らない、是れその心の照らされて又靈的自由にせられた者の鮮い所以である。

されば、わが此の宣言は確かである、「汝等その一切の所有を退くる者ならでは、わが弟子と爲るを得ず」（路可傳、一四ノ三三）と。故に汝もし我の弟子たることを望むならば、汝自身と、及び汝の一切の愛着とを以て皆我に捧ぐべきである。

第九章

己れと己れのもの一切を神にささげ、又すべてのために祈るべきこと

弟子の聲

一

主よ、天にあるもの地にあるもの、一切皆爾のものである。

私は自ら己れを供物として爾にささげまつり、又永久に爾のものとならんと願望する。

主よ、私は「全き心をもつて」（創世記、二〇ノ五）いつまでも爾に奉仕し、爾に順從し、又爾に供物となつて永久に讃美しまつらんため、今日私自身を爾にささげ奉る。

願くは爾が尊體の聖なる供物と共に、此の私を受納れたまへ。私はけふ爾のみ側にありて、而も目に見えざる天使たちの面前にて、爾に己れを捧げ奉る。私とおよび世の衆人との救のためである。

二

主よ、私が始めて罪を知りしこのかた此の日に至るまで、爾と及び聖なる天使らとの前に犯せし私の罪愆一切を、今爾に捧げて爾の宥めの祭壇の上に置きまつる。願くは爾の愛の火を以てすべてを皆燒盡して私の罪のあらゆる汚點を抹し去り、又私の良心をそのすべての愆過より洗ひ淨め

て、私が己れの罪ゆゑに失ひし爾の聖寵を私に回復せしめ、すべてを皆容赦して、そして憐憫もつて爾の平和の接吻に私を受入れることを許したまへ。

三

何を己れの罪ゆゑに私は爲すべきだらう。只謙遜に之を告白し悔恨し、そして絶えずに爾の寛恕を願ひまつるのみである。

私の神よ、玆に爾のみまへに立つて祈り奉る、願くは御惠憐垂れて聽き給へ。すべての罪過は私之を最も忌嫌ふ、之を復犯さうとは決して思はない、而も之がために歎くのである、又生きてる限り歎くだらう。悔悟の苦行を常に覺悟して、出來得る限りに罪の償ひをするのである。

私の神よ、私を宥したまへ、爾の聖なる御名のために私の罪を宥し給へ、そして爾の尊き御血をもつて爾が贖ひ給ひし、この私の靈を救ひたまへ。

見よ、私を爾の御慈悲に任せ奉る、爾の御手に私を委ね奉る。

願くは爾の仁慈に由て私を遇したまへ、私の邪惡と不義とに由り給ふな。

四

もし善事私にありとするも極めて僅かである、又不完である、而も私は之を以て皆爾にささげ奉る。願くは爾之を補ひ又聖め給へ。願くは恩惠垂れて之を爾に受納せられるものと爲し、又常に之を引付けて益々善ならしめ、そして此の遲鈍で無用な賤奴の私を導いて、幸ある立派な最期に至るを得させ給へ。

五

私は又爾にささげ奉る、卽ち敬虔なる人たちの忠誠なる願望であつて、是れ私の兩親、朋友、兄弟、姉妹、又はすべて私に親愛なる者、又は私或は他の人々に爾の愛の故に善事を爲したる者。』その他己れと己れの眷族とのために祈禱と彌撒とを私より捧げられるを要し又願ふその者たち、そして此等は現在尙生存するがある、或は旣に此の世を去れるがある、而もその者たちの必要を云ふのである。

願くは此等すべてが爾の聖寵の援助と慰安の力とを己れに感じ、又その危難より保護せられ、その刑罰より免れ出るを得させ給へ、願くは又此等がそのすべての災惡より救濟せられ、そして爾を讚美しつ、歡喜の感謝を捧ぐるやうにならせたまへ。

六

爾に更に私は此の祈りと肯めの贄とをささげ奉る、卽ち殊に私を害ひ、悲ませ、或は辱め、その他何かの損傷苦痛を私に與へたその者たちのためである。

又は更に、私がいづれの時にか又は何事にか、或は知りつつか、或は知らずにか、すべて言に業に悲ませ、苦ませ、或は惱ませ、或は躓かせしその人たちのためである。願くは私共すべてに一樣に私共の罪惡と及び相互の非行とを恕し給へ。

主よ、願くは私共の心より、すべての猜疑、憤懣、嗔恚、又鬪爭等、その他何にまれ、愛を損ひ、又同胞の情誼を滅ずるものを取除きたまへ。

主よ、憐み垂れたまへ、願くは爾の憐愍求むる者にそのあはれみ垂れ給へ。又乏き者に爾の聖寵與へて、私共をしてその聖寵を享け樂み、そして永遠の生命に進むに足る者とならんため、此の生を存へるを得させ給へ。

アーメン。

第十章

聖體拜領は容易に廢止すべからざること

愛しまつる者のみこゑ

一

是れ、神の聖寵と憐愍との泉である、又あらゆる仁愛と純潔との源であつて、汝宜く屢げ之に趨向すべきである。即ち之に由て汝は己れの情炎邪念より癒されるを得、又一切の誘惑や、惡魔の詭計に抵抗する、一層の力と用心とを增すのである。

此の聖なる祕蹟に含まれる偉大の效力靈驗を敵魔は知つて居る。で、力の限りあらゆる方法手段を用ひ、そして忠實敬虔なる人々を引留め、又之を妨害せんと努力するのである。

二

故に、もし誰かこの聖なる祕蹟に與からうと自ら準備するや、サタナの姦惡一層その人に加はるのである。

その時、ヨブ記にも錄してある。惡魔は「神の子たち」（ヨブ記、一ノ六、）の中に出入して、之をその邪惡もて惑亂させ、之を全く恐怖と疑惑とに陷らせる。そしてそれに由てその愛情は減退し、その信仰は覆へされ、假令全然聖奠を廢止しないまでも、その熱心冷却して之に近づくやうになるのである。

されど、その惡魔の姦策暗示、如何に惡辣で又怖ろしくあらうとも、汝決して之を顧慮すべきでない、却てすべての暗示をその頭に投返してやるべきである。

醜奴賓に賤むべきである、忌むべきである、そして如何なる攻擊之が加ふるとも、如何なる不安之が汝の心に起すとも、それがために汝は聖體拜領より遠ざかつてはならぬ。

三

人は往々自分が持つ敬虔を餘りに心配し、又は告白なすに餘りに憂慮して、却て之がために障碍を受けることがある。

そやうな時は、汝賢者の言に聽いて行ひ、そして憂慮心配を拂ひ去れ、神の聖寵を妨げ、又心の敬虔を破壞するからである。

多少の不安や煩悶あつたとて、その故に聖體の拜領を廢めてはならぬ。寧ろ行つて早く罪を告白し、又他が汝に對して爲た愆過を悅んで宥恕せよ。

若し又、汝が誰かに向て愆過を犯したならば、行つて謙遜に謝まれよ。（馬太傳、五ノ二五、）神はよろこんで汝に宥して下さるだらう。

四

汝が永く告白を躊躇させたとて、又は聖體の拜領を遲延させたとて、それが汝に何を益しよう。』早く己れを淨めて、毒はすぐ吐出して了へ。そして急いで醫藥を受入れよ、永く打ちやつて置くよりも氣持が好いだらう。

もし汝が今日その故で躊躇したとする、明日は怕くもつと大きな妨が起るだらう。そして永く聖體の拜領より妨げられて居るほどに、愈々汝はそれに適しなくなるだらう。

できる限り、汝は早くその現在の苦惱怠慢より脫して了へ。いつまで煩悶して不安に日を送り、そして毎日障碍のためにこの聖奠より遠かり居たとても、それが汝になんの益する所ないのである。

否、永く聖體の拜領を廢絶させるは、中々に有害た事である、重い怠慢いつも之より生ずるからである。

あな哀れ、或る冷淡で放縱な人々は、好んで告白を遷延して、聖體の拜領を遲らせようとする。此の上に己れを嚴正に守るの義務を負はせられないためである。

五

さても、斯く聖體の拜領を輕々に遲延させるその人は、なんと神の愛の微弱で、又信念乏いのであるだらう。

之に反して、誰ぞもしそれが許されて、而も殊更に人目に立たず爲し得ることであるならば、毎日でも己れこの祕蹟を受くるを熱望し、又之に準備されんため、常にその生涯を愼みてその淸い良心を守ることをせよ、その人是れなんと幸福であつて、又神に嘉納されべきであるだらう。

若し人時としてその謙遜の念より出るか、又は已むを得ざる障碍の故に之を差控ゆるとも、それは尊敬の意味であつて、稱むべきことなのであるならば、自ら勵みて、そして力の限りを爲さねばならされど、もし懈怠の念が侵込んだのであるならば、亦その人の望を助けて下さるだらう。

ぬ、さすれば神は善意を顧み給ふのである。

六

もし又眞に故障が生じてそれが正當である時は、その人須く常に善意を抱いて、そして聖體拜領の恭敬な志望を存ずべきである、さすればその人は心に既にこの祕蹟に與かつた效果を享けて居るのである。

そは、すべて敬虔な人は、いづれの日いづれの時を問はない、いつでも有效に又何等制限なく、基督の靈的聖なる祕蹟に與かることできるのである。

されど又、或る一定の日一定の時に於て、よろしく恭敬な愛心込めて己が贖ひ主の聖體を拜領すべきである、而も己れの慰安を求めんとするのでなく、むしろ神のみ榮とみ譽とを高めるためであらねばならぬ。

そは、人敬虔の念もつて、基督の受肉と受難とを憶起し、そして之に對し奉る愛に心の燃え立つならば、その度毎にその人げに神祕な聖體を拜領し、又目に見えずして靈の養滋を受けるのである。

然るに只祝日の迫つた時か、又は習慣で餘儀なくされた時の外、他に準備をしない人がある、是れ往々その準備のない人であるだらう。

此の聖奠を擧行し、もしくは聖體を拜領する度毎に、自分を燔祭として主に獻ぐるその人は、げに福者である。

この聖奠に臨みては、緩急その度を失ふな、而も汝が一緒に居るその人々の善とする所に從ひ、慣例を守りて之を行へよ。

決して他人の氣持を損ね、又は之に倦怠を起させてはならぬ、而も古來先輩たちの定むる所に從て、尋常の道を守るべし。すべて自分の信念や好尙を滿足させるのでない、むしろ他人の利益に奉仕すべきである。

第十一章

基督の聖體と及び聖書と最も信者の靈に必要なること

弟子のこゑ

一

嗚呼、最もいつくしみ奉る主なる耶蘇よ、苟も爾の饗宴に列りて、而もそこにて供せられるは何の食物ぞ、私共の愛しまつる爾御自身に外ならない、して是れ、心の望みのあり丈の尙その以上に望ましいものなのである。敬虔な靈的の人に取つてなんと甘美そのものであるだらう。

そして心の底よりの愛情もつて爾のみまへに涙を灑ぎ、あのまことしのマグダレナの如く、私も亦涙を以て爾の御足を洗ふを得ば、嗚呼、なんと嬉くあるだらう。

されど、この熱誠何處にあるのだらう、この雨と濺ぐ聖なる涙は何處にあるのだらう。

まこと、爾と爾の聖なる天使らとのみまへに於ては、私の全心火と燃えて、又歡喜に溢れて泣かねばならぬ。

そは、假令異つた形に隱れましますとも、爾は卽ちこの祕蹟において現在私の前にいます故である。

二

抑も爾をその御自身の神たる光輝で仰ぎ奉る、是れ私の眼の堪へ得る所でない。然り、爾の尊嚴照り渡るその光榮に向つては、全世界も之を支へることできないのである。

故を以て、爾はこの祕蹟の中に隱れ給ふ、私の屢弱を憐み給ふに由るのである。

御使たち天にあつて崇めまつるその爾を、私も亦已れの有となして崇め奉る、只私は信仰もつて之を心の中で爲すのである、而もみ使たちは面のあたり、面帕もなしに爲すのである。

遂には永遠の黎光明けそめて、種々なる形象の「影は消える」（雅歌、二ノ一七）だらう、而もその時來るまで私は眞なる信仰の光明もつて滿足し、そしてその中にのみ歩まねばならぬ。

卽ち、その一全きもの來らん時」（コリント前書、一三ノ一〇）祕蹟の用は廢るだらう。天の榮光に入つては、福

者は復祕蹟の醫藥を要することない故である。而も、その時、神のみまへにあつて一面のあたりないだらう、又神の不可測なる御性を受けてりたる神の御言を、「そが太初よりありしまま」、だらう。

三

此等の驚異を想ひ來るや、どんな靈的慰安のある。なぜなら、主をその御榮に於て明かに拜して私には何等取るに足らない故である。然り、神よ、爾は私に證者であり給ふ」。（ロマ書、一ノ一〇）まこと、如何なる事も私を慰め得ない、萬物如何なるものも私を安息させ得ない。只私の神よ、爾の在すのみである、そしてその爾を私は永遠に仰ぎまつらんと望むのである。

けれ共此の事、私がこの死すべき生命にある限り、是れ出來得る事でない。

この故に、私は己れに置くに大なる忍耐を以てして、そしてすべての願ひに於て爾に服從しまつらねばならぬ。

是れ、主よ、今は爾と共に天の御國に歡喜する爾の聖者たちも、曾て此の世に存へてる間亦大なる信仰と忍耐とをもつて爾の「榮光顯れるのを期待した」（ヘブル書、一一ノ一三）のである。さればその信じた事私も信ずるのである、その望んだ事私も望むのである、そしてその行着いた所、私も爾の聖寵に依賴して、亦行くことできると自信するのである。

即ちその時までぞ、その聖者たちの模範に強められて、私も信仰もつて歩みませう。

加之、私の慰安として、又生路の龜鑑として、茲に聖書がある。殊にはすべてにいや增して、爾のいと尊い聖體を拜領し、そして之を特別なる療藥ともなし、又隱れ場ともなすのである。

四

この人生げに二つの最大必要物私に存ずるのを覺知する、して之なくしては、この悲慘な人生私には到底悚へ得られない。

即ち、此の肉體の牢屋に繫がれてるその間は、私は自白する、この二つの物を私は要するので、一は食物である、又一は光である。

されば、爾はこの劣弱な私に心と體とを養ふために、爾の聖體もつて與へ給うた。又爾の聖言もつて私の足の燈火（詩篇、一一九ノ一〇五）と爲し、之を置きたまうた。

して、此の二つがないならば、私は正しく生き得られない。即ち、神の聖言是れ私の靈の光である、又爾の祕蹟是れ私の生命のパンである。

この二つの物、聖なる公會の寶庫の中に互に並び置かれて、二つの臺とも言はれ得る。

一は聖なる祭壇の臺にして、上に聖なるパンを載す、即ち基督の尊體是れである。

他は又神の律法のそれにして、聖なる教訓を包み、正しき信仰を教へ、又聖の聖所である「幔の

丙」（ヘブル書、六ノ一九）にまで私共を安全に連れ行くのである。

卽ち此の臺や、爾、永遠の光の主なる耶蘇よ、爾の僕の預言者たち、使徒たち、又は他の學者たちに由り、爾が私共に授け給ひしその聖なる教訓を載せるのである、私はその故を以て爾に感謝し奉る。

五

又、爾に感謝し奉る、天地の造り主よ、人類の贖ひ主よ、爾はその至大の愛を全世界に表明せんために、此の「大なる聖餐」（路可傳、四ノ一六）を準備し給うた。而もそこに供せられて私共の食するもの、是れ單に象徴的の羔羊ではない、卽ち爾のいと尊き聖體と聖血とであつて、してすべての信者はこの聖なるうれしき饗宴に列り、その救ひ與ふる「酒盃」（詩篇、二三ノ五）に醉ふのである、樂園の珍羞みな此の中に具備して、天の聖なる御使たちも、只その樂みはるかに優つて瑞氣に富めるのみ、亦私共とこの歡樂を偕にするのである。

六

嗚呼、司祭の聖職如何に大にして又尊ぶべき。聖なる言葉をもつていとも嚴かなる主を聖別し、その屑之を祝福し、その手之を奉持し、その口之を拜領し、そして他人に又之を授與するのである。

嗚呼、司祭は如何にその手清淨で、如何にその口純潔で、又その心の如何に潔白無垢であるべきぞよ。況れその中にすべて純潔の本主なる神の幾度も入り來ります故である。

司祭は是れ屢ば基督の祕蹟を拜受するのである、その口より出る言も亦、只是れ聖なるもの、直なるもの、又益あるもののみであらねばならぬ。

七

その眼亦純眞で又貞潔なるべし、常に基督の聖體を見奉る故である。その手も亦宜く淸淨で、又天に向て擧げらるべし、天地の造り主に常に接觸し奉る故である。

司祭に就ては特に律法の中に言はれてある、「汝等宜く聖なるべし、そは汝等の主なる神、我は聖なる故である」（利未記、一九ノ二）と。

八

全能の神よ、私共司祭の聖職を受けたる者である。すべて潔い正しい良心もつて、虔しみかしこみ爾に奉仕することできるため、願くは爾の聖寵を與へて私共を助けたまへ。

私共は、勿論、全く無垢なる生涯を送らねばならぬ。されど若し此の事できぬとも、なほ私共に許して、己れが犯せし罪を眞實に痛歎し、そして靈は益々謙遜に、又善心いよいよ堅固になつて、以後を一層熱烈に爾に奉仕せさせ給へ。

第十二章

大なる精勵を以て聖體の拜領に準備すべきこと

愛しまつる者のみ聲

一

我は純潔を愛するのである、又すべての聖なる事我に由て與へられる。
我は清淨の心を求める、してそこに「我が安息の場所」（使徒行傳、七ノ四九、）がある。
「わがために大なる食堂を準備せよ、我は弟子たちと共に汝に來りて踰越のいはひを守るべし」。（路可傳、二二ノ一一、馬太傳、二六ノ一八）
もし我の汝に來りて汝と共に留まるを欲するなら、「舊きパン種を取除き」（コリント前書、五ノ七）て汝の心の棲家を淸くせよ。
全く世俗と斷ちて、又すべて邪念の囂々を遠ざけ、而も「屋根に居る孤獨な雀の如く」（詩篇、一〇二ノ七）汝の「靈魂の苦痛」（イザヤ書、三八ノ一五）に坐して、己が罪過を考慮せよ。
そは、凡そ人がその親しき友を愛するや、之がために最善最美の居室を支度するのである、之に由てその迎へんとする友への愛情認められる故である。

二

されど汝よしや之が準備に丸一年を費して、心に何等殘さぬとて、なほ自力の功績のみに由りては、その準備が充分できるでないと汝知れ。
汝が我の食卓に近づくを許されるは、只是れ汝の恭敬と及び我の恩寵とに依るのである。恰も乞食が富者の馳走に招かれて、その惠與に酬いるに已れ一物ない、只自ら謙遜して、ひたすらに之に感謝する外ない如くである。
で、汝の力の限り爲せ、又精勵もつて之を爲せ、習慣に由るのであるな、又必要に由るのである。
な。かしこくも汝の神なる、愛しまつる主が汝に來りますのである、只恐懼と敬畏と又愛情とを以てその聖體を拜領せねばならぬ。
汝を呼びたるは我である、我が爲せよと命じたのである。汝に足らざる所、我は之を補はう。來り、そして我を受けよ。

三

我が汝に聖寵與へて信心起させたその時は、汝之を汝の神に感謝せよ。汝にその善德あつての故でない、「我が汝を憐んだ」（馬太傳、一八ノ三三）故である。
もし汝にその聖寵なくして、却て自ら落寞を感ずるなら、汝絶えずに祈禱して歎き悲み、そして我に敵け。然り、汝に切なる聖寵をたとひ一片一滴でも受け得るそれまでは、決して之を廢するな。
汝は我を要するのだ、我が汝を要するのでないのである。
汝が我を聖別するとて來るのでない、我が汝を聖別し、又善導するため來るのである。
汝は來る、我より聖別せられて、我に合一するために進まんとし、汝の熱心燃立たされんためである、又新たに聖寵蒙りて、更に新たに善ゆめ、この「聖寵を忽諸にするな」、（テモテ前書、四ノ一四、）而もあらゆる精勵もつて汝の心を準備し、そし

て汝の愛しまつる者を己れに迎へ入れよ。

四

されど、汝實に聖體拜領の前に於てのみ敬虔得るために準備すべきでない、亦祕蹟を受け奉つた後に於ても、汝努めてその敬虔を保持せねばならぬ。即ち最初熱心に之が準備をするよりも、以後に之を守るの緊要劣るとはせられない。是れ以後に克く自ら守ることは、却て聖寵益々加へられる最善の準備である故である。

その故に、誰でも若し聖體拜受の後、忽ちこの世の慰安に浸つて了ふ如きあるならば、その人げに復元に戻ること甚だ困難であるだらう。

勉めて多辯を愼みて、靜かな所に退き、そして汝の神を享け樂め。汝が既に有ち奉りたその神は、全世界も之を汝より取り去ることできないのである。

我は即ち汝が以て全く己れをささげねばならぬ者である。是れ汝が今より以後、復自分に依ることなく、只我に依りてのみすべての憂慮を離れてこの生を送り得んためである。

第十三章

敬虔なる靈の人は宜く全心もつてこの祕蹟に於て基督と合一するやう望むべきこと

弟子の聲

一

主よ、私は獨り爾をのみ見出し、爾に私の心を皆打明けて、そして「私の靈の欲する」（詩篇、四二ノ二）ままに爾を享け樂まんとするのである。さすれば誰も復「私を卑む者ない」（雅歌、八ノ一）だらう、萬物何等私を動かし、又顧みることないだらう、只爾の私に語り給ふのみ、又爾に私の語りまつるのみ、恰も「人がその愛する者に物言ふ如く」、（出埃及記、三三ノ一一）或は友と友と互に杯酌交はす如くであるだらう。而も之を誰が私に與へるであるだらう。

卽ち、爾に全く合一して、すべて萬物より私の心を引離し、殊に尊き聖體を拜領し、或は屢ばこの聖奠を擧行するに由り、私が天と永遠との事を味ふを學ばんため、此の事之を私は祈り又願ひたてまつる。

嗚呼、主なる神よ、いつ私が全く爾と一つになつて、爾の中に沒入し、そして自分を全く忘れて了ふだらう。

願くは、爾が私の中に居り、私亦爾の中に居りて、（約翰傳、一五ノ五）爾と私と一緒に存へたや。之を叶はせ給へ、只管に望みたてまつる。

二

爾はげに「私の愛しまつる者、よろづのものの上に超え給ふ」、（雅歌、五ノ一〇）して是れ「私の心の悦ぶ所」、（馬太傳、一二ノ一八）生命の限り、之に住み奉らんとするのである。

爾はげに私の平和であり給ふ、爾の中に卽ち無上の平和と眞の安息とは存在する、そして爾を外

にしては、只勞苦と悲哀と、無限の不幸とを見るのみである。

爾はげに「隱れてゐます神であり給ふ」、(イザヤ書、四五ノ一五)そして爾の謀議は惡者と干はる所ない、只謙なる者純なる者とのみ爾のみ言はあるのである。

嗚呼、主よ、爾はその子たちに爾の甘美を示さんため、天より降れる最も美味なるパンもつて、畏くも之を養ひ給ふのである。

げに、「嘗れの國人か斯の如く大にして、私共の神よ」、(申命記、四ノ七)爾がそのすべての忠義なる者に近づきます如く、「亦その神たち之に近づくもの他にあるや」。然り、爾はその忠義なる者たちに日日の慰安と爲り、又その心を天に高めんため、爾の御自身を與へて之に食はしめ、又之を樂ましめ給ふのである。

三

又「いづれの國民か」、(申命記、四ノ八)此の基督信徒たる民のその如く、「斯も大なる光榮與へられる者他にあるだらうか」。

或は天が下如何なるものなりとも、凡そ神がその中に入り來りて、そしてその榮の聖體もつて養ひ給ふ、その敬虔なる靈魂の如く、斯も天より愛せられるもの復あるだらうか。

嗚呼、得も言はれぬ聖寵かな。嗚呼いしくも崇むべき仁慈かな。嗚呼、殊に只人類にのみ垂れますその無限不測の恩愛かな。

而もその聖寵に對し、又その斯も洪大なる仁慈に對し、私は「何を以て神に酬い奉らう」。(詩篇、一一六ノ一二)

(二)只全然私の心を以て神に獻げ、そして神と奥底より密着し奉るのみ、之より外に何等感謝を表し得べき方法ないのである。

そして私の靈魂完全に神に合一したその時に、即ち、私の內心すべて歡喜に躍りいさむだらう。』その時、神は私に言ひ給ふだらう、『もし汝、我と共に居らうとするならば、我も亦汝と共に居るだらう』と。そして私は答へまつるだらう、願くは主よ憐憫垂れて私と共に居りたまへ、私は悅んで爾と共に居ることを望み奉ると。

即ち私の心が爾と合して一とならんこと、是れ私の唯一の願である。

第十四章

基督の聖體に對する或る敬虔なる人の抱くその熱情のこと

弟子の聲

一

嗚呼、主よ、「爾が爾をおそれる者のために貯へ給ふ、その仁慈の如何に大なるかな」。(詩篇、三一ノ一九)

主よ、他の敬虔なる人々は斯も大なる熱誠と愛情とをもつて爾の祕蹟に近づくに、私は然うでない、爾の祭壇、即ち尊き聖體拜領の臺に近くに全く冷かである熱がない。そして之を想ひ出してはその時私は屢ば自ら恥ぢて赤面するのである。

げに私は無情であつて、私の神なる爾のみまへに近づきても、多くの熱心なる人のその如く、亳

も愛の心の燃立つなく、又劇く之に引寄せられ、又感動せられない。而もその人々の所爲如何、その聖體拜領の願の已み難さ、心の愛情の燃ゆるに禁せずして、自ら涙の流れるのを押へ得ない程である。

そして、その口もつて叫び、その心もつて祈り、生命の泉の神なる爾に向つて、髓まで徹して焦れ喘ぎ、只爾の聖體をすべての歡喜と及び靈的貧婪もつて拜領しない限り、復他にその飢を和げ、又滿足させることないのである。

二

まこと、此等の人の燃ゆるが如きその信仰、是れ確かに爾の聖なる存在を論證するのである。なぜなら、此等の人は、そのパンを擘くに當つて眞に己れの主を認めるのである、そしてその心は、耶蘇之と共に步み給ふに依りて、「その胸に旺んに燃えるのである」。(路可傳、二四ノ三二)然るにその如き愛心と信念と、又その如き熱烈なる戀慕と激情と、私にはとても及びも付かれない。

されど、めぐみ富みます、甘美な、なさけの耶蘇よ、私に憐憫垂れ給ひて、爾のこの哀れな僕に尊き聖體を拜領して、之に由て時折なりと爾の優渥なる愛情のその幾分をか感ずることを許したまへ。卽ち私の信仰益々增加し、又爾の仁慈に對する私の信賴いよいよ强まりて、そして私の愛心の一度完全に燃立たされ、又天のマナもて養はれるや、復決して退轉することないためである。』

三

而も爾の憐愛は私の望みまつる聖寵を私に與へ下さるのである、又爾の聖意に叶ふの日の來るなら、その時その一燒き盡す靈」(イザヤ書、四ノ四、)をもつて此上なき仁惠垂れ給ひ、以て私を眷顧し下さることできるのである。

で、假令私がその殊更信念熱烈な人々の如く强い願望もつて燃えずとも、而も爾の聖寵に依り、私も亦その熱誠もつて爾を愛しまつるすべての人たちの中に加はり、又その聖者の仲間の一人に算へられんため、之を祈りつ願ひつ、その大なる焰と燃ゆる願望を亦私も抱き度しと欲するのである。

第十五章

謙遜にして能く己れを棄てる者のみ聖寵を獲得すること

愛しまつる者のみ聲

一

敬虔の聖寵、之を汝宜く切實に求むべし、之を殷懃に祈るべし、忍苦と忠誠とを以て之を俟望め、感謝を以て之を受納れよ、而も謙遜に之を保持して、精勵以て之を實行に徵すべし。只この天的の眷顧を受くる時期と仕方とは、之が降來のその時まで、汝すべてを神に委任しまつるべし。汝もし殆ど、或は全くに、敬虔を感じないその時は、須く特に謙遜なるべきである、之がために決して氣を落すな、或は餘りに憂愁に沈み過ぎるなよ。

神は往々長い時間斥け置かれたその願を、僅かの刹那で與へたまふ事がある。又祈の最初には拒みたまうたその物を、遂には與へて下さるのである。

二

もし、いつでも聖寵がすぐに與へられ、そして祈つた事が何でも聽かれるのであるならば、弱い人間とてもそれを負ひ切れぬであるだらう。

その故に、敬虔の聖寵は汝之を堅い希望と謙遜なる忍耐とを以て待望むべし。そして之が汝に與へられぬとて、或は時に竊かに取去られることのあらうとも、汝それを己れと己れの罪との故に歸すべきである。

往々些細の事が聖寵を妨害し、又之を隱蔽するのである。然り、之を些細と云へば云へ、斯様な大事なものが障碍せられるのである、却て重大とすべきではないかしら。

而も、事は大であれ小であれ、汝は之を除き去つて、そして完全に打克てよ、さすれば汝の願ふ事遂げられるであるだらう。

三

汝が全心もつて己れを神にささげ、そして自分の好惡に由て彼此の事物を取捨するなく、只神御自身に全く己れを任せまつりて了ふなら、その瞬間げに汝は自ら神と合一して、そこに平和の來るを見るだらう。是れ神の聖意を悦ばせまつるその事ほどに、汝に愉快であり、又うれしくあるは他にないからである。

で、誰でも純眞な心を以てその志向を高く神に揚げ、そして物界紛々たる愛憎の念より己れを離脱させるなら、その人即ち最も聖龍を受くるに適し、又敬虔を賜はるに足る者となるだらう。

なぜなら、「容器が空虛である」（列王記略下、四ノ三）と燬はす所に、主はその仁惠を與へ給ふ故である。

即ち、人この下界の事物を思ひ棄てる愈々完全で、又自ら輕蔑して己れに死する愈々大なれば、それ丈亦聖龍の來降いよいよ速かで、又その入臨いよいよ豐かに、又その自由な心は、いよいよ高く引上げられるであるだらう。

四

その時神の御手その人と共にあるので、その人即ち「自ら見てよろこびの光をあらはし、その心はおどろかされ、且つひろやかに爲るだらう」、（イザヤ書、六〇ノ五）そして永遠に至るまで神の御手に全く己れを置きまつりたのである。見よ、その全心を以て神を求めて、「その靈魂虛しき事を仰ぎ望まぬ」（詩篇、二四ノ四）その人は、げに「斯くも幸福を受くるのである」。（詩篇、一二八ノ四）

此様な人即ち、尊き聖體の拜領に由りて神と結合ふ大なる聖寵を賜はるのである。是れ、その人は自分一箇の敬虔や慰安を顧みない、而もすべての敬虔慰安に優りて只管に神の光榮と尊譽とを求めるからである。

第十六章

私共の必要は之を基督に打明けてその聖寵を願ひまつるべきこと

一

今私が敬ひつつしみて拝領せんと望みまつるその爾、いともうましき又いとめでまつる主よ。如何に私の劣弱なる、如何なる必要私の忍び居る、如何なる悪習邪念に私の沈み居る、如何ば私が壓虐せられ、誘惑せられ、煩悶せられ、又汚辱せられるか、爾は之を知り給ふ。私は爾に己れを寄せまつる、爾に救治ぜられんためである。爾に祈り奉る、爾に慰められ、支持せられんためである。

爾はすべてを皆知り給ふ、依て爾に私は誄り奉る。私の内心皆爾に明かである、して只爾のみ完全に私を慰め又助けることでき給ふ。

何の善事に私の最も缺乏せる、又如何に私が心の徳に貧弱なる、爾は之を知りたまふ。

二

見よ、この哀れな裸の私、爾の聖寵を冀ひ、又爾の憐愍を求めつつ、茲に爾のみまへに立ち奉る。願くはこの飢ゑたる賤奴の私を養ひたまへ。願くは爾の愛の火をもつて私の冷へたる心を熱したまへ。又願くは爾が光臨の輝きもつて私の盲目を照したまへ。

願くは地上の事皆私に辛苦なものとならせ給へ、すべての憂き事逆な事之を私に忍ばせ給へ、又この下界と一切の諸物と、之を輕蔑して、又之を忘却するを得させたまへ。

願くは私の心を擧げて天に在す爾に向はしめ、又私をこのままに地上にさすらふ者となりて置きますな。

今より以後爾ぞひとり長久に私を樂しませ給へ、爾のみ是れ惟り私の食物である、飲物である、又私の愛である、私の歡喜である、又私の甘美である。又私のすべての善事であり給ふゆゑである。

三

げに願くは、爾が光臨ましまして、之に由て私を全然燃立たせ、燒盡し、そして爾に私を同化し給はれや。さらば心的合致の聖寵に由り、又灼熱せる愛もて融合せられ、私は靈を以て爾と一つに爲ることのできるだらう。

願くは私をして飢ゑて渴けるこのままに、爾のみまへを去ることあらしむるな。而も爾が昔の聖者たちに屢ば不思議な御能力現はして爲し給ひしその如く、亦私にも憐愍垂れて爲し給へ。

もし私が全然爾に依つて炎燒され、そして己れに消えて了つたとて、それが何の驚異であるだらう。爾は絶えず燃立つて決して消ゆることない火炎である、即ち私共の心を淨化して又理智を照明するその愛でまします故である。

第十七章

弟子のこゑ

聖體を拜領すべき熱烈熾盛なる愛心のこと

その聖なる生涯もつて最も爾に悦ばれ、又最も熾烈なる信念もつて爾に奉仕したる多くの聖者たちや、敬虔なる人々が、古來爾の聖體を拝領するを熱望したるその如く、私も亦、主よ、無上の敬虔と燃立つ愛とをもつて、又全心の戀慕と熱誠とを凝し、爾を受けまつらんと願望するのである。

一

嗚呼、私の神よ、永遠の愛よ、私の全部の善事そのもの、不斷無窮の祥福なる主よ、凡そ聖者が今までに有ち得た限り、又感じ得た限りの、その最も熾烈な熱望と又最も適切な恭敬と。私は亦之を以て汝を受けまつらんと焦望するのである。

二

されど、假令私が此の信念を盡く感得するに足らないとも、尚怜も爾の最も悦びますこの燃ゆる熱望を己れ獨り有する如く、私の全心の愛情もつて爾に獻げまつるのである。

然り、凡そ恭虔の心を以て考へ又望み得る限りの事、之を皆私は無上の崇敬と心の奥よりの熱誠とをもつて、爾にささげ、又提供し奉る。

一物たりとも、之を私は己れに保留しようと求めない、而も私のすべてのもの、之を自ら進んでいさみうれしみ、爾に贄として獻上し奉る。

私の主なる神よ、私の造り主、又私の贖ひ主よ、曾て爾のいと尊き聖母なる、榮えの童貞マリアが、之に天使の御詰して爾が受肉の祕義を告げし時、謙遜に敬虔に、「見よ主の婢を、爾の言の如く我に成れかし」（路可傳一ノ三八）と答へして、そして爾を受けまつりて希望したりしその如く、私も亦その如き大なる愛心と尊敬と讃美と頌榮とを以て、又さらにその如き大なる信仰と希望と純潔とを以て、然り、今日爾を拝領せんと焦れたてまつる。

又爾の先驅者なる、聖徒の中のいと秀でたるあのバテラスマの聖約翰が、まだ母の胎内に宿りし時、爾のみまへに於て聖き御靈に感激し、歡喜に滿ちて「よろこび踴りし」（路可傳一ノ四一）その如く、又はその後耶蘇が人の群中を歩みつつ居るを識り奉り、極めて自ら謙卑して、恭敬は愛慕と伴ひ、「新郎の友たちて新郎の聲をきく時は、そがために大いによろこぶ」（約翰傳三ノ二九）と叫びしその如く、私も亦大なる又聖なる望に燃立ち、私の渾心より己れ自身を爾に獻呈せんと欲し奉る。

此の故に、茲に私と、及び祈禱に於て私に委托せられたすべての人たちとのために、あらゆる敬虔な心の者の歡呼とその熱烈な感情と、その甚深の法悦と、及びその神來の照明と、その天的の幻想と、尚一緒に、天と地とにあるあらゆるべきすべての善德と讃美とを以て、之を私は爾に獻げ又呈し奉る。爾がすべての者より正しく讃美せられ、又永久に頌揚せられ給はんために。

四

私の主なる神よ、爾の靈妙偉大なる御摂威の故に、當然爾に歸すべき無限の讃美と至大の慶祝とを亦爾にささげまつらんとす。その私の祈願と懇請とを受けたまへ。

私はこの崇敬を現在爾に呈し奉る、又之を毎日毎時爾に呈し奉らんと望むのである、そして尚すべての天の靈たちや、爾のすべての信者たちが、亦私と共に爾に感謝と讃美とをささげまつらんため、之を慇懃に懇切に招致勸誘するのである。

五

「あらゆる國民」（詩篇、一七ノ一）も種族も言語の人たちも、あらん限りの歡呼と燃ゆる熱心ともつて爾を讃美し又爾の聖なるうるはしの御名を崇めたたへよや。

そして皆かしこみうやまひて、爾のいと尊き祕蹟を守り、又信念滿ちて爾の聖體を受け奉り、みまへに在て爾の聖寵と慈愛とを見出せよや、亦この罪人なる私のために願ひ求めて祈れよや。

そして、此等の者たちが、その敬虔の願望遂げられて、爾とうれしく一つになるを得、慰安豐かに不思議な力に養はれて、聖なる天の食物の食卓より退く時、この哀れな私の事を亦想出すことの願くはあれかしな。

第十八章

人は聖體の祕蹟に就きては、妄りに好奇に耽つて探求すべきでない、宜く謙遜に基督をまねびて、ひたすらにその心を聖なる信仰に服せしむべきこと

愛しまつる者のみ聞け

一

もし汝が疑惑の淵に沈んで了はうとしないなら、此のいとも幽玄な祕蹟に就て、妄りに好奇の心に驅られ、無益な穿鑿に耽けるを謹めよ。

「神の尊嚴を穿鑿する人はその榮光に壓せらる」。（箴言、拉丁譯）（二五ノ二七）然り、神の御業の能力はとても人間の理解の及ぶ所でない。

されど、常に學ぶに敏にして、その歩むや力めて敎父たちの健全なる敎に從ひ、そして恭虔に謙遜に眞理を探究するは、亦認容すべきである。

二

むづかしい問題の難路は之を棄て、そして神の誡命の平坦堅固な途をのみ行く心の純なるその者は、是れげに幸福な人である。

妄りに高遠なる事物を穿鑿しようとして、人は多くその信念を喪失するのである。

汝に要求せられるのは、卽ち信仰の心と及び淸淨なる生涯とである、高遠なる理智でもない、神の奥義を知るのでもないのである。

もし汝が己れ而下なる事を知り又曉るでないならば、どうして汝而上なる事を了解せられよう。』

「神に服從し」（雅各書、四ノ七）まつりて、そして汝の知覺を信仰の下に屈させよ。さすれば汝に有益で又必要なるその智識の光明汝に與へられるだらう。

三

或はその信仰とこの祕蹟とに就て甚く誘惑せられる者がある。けれ共之はその人の罪に歸すべきでない、むしろ敵魔の故である。

之を決して心配するな、決して自分の思想と爭ふな、又は惡魔の誘致したその疑惑に決して應ずるな。只神のみ言を信じ、その聖者と預言者たちとを信じ居れ。さすればあの惡劣なる敵魔は汝より逃去つて了ふだらう。

かやうな事に神の僕が出逢ふのは、却て往々多大な益があるのである。

是れ惡魔は不信者や罪人を誘はない、既に安全に自分の掌中にあるからだ。けれ共熱心な信者を殊に種々な方法もつて誘惑し又惱ませる。

四

その故に、汝宜く單純な不動な信仰もつて遮進し、かしこみうやまひて此の祕蹟に近づくべし、そして汝が理會のできない事は、之を安全に全能な神に任せ奉れ。

神は決して汝を詰き給はない、詰かれるのは卽ち自分を過信する人である。

神は純眞な者と共に歩み、謙遜な者に己れを顯はし、小なる者に理解を與へ又心の潔い者に知覺を開き給ふ。されば好奇な者傲慢な者よりは、その聖寵を隱し給ふのである。

人間の理智は脆くして、直に詰かれる。けれ共眞の信仰は、詰かれること決してあり得ない。

五

すべて理智と自然の研究とは是れ信仰に隨從すべきである、之に先立つべきでない、又之を侵害すべきでない。

そは信仰と愛とは最も優越して、この最も尊い最もすぐれた祕蹟に於て隱微な中にその働きをするのである。

神は永遠で、絶大で、又無限で全能でましまする、そして天と地との間に「大にして測りがたき事を爲し給ふ」(ヨブ記、五ノ九)その驚くべき御仕業は「之を究め得べきでない」。(イザヤ書、四〇ノ二八)

もし神の御仕業がさう容易に人間の理智で了解されるであるならば、それは決して不思議だ靈妙だと言はれることないだらう。

昭和三年七月五日印刷
昭和三年七月十日發行

岩波文庫
233—265

定價六十錢
イミダーシヨ・クリスチ ★★★

譯者　内村達三郎

發行者　東京市神田區南神保町十六番地　岩波茂雄

印刷者　東京市牛込區市ケ谷加賀町一丁目　菊地眞次郎

株式會社秀英舍印刷

發行所　東京市神田區南神保町十六番地　岩波書店
電話九段二一〇九番
振替東京二六二四〇番

讀書子に寄す

岩波文庫發刊に際して

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狹き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫はこの要求に應じそれに勵まされて生れた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に隈なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生產豫約出版の流行を見る。其廣告宣傳の狂態は姑く措くも、後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の飜譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繫縛して數十册を强ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の良途なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあたつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を愼重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亙つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出來る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも內容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犧牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んでこの擧に參加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒としてその達成のため世の讀書子とのうるはしき共同を期待する。

昭和二年七月

岩波文庫

□此文庫は、普及を第一義として刊行する廉價版です。
□內容の嚴選　古今東西のあらゆる古典及び、價値高き良書を網羅し、校訂、編譯に於ても最善を期します。
□最低の廉價　出來る丈安く手に入れられる樣に、小さい形の中に、澁山の內容を盛る形式を採りました。
□購求の自由　しかも讀者が全く自由に、欲しい　を隨時求められる自由選擇の方法を執りました。
□方法は、範を嚴く內外に倣めたる結果、最合理的普及版たる獨のレクラムに則りました。
□約百頁を單位として星一つを以てそれを現はし、★一つ毎に二十錢の定價です。
□★一つを1に數へて此の文庫の番號を進めてゆきます。
□番號はたゞ發行順に從つて之を追ふものであります。
□★★或は★★★★★は、夫々二百頁或は五百頁の本一册なる事を示し百頁づゝの分冊ではありません。
□裝幀は平福百穗畫伯を煩はしました。
□送料(及定價)は左表の通りです。

	定價	送料
★	二十錢	二錢
★★	四十錢	四錢
★★★	六十錢	四錢
★★★★	八十錢	六錢
★★★★★	一　円	六錢

□御注文は前金で御願ひ致します。